312.22
H326g

*0005282000*

3

0005282-000

３１２．２２－Ｈ３２６ｇ

# 現代支那の政治と人物

波多野乾一・著

改造社

１９３７

ABC

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第６７条の規定に基づき、平成１２年５月１５日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。

波多野乾一著

# 現代支那の政治と人物

改造社版

312.22 H326g

# 自序

新聞社の支那技師として、編輯局の窓から、隣邦支那の動向を觀察すること、それが十數年來の私の仕事であつた。一九三二年の上海事件を契機として、私はかうした仕事から離れ、家居して支那研究に專念してゐるが、心構へは少しも變らず、終始一貫、支那問題の平明なる解說者たらんことを期してゐる。で、この念願の下に、『改造』、『中央公論』、『文藝春秋』、『世界知識』、『國際評論』、『支那』等の十數誌に家居以後滿五年間、約百五十篇 支那時事解說を書いた。そのうちから鷄肋棄つるに忍びない五十數篇を撰し、ここに本書を編むに至つたのである。

なるべく議論に走らず、新聞電報以上、何程か堀下げた情報を基礎とし、出來るだけ平明に解說するといふのが、私の執筆の用意である。然し、堀下げ方の足らない一面、獲た情報に執着し過ぎた弊もあつて、稍々判斷を誤まつた點があり、讀み返して汗顏の至りであるが、時には無意識ながら論題を提起し得たこともあり、功過ともに隱すところなくさらけ出して、讀者の一顧を索めようと思ふ。

書成るに臨み、三十年來の親友にして、絕えず、私の筆業を激勵して呉れた大西齋、村田孜郎兩君及び私の伯樂である佐藤觀次郎君、未知の人ながら、論壇に於いてはじめて私を認めて下さつた戸坂潤氏並びに本書出版を快諾せられた山本實彦氏に對し、深甚なる謝意を表する。

一九三七年七月一日

著者

31222
H326g

30631

# 目次

自序

第一章　上海事件後の政治情勢……三

第一節　一九三二年末に於ける全局勢……三

諸勢力の一大混戰期―汪兆銘の左翼戰線―蔣介石と藍衣社―注目すべき廣東の動向―學良居据りと北支の政局―四川軍閥の自擾―邊疆分離運動―中國共産黨・軍―支那は動く

第二節　察哈爾の形勢と馮玉祥……二五

何故馮は注目されるか―馮とソヴエート・ロシア―馮麾下の二派―聯俄政策の根本理論―馮維國のモスコー行―ロシア果して援助するか？

第三節　宋子文と黃郛……三一

電波に打ちふるふ怪奇の塔―ライヒマンと宋―聯盟の對支援助―『經濟軍閥』―棉麥借款―黃郛の存在理由―黃の抱負

第四節　支那を征服するもの……三七

『支那はいづこへ？』―內藤湖南博士の支那觀―北一輝の英雄待望論―中山優氏の觀點―藤枝丈夫氏の場合―邊疆分離の傾向―康藏問題―新疆問題―雲南の形勢　支那は赤化するか？―中原の政治勢力

目　次


—優勢なる中央派—蔣介石はオゴタイ汗か？

**第五節　誰が中華民國を？** ……四八

統一途上の支那—いはゆる統一の範疇—邊疆は暫らく除外—中原に鹿を逐ふもの—蔣の獨裁意企—胡漢民の正統國民黨運動—赤化を指標する第三動向—結局獨裁・共産二陣營對立

**第六節　一九三三年に於ける內政動向** ……五四

支那を撫でて見る—混亂支那の全貌—青廣藏及び雲南—外蒙、新疆—赤化運動—南京政權

## 第二章　福建革命の輪廓と動向 ……六六

**第一節　福建獨立の新形勢** ……六六

三個營巢の對立—『人民』政府の機構と政綱—中心人物とその背景—永續性その他の見透し

**第二節　福建革命の思想** ……七六

福建獨立を『革命』と見る所以—第三黨と鄧演達—その政綱—社會民主黨とその主張—國家主義派

**第三節　十九路軍物語** ……八一

福建革命の武力—陳銘樞手創す—その十數年來の歷史—その領袖を語る—十九路軍は强いか？—既に强弩の末

**第四節　福建獨立をめぐる人人** ……八六

李濟深—陳銘樞—蔣光鼐—蔡廷楷—戴戟—黃强—區壽年—翁照垣—王禮錫—梅電龍—胡秋原—黃琪翔

季方—章伯鈞—徐名鴻—彭澤湘—何公敢—陳友仁—徐謙—歐陽予倩

## 第三章　五全大會まで ……九七

**第一節　張學良歸る** ……九七

學良下野の回顧—外遊八ヶ月—宋子文との關係—孫科一派合流？—彼は結局どうなる？—蔣に賴らん

**第二節　一九三四年政治・外交の烏瞰** ……一〇三

國民革命の歷史—政治機構—中央派—西南派—北支那各派—國家主義派—第三黨と社民黨—共産黨・軍・ソヴェート—邊疆問題—聯盟の對支援助—日支關係の現狀と將來—米支關係—露支關係—時局に躍る人人

**第三節　激化する列强の對支利權獲得運動** ……一五三

『天羽聲明』は支持されねばならぬ—潛入する米國資本—躍動する英國の勢力—獨・佛・伊の割込運動

**第四節　支那政局首腦者論** ……一五九

五全大會延期・蔣の腹藝—冷頭冷腦の王寵惠—面紅耳赤の胡漢民—紅軍類勢が延期の眞因—自崇禧・支那の蒲生氏鄕—北支那はどう動く？

**第五節　汪兆銘の遭難** ……一六六

滿洲事變と支那の三政治家—蔣・胡の主張—汪『一面抵抗・一面交涉』を高唱—蔣との合作—對日策の完成—遭難の原因—犯行の背後—政局は動搖せず

## 第四章　支那ファッシステイと蔣介石……一七一

第一節　支那ンアッシステイ運動の解析……一七一
分解する國民黨―『西西園』時代―中國棒喝黨成る―藍衣社出現―總章と『三健運動』―左翼戦線を破る―ファッショは藍衣社の專賣か？

第二節　藍衣社の正體……一九二
社が產れるまで―首腦の面面―社の役割―白色テロの嵐―新生活運動と文化運動

第三節　蔣介石の「新生活運動」……一九八
有利な環境を利して―Imported Slogans への代替―民心轉換のために―運動の發靱と經過

## 第五章　北支那局勢の考察……二〇四

第一節　北支排日グループの正體……二〇四
白逾桓・胡恩溥の暗殺―酒井參謀長の强談判―テロの背後―憲兵第三團―政治訓練處―曾擴情―蔣孝先―于學忠

第二節　北支事態の急迫と蔣政權……二一一
北支停戦協定の破壞―黄郛退場を餘儀なくせしめた北支の政情―一應の解決

第三節　北支情勢の新展開……二一六
農民自治運動―河北省内に於ける政治勢力の單一化―滿洲に於ける赤化運動―日支防共協定の必要―内蒙强化の工作

第四節　北支時局に躍る人人……二一七
のし上つた宋哲元―閻錫山―韓復榘―蕭振瀛―殷汝耕―王揖唐―曹汝霖

## 第六章　日支關係を檢討す……二三一

第一節　抗日情勢の變化とわが對策……二三一
北支停戦協定の意義―一歩の内必ず芳草あり―大亞細亞主義の正覺―男子漢・黄郛―黄出山の意義―北支の鎭定

第二節　銀公司問題と日本……二三七
宋子文コース―ライヒマン―ジャン・モネ―キンダアスレイ―中國建設銀公司成る―日本の態度

第三節　日支復常工作の現狀と期望……二四〇
支那は何故轉向したか―統一への蔣の意企―經濟萎縮、特に銀問題―抗日排貨の無效果―聯盟依存の夢破る―轉換の態樣―支那の求むるところ―日本の索むるもの―期望

第四節　支那の親日派・排日派……二五一
楯つく面面―宋子文―顧維鈞―施肇基―顏惠慶―潘公展―董顯光―龔德柏―色よい人人

第五節　親日派の人人……二五七

親日派とは？—汪兆銘—黃郛とその一黨—唐有壬—吳震修—その他の知日派 ……二四四
第六節　問題の「新生」事件 ……二五八
放恣な小雜誌・小新聞—鄒韜奮の『生活』刊—杜重遠—學良の尻押し—『開話皇帝』—日支の交渉

## 第七章　中國共産黨・軍の研究

第一節　中國共産黨解消派の潰滅 ……二六八
上海の左翼大捕物—陳獨秀の眞價値—『支那のレーニン』時代—日和見主義と陳獨秀—非幹部派から解消派へ—清算
第二節　露支復交と豫測 ……二八一
斷交の回顧—復交の機運—終に無條件復交—影響は重大
第三節　時今支那共産軍に書 ……二八七
「首斬り」「鄭繼勛」、騙られの事—三省圍剿、風に木の葉の紅軍の事—白狼の昔を偲ぶ徐向前・賀龍の遊擊戰—蔣介石・毛澤東鍔せり合ひの事
第四節　共産軍の頽勢と蔣介石の獨裁强化 ……三〇一
剿匪陣營の蔣介石—閥堡政策—經濟封鎖—江西に於ける剿匪の進捗—第二期國民革命の開始
第五節　赤區の潰滅と江軍の西漸 ……三〇九
瑞金の陷落—第五次圍剿の經過—赤白對抗史上の一大轉機—大舉西漸愛勝つ—八條の游擊線
第六節　支那共産軍の歷史と現勢 ……三一六
黨軍か流寇か？—紅軍の歷史—毛澤東の農民バルチザン隊—朱德軍との合流—四方風を望む—長沙攻陷—一九三一年初頭の紅軍—一九三四年の紅軍—一九三五年の現勢
第七節　西北赤化の現段階 ……三二五
統一障碍の除去—追剿軍事進む—貴州爭奪戰—四川に於ける紅軍及びソヴエート區—新疆の赤化情勢
第八節　一九三六年に於ける共産軍 ……三三三
年初の態勢—朱・徐軍の山西侵入—賀・蕭軍の北上—年末の態勢
第九節　滿洲に於ける共産運動 ……三三九
滿洲のもつ複雜性—ロシア側からする運動—朝鮮共産黨の運動—中國共産黨の滿洲進出
第十節　支那赤化へ—外蒙の觸手 ……三四二
三條のコミンテルン・ルート—內蒙國民革命黨—馮玉祥との握手—黨の內訌—反共産派の動き—內蒙青年黨とその政綱
第十一節　中國共産黨の中心人物 ……三四七
陳獨秀時代の主要人物—國・共合作時代の領袖—李立三時代の領導者—巨星毛澤東
第十二節　中共領袖譜 ……三五七
毛澤東と朱德—陳紹禹とその一黨—李立三—韓麟符—賀龍—瞿秋白と向忠發—方志敏と邵式平—何孟雄と羅章龍—黃平—華崗—劉少奇

第十三節　「赤豹」毛澤東傳……三六八
長沙師範の一學生—『湖南王』—一全大會の湖南代表—上海執行部秘書—宣傳部長代理—武漢時代の彼—『四省秋收暴動』—農民パルチザン隊組織—中華ソヴエートの主席
第十四節　毛澤東印象記……三七三
匿名支那記者の回憶—亂髪の病人見たいな男—新聞亂讀—麻雀で喧嘩—個性が強い—あの男がソヴエート主席とは
第十五節　瞿秋白傳……三七六
網に引つかかつた大物—處刑—『露專』の文學青年—『晨報』莫斯科特派員—上海大學教務長—楊之華とのロマンス—黨總書記—ソヴエート教育人民委員—暴竟文人

## 第八章　高漲する抗日聯合戰線……三八五

第一節　抗日思想の諸要因……三八五
『支那版『人民戰線』—『抗日救亡聯合陣綫』—中共の對日宣戰通電—國民黨侮日救會—國民武裝自衛運動—コミンテルン七全大會—軍事依存主義の揚棄—新戰術の採用—八・一抗日宣言—北支の學生運動—救國團體の簇生—戰線の各階層—戰線の理論と工作—抗日テロ
第二節　抗日宣傳最近の傾向……三九五
抗日から侮日へ—章乃器・王造時の主張—錢俊瑞『中日財政經濟上より未來戰爭を觀察す』—終に日支戰爭を夢想
第三節　抗日聯合戰線と蘇聯邦……四〇一
ロシアの對支文化工作—中蘇文化協會—映畫政策—新聞政策—支那抗日宣傳の變化—かくて聯合戰線は成る
第四節　抗日聯合戰線の人物……四〇六
陳紹禹—中華民族革命同盟の人人—沈鈞儒—章乃器—鄧韜奮—杜重遠—陶行知—王造時—左翼作家

## 第九章　西安事件と國共兩黨の再婚……四一四

第一節　「容共」と西安事件……四一四
『容共』の意義—容共の歴史—コミンテルン七全大會後の新方針—目的は國民黨をして容共せしむるに在り—終に西安クーデター
第二節　國共妥協問題の眞相……四二一
國・共妥協說の回顧—黃漢湘對黃公略—蔣と毛代表の會見說—洛川會議說—西安事件の意義—抗日戰線側の年餘の經營—潘漢年・苗劍秋・黎天才・黃琪翔・杜重遠—張・楊八要求は活きてゐる—蔣と周恩來の會見—蔣釋放の條件—中共『致三中全會書』—三中全會の根絶赤禍決議—妥協條件の明示—風氣果然一變す
第三節　國共再婚と周恩來……四三七
巴里留學生の三派—超然派—國家主義派—共產派—曾琦・李璜・余家菊—趙世炎・陳延年・李立三・蔡和森—少共幹事周恩來—廣東區軍委書記—『赤黃埔系』の結成—軍事部長となる—江西赤區に入る—西安

目次

事件に於ける周―新時代領導者として登場……四三二
附錄……四三四
支那文壇の颱風時代（郭沫若）……四四〇
廬山の風光と人物（壬癸生）……四四三
廖仲愷の暗殺者……四四八
張學良行狀記……四八九
梅蘭芳傳（近代支那美少人錄）……五一三
迷途的羔羊（最近の支那映畫）……五二〇
支那惡童物語（老舍）……五三八
春城深草香妃怨（西城看戲絕話）……



# 現代支那の政治と人物

# 現代支那の政治と人物

## 第一章　上海事件後の政治情勢

### 第一節　一九三二年末に於ける全局勢

#### 一　諸勢力の一大混戰期

目前支那の客觀的情勢、これが私に與へられた命題である。これについて、私は、先きに公表されたリットン報告を先づ想起することが出來る。

『一九二七年、南京に中央政府が樹立せられた。同政府は、黨に依つて統制せられた。(中略)暫時、統一は表面に於いて保持せられた。しかし、有力な軍閥が相互に同盟を結び、南京に向つて進軍した場合には、統一の外觀さへ、これを保持することが出來なかつた。これらの軍閥は、一度も目的を達しなかつたが、しかも彼等は、戰敗の後に於いても、輕視し得ない潜勢力であつた。加ふるに彼等は、中央政府に對する戰爭は、決して叛逆行爲ではないと思惟してゐたのである。彼等の眼中に於いては、戰爭は單に彼等の黨派と、國都に在住し、諸外國に依り、中央政府として承認せられた他の黨派との間の、單なる爭覇の戰鬪に過ぎなかつたのである。この上下關係の缺欠は、黨そのものの中の重大な不和に依り、中央政府の、孫文の疑ひなき後繼者であるといふ資格が弱められるため、いよいよ危險なものとなる。この新たな分裂の結果、南方の有力な諸首領は、離叛して廣東に退き、同方面の地方

官憲及び國民黨支部は、愈々中央政府と獨立に行動して來た。右の概述に徴すれば、支那の分裂的諸勢力は、今も尙强いもののごとくである。この結合の缺如の原因は、國民大衆が、支那と諸外國間の關係緊張せる時期を除いては、國家を基礎とせず、家族及び地方を基礎として考ふる傾向あることに存してゐる。現在でも、自己獨立主義的感情を超越してゐる指導者がないではないが、眞の國家統一が齎らさるるためには、更に多數の國民が國家的見地を有つことが必要である。避くることを得ざる政治的、社會的、知識的及び道德的亂雜を示しつつある支那の過渡期の狀況は、支那の性急な友人を失望させるものではあるが、しかも種々の困難遷延及び失敗にも拘はらず、事實に於いて相當の進歩が遂げられた（中略）。現在、中央政府の權威は、尙若干省に於いて薄弱ではあるが、中央の權力は、少くとも公然とは否認せらるることなく、もし中央政府が、現在のまま維持せらるるに於いては、地方行政、軍隊及び財政は、漸次國家的性質を帶ぶるに至るであらうことは、期待してもいい。』（第一章『支那に於ける近時の發展の概要』）

現在の支那の情勢に對して、これは絶好の脚註である。リットン報告は、わが朝野を擧げて、囂囂たる非難の的となつて居り、成程、九・一八事件の起因に對する認識とか、滿洲國の創生に對する觀測とか、批議すべき點が多々あるが、それを外にして、一概にその價値を抹消することは出來ない。支那の現勢に對する觀察、ボイコットに對する檢討等、幾多の傾聽すべき叙述を含んで居り、公平に見て、「第三者の觀た滿洲事變史」として、永久に歴史に殘る報告であると、私は信じてゐる。すなはち上記援用の諸節のごときは、「埋藏せられた珠玉」の一つであつて、私は大體に於いてこれを首肯するものである。ただ、中央の權力は、少くとも公然とは否認せらるることなく」といつてゐるのは、中國共產黨及び紅軍の猖獗を、全然無視した斷定であり、また「地方行政軍隊及び財政は、漸次國家的性質を帶ぶるに至るであらうことは、期待してもいい」と叙した一節は、「もし中央政府が、現在のまま維持せらるるに於いては」といふ條件附きだから、別に批議すべき點はないやうなものの、そのいはゆる中央政府なるものが、もし果して南京政府を指してゐるものならば、調査團の觀察は間違つてゐる。現在の南京政府は、誰が見てもその基礎が薄弱である。その薄弱な狀態が、今後幾年つづけられたとしても、調査團の期待するやうな狀態は產れて來ない。內に何等かの氣配が起り外から何等かの作用が加へられ、それによつて南京政府が薄弱な現狀から跳躍し、ヨリ强き段階にまで置かれた時、支那ははじめて救はれるのである。「現在のまま維持せらるるに於いては」は、「現在より强めらるるに於いては、」と訂正されなければならないのである。

この一點は、畢竟外國人の短時日の調査では、看透し得なかつたところであらうが、しかしながら「當國者、切。」の立場に據る支那の識者の、早くから氣附いてゐたところであつて、中央權力擴大、强化及び代替の運動は、國內各政治的勢力に依つて試みられてゐる。すなはち蔣介石を首領とする藍衣社のファッシズム運動は南京及び漢口を根據として行はれ、これに對抗する汪兆銘一派の左派國民黨は、中國國民黨改組同志會なる形に於いて結束し、これ亦南京を中心として活動してゐる。南では右派國民黨の元老胡漢民の理論と、廣東の陳濟棠の實力とが結びついていはゆる新國民黨運動なるものが起らうとしてゐる。北では張學良軍閥が最後の居據りを策し、その指導理論としては、反國民黨の國家主義青年團がある。——團と學良との關係は、やや曖昧ではあるが——これを繞つて馮玉祥等北支那舊軍閥の策動がある。馮は胡漢民一派と聯絡があるといはれ、或は又一九三〇年以來の因緣を辿つて汪兆銘一派に呼應するものともいはれてゐる。

以上の各派は、ともかくも多少の指導理論を持つてゐるものであるが、この外の地方軍閥、例へば山東の韓復榘、劉珍年、四川の劉湘、劉文輝等は中原に志があるわけではなく、純然たる部落思想、割據主義に立つて自擅作用を續けつつある途中である。更に公然と南京政府を否認し、全然段階を異にせる政權を樹立し、支那の正統政府たることを標榜せるものに中華ソヴエート共和國臨時政府（中國共產黨及び紅軍）がある。最後に滿部を一瞥すれば割據主義に一歩を進めて、支那本部から分離しようとする運動を試みてゐる西藏、綏、察がある。外蒙古のソヴエート化、滿洲國の獨立につづく邊疆分離運動は、今や大西藏運動に依つて集大成されようとしつつある。

叙上の中央強化、代替、獨裁、割據、分離、赤化の各政治的勢力が、武力と宣傳の工具を振り翳して、一大混戰を闘ひつつあるもの、これが一九三二年末に於ける支那の客觀的情勢である。

## 二　汪兆銘派の左翼戰線

一九三二年十月初旬、いはゆる滿洲撤棄宣言を發出したことによつて、蔣介石を獨裁首領と仰ぐ秘密結社、もしくは國民黨内の小組織として、藍衣社なるものの存在してゐることが、改めて世人の腦に落ちた形である。藍衣社とはどういふ結社であるか。何を目的としてゐるか。それよりも、何故に蔣介石は、かうした組織を必要とするか。それを明かにするためには、先づ汪兆銘一派の中央政府乗取り運動を、解剖しなければならない。

汪兆銘は、國民黨内の左派、修正派として知らるる改組派の首領である。かつては容共（共産黨容納）政策の主張者として、又一九二八年蔣介石の南北統一以後は、蔣の獨裁的傾向に反對して、黨内民主化を唱道し、一九三〇年には蔣と快からざる北支那の馮・閻軍閥と結んで、擴大會議及び政府を北平に開いたこともある。一九三一年三月、蔣が政府部内の右派首領胡漢民を監禁したことが楔機となつて、五月、孫科、古應芬等の南下に依つて、廣東國民政府の成立を見るや、汪も一黨を率ゐてこれに馳せ參じ、指導的地位を占めたが、滿洲事變起るとともに、逸早く蔣と妥協し、一九三二年一月、入つて行政院長の要職を占めた。この時同志で、ある孫科、陳友仁等は、蔣に見切りをつけて退却したに拘はらず、汪は逆に蔣の腹中に飛び込んでしまつたのであるが、これは必ずしも蔣に致されたわけではなく、中央に盤據して自派の勢力に培ひ、一擧にして南京政府を乗取らうとする策謀が、彼の胸中深く藏せられてゐたのであつた。すなはち彼及び陳公博（實業部長）顧孟餘（鐵道部長）に隨伴して、改組派少壯組の闘將谷正鋼も南京に入り、「中國國民黨左翼同志通訊處」といふ名目で政治的秘密結社を組織し、改組派三巨頭の地位を擁護し、特に蔣介石一派のクウデタアに備ふる目的から、巨頭連の身邊の護衛を主たる任務とすることになつた。これが國民黨内の左翼小組織の出發點で、通訊處は間もなく擴大され、「中國國民黨改組同志會」と改められ、改組派の中央政權把持を目指し、積極的に活動を開始し、その第一回會議で左の通り運動方針を決議した。

（一）左翼戰線の同志を糾合して大同團結を成し、蔣派のファシスト運動に對抗し改組派の政治主張を貫徹するため、國民黨改組運動を起すこと。

（二）一全大會（國民黨第一次全國代表大會——一九二四年一月）宣言及び決議に基き、新政綱を作成宣布すること。

（三）嚴密且つ敏速に下層階級への浸入に努め、廣汎なる大衆を領導して、左派の民衆基礎を建設すること。

この運動方針の遂行のため、各主要省に幹部委員と登記主任を設け、左翼同志の糾合登記を行ふこととし、四川、湖南、湖北、浙江、江蘇、安徽、山東、河北、山西各省の地方幹部委員二十餘人が、即時還任された。この外盟血隊を組織して、暗殺運動を準備したり、軍事運動の責任者を設け、軍隊内の同志を獲得するとか、種種の實行方法が講ぜられた。また文藝戰線の獲得にも力を入れ、その代表的機關誌「南華評論」の名を取つて「南華派」と呼ばれる一大勢力を、文藝界に樹立してゐる。汪の夫人陳璧君女史はこの方面に特異な活動を試みてゐるといふ。

改組派の特色は理論家、文者學に富んでゐることで、蔣介石が軍閥を基礎としてゐるのと、好個の對照をなしてゐる。汪その人が、そもそも革命同盟會時代の機關誌「民報」の記者として出身し、文字を以て革命を鼓吹した第一人であり、その後も絶えず革命理論、文學方面に精進し、「永久の青年」型の人物であるため、その麾下に集まる連中で、筆の執れない人物は殆んどないといつてもいいくらゐ。三巨頭の他の二人、すなはち顧孟餘は學者として、陳公博は評論家として著聞してゐるし、その他鐵道部次長の曾仲鳴、中央政治會議秘書長の唐有壬、汪派機關紙「中華日報」社長の林伯生、同編輯長黄延凱等も、相當有名である。これらの連中が、「中華日報」、「中華夜報」、「南華評論」、「南華文藝」等に據つて筆陣を張るや、一方南京政府の峻烈な取締りに因るプロレタリア文藝陣の滅亡と相待つて、支那の文藝陣を獨占してゐる觀がある。だがこれらの、いはば「口舌の雄」に過ぎない連中と、著るしく色彩を異にし、共産黨式の運動方法を採用して、改組派の先鋒隊となつてゐるものに、谷正鋼一派がある。背後に宿將王法

動を控へ、谷正鋼、鄧和黃、蕭忠貞を領袖とし、別格領袖として朱霽青、潘雲超等を有するこの一派は「革命評論派」（陳公博派）「現代評論派」（陶孟餘派）、「南華派」、「學生派」（陳学木一派）と相對して、「三民主義青年派」と稱せられ、事實上改組派を引きずり廻してゐる觀がある。中にも朱霽青は、東北義勇軍後援會から推擧されて義勇軍指揮官となつて北上してゐるし、潘雲超は上海東北義勇軍後援會主席として、對日ショウヴィニストを牛耳つてゐる。

五派の俊髦を領導して、政府の中樞たる行政院に占據し、チリチリ押しに政府を乘取らうとした汪派の策動は、果然目覺ましいものがあつた。軍事委員會に據る蔣介石は、これに對して、最初は「口舌の徒、何するものぞ。」といふ態度を執つてゐたが、後にはやや狼狽の姿で、露骨に對抗手段を講ずるやうになつた。豫ねて秘密のうちに育くみつつあつたファッシズム團體「藍衣社」を隱し切れずに表面に出す形になつた。汪派の「文の私黨」に對抗して、蔣派の「武の私黨」が、樂屋から舞臺へ登場した。

## 三　蔣介石と藍衣社

蔣介石獨裁の工具、支那ファッシストの總機關として、藍衣社の名は、最近頓みに有名になつたが、その前身たる「中國棒喝黨」は、一九三一年秋、秘密裡に組織せられたもので、國民黨内の小組織運動としては、改組派のそれよりも早く、ただ改組派の躍起運動に刺戟されて、不本意ながら表面に出て來たわけである。

最初、蔣介石に對して支那ファッシストの組織を進言したのは、黄埔軍官學校の出身で、黨内政治訓練の工作に、多年の經驗を持つてゐる賀衷寒であつた。はじめは黨内の小組織として進行させ、黨内の實權を握つた後、一切の反對派を武力で打倒し、最後には國民黨そのものをも覆滅し、蔣の獨裁政治を招來しようといふ計畫である。下地は好きなり、で、蔣は賀の進言を容れ、賀、桂永清、潘佑强、杜心樹、鄧悌等十三人の、いづれも黄埔軍官學校出身者を中央幹部に任命し、その外に蔣の腹心で、豫ねてから黨部方面を操縦させてゐた陳果夫、陳立夫兄弟、三民主義理論家の周佛海、並びに邵元冲、陳布雷、朱家驊、賀耀祖、張治中、程天放、張道藩等を顧問格に、經費の點は宋子文に心配させることゝし、一九三一年秋、いよいよ「中國棒喝黨」を組織したのであつた。當然、黨は社長（蔣介石）の獨裁で、黨員は十人一組、三百組を基本黨員とし、内二百組を黄埔軍官學校出身者に取り、一百組をその他から募り、基本黨員には月二百元の生活費を保障することとなつてゐる。南京の中央軍官學校にも、そのフラクションをつくつてゐる。ゲ・ペ・ウとしての鐵血隊も組織された。汪兆銘、陳銘樞、蔡廷鍇、程潛等は同隊の「要處分」表に含まれてゐるといふ。宣傳機關としては、南京の中國日報をはじめ、小報及び週報が三四種ある。黨の經費月額百二十萬元は、蔣の私財から支出されてゐるといふ。（一說に據れば、棒喝黨成立以前、陳果夫の手に依つて、「西西園」なる祕密結社が先づ成立し、それを母體として黨が產れたといふ。西西は支那音シイシイでC・Cに通じ、中央黨部 Chung-yang Tang-pu の頭文字でもある。この說は信じていい。）

棒喝黨の名は勇壯活潑であるが、あまりに露骨であるといふので、一九三二年三月初旬「中國國民黨藍衣社」と改稱した。同時に「藍衣社總章」三十餘條を制定したが、その最扼要の一節に、「虛僞の民主集權制を廢棄し、ファッシストに倣つて社長獨裁制を行ふ。」（第三條第一項）「一切の大計は、社長の裁決に依る。」（同第三項）とあり、明白にファッシスト團體たることを明かにしてゐる。また第四條に、最低限度の政綱として、（一）國仇を復し、獨立を完成し、不平等條約を廢棄すること。（二）中央集權。（三）吏治肅清。（四）農業の開發と、地權平均の實行。（五）工業建設と、勞資鬪爭消滅。（六）節約的財政政策。（七）徵兵制實行。（八）職業教育提唱、民衆教育普及。（九）男女同權。（一〇）三民主義新社會の實現。の十項を擧げてゐる。一見他奇なき政綱で、殊に第十項のごとく、あたかも三民主義の忠實なる信徒であるかのやうに見えるが、實際は（一）健軍運動（黨内雜系整理。藍衣社への黨權集中。黨總理制の復活。地方黨部整理）、（二）健黨運動（諸將領の行動監視。諸將領の既得實權の奪取。軍隊ファッシスト化。）（三）健財運動（地權平均。ファッシスト運動經濟的基礎の確立。）の、いはゆる「三大健策」並びに（A）宣傳政策、（B）銀行政策（上海の金融ブルヂョアジイ、買辦階級の引入れ。）（C）教育政策（陳果夫を主任とし、藍化教育を實行することゝ）の三大政策の執行に依つて、基本黨員の充實を待ち、一擧に中央、地方黨部の實權を掌握し、國民黨總理（この際は、永久に孫文のものとして、空位に置くことになつてゐる）に蔣介石を据へようとし、場合に依つては、國民黨そのものを蹴飛

ばさうといふ、恐るべき目的を持つてゐるのである。

支那は Land of Blue Gown といはれる。その國民的衣裳たる藍青色の制服を纏ひ、青天白日旗の「青」にも近く、堅忍克苦の志を首領に致さうとする支那ファッシスト秘密結社である「藍衣社」の活動は、流石に蔣一派の計畫とて規模の大なること汪派の比でなく、一時押され氣味であつた中央政局も、忽ち蔣派に有利に展開し、終に汪兆銘をして行政院長の要職を一擲するのやむなきに到らしめた。八月初旬、汪は張學良痛罵の通電を發して職を去つたが、辭職の原因は學良でもなく、藍衣社、鐵血隊の活躍に怖氣附いたためである。改組派の陳公博、顧孟餘、曾仲鳴、唐有壬等は、その後も中央に殘つてゐたが大勢の挽回は先づ覺束ないと觀られた。

蔣派はかく一たび汪派に戰勝した。しかもこれを以て足れりとせず、新根據地を武漢に求め、蔣直系軍十二萬を集中したのみならず、藍衣社内の最急進派として、汪派の谷正鋼と對照される劉建群の建言に依り、南京に政治訓練班を開設し、高度ファッシスト運動遂行を目指すなど、勢焰冲天の慨がある。

## 四　注目すべき廣東の動向

廣東は、今日でも依然として革命の搖籃である。亥辛革命は武漢を起點としてゐるが、その直前に、黄花崗七十二烈士を以て代表される廣東事件があつたことを、忘れてはならない。次ぎの討袁革命でも、胡漢民はここに據つて獨立を宣した。孫文の護法革命もここを根據地とし、國民黨の改組も、ここで行はれたし、國民革命もここを出發點とした。近くは孫科、古應芬等の反蔣運動も、ここを根據とした。かうした土地柄の廣東に、今、理論派として國民黨右派の首領胡漢民が居り、實力派として蔣介石に次ぐ有力軍閥である陳濟棠がゐる。胡の理論と、陳の實力とが、完全に結びついたとき、新たな風雲が捲き起さるべき可能性が充分にある。必然、廣東の動向は、蔣介石派の惱みの種である。

胡漢民は、汪兆銘と並んで、孫文門下の雙璧であつて、國民黨元老の、ほとんど第一人である。孫文死後、彼は戴天仇とともに右派の理論家として、一九二八年の北伐完成前後から、南京政府部内に重きを成し、蔣介石の實力と結びついて、特に黨部方面に滯勢力を持つてゐた。一九二九――三〇年頃、北方反蔣派の大同團結である擴大會議派（汪兆銘一派の理論と、閻錫山、馮玉祥の實力。）を向ふに廻し、右派の理論を振りかざして奮鬪した武者振りは、今なほ我等の記憶に殘つてゐる。立法院長として、政府部内に於ける廣東派の首領として、隱然蔣介石の一敵國でもあつた。廣東財閥を率ゐて、浙江財閥と對抗し、後者の國際聯盟に期待する財政政策に反して、米國系資本を入れようとしたこともある。

兩雄並び立たずの譬へに洩れず、蔣胡兩者の關係は、間もなく決裂した。直接の原因は、訓政期間に於ける約法制定可否の問題であつたが、實は上述した兩雄不並立の原則に據つて、實力を持つてゐる蔣介石は、矢庭にクウデタアを斷行して、胡漢民を監禁してしまつた。それは一九三一年三月のことであつたが、この理不盡な仕打ちに對して、流石の廣東派も堪忍袋の緒を切り、中にも胡と關係最も深かつた古應芬は廣東に潛行して、同地方の實力派陳銘樞・陳濟棠に、反蔣の旗上げを說いた。つづいて鐵道部長であつた孫科等も、反蔣の旗幟鮮明に南下したが銘樞は蔣の脈を引いてゐるので態度を明かにせず、愚圖ついてゐるうちに、怪物濟棠のためにシテやられ、廣東は完全に濟棠のものになつた。そこへ汪兆銘一派も馳せ參じ、陳友仁も加はり、五月、廣東國民政府なるものをデッチあげた。對峙四ヶ月、滿洲事變起るとともに、南京、廣東兩派の妥協話が持ち上り、種種の經緯はあつたが十二月には兩政府一先づ合體し、胡漢民は釋放されて香港に歸つた。

彼は前述した通り、汪兆銘とは主張を異にしてゐる。彼は三民主義を、嚴密に孫文の述作に準據して解釋する主義で、先づ正統三民主義といへる。これに反して汪兆銘は、大向ふの評判を氣にする方で、新らしい方へ、絶えず改論して行く。胡から見ると、汪は輕浮な新らしがり屋でしかない。のみならず汪は、閻、馮等の軍閥と手を握つたりして、政治的節操が欠けてゐるやうに見えるので、胡としては、どうしても汪と合作する氣になれない。故に汪が擴大會議を率ゐて、北平にゐたときには、胡は南京にゐて極端な人身攻擊を、汪に對して試みたくらゐである。蔣とは新たに深怨を結んだし、汪とも協同することが出來ないとすれば、胡

としては、どうしても廣東に頭張る外ない。で、彼は、陳濟棠の實力に着目し、これを利用して再起を策すべく、一年間努力をつづけて來た。

胡の理論と、陳の實力とが、果して結びつき得るかどうかに、廣東政局の關鍵がある。そこで問題は陳濟棠である。彼は保定軍官學校の出身で、李宗仁、白崇禧が、第四集團軍の正副總司令だつたとき、僅かに一軍長に過ぎなかつたくらゐの、ごく平凡な一武辨であつた。一九三一年南支反蔣軍の旗上げまでは、テンデその存在を認められなかつた。書を能くし、辯に巧みで、機會ある毎に民衆に呼掛け、萬事派手好みの陳銘樞が省政府主席だつた時代には、濟棠は全く片隅に片附けられてゐた。しかし結局彼は銘樞より偉かつた。それまで赫赫の名がなかつたのは、彼の陰鬱な性格の然らしむるところで、名がなかつただけ、それだけ實を收むることに拔目がなかつたのであつた。だから胡漢民救援の目的で、古應芬が南下して來ると、銘樞は蔣介石に氣兼ねして、首鼠兩端を持したに反し、濟棠は敢然古と結び一氣に銘樞を押し出してしまつた。多年默默として馬鹿にされて來た濟棠の實力は、ここにはじめて發揮された。つづいて乘り込んで來た汪兆銘も、孫科も陳友仁も、いづれ劣らぬ口八丁手八丁の連中ながら、濟棠には大刀打ち出來ず、香港に逃げたり、澳門に隱れたりしてゐる。伍朝樞もさうだつた。伍は胡漢民、孫科等の推薦で、濟棠の實力を抑ふべく、統一政府司法院長の地位を一擲して、廣東省政府主席に來任したのであるが、濟棠は勿論これを喜ばず、財政廳長馮祝萬を手先に使ひ、省政府收入中の大部分を軍費として要求させ、伍をして「無い袖は振られぬ。」の苦痛を滿喫せしめ、終に退却の餘儀なきに至つた。黨の大御所胡漢民さへも、濟棠の實力に逆らふわけに行かず、毎月四千元の生活費を濟棠に仰ぐやうな狀態であつた。

以上は政客に對する濟棠の遣り口であるが、他の軍閥に對しても、濟棠は着着鮮やかな手口を見せた。孫科の使嗾を受けた陳策（海軍總司令）、張惠長（空軍總司令）、陳濟棠（虎門要塞司令）のいはゆる「三銃士」が、實力を以て濟棠を脅かさうとした際、彼は機先を制して、陳策麾下の陸戰隊を、虎門で武裝解除し、爾來一九三二年四月までに、三銃士を處分し去つた手際は、ちよつと眞似の出來ないところがある。その他の小軍閥に對しては、絶えず五萬十萬の小金を出し懐柔に努め、又正面の敵たる廣西派の李宗仁、白崇禧に對しては、從來廣東國民政府から出てゐた月六十萬の軍費支給を停止し、一面武器の手に入らないやうに監視し、善戰の廣西派をして、雌伏のやむなきに立ち到らしめてゐる。濟棠は又、その麾下の軍隊中から、大物の出て來ることを極力警戒し、余漢謀、香翰屏、李揚敬三羽烏の勢力を常に平均させ、その外に彼直屬の獨立師、獨立旅を多くつくり、自己の勢力が、萬遍なく麾下軍隊に行き亘るやうにしてゐる。財をつくることもなかなか巧者で、一九二八年以來、毎月四百三十萬元の軍費をせしめ、その中六十萬元くらゐは必ず着服し、實兄陳維周を廣西鹽運使に任じ、その手から毎月少くも百萬元の收入があり、私財三千萬元といはれ、香港九龍方面に七八百萬元の土地建物を持つてゐるといふ。彼が目下思ひのままに振舞ひ得るのは、全く金の御蔭で、直屬軍隊二十萬人と號し、蔣介石に次ぐ大軍閥となつてゐる。

――かうした陳濟棠である。煮ても燒いても喰へない彼である。思想、理論の上からいへば、兩廣の地盤以外には何もない。純然たる部落思想、割據主義の男である。かういふ男に、何等かの理論を吹き込まうといふのだから、胡漢民も骨が折れるわけだ。しかも最近、南京に於ける劉蕡隱、孫鏡亞等のマウスピイスを通じて、胡漢民一派の新國民黨樹立運動が傳へられてゐるのは、果して濟棠と話し合ひがついたのであらうか。私は濟棠の性格から推して、胡と陳との間には、完全な諒解はついてゐないと觀る。恐らく胡漢民は蔣介石の藍衣社に刺戟され、濟棠との聯繫充分でないに拘はらず、明敏な彼に不似合な盲動を開始したのではないかと想像する。それにしても新國民黨の四大政策として新聞紙上に擧げられた、(一)聯英政策採用、(二)反南京政府、(三)瞞殺政策、(三)滿洲國との聯絡、の四項は、至極變なものだと思ふ。その後に傳へられた「智社」組織說の方は、まだしも多少信を置き得る。事態は、蔣派がファッショ運動を開始した時期と、胡派今日の運動段階と相似、胡派の「智社」は、蔣派の「西西園」と前後相對比されるものではないかと思ふ。

かくて今日廣東の動向は、正統國民黨樹立、中央政府代替の運動と見ることは、まだ出來ないが、割據運動としては、もうすで

に完成されてゐる。何となれば、廣東に在る西南委員會は、儼然「西南執行部」と稱し、兩廣のみならず、貴州政府主席の任命權すら、これを南京から割取してゐる實情だからである。尙、この割據主義に油を注ぐものは「大客家主義」である。客家は廣東地方に於ける異人種で、歷史的にいへば「中原の遺種」であり、有能であるとともに、排他的な感を以て著聞してゐる。太平天國の洪秀全、馮雲山、黃花崗七十二烈士中の二十四名、淸末の廣東に於ける四暗殺者（客家四烈、すなはち溫生才、林覺民、陳敬岳、鍾明光）、と（熱海會見で有名）も客家だつたし、國父孫文その人も、客家であるといふ說がある。孫の晩年最親信した廖仲愷（容共政策に與つて力があり、ヨッフェとのミュウンで、赤軍總司令に推された葉挺、支那最初の赤軍の指揮者で、一九二七年十二月十一日の廣東コムもまぎれもない客家だ。孫文と對抗した陳炯明、支那最初の赤軍の指揮者で、一九二七年十二月十一日の廣東コムど共產黨員と觀られ、後第三黨を組織し、一九三二年終に銃殺された鄧演達、かういふ變つたところも、皆客家だ。現存の人物では陳銘樞、陳濟棠、張發奎、鄒魯、陳公博をはじめ、謝英伯、香翰屏、繆培南、范其務、黃强、翁桂清、薛岳、林雲陔、林翼中、李漢魂、李振球、鄧仲元等、皆客家である。新しい文士張資平などいふ變り種もある。陳濟棠部下團長以上の三分の二は客家であり、上海事件で名を揚げた第十九路軍は、陳銘樞の手創した軍隊であるが、大部分客家族であるといふ。廣東の政治は、客家を無視しては到底遂行出來ない。もし又大客家主義運動が强化され、銘樞、濟棠の兩巨頭が握手するとせば、銘樞及び十九路軍を以て組織せる「國光社」と、濟棠部下二十萬の軍隊とが合體するわけで、更に廣東別派たる孫科一派の「再造社」が加はれば廣東はいよいよ拔くべからざる牢固たる地盤となるであらう。所詮濟棠は陳炯明の再來であり、孫文在世當時、炯明が散散孫を手古摺らせたと同樣に、濟棠は蔣介石を苦しめることだらう。

### 五　學良に据りと北支の政局

滿洲事變に處して、張學良の執るべき策は、上、中、下の三策があつた。下野外遊は上策であり、平・津居据りは中策であり、失地恢復の蠢動は下策である。馬鹿でない彼は、下野外遊の一途を擇びたかつた。しかし彼ほどの軍閥になると、去就は所詮身輕に行かない。で、彼は中策の居据りを策した。さうしてそのために、國民の信望を繫ぐ必要上、失地恢復を表看板にした。これが今日までの、彼の行徑の全部である。すなはち彼の政治的行動は、一切これを純然たる割據運動に歸納し得る。但し廣東の陳濟棠とは異り、彼はどこまでも蔣介石の勢力を認め、極力蔣と聯絡するに努めた。かうして一年以上、平・津に頑張りつづけた。一九三二年八月、汪兆銘の放つた巨彈に依つて彼は綏靖公署主任を棒に振つたが、綏靖公署の代りに出來た北平軍事分會は、依然として彼の一派が多數を占め、彼の勢力には微動だもない。彼の勢力は、直系軍隊十二萬といはれるが、彼はこれを維持するためには細密な注意を拂つて來た。天津事件の外にはボロも出さず、北平の治安維持には特に注意し、日本人との間に事故を釀さないやうにして來た。

だが、彼の居据りがいつまでつづくか。これは誰しも懷く疑問である。薄氣味の惡い隣人として、山東に韓復榘がゐる。舊山西軍、舊馮玉祥派があり、天津を中心として段祺瑞派の策動もある。このうちで一等實力のある韓復榘（山東省政府主席）が、山東東部に盤踞して、蔣介石のために睨目附を勤めてゐる劉珍年（省政府委員、第二師長）を處分しようとして、一九三二年九月十六日來、行動を起したことは、一般に、北支那に於ける、反學良戰の序幕として大分注目されてゐる。南京からの停戰命に依つて、九月末、韓劉の間に和平商議が纏まりかけたが、その條件は結局劉の勢力を、多少縮めて殘すといふに在つたので、又復た形勢逆轉し、十月に至るもまだ片附いてゐない。韓が積極的行動に出たについては、蔣介石はこれを馮玉祥の差金に歸し、韓に對して馮驅逐を命じたので、韓はやむなくこれに從ひ、寨安滯在中であつた馮に、河北省宣化に移つて貰つた。これは十月上旬のこと。韓はもと馮麾下の第一人で、一九二九年の反蔣戰に際し、一たび馮を裏切つたが、今日ではスッカリもとの關係を取り戻したやうで、身を措くにところなき馮を、自分の勢力範圍である寨安に匿まつてゐたのである。かくて馮は十月十日天津通過、一路宣化に向つたと傳へられたが、同地方は察哈爾省主席宋哲元の勢圈であり、宋が馮の舊部下である關係から、馮再起の噂が高くなつた。寨安に蟄居はしてゐたが、馮とて滿更無爲に暮してゐたわけではなく、實は汪兆銘派の行動に囑望してゐたのである。しかし汪の策動が失敗に

歸すると見ると、彼は鄧文輝、陳嘉佑等の仲介に依つて胡漢民一派と通じ、胡、韓・馮の間には、一脈の聯絡が出來たと傳へられてゐる。（蔣介石が馮に三十萬元を贈り、反蔣陰謀に加擔しないやうに依頼したといふ風說があつた。）しかし馮再起說は、今のところ噂だけで、近く物になりさうに思へない。山西軍も鳴りを靜めてゐるし、段祺瑞の策動も事事しく傳へられるほど進んでゐるかどうか疑問であるとすれば、韓劉の爭ひが、北支反張・反蔣戰の序幕であるとする說も、ちよつと首肯し兼ねるわけだ。

學良の剿據運動に關聯して、記載を逸してならないのは、中國國家主義青年團のことである。團は、その母體たる中國青年黨とともに、一九二三年十二月、巴里に於ける支那留學生を以て組織せられたもので、共產黨反對、國民黨一黨專制反對を旗幟とする、國家主義的結社であるが、その主義、主張は、北支の政治的勢力たる段祺瑞派、張學良派、吳佩孚派、乃至「赤大根的」三民主義者たる閻錫山派、馮玉祥派のいづれに對しても、充分その指導原理たるべきものであり、事實張學良派、段祺瑞派及び吳佩孚派とは、黨、團の發展過程中に於いて、多少の結びつきを有したことがあるので、便宜上この項に於いて叙述することゝしたのである。實際、將來蔣派の支那ファッシストに對し、反蔣各派の掲ぐる標榜としては、汪兆銘一派の修正派意見（黨內民主化等）では、充分でない嫌ひがあり、是非ともメスを國民黨弊の根本に深く入れ、一黨專制の非を鳴らさなければならない。それには、中國青年黨、中國國家主義青年團の主義、主張が恰好である。北支那に於ける反蔣派は、恐らくその指導原理として黨、團の主義を採用するであらう。この意味に於いて、黨、團の前途は、かなり注目に値ひしよう。

前述のごとく、中國國民黨の聯俄容共政策採用に刺戟されて、一九二三年十二月、留佛支那學生に依つて黨、團の創立を見、爾後左の通りの發達過程を執つた。

一九二三年、十二月二日、留佛支那學生曾琦、李璜、周太玄、張子桂等に依つて、中國青年黨巴里に於いて創立。同時に黨の外廓を成す中國國家主義青年團成立。同月、南京に於いて陳啓天「少年中國」誌上に反共產の論文を掲ぐ。

一九二四年、巴里に於いて黨機關誌「先驅週報」創刊。十月、曾琦、李璜歸國、上海に「醒獅週報」創刊。

一九二五年、五・三〇事件を機として、北京の國魂社、救國團、上海の商界青年同志會、大夏青年團をはじめ、全國各地に國家主義的愛國團體二十數社の成立を見るや、十月十日、黨、團はその存在を表面化す。

一九二六年、八月一日、黨、團第一次全國代表大會開催。

一九二七年、黨中央部を南京、東南大學內に設立、三月二十四日蔣介石に依つて解散され、首領曾琦逮捕さる。この頃、黨員三千餘人に及ぶ。七月十五日、二全大會開催。

一九二八年、八月十五日、三全大會。

一九二九年、九月、四全大會開催「中國青年黨黨名公開宣言」發表。曾琦出獄、吳佩孚の紹介を得て奉天に入り、張學良、張作相、萬福麟を說得し、黨中央部を同地に再建す。舊研究系政客羅文幹、顧維鈞等、舊直隸派政客孫傳芳、王克敏、潘復等その他章士釗、靳雲鵬等加盟。胡適、劉修竹、郝更生等も黨の理論に賛意を表す。

一九三〇年、黨中央、北平に移る。九月「剷共半月刊」創刊。

一九三一年、三月八日、黨內情暴露を憤り、黨員百餘名、北平、華北日報社を襲擊して、發行不能に陷らしむ。

現在の黨員數は約三萬、新疆を除く各省市、南洋、比律賓等に支部がある。黨員の成分は軍人、政客、大學生、大學教授で、(一)實力派としての張作相、萬福麟、(二)文治派としての曾琦・何海鳴、(三)政客派としての劉大同、汪榮寶、紐傳善、(四)大學教授派としての丁錦、萬雲剛等が牛耳つて居り、その他幹部として、孫傳芳、吳佩孚、陳嘉謨、劉玉春、向乃祺、劉書銘、徐佛蘇、鮑貴卿、徐傳霖、李璜、常乃德、余家菊、周太玄、陳啓天等。中央執行委員長は曾琦で、組織部長兼執法部長は常乃德である。

黨の主義は、全國各階級國民を以て全民政治を行ひ、國民黨の一黨專制、共產黨の一階級獨裁を排し、對外的には一切の帝國主義的國家、國土の獲得を計るものを打倒し、對內的には階級鬪爭を消滅するに在る。すなはち反共產、排一黨專制（反國民黨）で、眞正デモクラシイ政治を主張してゐるのであつて、蔣派の支那ファッシスト、汪兆銘派の黨範圍內に於ける民主化主張とは、餘程異

つてゐる。

最近黨、團の活動としては、段祺瑞、吳佩孚、孫傳芳各派と聯絡し、北平に新政府を組織すべく、先づ民衆との聯絡を完成するため、各種の團體を簇生せしめつつある。その重なるものは全民救國協會（丁錫等）、憲政期成會（紐傳新、王振庁、齊燮元、王人文、湯薌銘、章士釗、張耀潤、程克等）、民族自決救國會（劉大同、王蕃等）、國難會議會員會（曾琦、徐傳霖等）、青年自勵社（張力英等）等である。

## 六　四川軍閥の自擾

山東に於ける韓、劉の爭鬪が收まらないうちに、四川では二劉の訌爭が爆發した。いづれも軍閥の割據運動、自擾作用であるが韓、劉戰爭は、ややもすれば北支動亂の導火線とならうとし、二劉戰爭は、西藏の邊疆分離運動の成功を容易ならしむるが故にともに輕視を許さない。

四川ほど小軍閥の多いところはない。天津の「大公報」は「川省豪兵百萬、亘省六七。成都一地、分隸三軍。全省割裂、有同異國。」といつてゐるが、實に適切な批評である。豪兵百萬は大きいが、二十餘萬ほたしかにある。民國以來かつて治まつたことのない省で、今日までに、大小四百七十三戰の內亂があつたといふ。「天下未亂、蜀先亂。天下已治、蜀未治。」といひ、「天府、地獄。」ともいふ。四川の特色は、寥寥たるこの數句によく現はれてゐる。四川の各軍閥中、劉文輝、劉湘、田頌堯、鄧錫侯を四大天王といひ、これに次ぐもの楊森、李家鈺、劉存厚がある。今その兵力を示すと、左の通りになる。

| | | |
|---|---|---|
| 劉文輝 | 省政府主席、第二十四軍長） | 八六、四〇〇 |
| 劉湘 | （川東督辦、第二十一軍長） | 七九、〇〇〇 |
| 田頌堯 | 第二十九軍長） | 四六、〇〇〇 |
| 鄧錫侯 | 第二十八軍長） | 四五、〇〇〇 |
| 楊森 | （川陝邊防軍督辦） | 三二、七〇〇 |
| 李家鈺 | （新編第六師長） | 一六、九〇〇 |
| 劉存厚 | （川陝邊防軍司令） | 一〇、〇〇〇 |

劉文輝は成都を中心として七十餘縣を占め、その甥の劉湘は、重慶を中心として二十四縣に據り、叔は汪兆銘系甥は蔣介石系で一九三一年來仲違ひしてゐたが、湘は文輝の勢力が日に强くなるのを嫉み、田頌堯と文輝との間の爭鬪を利用して田を抱込み、九月中旬、文輝購入の武器三百餘萬元を、重慶で差押へ、これが導火線となつて、十一月一日順慶附近で內亂が開始された。文輝には李家鈺が響應し、この兵力約十一萬。湘には田頌堯、鄧錫侯、楊森、劉存厚が左袒し、この兵力約十七萬。諸人の向背については、自づから込み入つた事情があらうが、何しろ別天地の四川のこととて、支那人にもよく判らないくらゐ。我我は大體上述程度のことを知つてゐればいい。ともかくこれらの「巨酋」が、全支那の縮圖、ここに在りとばかりに、揉みに揉み拔きはじめたのだから南京政府は大いに吃驚して、四川出身戴天仇、張群等に對し、調停のため入川して貰ひたいと依頼したが、文人出の戴は勿論、武人の張までが、一議に及ばず拒絕し、南京政府は手を束ねて、自擾作用の終熄を待つのみとなつた。

グロテスクな「巨酋の亂舞」も、やがては一時終熄する日もあらう。省內で踊つてゐるだけで、省外に飛び出すことは、先づないのだから、それは南京政府でもさして憂へてはゐないが、その虛に乘じて、西藏の分離運動が、ますます猖獗をきはめるのが、何よりも痛い。何とかして熄めさせようと、聯盟代表顏惠慶等に、停戰依頼電報を寄越させるやら、勿論停戰令を發するやら、躍起となつてはゐるものの、長鞭馬腹に及ばざるを、如何ともしがたい實情である。

## 七　邊疆分離運動

九月中旬、南京、上海方面からの電報は、西藏軍の西康、青海兩省侵入を報じた。その要點は次ぎの通りであつた。

（一）　一九三〇年の初夏以來、西藏、西康國境の雅礱、金沙兩江流域を爭うて、劉文輝麾下の四川軍と、達賴喇嘛派遣の西藏軍とは、江岸の鑪霍、甘孜、德格、白玉等の諸地を挾んで、絕へず戰鬪中であつたが、一九三二年一月、西藏軍主力の出動に依

つて、四川軍は德格、白玉を失ひ、爾後九月までに、西康省の大部分は西藏軍に占領され、康定（打箭爐のこと。西康省政府設置豫定地。）の危急は目前に迫つた。

（二）三月二十三日、青海省の南端で、黄河、揚子江兩大河の水源地なる玉樹の高原に於いて、馬麟（青海省政府主席）麾下の青海軍と、西藏軍とが戰端を開き、九月上旬、玉樹遂に陷落し、青海省南部一帶は、確實に西藏軍の手に入つた。

（三）西藏側の理想はこれにとどまらず、西康省の大部、青海省の玉樹以南雲南省の中甸・維西以北の地域を打つて一丸とし二十五族を糾合して、西藏の黄金時代たる、唐時代の大西藏を建設せんとするに在る。

（四）藏軍兵は約九萬。英國將校に依つて訓練された精兵で、武器、彈藥は英國から供給され、最近にも飛行機六臺、步兵銃一萬五千挺、大砲數十門が輸入された。

西藏が、英國後援の下に、事實上支那から獨立してから、すでに二十年を經過してゐる。今更目を瞠ることはあるまい。しかし今度の西藏の行動は、これまでの小競合ひとは異り、積極的に西康、青海兩省に侵入し、欲するがままの地を劃して、大西藏國を創建し、支那の宗主權を完全に拋棄させようとしてゐる點に於いて、充分注目の價値がある。張學良の虐政、誤まれる排日外交が滿洲三千萬民衆を刺戟して、滿洲國の創成を見るに至らしめたと同樣に、四川省内六七の互爵が、合計三十餘萬の兵力を擁しつつ繩張り爭ひに沒頭したことが原因となつて、支那は、西藏に對する宗主權を喪失しようとしてゐるのである。西藏運動こそ、自擾飽くなき支那軍閥に對する「天譴」である。

世界の屋根裏の民族、秘密國西藏を繞つて、英、露、支三國の角逐は、すでに四十年の歷史を持つ。この間の經緯を叙することは、一小篇のよくするところではない。ただ露國が英國に押されて、志を西藏に絶ち、轉じて外蒙古に一念を遂げたことと、支那が對藏策を誤まり、一切の實權を英國に握られ、ただ支那の側から見るとき、西藏は依然として世界の秘密國であらうが、英國の側から見れば、西藏はもはや秘密境でも何でもなく、印度シキムと西藏の首府拉薩との間には、坦坦たるドライヴウエイが出來、電信、電話、電燈はいふまでもなく、その軍隊は全く英國式に訓練されてゐること、「天に日月あり、地には達賴、班禪。」この兩喇嘛の競合ひでは、豪壯にして親英政策を執つた達賴の勢力が、溫厚にして親支策を執つた班禪のそれを、全く壓倒するに終つたこと、等等は、我人ともに即時且つ正確に認識しなければならぬ。

かく大雜把に片附けて、現局面の出發點は一九二九年に在る。同年八月、達賴は終に新政府を樹立し、英國留學出身の印度人及び緬甸人を顧問とし、印度兵及び英兵五萬を川康特別區（西康省と改稱）に入れた。支那政府がこれに對して、何等の對應策をも講じ得ないうち、一九三〇年九月、雅拉、大金兩寺の財産爭ひ事件が起つた。甘孜と大金寺の中間に在る白利村雅拉寺に雅拉といふ喇嘛があつた。川邊の孔薩土司の娘は、美人の噂が高かつたが、雅拉はこれに懸想し、たまたま孔薩土司が病死したので、色と慾との二道かけて、孔薩婦に結婚を申込み、兵三千を擁する大金寺喇嘛の後援を得て、見事目的を達すると、報酬として大金寺喇嘛に財産全部を與へた。（全部といふのは少し可笑しいが、支那紙にはかう出てゐる。）孔薩土司の遺族は、これを聞いて大いに反對し、甘孜縣政府に訴へた。縣政府は勢力が弱いので、大金寺側を如何ともしがたく、これが解決を第二十四軍政務委員會に依賴した。會と大金寺との交渉は大分長引いたが、九月終に決裂し、支那官憲は武力に訴へて大金寺の財産を沒收したので、大金寺喇嘛は僧兵三千、德格、橙柯等の土兵を加へて約五千の兵で應戰し、急を達賴に報じた。達賴からの援軍は十二月大金寺に着、支那軍（劉文輝麾下一千に砲數門）を逐うて甘孜、鏞霍を占領した。南京政府は一驚を吃し、一九三一年四月、蒙藏委員會委員唐柯三を、調停のため派遣したが、勿論不調に終り、唐は五月南京に歸還した。爾後小競合ひをつづけて一九三二年に入り、前述したやうな形勢となつたのである。

現局面に對して、南京政府は、如何なる對應策を講じてゐるか。（一）和平會議を開き、支那側關係代表と、達賴、班禪兩喇嘛代表を集め、達賴に代つて、班禪を西藏の統治者とする案だとか。（二）青海第九師、劉文輝軍、貴州軍の三路に依る武力討伐だとか（三）英國に對し、對藏武器供給停止及英國將校の藏軍訓練、指揮中止を交渉する案だとか、机上の論は相當あるやうだが、四川軍閥の自擾をすら、何とも出來ない南京政府が、四川のその又先きの、しかも十年生聚の西藏を、何とかしようといふのは、結局出

來ない相談であらう。支那は畢竟「天譴」を甘受しなければならない立場に在る。

支那邊疆の分離運動は、西藏のみならず、綏遠、察哈爾二省にも起らうとしてゐる。外蒙古の遠征軍も、甘肅省北部に侵入したと傳へられる。ただ西藏の場合と異り、未だ詳細な報道がないので、現在の情勢をハッキリと指示することの出來ないのは遺憾であるが、滿洲國が産れ、西藏の分離運動が、ある點まで成功したとすれば、蒙、綏、察に策動するのは當然の歸結である。早晩これらの方面から、警鐘櫛の齒をひくがごとく達するであらうことは、充分豫測出來る。

## 八　中國共産黨及び紅軍

現國民黨政權を全面的に否定し、階級獨裁を主張する政治的勢力として、中國共産黨がある。黨の創立は一九二〇年九月で、すでに滿十二年を經過し、牢固たる勢力を中部支那に扶植し、一九三一年十一月七日、江西省瑞金に樹立された「中華ソヴエート共和國臨時政府」も亦滿一ヶ年間持ちこたへたわけである。黨中央部は上海に於いて組織され、總書記陳紹禹等幹部がゐるけれども國民政府の取締り峻烈を極め、著るしく活動を制限されてゐるが、紅軍に依存する中蘇臨時政府、並びに各ソヴエート區は、豫想外に固い基礎を持つてゐる。前後四回に亘る蔣介石の討伐も、效果捗捗しからざる狀勢である。黨の恐るべき以上に、紅軍は一層恐るべき存在である。その兵力は、約二十萬と稱せられ、內武器を有するもの十五六萬といはれてゐるが、紅軍の外廓を成す赤衞隊、游擊隊、少年先鋒隊、獨立師、獨立營を加ふれば、その倍數にも達するであらう。これらの紅軍が蟠踞するソヴエート區は、全國で八大ソヴエートの外、無數の小ソヴエートがある。一九三一年五月の國民會議に提出された「剿匪報告」は、三百縣以上が赤化してゐると述べたくらゐである。重なるソヴエート區を左に示す。

（一）　江西、福建、廣東省境區（中央區）。中蘇臨時政府所在地たる瑞金を含む地域で、福建の建寧から汀州、武平に至り、江西南端を包含して信豐、南康、武山、興國、樂安、撫州、黎川を連れる。

（二）　湖南、湖北西部省境區。湖北の天門、沔陽、監利、公安、枝江一帶と、湖南の華容、常德、石門、桑植、慈利一帶を含む中心は湖北の洪湖である。

（三）　湖北、河南、安徽省境區。湖北の應城、孝感、應山、黃坡、黃安、麻城、羅田、廣濟、黃梅と、安徽の六安、英山、霍山蘄縣、河南の固始、商城、潢川、光山、羅山を含み、中心は黃安に在る。

（四）　湖南、湖北、江西省境區。湖南の茶陵、攸縣、醴陵、平江、瀏陽、桂東、汝城、湖北の通城、通山、大冶、江西の崇義、萬安、永新、銅鼓、萍鄉、蓮花、宜春、萬載、攸水を含み、平江が中心となつてゐる。

（五）　江西東北特別區。江西の橫峯、弋陽、上饒、貴溪、德興、餘江、萬年、樂平、玉山、福建の崇安、鉛山を含む。

大體右のやうになつてゐるが、中央軍の討伐に伴うて、一進一退を免れず、赤、白境界は、絶えず異動してゐることは勿論である。

中蘇臨時政府（主席毛澤東、副主席項英、張國燾。）成立後、紅軍は活潑な行動を開始したがその作戰方針は、各ソヴエート區間の聯絡を執ること、及び大都市を占據することの二つである。この方針に從つて、一九三二年春來活動しはじめた紅軍は、大體に於いて三個の方向を執つた。第一は朱德、彭德懷兩軍の福建進出である。これは四月から行動を起し、福建西南部の要衝で、かつて閩西ソヴエートの所在地であつた龍巖を占領し、十九日厦門に近い漳州を占領して、福建ソヴエート政府を樹立し、毛澤東をその主席に推したのみならず、なほも附近を攻略したが、中央軍の討伐布置成り、上海事件で勇名を揚げた十九路軍の福建入りを見るや、五月末自發的に漳州を拋棄し、巨額の金員を携さへて、足を福建から拔いた。第二は同じく朱德、彭德懷、林彪、董振堂各軍の廣東侵入である。福建を拋棄した右紅軍は、六月末廣東に侵入し、七月二日から七日まで、廣東の余漢謀軍との間に激戰を交へたが、紅軍の勢漸く振はず、同月末全部江西に追ひ返され、却つて廣東軍のために信豐を奪はれることとなつた。第三は安徽の鄂豫皖、徐向前軍と、湖北の賀龍、段德昌軍、並びに湖北南部の孔荷寵軍との聯絡運動である。すなはち紅軍の唯一目標たる武漢包圍の運動で、これが成功すれば、由由しい大事となる筈であつたが、蔣介石は武漢保持を以て、自己の政治的地位保全のためにも又將來ファッシスティ樹立のためにも、絶對必要であると思つてゐるので全力を擧げて討伐に努め、その甲斐があつて紅軍三軍

の聯絡が完成しなかつたのみならず、湖北東部の黄安、七里坪、羅田、安徽の英山等を恢復し、西部では賀龍の本據洪湖をすら奪取し、南部の孔荷寵軍の進出を阻み、紅軍の計畫は先づ失敗したもののごとくである。

紅軍の活躍は、一先づ阻まれた。しかしこれは、南京政府に取つて、僅かに危機を脱したといふに止まり、紅軍そのものは大した打撃を受けてゐず、各ソヴエート區も、さまで縮少されてゐず、依然として一大脅威たるを失はないのである。

### 九　支那は動く

中央政局に於ける蔣、汪兩派の角逐は、結局汪派の敗北に終り、汪兆銘は十月二十二日上海發佛國に向つた。南京には陳公博、顧孟餘、谷正鋼等が殘つてゐるけれども、軍隊に基礎を有しないこの派は、言論、文章に依り職ふ外なく、結局雌伏を餘儀なくされるものと思はれる。でなければ中央から退却して、北支那で起るかも知れない反蔣運動に、理論的指導を與へるか、さもなければ廣東に歸るかであるが、胡漢民汪兆銘の關係からすれば、北支那に行くよりは、この方が却つて困難である。結局雌伏が最善の策だ。廣東はまだ暫らくは動くまい。胡漢民の運動も今一息といふところである。北支那で反蔣派の足並みはまだ揃はないが、山東の形勢如何に依り、發動の機は案外早いかも知れない。邊疆分離運動はいよいよ仕揚げに入るであらう。

我等に取つて最大の關心事は、そこで結局蔣介石のファッシズム運動と、中國共産黨及び紅軍との對峙である。一黨獨裁と、階級獨裁との對立である。そのいづれが勝つかについては、何人も豫斷出來ないが、客觀的條件は、矢張り蔣に有利である。黨・紅軍の勢力は、インヴインシブルなものであるに違ひないが、彼等が武漢を占領するくらゐの成績を示さない以上、ナンバアワンの折紙をつけることは出來ない。いづれにしても各政治的勢力の内訌は、やがてその混戰を産み、近く何等かの形で全支に亘る動亂を見るであらうが、それが最後の總決算であるとは斷言出來ない。一朝の交替にも、常に百年の混亂を要した支那である。辛亥革命後二十年を經過したのみの今日、安定をいふは尚早だ。「動いてやまざるもの」それが、目前の支那の眞の姿であらう。（『國際評論』一九三二・一二）

# 第二節　察哈爾の形勢と馮玉祥

### 一　何故馮は注目されるか

舊部下である韓復榘の庇護の下に、泰山山下に隱棲してゐた馮玉祥が、これも舊部下の宋哲元を頼つて、察哈爾省宣化へ遷つたのが、一九三二年の十月初旬。間もなく張家口に移つて、反蔣の旗上げ準備に餘念もなかつたが、一九三三年五月、河南省鄭州で兵變を起して、宣化に移駐した方振武と合體し、二十六日、抗日同盟軍の組織を公表し、張家口の總司令に就任するとともに、痛烈な反蔣通電を發したことは、日支停戰交渉の進捗によつて、北支那政局の安定が、期待せられつつあつた時の出來事とて、一方ならず世人の注目を惹いたものであつた。

爾來二ヶ月餘、馮の態度は一度ならずグラつき、一時は反蔣運動を中止したかのやうな報道も傳はつたが、それは彼の撒布した煙幕に過ぎず、事實は依然として反蔣の一路に邁進しつつあつたのである。尤も軍事的には、まだ大した發展もしてゐず、多倫諾爾に吉鴻昌軍が進出したくらゐのことであり、又彼に附き隨ふものも、方振武、吉鴻昌、孫良誠　鄧文（もと馬占山部下）李忠義、劉桂堂各軍合計六萬餘に過ぎぬといはれてゐる。大した實力ではない。見やうによつては、齒牙に掛けるにも足りないとさへ思へるのである。それにも拘はらず彼の行動が重大視されるのは、彼の據つてゐる察哈爾地方が、ソヴエート・ロシアの對支進出の一幹線に當つてゐるからである。滿洲國の結成に依つて、對支進出の東路を阻まれたソヴエート・ロシアが、中路察哈爾、西路新疆に今や全力を注ぎはじめたかに見える形勢。さうして、かつてソヴエート・ロシアと結んだことのある馮玉祥が、またじてもその工具になりはしないかといふ懸念。これが世人をして、馮の一擧一動に注目せしむる所以である。

### 二　馮とソヴエート・ロシア

馮露關係については、これを是認するもの、否定するもの、種々雜多の情報がある。先づこれを是認する情報を擧げると、次の通りである。

(一)馮軍司令部は張家口の赤系露人の旅館に置かれ、張家口と庫倫との間には、毎日大型自動車四臺が往復してをり、武器彈藥は庫倫から送られてゐる。

(二)かつて支那大革命時代、最高顧問であつたボロディンも庫倫に來てをり、馮の軍事顧問である赤系將校クーシチンは、上海にあつて各方面と聯絡してゐる。

(三)モスコー共產大學卒業の支那共產黨員三百名張家口に到着した。馮の總司令部宣傳部長張慕陶は共產黨員である。

(四)張家口市內各處に、紅軍の勝利、共產黨入黨勸誘に關するポスタアが貼られてゐる。

(五)露人共產黨員十餘名、七月上旬張家口に入る。

(六)馮總司令就任とともに、政治革新令を發したが、その中に苛稅廢除、政治犯人釋放の二項がある。政治犯人釋放はすなはち共產黨員容納を意味する。

(七)馮軍と中央軍との間に在る孫殿英軍は、中央から開拔費十萬元を受領したが、匪賊を改編せる不良部隊を包頭方面に移動せしめただけで、精銳部隊を按じて動かず、中央軍進攻せば、これに反抗する腹であり、その軍には共產黨北方の元老であつた韓麟符が、秘書長として入つてゐる。

(八)馮は察哈爾一帶を中國ソヴエート中央西北支區と宣言し、馮自から主席となり、徐維烈、張瑾騰(以上中央)、張健相、姜凡卿(以上鮮人)及びロシア人二名を委員に任じた。

(九)特別極東赤軍司令官ブリユウヘル(すなはちガアレン)と馮の聯絡成り、小銃三千挺、彈藥三百萬發、機關銃若干供給の契約ができ、馮は庫倫を經て近くハバロフスクに赴くことになつてゐる。

(一〇)張家口鐵道工夫を中心として赤色工人部成立、たほ女子青年黨も組織された。

(一一)張家口に赤龍飛行場設けられ、ロシアから提供された飛行機十二臺に、露人飛行士搭乘して、平綏線方面に威嚇飛行を行つてゐる。

(一二)馮露間に、千萬金ルーブル借款が成立した。

ちよつと擧げただけでこれだけある。これに反して、馮露關係を否定する情報は、左の通りきはめて少い。

(一)江西の中國ソヴエート中央政府と馮との間には、何等の聯絡もない。

(二)六月十一日の馮の通電に、赤露と關係なしと釋明してゐる。

(三)馮軍內には白露人あるも、赤露人はなし。

(四)庫倫張家口間の自動車運送業は、年利二百萬元に達する有利な事業なので、馮は過去三ケ月に亘り、この事業を、現經營者たるドイツ人側から奪はうとしたが、露國側では斷然これを阻止した。

(五)少くも馮及び幹部は共產黨員ではない。

かう並べて見ると、馮露の間、どうしても一脈の聯絡があると斷ぜざるを得ない。馮自身が赤露と關係がないといつたとて、誰も信用するものではない。中國ソヴエート中央と關係がないといふのは、或は事實であらうが、その關係の有無は現在の場合問題とならない。江西を經なくても、庫倫から直接馮を指揮すればいいのだ。馮及び幹部が共產黨員でないといふが、彼等は工具である。黨員たると否とはロシアの關するところではない。馮露關係を否定する情報は、かういつた種類の賴りないもので、馮とソヴエート・ロシアと關係があるといふ情報の方が、不幸にも一層有力であることを否めない。

### 三　馮玉祥麾下の二派

さうだ。赤露と關係なしとか、中央と妥協するとかいふ馮の糊明は、例によつて馮のカムフラージ、兵家のいはゆる緩兵の計で

あつたので、事實においては馮は聯俄容共政策の一路を邁進しつつあつたのだ。「社會新聞」といふ、例の「藍衣社の滿洲拋棄宣言」を素破抜いた雜誌に現はれた張家口通信に據つて、私は左にその内幕を暴露するであらう。

馮玉祥の麾下には、新舊二派の策士がある。舊派の策士といへばもとから馮に喰附いてゐた連中で、そのうちで比較的新らしいといはれた徐謙までが、最近スッカリ馮に厭かれた樣子で、今や馮を包圍するものは彼の長子で、モスコー共產大學に學んだといふ馮維國、今度馮から察哈爾財政廳長に任命された張允恭、それに張新亞、張慕陶、喬春冰、胡子恒、魏鳳樓等の新派である。實力派の吉鴻昌、方振武等も新派に附和してゐる。この中で、今出頭第一といはれてゐるのが張允恭。この男は、昔たしかに中國共產黨の一員であつたが、幹部とまでは行かず侍大將といつたところ。その後陳獨秀一派の解消派に屬し、黨籍を除かれた男だ。どうした風の吹き廻しか、馮はスッカリ張に丸められ、張のいふままに、ドシドシ彼の同志を引き入れた。いづれも解消派・第三黨、それから馮が自から金を出してやりかけた民權聯治黨の殘黨といつた手合ひで、有象無象六七百人に上つたといふ。そのうちで名前の知られてゐるのは、李世璋、許德衍くらゐのところであらう。

かうした連中を集めて、先づ何をやつたかといふと、御多分に洩れぬ政治訓練學校。馮維國が校長、張允恭が總務長になり、蔣介石の黄埔軍官學校張りの、高速度革命教育の計畫を立てたものだ。この計畫は或程度まで成功し、今もなをつづけてゐるといふ。

### 四　聯俄政策の根本理論

つづいていはゆる聯俄政策を打ち立てた。その根本理論は、次ぎの四點であつた。

(一)中國共產黨は、北方においては、まだソヴエートをつくつてゐない。故にソヴエート・ロシアは、北方において軍人領袖を利用し、北支那に於ける利益を堅固にする可能性がある。

(二)ソヴエート・ロシアは、對日別働隊を需要してゐる。

(三)察哈爾は、地形上、經濟上、どうしてもロシアの援助を必要とする。同樣にロシアも、外蒙から察哈爾に勢力を伸張する希望を持つてゐる。

(四)北方に新局面を創開することは、間接、湖南、湖北、四川、江西の共產軍を援助することになるから、ソヴエート・ロシアおよび中國共產黨は、必ずや同情と援助とを與へるであらう。

ロシアのことを一等よく知つてゐる馮維國は、この計畫を幻想に過ぎずとなし、著名の反動人物として折紙つけられてゐる父馮玉祥に對して、ソヴエート・ロシアが援助を與へる筈はないとしたが、馮と張允恭は、それはあまり取越苦勞に過ぎるとして一蹴し、積極的にこの計畫を遂行することになつた。

### 五　馮維國のモスコー行

その結果秘密工作委員會が設立せられ、張允恭が委員長となり、第一に黨禁の開放すなはち政治犯釋放を行つた。つづいて張新亞等を北平、天津、上海に特派し、中國共產黨引入れの工作に從事させた。新亞は解消派の一員であるが、さまで中共幹部派に睨まれてゐず、軍事工作の人員とは、多少ながら聯絡があるので、自からこの大役を買つて出たのである。

張新亞の一行は、北平天津での工作を終つた後、今上海で盛んに活躍してゐる。中共中央には手が屆かないので、革命互濟會、反帝同盟、左聯等の赤色外廓團體に全力を注いでゐるといふ。しかしそれだけのことで、まだ具體的に成果を擧げてゐないので、焦慮した馮玉祥は、たうとう馮維國をモスコーに派遣した。カリニン、スターリン、カラハン等に對して馮直筆の書面をつけた。維國は途を庫倫に取つて赴露した。それは六月上旬のことであり、その使命が成功したか、失敗したか、もう手應へのある頃である。

### 六　ロシア果して援助するか

「社會新聞」の張家口通信は、これで終つてゐる。說いて周密、剩すなしといふところまでは行つてゐないが、馮の大體のプランはこれで解るであらう。すなはちソヴエート・ロシアに色目を使ひ、何とかしてその援助を得たいと思つてゐること、一方中共方

面にも秋波を送り、その合作を懇願してゐること。それがどこまで成功してゐるかは、殘念ながら明白でないが、はじめ一二萬に過ぎぬといはれた馮の實力が、馮占海、何遂兩軍を武裝解除し、世玉璜、張自光、曹輔臣等の土匪團を招撫した結果、いつの間にやら六萬を突破し、それに灰色軍の孫殿英を加へると、彼是十萬近くになる。軍費も太原を經て送られてゐる（西南派から！）といふが、さうなると閻錫山とも一脈相通じてゐると見なければならぬ。中央が馮の緩兵の計に乘せられて、穩便に納めようと努力してゐる間に、馮はまるで雪達磨のやうに、太つて行く。厄介な土地に、厄介な人物が、出て來たものだ。

そこで、最後の問題は、ソヴエート・ロシアが、果して馮を助けるかどうかといふことに歸する。察哈爾が滿洲、新疆と相並んで、ソヴエート・ロシアの對支進出の三幹線であることは、すでに前述した。滿洲はすでに閉塞され、剩すは察哈爾新疆の二線。さうして外蒙の首都庫論と、察哈爾省政府所在地の張家口とは、自動車行程僅かに四日といふではないか。

諺に曰く、据膳喰はぬは男の恥と。馮玉祥が過去において反動人物であつたにせよ。アノ大男が、羞恥を忍んで、眼八分に持つて來た据膳を、ロシアはいつまでも喰はないであらうか。そもそも「北方落後」は、コミンテルン及び中共が、常に終世の恨事とするところであるが、今や棚ボタ式に北方の地盤が馮に依つて獻上されつつあるのだ。ロシアは結局手を出すだらう。

新疆省から四川、湖南、江西の西部線に注ぐ精力を割いて、赤鷲は、その觸手を、察哈爾に打ち込むだらう。指顧の間、そこには「赤化の故郷」たる北平がある。

それもよからう。だが察哈爾の局勢には、他のファクターの動いてゐることを忘れてはならぬ。熱河、綏靖工作に專心してゐる滿洲國の存在、察東四旗の親滿離支的傾向がそれである。察東四旗は、滿洲國建國當時、早くすでにその傾向を明かにし、今日ではその色いよいよ顯著である。馮察關係一段の緊密を加ふるとき、察東四旗は變じて熱河の外廓となつてゐるかも知れぬ。——河豚は喰ひたし、生命は惜しし。かうした形勢を知るが故に、ソヴエート・ロシアは、今正に苦悶しつつあるのであらう。（『世界知識』一九三三・九）

# 第三節　宋子文と黃郛

## 一

滿洲事變が、酣はの頃であつた。

上海の郊外、實茹に在る無電臺は、創設以來、恐らく未曾有の緊張に包まれてゐた。不眠不休を示す燈火が、深夜まで煌煌と輝いて、技師たちの感激に滿ちた、若い、激しい面を照してゐる。事務員や、ボーイの慌だしい出入り。ヒッキリなしにかかつて來る電話。暗を衝いて、この、曠野の燈臺を目ざして、驀進する自動車、それは夏の夜の燈火を慕うて　唸り、ブツつかる甲蟲とも見えよう。

「ジュネーヴへ！」の、ひたむきの念願を祕めて、電波に打ちふるふ怪奇の塔。奥まつた一室に、その頭腦と心臟がある。二十疊もあらうか、簡單な飾り附け。壁際に二つのベッド、中央に大きなライテング・デスク。事務所風の、青笠のテーブル・ラムプの下で、額を鳩めてゐる二人。ロイド眼鏡を掛けた、四十一二に見える、ガッシリした男。ズルいが、しつかりした顔附の支那人だ。も一人は、北歐人らしい、ムッツリした五十男。一見謹嚴なやうだが、眼に一方ならぬ光りがあり、口を開かせたら、冷嘲熱罵聯珠のごとく飛び出しさうな氣構へが漂うてゐる。

「實に怪しからん。錦州は我々のバリケエドだ。あそこをやられちや、關内はメチヤメチヤですぞ。何とかしなきやならん。いい考へはありませんか。遠慮なく仰しやつて下さい。えゝライヒマン博士。」

「さうです、宋部長。だが、私にいはせれば、日本は我々のワナにかかつたやうなものです。各國とも獸つちやゐますまい。一つ馬力を掛けて打つ飛ばしませう。停車場を空襲したとか、大學をつぶしたとか、無辜のものを殺傷したとか、いつてやれば、一も二もなくワッと來ますよ。しかしどうです。經費は大丈夫ですか？』

「イヤ、その點は御心配なく。不肖乍ら宋子文、遣繰りは上手です。何しろ搖籃樹を持つてゐますからネ。十萬や二十萬の無電料には驚きませんよ。」

「アハハ、さうでしたネ、小財神と綽名のある貴方に、今更駄目を押すこともなかつたですナ。胸にヨリをかけてやつつけませう。」

精々外交部の役人かと想つたら、意外の大物だ。財政部長の宋子文と、國際聯盟の保健部長で、支那の顧問を兼ねてゐるライヒマン博士。この二人が、ベッドまでかついで、乘り込んで來てゐたのだ。九・一八事件の最初から、宣傳では支那に一日の長があつた。勿論、嘘八百で堅めたものではあつたが、ああした場合、何よりも多量の情報を、早く送つた方が勝つ。さうして一度その情報を信じたものは、大體その系統の情報に引きずられて行く。かうした心理狀態に通じ、且つ又聯盟内部の事情をよく知つてゐるライヒマンが、聯盟から支那に派遣せられてゐたことは、支那の宣傳陣をして、水際立つたものたらしめた主因であつたらう。彼は九・一八事件勃發の報に接するや、ただちに支那に勸めて聯盟提訴の手續きを取らせ、繼續して情報提供の方面を指導した。そこへ起つた錦州空襲事件、彼は有無をいはさず財政部長宋子文を貞茹無電臺に引張り込み、「怪奇の塔」の頭腦・心臟となつて、情報の總指揮官となつたのだ。

怪物ライヒマン。さうして、そのよきパアトナアである宋子文。――それから二年。我々は、又この無氣味なラ・宋のコムビネイションを、眼前に見なければならないのだ！　といふのは、一九三三年七月十八日の對支技術的援助委員會で、聯盟と支那政府との聯絡員として、再びライヒマン博士を支那に送ることが決定されたからである。

## 二

"Purely technical, and non-Political." 聯盟の對支援助の性質・範圍を七月十八日のコミュニケはかう掲記してゐる。さうして情報に據れば、この條件は聯盟側からでなく、宋子文その人から提議されたものであるといふ。だから、そこには何等政治的策謀の餘地はなく、事態はどこまでも一九三一年五月の技術援助決議の繼續であると聯盟側では主張する。從つて倫敦タイムスのごときも、「計畫はきはめて稱讚せらるべく、そこには何等の政治的目的も含まれてゐない。」と論じた程だが、それではエコー・ド・パリが、七月二十八日の紙上に於いて、

「南京の穩健政策は、宋子文の容認し得ないところで、宋は、政爭再開の資金調達のため、張學良の援助を得て、西歐諸國を歷訪しつつある。これらの人物の周圍には一九三一年の末期に、極東を修羅の巷とした責任者たる狂信的聯盟事務局員が集つてゐる。彼等は今日まで、日本を聯盟から離脫させた以外、何等爲すところがなかつたのみならず、今や更に復讐を策し、對支技術委員會なるものを設けた。かくて再び現はれたのは、支那で本務を捨てゝ活躍したライヒマンで、この陰謀家は、相當手厚い俸給を得て上海に赴くといふ。數日前タイムスは彼等の計畫を實讃し、右は何等政治的目的を有するものでないと論じたが、ライヒマンが登場してゐる限り、タイムスの所論は首肯し得ない。無心のボンクウルは、宋及びその一派を激勵することは、やがて聯盟に關聯せる列國の利益を計る所以だと想像してゐるが、結果は、支那問題に關し、日佛相互に支持すべきことを規定してゐる一九〇七年の條約を主張し得る日本を、却つてフランスの向ふに廻すに過ぎないであらう。將來日本は西太平洋に勢力を有すべく、吾人は印度支那がわが植民地たることを永く忘れてはならない。」

と論じてゐるのは一體どういふわけか。更に聯盟の一要人が、「有體にいへば、日本の御機嫌を取結ぶ必要があつたとすれば、ライヒマンを指名しなかつたであらう。」と放言したといふ報道、それが事實だとすれば、ライヒマン任命の情僞は、ハッキリと我々の眼底に映ずるのである。すなはち知る、「純粹に技術的、而して非政治的。」とは、全く宋子文のカムフラージで、對支技術委員會の設立、別してライヒマンの聯絡員任命は、エコー・ド・パリの指摘したとほり、「聯盟狂信者の復讐」に外ならないのである。聯盟にして、その標榜のごとく、技術援助以外に一歩も出でないのであるならば、無色無臭の人物を聯絡員に任命すべきであつた。貞茹無電臺にベッドを舁ぎ込んで、反日情報を送つたライヒマン。かつては日本の厚意で新嘉坡衞生試驗所をつくり、それを踏臺にして聯盟保健部長に成り上り、その恩を忘れて日本に楯つくライヒマン。その策動が目に餘つて、歐羅巴ですら札附きの排日家

ライヒマンを、この重大な時機に、あの重要な地位に据ゑたといふことは、聯盟の措置何としても不當である。

やがて宋子文歸國し、ライヒマンその後を逐うて渡支したならば、宋の牙城たる財政部に擴大强化され、交通・郵政、鐵道、航空、實業、その他一切の生産事業を統轄する經濟部となり、これに現在の稅警團を加へて、前代未聞の「經濟軍閥」が成立し、全國經濟獨裁を形成することにならう。稅警團といふのは、財政部長（すなはち宋子文）に直屬し、徴稅强行の爲にする軍隊で、二百中隊（四聯師）を有し、各中隊に獨人教官一名を配屬し、江蘇、浙江、安徽諸省に配置されてゐる。兵士の給養の如きも、流石に宋直屬の配下とて、支那第一だといふ。「經濟軍閥」の稱、決して夢想ではないのである。

「經濟軍閥」のプログラムの今一つは、聯盟の技術的援助、進んでは財政的援助を得て、江蘇、浙江二省を經營して「支那の模範省」とし、列國の權益をこの方面に錯綜せしめ、然る後抗日經濟策を昂揚せしめ、將來日本が上海事件類似の外科療法施行の必要に迫られても、列國との關係上、手も脚も出せないやうにするに在る。さりとはあまりに穿ち過ぎた說のやうだが、宋子文が歐羅巴歷訪に際し、遊說の基調としてゐたところを見れば、このプログラムは決して架空の談ではない。即ち彼は說く。

「日本はどこまで進出するか、豫想出來ない。現狀を以て推移すれば、日本は將來支那全土の秩序を破壞し、外國の在支權益を侵害するに至るであらう。かく日本の態度は貴國の利益と相反するが、貴國はこれを默視するか？」

## 三

かくして宋子文の遊說は、聯盟に關する限り、多大の成功を見た。それではアメリカではどうだつたか？　ここでも彼は五千萬米弗の棉麥借款に成功してゐる。歐羅巴での借款談、コンソルシアムへの働らきかけは、今までのところ失敗のやうで、僅かにモネの渡支が傳へられてゐるだけで、アデイスもラモントも來ないやうだ。そこで棉麥借款だけが、彼の唯一の御土產となつたわけである。銀に換算してザット二億元・表面の條件はともあれ、これが一部は彼のポッポに入り、一部は蔣介石に取られるのは既定の事實だ。尤も棉麥は一時に運び切れず、假りに一年かゝるとしても、毎月千五百萬から二千萬元の金が、國民政府に入る勘定で有力な一財源たるを失はない。ことに、浙江財閥の支援が、やゝ消極的になつてゐる今日に於いては、この借款の價値は、金高以上のものがあるであらう。一部では、この金の分配で、蔣・宋の內訌が起るだらうとさへ觀てゐるくらゐである。宋の手土產としては、相當なものたるを否まれない。

## 四

聯盟の援助と棉麥借款、これを兩手の花として、歸つて行つた宋子文である。國民政府部內に於ける發言權は、斷然增大すべき筈である。これに對して、最後の鍵を握る蔣介石が、果してどういふ態度に出るであらうか？　廟議は、一應對日穩健策に決したことになつてゐるが、蔣に對して飽くまでそれを强張り得るかどうか？　興味はそこにかゝつてゐる。と同時に、汪兆銘、黃郛の存在理由が、そこに發見せられる。

日本を理解する第一人として、黃郛の名は、北支停戰協定以來、邦人の耳に熟してゐる。支那革命黨中の浙江派、陳其美系の領袖として、黃は、蔣介石の先輩である。技術家の出で軍人になり、しかも外交に通じ、一九二七年以來、蔣の外交上の師匠だつた。一九二八年に外交部長の椅子に着いたが、五月濟南事件で態度軟弱を攻擊されて下野、爾來何もしないで上海に隱れてゐたが、それでゐて隱然重きを成してゐたのは、日本を理解すること深く、日支の間に難局を生じた場合、斯人に頼る外なしといふことを、蔣がよく知つてゐたからである。彼は蔣介石の最後の切り札であつたのだ。

果然熱河の敗退、學良の下野となると、蔣は先づ何應欽を派して軍事統率に當らせ、追つかけて黃郛を出馬させた。黃はやをら御輿をあげた。さうして上海で萬全の準備を整へた。第一に張群、吳鐵城（上海市長）等に後押へを頼み、袁良、李擇一、殷汝耕等の日本通を總動員し、靑帮の首領杜月笙などとも聯絡し、次いで蔣に要求して委員長（黃は、行政院駐・政務整理委員會の委員長に任ぜられたのだ）の權限を擴張させ、殆ど獨裁に近い權力を握り、北方に於ける黨部の活動を停止させる等、水も洩らさぬ用意をした。

「日支關係の打開に當り得るもの、斷じて自分以外にはない。今度の自分の使命が失敗すれば、日支の關係は絕望となるだら

うし、自分の政治的生命もこれで絶たれて了ふだらう。いづれにせよ、これが自分の最後の奉仕だ。」

上海を去るに先だち、彼はかう述懐した。何といふ悲壮な言だらう。何等の政治的野心なく、冷静に國家の運命を考察し得る彼にしてはじめて發し得る感懐だ。

かうした決意と準備とを以て北上した黄郛の業績は、果然目覚ましいものがあつた。五月三十一日調印の、北支停戰協定は、その第一の證左である。何應欽等在北支中央軍の要人が、よく黄の節度を奉じ、于學忠等の舊東北軍を安堵せしめ、ピリツともいはせずに北支局面の收拾を了したことを見よ。察哈爾一帶に據つた馮玉祥の反蔣抗日運動が、一時は燎原の勢を呈したに拘らず、黄郛は最初から物にならぬと見透しをつけ、從容として馮の自滅を待つた。引込思案の閻錫山は終に山西を動かず、北支第一の實力たる山東の韓復榘も、兵を按じて保境安民した。停戰協定の調印に依つて、當然起るべく豫想された上海、天津地方にも、何等の動搖を見なかつたではないか。

黄郛の非常な決心と周到な用意の前には、あらゆる反對勢力が影を潜めた。ただ一つ、犬の遠吠え的な西南派の反對があつたやうだが、ヘロヘロ矢に過ぎなかつた。しかも黄は、この業績を以て足れりとせず、南下して廬山に蔣介石、汪兆銘と會し、北支政局の癌たる舊東北軍の處置を協議した。まだ確定議となつてはゐないやうだが、舊東北軍の新疆移駐案が傳へられてゐる。これも恐らく黄の案であらう。

## 五

以上の叙述に依つて、我等は、對日政策をめぐつて宋子文等の抗日派と、黄郛等の親日派とが對立してゐることを知る。それが果してどう落附くか。世人の關心は、一にかかつてここに在るもののごとく、我等の酒前茶後、隨分飽きるくらゐ議論を闘はせて來た。しかも甚だ殘念ながら、常に何等の歸結を發見し得なかつたのである。

ただ一事の明かなるは、宋子文にせよ、黄郛にせよ、蔣介石の意志を無視して、抗日策なり、親日策なりを、遂行し得ないといふことである。それでは蔣の眞意はいづくに在るか？　この點に關しても、從來種々の說があるが、私は躊躇なく斷言する。彼は自己の勢力の保全を第一義としてゐると。これは、必ずしも彼の利己心を現はすものではない。彼は自信、自任の資を享く。彼に在つては、自己の勢力を保存することが、すなはち民國のために忠なる所以であると信じてゐるのである。

すでにその勢力保存を以て第一義とする以上、彼としては、上海から四川に至る横の地盤を確保することに努めざるを得ない。滿洲事變以來の彼の行動を閲すれば、この間の事情はハツキリと判る。さうして彼のこの横の地盤を脅かすものが、江西、湖北、湖南、四川の共産軍であるとすれば、彼が北支の變局に際して、長期間の北上を敢てし得ず、南昌に鎭座してゐる眞意が讀めよう。それは必然、北支に於ける守勢となる。すなはち抗日軍事の停止である。南支に於いては、剿共軍事の猛進に歸着する。さうして抗日經濟策は、自づから第二義的のものとなるであらう。

抗日經濟策の失敗は、上海事件に於いて、彼のすでに經驗したところである。彼の地盤は、そのために龜裂を生じ、支那の商工業は致命的打擊を被り、浙江財閥の牙城すら動搖した。しかも日本の財界は少しも悲鳴をあげず、ケロリとして打開策に成功してゐる。かやうに馬鹿らしい取引きを繰返すべく、蔣介石は、少しく怜悧に過ぎる。結局、彼は宋子文を抑へるであらう。多少の躊躇を以て、かう私は豫斷する。（『中央公論』一九三三・一〇）

# 第四節　支那を征服するもの

## 一

「支那はいづこへ？」

これは、生命取りの設問である。これさへ判れば、すべての支那研究者は、苦勞はしない。判らないから、一生、暗中摸索で身を終る。ただ判らぬ、では口惜しいから、混亂支那の事象を捉へて、ガツチリとスクラム組んで、分析に日も足らないのが、不運

な支那研究者だと名にし負ふ「地大物博」の支那、それも清朝時代のやうに外形だけでも統一して居ればまだしもいいが、今日の支那のやうな、一大ケエオスを對象としては分析すればするほど、解剖すればするほど、ますます判らなくなつて來る。混迷の研究者は、そこで吐き出すやうに、「支那は謎だ。」といふ。

しかし、勿論、かうした「混迷の研究者」ばかりではない。日本に於ける支那論壇にも「權威を持てるもののごとく致へる」幾人かがある。そのうちから、例へば内藤虎次郎、北輝次郎、中山優、藤枝丈夫の諸氏を拾ひ出すことが出來る。内藤博士は、その著「支那論」（一九一四年）の序文に於いて、

「北清事變の際に、一時天津に都統衙門といふものが出來て、列國の聯合政治を行つたことがある。第二の大なる都統政治が出現すべき時機は、あまり遠いとは思はれぬ。支那人は大なる民族である。この民族は、民族として統一されてゐる。又列國の支那に於ける利權も、隨分錯綜してゐる。故に支那が急速に分割さるべきものとは、自分も思はない。ただし一種の都統政治は、何時でも行はれ得るのである。又この都統政治の方が、國民の獨立といふ體面さへ拋棄すれば、支那の人民に取つて、最幸福なるべき境涯である。」

と述べてゐる。これは列國に依る支那の共同監政を豫想したものである。博士は又、同書の他の部分に於いて、蒙古の分離、西藏が、附近の強國の勢力に敏感で、終に親英の一途に歸すべきこと、等等を擧げて、邊疆分離の傾向濃厚なるを指摘してゐる。

内藤博士に比べると、北輝次郎氏は、一層豫言者的であつて、その著「支那革命外史」（出版は一九二〇年だが、脱稿は一九一六年。）隨處に激越な豫言を盛つて居り、イザヤ書を讀むやうな感興を與へる。氏の理想は、東洋的共和制であり、支那の武斷的統一を期待し寫潤台汗なる形に於いて、統一者の出現を翹望してゐる。曰く。

「實に成吉思汗といひ、寫潤台汗といひ、忽必烈汗といひ、君位を世襲繼承せし君主に非ずして、「クリルタイ」と名くる大會議に依りて選擧されしシイザアなり。而してシイザアの羅馬よりも、遙かに自由に、遙かに統一し、更に遙かに多く征服したり。革命の支那は、自由と統一との覺醒に依りて、將に最高輝ありし共和政的中世史のそれを採りて、寫潤台汗を求めんとす。」

寫潤台汗はどこにゐるか。北氏は辛亥革命の經過を見て、袁世凱、孫文、ともにその任に非ずとし、「何ぞ現下の革命に於いて、寫潤台汗とその諸汗とが、「地下層より搖り上げらるる」を推想し得ざるや？」といつてゐる。かうして北氏は、無名のうちから崛起する寫潤台汗が、武斷を以て統一を行ひ、天下を郡縣にし、外、英露と戰つて國基を確立するに至る、そのプログラムを、周密に描寫してゐる。畢竟、一つの英雄待望論であるが、氏の議論から、我等が今ここに拾ひ上ぐべきは、「支那は終に統一さるべき或物である。」とする概念である。すなはち内藤博士が、「共管と分割」の豫言者であるのに對し、北氏は「統一」の豫言者である。

中山優氏は、最近「再認識下の支那」を著はし、一躍わが支那論壇に知られた新鋭の士である。氏は、先づ、「支那は謎ではあり得ない。」と喝破し、現代支那の諸傾向を叙した後、

「支那の占有してゐる彩大な地域、人口、その古き傳統の壓力として、現在到達したところの絶對的な貧困、長き戰亂の歴史が齎らした支那人の功利的な心理狀態、阿片の嗜好と性病の蔓延に惱む無智な大衆、新興ブルヂョアジイの洗錬されたる貪慾など一切の狀態は支那の再組織が、自力では不可能であることを結論させるに近いといはねばならぬ。」

と斷じ、「混亂は當分つゞく。さうしてそれよりも早く、世界の他の部門に變化が起り、これに依つて、支那の方向が決定される傾向が、かへつて多くはないかと思へるのである。」と結んでゐる。――「崩壞」の豫言者だ。

假りに藤枝丈夫氏を以て代表させたが、實は寺島一夫、武藤丸楠、中山耕太郎氏等を含めて、左翼支那研究者の一團を指す。このグルウプは、ソヴエート支那の成長と、それに依る支那統一の必然性を確言しつづけた。引用は必要であるまい。諸氏は、要するに、「××」の豫言者である。

これら諸先達の示唆する共管、崩壞（分離、分割）、統一、「××」の方向。

「支那はどうなる？」の、大體の歸結は、この四つの外にはあるまい。そこで、今、私の任務は、現在の支那の狀勢を分析して、

叙上四つの傾向のうち、いづれが濃厚であり、いづれが輕微であるかを、檢討するに在る。さうして、最後に、私の氣禀の命ずるところに從ひ、未定稿的な總結を貢獻したいと思ふ。

## 二

第一に、滿疆分離の傾向を、取上げて見る。

支那の邊疆といへば、東から西へ、察哈爾、綏遠、外蒙古、新疆、青海、西藏、西康、貴州、及び雲南である。これらの地方が支那の主權から離脱しようとする傾向は、清朝末期から、絶えず動いてゐた。さうして、周知のごとく、外蒙古と西藏とは、今日では、完全にその目的を達してゐる。故に、この兩地方に關する限り、もはや滿疆分離運動の範疇を離れてゐる。で、今日支那邊疆の分離運動といへば、第一に、西康の歸屬如何すなはち西藏に併合されるか、それとも支那の一省として殘るかの問題である。これに關聯して、青海の問題がある。第二に切迫してゐるのが、新疆のソヴエート同盟屬屬の傾向であり、察哈爾、綏遠の問題が、それと關渉を持つ。第三に、雲南の佛領印度支那への隷屬の傾向が算へられる。貴州は、同じく滿疆であるが、今のところ問題とはならない。

西藏問題、といふよりは、西康問題が世人の耳朶を打つたのは、一九三二年九月であつた。達賴喇嘛の派遣した遠征軍が青海、西康の二手に分れて侵入し、青海省の玉樹以南、西康省の金沙江以西を占領したと、當時の情報は、傳へた。地圖を披いて見ると金沙江は、西康省の東部を縱斷し、その以東が省全面積の三分の一、以西が三分の二となつてゐる。すなはち青海の三分の一、西康の三分の二が、手もなく西藏軍に席捲されたのである。これは、西藏の侵略に備へて西康を防衛すべき地位に在る四川省の諸軍閥、劉文輝、劉湘等の「互爲」が、合計三十餘萬の兵力を擁しつつ、繩張り爭ひの內戰に沒頭したことに對する、一種の「天譴」と見るべき事象であつた。爾來一年、青海省の軍閥（省政府主席馬麟、その麾下の實力馬步芳）は、ややその責務を自覺し、省內に侵入した西藏軍を完全に省外に驅逐し、青康藏同盟ノ提議して、少くともここ數年間の平和を確保しようとしたが、達賴喇嘛これを拒絶するや轉じて青藏間の不侵略協定締結を志し、一九三三年六月十五日終にその調印を見たとのことである。これに依つて青藏間の危機は少くとも當分、緩和せられたのであるが、一方四川側に於いては、劉文輝の進出に依つて、辛うじて德格、白玉地方（金沙江東岸）を恢復し、一面拉薩に反達賴喇嘛の政變が起つたりしたので、一九三二年十月八日德格に於いて四川側の姜郁文と西藏側稽トとの間に、漢藏停戰協定八ヶ條を締結し得ただけである。しかも、この停戰協定に據ると、「四川軍は金沙江東岸、西藏軍は同西岸を以て各その最前線となす。」となつて居り、內容は、非常に屈辱的なものである。すなはち實際に於いて、西康省西部の三分の二を、西藏に讓渡したやうなものである。

最近の情報に據ると、達賴喇嘛は、青海との不侵略協定締結に依つて、北部中甸、維西以北の奪取を志し、金沙江東岸の重要地點たる巴塘を占領したといふ。これは明白に漢藏停戰協定の蹂躙であり、西藏の第二次西康侵入の出發點なのであるが、これに對し、四川側に於いて斷續せる軍閥混戰第二期のクライマックスに達し、劉文輝の旗色ますます惡くなつてゐた折柄とて、西藏軍の侵入を阻止すべき、何等の手段をも講じ得ず、巴塘を敵手に委してしまつたのである。巴塘から東すれば、省政府設置豫定地たる康定（打箭爐）まで、日本里數で五十里もあらうか。しかも打箭爐は、省の極東部四川との省境に在るのである。西康全省が西藏に歸屬するのも、もはやあまり遠い將來でもあるまい。

康藏問題に次ぐ急調を示してゐるのは、支那西北の寧庫、新疆である。住民の六十パアセントが回教徒であり、「新疆」といふ省名が、「新しい領土」を意味し、別名が「東トルキスタン」と呼ばれることを知れば、その特殊狀勢を明かにし得よう。この地は、民國以來「鐵腕」と綽名された楊增新の支配下に置かれ、半獨立狀態を保つて來たために、折角の寧庫の開發が遲れたが、彼の「深閉固拒」政策は、一面英露の侵略を防ぎ、分離の傾向を阻止することが出來た。しかし彼の後を承けた金樹仁のレヂイム（一九二八―三三）は、回教徒に依る、寧日なき叛亂の連續であり、その極、一九三三年四月、いはゆる廸化政變となり、金樹仁沒落、新政權樹立を見、同時にロシアの野心が暴露せられ、今更ながら世人を瞠目せしめたのである。

新政權の中心人物は、劉文龍（教育廳長）盛世才（南路剿匪總指揮）等であり、盛の兵力を以て、省城廸化附近を抑へてゐるが、その勢力の及ぶ範圍はきはめて狹く、東部哈密一帶には、政變の原動力となつた回教徒の首領馬仲英（第三十六師長）あり、カシガル地方には馬紹武旅長あり、伊犂には、張培元旅長あり、塔城一帶には、金樹仁の舊部下である魯效祖がゐる。このうち馬紹武が親英的なるを除き他は全部親露派である。就中、馬仲英及び回教徒、並びに張培元は、數年來「大西北主義」を提げて、金樹仁と戰爭し、ロシアと通じてゐる勢力である。廸化政權も、南京政府の派遣した宣慰使黄慕松を放逐したりして、中央を蔑視したに反し、逸早く代表陳中を莫斯科に派遣し、ロシアの援助を懇請したのみならず、廸化には、滿洲國から露領に遁入した蘇炳文、季杜の舊部二ケ旅が、「赤」の手先きとなつて入つてゐる。いかなる政權も、ロシアの援助なくしては、新疆省内に存立し得ないといふ事實は、我等の注目を怠つてはならないところである。けだし、新疆が英露の角逐場となつたのは、隨分久しい以前からで、兩國は、その世界政策の遂行上、新疆の領導權を爭うて來たのだが、トルク・シブ鐵道の開通（一九三〇年四月）以來、ロシアは英に勝つた。一九三一年回教徒の叛亂に際し、ロシアは金樹仁を援助して叛亂を鎭壓しその代償として廸化條約（同年十月一日調印）を締結し、商業代表機關、決算事務所創設權、專門家派遣、稅率引下げ等の利益を得たが、金がその後反露的態度に出づるや、援助目標を回教徒に定め、終に現在見るがごとき親露的局面を、新疆に現在せしめたのである。トルキスタン・ソヴエート社會主義共和國の新疆併合が、その最後の目的でなければならぬ。

察哈爾も亦、ロシアと關聯して、考察されなければならぬ。けだしソヴエート・ロシアの對支進出の三幹線中、東路滿洲は、滿洲國の創生に依つて塞がれたから、次ぎは中路察哈爾、西路新疆に向ふべき順序。さうして察哈爾には、喜んでロシアの工具たらんとする馮玉祥がゐるので、この方面からする赤化運動も、相當重大視されたものだつたが、馮の腰くだけに依つて、ロシアの劃策は畫餅に歸した。――その餘憤は、當然新疆に注がれるのだ。西康に次ぎ、新疆の形勢が注目される所以である。

西南支那の一角に、從來あまり人目を惹かなかつたが、その實きはめて危險な一つの火藥庫がある。雲南である。他の各省とは關係頗る薄く、經濟上、政治上、佛領印度支那の附庸である。最近同地方を視察した米人記者、ウイルバア・バアトン氏は、チヤイナ・ウヰイクリ・レヰウ誌上に於いて、「最近一部支那人間に、佛國の雲南併合實現の期は、目睫の間に迫つてゐるとの印象が、濃厚になつて來た。惟ふに佛國が、斷然同省を占領するか否かは、多くの要素に依つて左右されるのであつて、その要素中には、佛國外務省の支配外に在るもの、――西藏に於ける事態もその一である。――が存する。」と記してゐる。注目すべき叙述である。「西藏に於ける事態が、佛國の雲南併合の要素となる。」と氏はいふのである。雲南の佛領印度支那に於けるは、西康の西藏に於けるそれであり、しかも雲南は、猓猓と名くる異人種の棲息地であつて、省政府主席龍雲、委員中の有力者盧漢のごときは、猓猓であるといふに於いておや。故に西康に對する西藏の侵略が、更に一歩を進めたときは、ロロランド雲南が、佛領印度支那に併合されたときでなければならないのである。

上來說き來つたところに依つて、外蒙、西藏の全部、並びに西康の三分の二が、完全に中華民國の主權を離脫したこと、西康殘部の歸屬問題が、雲南に牽動すること、及び新疆の形勢切迫せることが、明かにせられた。すなはち支那の邊疆分離運動は、推測でも想像でもなく、炳乎たる既成事實であり、換言すれば、英佛露の支那分割は、すでに開始せられたと斷じ得るのである。

## 三

分析課題の第二は、支那が赤化するかどうかの問題である。

中國共産黨の成立した一九二〇年から算へて足掛け十四年、最初のソヴエートたる海陸豐ソヴエート創建から滿六年、共産黨の主力たる朱・毛軍の成立から五年半の今日、それは支那の一省半乃至二省に及ぶ地域に割據し、二十萬の共産軍を有し、三千萬の人民を統轄する、一個の强力な政治的勢力となつてゐる。その重なるソヴエート區は八を算し、トルク・シブ鐵道から新疆に入り張培元（伊犂）――蘇炳文、李杜舊部（廸化）――馬仲英（哈密）等の親露的勢力を連ね、更に陝甘ソヴエート區――川陝區――湖鄂西區――江西四ソヴエート區――福建の遊擊圈と延長するときは、西北から東南へ、支那を横斷する赤化線が想定されるのみならず、

その路線を形成する一環一環が、大なるは山東の韓復榘を凌ぎ、小なるものも方振武、吉鴻昌軍に優る軍閥となつてゐる。その絶滅の容易でないことは、誰にも肯づける。しかしさればとて、支那全體が赤化しようとは、ちよつと思へないのである。その理由としては次ぎの四つを擧げることが出來る。

（一）支那全土を赤化するためには、上海、漢口等、經濟上の中心地點を占領しなければならないが、これらの地方には支那の特殊狀勢に依り、列國の勢力が及んでゐる。すなはちこれらの地點には、列國の軍隊及び軍艦が、常に防衛の姿勢を取つて居り、居留民保護のためには討伐軍と協力して、共產軍の驅逐を圖る。一九三〇年の長沙ソヴエートが、十日足らずで潰滅したこと、一九三二年福建に進出した共產軍が、漳州を占領しながら、終に厦門を占領出來なかつたこと、一九三三年八月、共產軍の延平進出に際し、列國の軍艦が福州に集中されたこと等、その適例である。

（二）ある一二の中心地點の占領に依り支那全國の死命を制することが不可能である。漢口だけ占領しても物にならず、上海だけでも行かず、しかも全國の重要地點を、同時に占領することは不可能である。現勢を以てすれば長江筋にて九江、福建で福州、厦門くらゐの占領は、或は望み得られるが、上海、漢口等の奪取は、到底駄目である。

（三）共產軍兵力、武器、彈藥、軍資、ともに不足である。ソヴエート區の分布も、全國的でない。ソヴエート區の分布が全國的になり、その各區が、十萬以上の兵力を有するに非ざれば、決して恐れるに足らない。

（四）蔣介石の共產軍討伐は、同一回と上手になりつつある。殊に一九三二年第四回圍剿は武漢を包圍する三大ソヴエート區を完全に擊破した。現在やつてゐる第五回圍剿及び今後の討伐は、少くとも第四回圍剿に劣らない成績を擧げ得るであらう。

私は以上の理由に據つて、全支の赤化は先づ望みなく、却つてソヴエート區の縮少を豫感してゐる。然し共產軍の全滅は不可能で、交通不便な山中などには依然として殘つて行くと見るものである。



叙述の都合上、ここらで總結をつける。支那に邊疆分離、列國に依る分割の傾向ありといふは、眞である。傾向だけではなく、すでに現實化された部分もある。しかし分離も、分割も、地域的に限定されてゐる。全支の分割はあり得ない。

支那に赤化の傾向ありといふも、眞である。しかし全支の赤化は不可能である。赤化も亦、地域的に限定される。

邊疆及び赤化地域を除いた支那の殘餘の地方は、當分各政治勢力の對立狀態を呈するが、その混戰を經て、結局ある一つの政治的勢力が勝利を得、やや堅確な統一を完成するに至るであらう。その完成の濃程に於いて、多少の列國共同管理的傾向が發現するかも知れないが、それは、遂に成熟せずに終るであらう。

これが、私の見透しである。

邊疆及び赤化地域を除外したその他の地域に、對立してゐる政治的勢力としては、山西、綏遠に閻錫山、山東に韓復榘、河北の一部に東北系、段派、直隸系、國家主義青年黨があり、江蘇、浙江、安徽、湖北、湖南、河北は中央派（蔣介石）の勢圏で、その勢力は、やや微弱ながら陝西、甘肅、寧夏に延び、江西では、中國ソヴエート中央政府との二重政權となつてゐる。廣西には陳濟棠等の廣西實力派、鄒魯等の廣西元老派、胡漢民等の新國民黨が雜居し、廣東には李宗仁、白崇禧等の廣西派、福建には蔣光鼐、蔡廷鍇等の十九路軍がゐる。これに貴州の王家烈、雲南の龍雲を加へて西南五省聯盟と總稱される。最後に四川には、劉湘、劉文輝等六七の軍閥が對立してゐる。

これら諸派のうち、勢力の最强大なのは、何といつても中央派である。すなはち蔣介石である。名目上の中央政府（南京政府）に占據し、十一省に號令し（その號令の徹底の度合ひに異同があり、且つ又諸處赤化に蝕ばまれてはゐるが）、六十萬以上の精鋭な軍隊を擁してゐる。軍閥の混戰に覇を稱し、やや堅確な統一を完成し得たる政治的勢力としては、中央派が第一の候補者でなければならぬ。（ここで中央派の意味を補足する。それは、蔣介石一派に、汪系（廣東派）、孫科派を加へ、林森、于右任等の元老派――これは普通に蔣派といはれてゐるが――を含めたものである。）

中央派の持つ第一の强味は、國民黨中央に於いて約百二十名の優勢を持し、他派の七十餘名を壓倒してゐることである。この內

譯は、蔣派六十餘名、元老派十餘名、合して八十名。汪兆銘派二十數名、孫科派約十名、西南派約四十名、その他三十名となる。故に全國代表大會、中央執行委員全體會議などでは、常に中央派が勝を制するのだ。

第二の强味は、南京國民政府部内に於いて、優勢を占めてゐることである。主席林森、考試院長戴天仇、司法院長居正が元老派蔣直系では、宋子文が行政院副院長兼財政部長となつて居り、行政院長は汪兆銘、立法院長は孫科だが、その下になると内政部長黄紹雄、軍政部長朱培德、交通部長朱家驊、海軍部長陳紹寛、司法行政部長羅文幹が蔣派であり、勢力爵然たるものがある。これに對し汪派では、汪自身が外交部長を兼攝してゐる外、實業部長陳公博、鐵道部長顧孟餘、同次長曾仲鳴、外交次長唐有壬がゐるに過ぎず、孫派の勢力も、立法院外に出ない。かく國民政府部内に於いて、蔣派の勢力は壓倒的であるのみならず、汪、孫兩派はこれまでの政治的經歴が禍ひして、北支にも、西南にも、ともにその立脚地を失ひ、蔣に依存する外なくなつてゐる。實は汪派孫派と、事事しく論じる必要はないのだ。

第三、軍事委員會は蔣介石の牙城で、蔣は委員長、參謀總長。北平軍事分會委員長に何應欽、軍事參議院長に唐生智、參謀長に賀耀祖を配してゐる。

第四、江浙資產階級、すなはち浙江財閥は　蔣直屬の宋子文、元老派の張靜江二人の關係で、一九二七年、蔣及び南京政府を支持してゐる。（その南京政府公債應募額は、七億以上、人に依つては十數億といふ。）張靜江は同財閥の大御所で、これにつづいて虞洽卿、李銘、張公權、錢永銘等が有力者だ。しかしこの新支那資本團も、最近やや疲勞した傾きがあり、もとのやうに支持しなくなつたといはれてゐるが、腐れ縁は決して切れるものではない。現に宋子文が棉麥借款を締結して歸ると、その相棒になつて、棉麥の處分に當つてゐるではないか。それに資產階級の恐れるのは共產黨、その討伐に蔣介石が一生懸命になつてゐる間、浙江財閥は蔣の命を奉ぜざるを得ない。

第五、藍衣社。蔣介石獨裁の工具、支那ファッシスト總機關としての藍衣社は、今更說明するまでもない。その後種種の情報があり、噂ほどのものでないといふのが通說になつてゐるが、どうして最近はますます根を擴げ、蔣の懷刀である蔣伯誠などいふエラ物が、本氣になつてやつてゐる。最近の北支那の政局の裏面をよく注視すれば、同社の勢力の一班が理解出來よう。恐るべき爪牙だ。

第六、元老派。國民政府主席林森をはじめ、吳敬恒、于右任、張靜江、戴天仇、蔡元培、李石曾、張繼等の元老派は、これまでの政治的經驗から歸納して、蔣を支援して、統一に當らしめる外ないといふことに、心境の一致を見てゐる。その蔣との關係は、本稿冒頭に擧げた北氏の「窩濶台汗及び諸汗」のそれである。汪兆銘のごときも、今はこの諸汗の一人に算へてもよささうである。

第七、列國の援助。宋子文の活躍に依る米國の棉麥借款、聯盟の對支技術的援助。生々しいこれらの事實に依つて、列國の傾向が觀取されよう。且つ又、共產運動防壓に關する列國の協助といふことも將來必ず起つて來るであらう。

――かうした多くの强味を持つ蔣介石及び中央軍は、冷靜に見て、最近次第に勢力を增して來たやうである。危機は北支那に在つたが、私心なき賛和を得て、よく局面を收拾することが出來た。樣に依つて葫蘆を描く馮玉祥の反蔣運動は、ヘロヘロ矢となつて地に落ち、驚りずまた起つた方振武、吉鴻昌の徒も自滅した。山西、綏遠の閻錫山、山東の韓復榘は、保境安民に徹底して居り蔣が重箱の隅をホヂくらぬ限り、中央を立てるだらう。東北系の蠢動も、張學良の歸國なくしては物になるまい。四川の軍閥は、徹頭徹尾、「自擾」を出でない。ただ蔣介石コオスの難關は、共產軍と西南派だ。しかし西南派は、利害を異にする諸派の寄合世帶で、胡漢民派の理論と、陳濟棠派の實力とが結びつけば、由々しい大事となるかも知れぬが、胡が二年間香港に頑張つて、たうとう陳を口說き落せないところを見ると、大して望みを懸けられない。とすれば、蔣の最後の敵は共產軍である。しかしこれも前述したやうに、全支の赤化は望みなく、蔣の討伐も、囘一回と進歩を見せてゐるから、世人のいふやうに、そのために蔣介石及び南京政府が顚覆しようとは想へない。

蔣介石を、北氏のいはゆる窩濶臺汗と見ることは、多少顏負けするが、體を具して微、窩濶臺汗の素材ではあり得るだらう。支

那革命は五十年の大業だといふが、民國以來二十二年、もうそろ〳〵統一しさうなものだと、グッド・ネエチュアドの氣禀から、蔣介石を持ちあげて見た。一人の贊成者もないとは知つてゐるが、私には、どうしても支那は崩壞するとは想へず、結局統一するとしか感じないからである。（『中央公論』一九三三・一一）

## 第五節　誰が中華民國を？

### 一

ムッソリイニのイタリイ、ヒットラアのドイッ、といつたやうな、動向の比較的明快な國國に在つては、領導人物を拾ひ出すことは、少しも困難を感じないが、支那のやうに、動きの曖昧な、混沌たる國柄では、例へば「蔣介石の支那」といふやうにハッキリといひ切れないので困る。それといふのも、支那には、まだ統一が完成されてゐないからだ。完成されてゐないのみならず、分裂の傾向すらある。外蒙古がロシアのものであり、西藏がイギリスのものであることは、いふまでもないが、最近では西康の三分の二が、確實に西藏の手に入り、ロシアの魔手が新疆に延び、フランスの雲南併合も、時機の問題に過ぎないといはれてゐる。

しかし、かうした報道は、得てして誇大に傳へられ勝ちであるから、多少割引きして考へる必要がある。そこで、もはや一點の疑ひもない外蒙古のロシア屬屬西藏及び西康の三分の二のイギリス隷從を別にして、新疆、青海、雲南が、名義上支那の主權の下に保存されるとする。それにしても支那の半身不隨的現象は、依然として除去されないのである。すなはちこれらの地方は、假令他國の主權に服從しないまでも、支那に於ける統一の範圍内には含まれないのだ。で、「支那を動かす人々」を考察するに當つて、私は、支那二十四省から、新疆、青海、西康、雲南四省並びに四川を除去し、殘り十九省を舞臺として選びたいのである。四川を切り捨てたのは、同省が諸軍閥の混戰、割據の地域であり、當方の間「統一」とは緣遠いと思つたからである。

厄介な「邊疆」は、外科的手術に待つこととして、身輕（可笑しな形容だが。）になつた十九省も、大觀すれば「割據」の世界に外ならぬ。江蘇、浙江、安徽、湖北、湖南、河南、河北七省を、蔣介石及び南京政府の勢圈とし、陝西、甘肅、寧夏三省をその準勢圈とし、馮玉祥の腰くだけに依つて、察哈爾も準勢圈といへるし、中國ソヴエートとの二重政權ではあるが、江西も準勢圈といへよう。これに對して、北には、山西、綏遠に閻錫山があり、山東には韓復榘がある。南には、廣東（便宜上香港を含めて。）に陳濟棠、胡漢民、廣西に李宗仁、白崇禧等の廣西派、福建に十九路軍、貴州に王家烈がゐる。最後に、江西の大部、安徽、浙江、河南、湖北、湖南、福建、四川、陝西、甘肅の各一部には、中國共產黨及び共產派が蟠まり、八大ソヴエート區を形成してゐる。

かうした情勢であるから、例へばある一つの政治的勢力（例へば蔣介石及び國民政府）が統一を意圖して行動したとしても、他のそれは、或は我不關焉をきめ込むだらうし（閻、馮等の割據軍閥）或はそれに乘じて、自己の勢圈を擴大しようとするだらうし（西南派）、或は積極的に、それを破壞しようと試みるものもあらう（共產黨・軍）。さうした事象が、我等の網膜に映じて、支那は混亂の外、何物もないといはれるのであるが、よくよく調べて見ると、その間自づから微すべき動向がホノ見える。一は支那を武斷的に統一し、開明專制を實行しようとするものであり、二は、孫文の三民主義を、忠實に履行して、全支那の統一を意圖しようとするものであり、三は、全支のソヴエート化を期圖するものである。蔣介石及び國民政府、胡漢民一派、中國共產黨及び共產派が、それ〳〵の動向の領導者である。從つて支那を動かす人々は、右の各派のうちから、發見されなければならない。

### 二

一九三三年五月末、北支那のドサクサにまぎれて、反蔣抗日の旗擧げをした馮玉祥が、中央軍の討伐もなかつたのに、八月にはもう腰くだけになつて、張家口から山東の泰山の古巢に歸つて行つたことは、何を語るか？　對手の蔣介石は、江西を一歩も出ず、共產軍討伐に專心して、北の方を振り向きもしなかつた。それでゐて、馮玉祥は、一たまりもなく自滅した。それは何を語るか？　ありきたりの、いはゆる反蔣運動が、今日ではスッカリ新鮮味を失ひ、民衆が少しも附いて來ないといふことなのだ。一九二八年の北伐完成以後、蔣介石の矢面には、廣西派が、馮玉祥が、閻錫山が、汪兆銘が、入れ替り、立ち替り、現はれたが、それ

らはことゞく失敗した。失敗して古巣に歸り、もとの地盤を丹念に繕つてゐるのもあれば、逆に政府たる蔣の懷中に飛んだものもある。御多分に洩れず、馮玉祥も、一時蔣と妥協し、南京にゐたこともあるが、その後舊部下なる山東の韓復榘に縋り、泰山に隱れ、考へて見ると、どうしても口惜しいといふので、張家口での旗擧げとなつたのだ。それにも拘はらずアノ體態——これを換言すれば、蔣介石及び南京政府の地位は、世間では、崩壞の一歩手前といつてゐるが、實は決してさうではなく、かへつて鞏固を加へて來てゐるのだ。いい加減内亂に飽いた民心は、「とにかく、先づ、蔣をして試みしめよ。」といつてゐるのだ。そこに蔣介石、及び國民政府の强味がある。

今、南京政府に據つてゐる中央派といふものは、蔣介石派を主體とし、それに汪兆銘、孫科の兩派、それから元老派を加へた各派のブロックだが、その元老派の心境が、全くこれだ。いづれを見ても山家育ち、だが、自分等ももう老いた。後輩だが蔣介石、これなら相當なところまで、遣り通すだらう。彼を支援して、ともかく切り拔けて見よう。——これが林森、于右任、張靜江、吳敬恒、戴天仇、蔡元培、張繼、李石曾等の僞らざる心境である。かつては蔣の政敵であつた汪兆銘が、蔣と妥協して行政院長となつてゐるのも、必ずしも、汪が蔣に降服したのではなく汪も亦、元老派と同じ心に落附いたからである。透徹した世界觀の持主で私心なき當世の魯仲連である黃郛が、民國に對する最後の御奉公を言明して出山し、よく北支の局面を安定せしめたのは、彼も亦この心境を有つてゐるからである。もう今日になれば、打ちまけてもいいと思ふが、汪の行政院長に復職したのは、全く黃郛の勸說に因るのであつて「處置に困ることがあれば、自分も出るから。」と、黃は汪に約したといふ。で、黃の行政院駐平政務整理委員會委員長になつたのも、この約を履んだのだといふ。蔣にいかなる過誤がこれまであつたにせよ、黃、汪のごときが彼を支援するに至つては、淸論の讚納を得たと一般。蔣も亦、胡漢民監禁事件（一九三一年三月）のやり過ぎに因つて、天下諍書子の心を失つたことを後悔してゐるらしく、その後は出來るだけ寬容、退讓に努め、他日の大を期してゐる。彼の志は、果然、決して小でない。

小ならざる彼の志が、どこに在るか？　勿論「統一」に在る。彼はそのために、この數年間の經營に依つて、六十萬以上の軍隊を養成し、十一省に直屬將領を配し、國民黨中央、國民政府、軍事委員會に壓倒的勢力を占め、浙江財閥を臺所方とし、藍衣社を爪牙とし、獨自のコオスを進んでゐる　目下の彼の關心事は、彼のこのコオスをさへぎる最大障碍たる共產軍の討伐である。一九三〇年以來、彼は四回の討伐を實行し、今やつてゐるのは第五回討伐である。世間では、前四回の討伐が、全然失敗であつたやうにいふが、少くとも第四回は、相當の成功をかち得てゐる。目下の討伐は、約十萬の江西共產軍に對し、三十萬の軍隊を差し向け、これを最後の討伐にしたいといふ意氣込みであるから、相當の成果を期待してもよからう。

共產軍討伐にやや成功した後、彼は一氣に統一に邁進するだらう。その傾向は、必然的に獨裁である。徵候はすでに藍衣社に現はれてゐる。獨裁の工具としてのこの社は、一九三一年祕密裡に組織されたもので、一九三二年滿洲抛棄宣言を發表したことによつて、その存在を世界に知られた。爾來その組織は、日を逐うて擴大强化されてゐる。ただその活動が潛行的であるために、世間では眞相を知らず、蔣系の失業軍人の俱樂部くらゐに思つてゐるが、それは誤まりである。强力無比のファッショ團體である。

藍衣社と相並んで、蔣の獨裁の工具となるものは浙江財閥である。江蘇浙江の資產階級、金融資本閥で、一九二七年來蔣を助け十數回の公債に應じてゐる。先達て外遊し、アメリカから棉麥借款二億元を、聯盟から技術援助を、兩手に花を持つて歸國した宋子文（行政院副院長、全國經濟委員會常委、國民政府財政部長）、元老派の張靜江を大御所とし、虞洽卿、張公權、李銘等が領袖となつてゐる。

蔣介石コオスの到達點は何時か？　一九三五年である。一九三二年十二月の黨中央全體會議で、憲法を制定公布する時が、いよいよ一九三五年と定められたからである。今の支那は、國民黨の一黨專制だが、一九三五年になれば、政權を國民に還し、國民黨は解消することになつてゐる。その秋だ、蔣が大總統を奪ひ、藍衣社が假面をかなぐり捨てるのは。一九三五年！　世界的に多事なこの年は、支那の内政に於いても亦、注目さるべき年である。

## 三

蔣介石の獨裁的傾向に反對して、あくまで孫文の三民主義に徹底しようとする動向がある。それを領導するのが胡漢民。彼はそ

の抱負を實行すべき舞臺を、國民革命の搖籃たる廣東に求め、一九三二年來香港に頑張つて、新國民黨運動なるものを續けてゐる。彼はもとから國民黨右派の首領といはれ、孫文主義の最忠實な弟子を以て自任してゐる。一九三一年、彼は南京政府立法院長として、同時に廣東の首領として、政府部内に根を張つてゐたが、訓政時期約法の制定問題で、蔣介石と衝突し、蔣のために監禁されてしまつた。それが三月。五月になると、彼の股肱古應芬が廣東に下り、同地の實力者陳濟棠を說服し、廣東國民政府を樹立、汪兆銘、孫科等も馳せ加はり、對峙半歲、滿洲事變勃發とともに南京との妥協が成立すると、その機會に胡は釋放されて香港に入り新らしい運動に發途することとなつたのである。彼はもと筆の人、三十年前新嘉坡で革命派の新聞の主筆をやり、同盟會時代の「民報」でも、汪兆銘と並んで筆を執つた。今全く書生の本色に歸り、「三民主義月刊」を主宰し、その他廣東の新聞などに、絕えず堂堂たる筆陣を張り、三民主義の徹底、蔣介石反對を叫んでゐる。政治的には、廣東實力派の首領たる陳濟棠に働らきかけ、何とかして廣東國民政府を再建しようと努力してゐる。

陳濟棠の兵力は二十萬、蔣介石に次ぐ、支那第二の軍閥で、財政的基礎鞏固（陳の財産は三千萬といはれる）。胡の理論と陳の實力が合體すれば、新らしい革命の嵐が、廣東の一角に捲き起される可能性が充分にあるが、それは今のところ望み薄である。何しろ陳濟棠は、純然たる郷落思想、割據主義の男で、眼中自分の地盤の外は何もない。廣東一省、附近二三省を保全して、威張つてゐれば滿足で、全支那に號令しようなどとは、考へてゐないのだ。西南派（いひ忘れたが、廣東實力派、廣東元老派、胡漢民派、十九路軍のブロックである）共通の立場として、表面は反蔣を裝うてはゐるが、裏面では蔣と一脈相通じてゐる。彼に取つては胡漢民は、厄介至極の存在だ。利用だけはしたいが、胡の命を奉ずるのはイヤだ。だから先般胡が廣西派、廣東元老派、陳銘樞と通じて、國民政府を樹立しようとしたら、彼は部下の勇將余漢謀に反對通電を出させ、武力を以て胡漢民系の通信社を閉鎖し、無二無三に胡の運動を打ちこはしたりするのだ。

かうした陳濟棠だ。胡漢民も飛んだ對手に引つかかつたものだ。こんな調子では、いよいよ一九三五年になつても、蔣との太刀討ちは所詮覺束ない。尤も、胡と歷史的に最も深い關係に在る廣西派が、それまでに大いに實力を恢復し、廣東乘出しに成功すれば、別物だが。それが出來なければ、氣の毒だが、胡の運動は、結局失敗の外なからう。

## 四

叙上の二動向、蔣の獨裁、胡の三民主義再運動は、大摑みにいへば、ブルヂョア民主主義革命の完成運動だが、それとは全然反對に、全支那の赤化を目指す第三の動向がある。中國共產黨及び共產軍の活動がそれである。それはかつて、民主主義革命運動と聯合戰線を形成してゐたが、一九二七年それと分離し、爾來單獨に社會革命に邁進してゐる。

一九二〇年に成立し、足掛け十四年の歷史を持つ非合法政黨たる中國共產黨は、勿論コミンテルンの支那の黨で、一九二八年來黨に屬する軍隊を持つてゐる。中國共產軍、又は紅軍と呼ばれるもので、各地に散在はしてゐるが、約二十萬の兵力があり、その遊擊するところ、江西の大部分、湖北、四川、湖南、安徽、福建、浙江、陝西、甘肅、九省に及び、八大ソヴエート區を形成し、（その面積支那の約二省、統轄する人民三千萬）江西省東南の瑞金縣に中華ソヴエート社會主義共和國臨時中央政府を樹立してゐる。この政府の主席が毛澤東。湖南のインテリ出身、相當な組織力を有するボリシエヴイキで、一九二七年、共產黨が國民黨と分離した後、郷里で農民暴動を起し、その失敗の經驗に敎へられて、三千の農民バルチザン隊を組織し、各地を遊擊してゐるうちに、軍官くづれの朱德の軍と一緒になり、工農紅軍を組織した。これが共產軍の濫觴で、各地に響應するものが出來、今日の猖獗に導いたものである。

ファッシスト蔣介石、三民主義者胡漢民、コムミユニスト毛澤東。まことに奇妙な取りあはせであるが、殊更奇をてらつたわけではない。現在の支那の動向を檢べて來たら、偶然かういふことになつたのである。汪兆銘、馮玉祥、閻錫山、韓復榘等も考へて見たが汪は今日では蔣のうちに含ませ得るし、馮は尾羽打ち枯らしてゐるし、閻、韓は割據軍閥の尤だし、結局前記三人者の選擇に落附いたのだ。

三人者の爭覇はどうなる？　胡漢民が實力（陳濟棠）の支援を受けてゐないだけ、一等弱い。結局は雌伏を餘儀なくされ、ファッシズムとコムミニズムの二大陣營の對照とならう。それよりは「獨裁」軍閥と「共産」軍閥との對戰といつた方がよからう。蔣介石、毛澤東の鍔ぜり合ひ、いづれも四十五六の男盛り、正に壯觀だが、現在の狀勢からは、勿論蔣の優勢が歸納される。（『經濟往來』一九三三・一一）

# 第六節　一九三三年に於ける內政動向

## 一　支那を撫でて見る

支那の現狀を解析するには、色んな角度から觀ることが、必要である。先づ、政治的に觀る。それから、國際的環境を檢べる。經濟の狀態を研究する。その他、思想的方面、民族心理等、色んな角度があらう。さうして調べた結果を綜合して、最後の判斷を下さなくてはなるまい。しかし現在の私に取つては、これは少し荷が重過ぎるのである。支那のことは、大分長く研究はしてゐるが、それは新聞記者として、淺く、スウツト撫でゝ見たばかりだし、又經濟記者ででもあれば、多少その方面のことも見當がつくだらうと思ふが、一番長くやつてゐたのが特派員生活で、それも北京といふのだから、經濟方面のことは一向判らない。で、致し方なく、極く表面的に、且つ平面的に、謂はゞ「鳥瞰圖」風に、支那の現狀を書いて見たいと思ふ。（稍や「定石」的な組立てなので、總括論を求められると、自づからかうしたことになる。さうして最近總括論を求められたことが、二三あつた事を御斷りして置く。）

## 二　混亂支那の全貌

「支那とは何ぞや？」――先年ワシントン會議でフランスの一代表から、かうした疑問が發せられてから、一時世界的の流行語となつたが、これに對する回答は、一九三二年、我が芳澤外相に依つて與へられた。即ち同氏は、同年二月二十日附の、「理事會議長ボンクウルに對する答翰」附帶聲明に於いて、「支那は組織ある國家に非ず。」「支那を統一ある國家といふは、疑制に過ぎず。」と喝破したのである。「支那とは何ぞや？」に對して、「支那は組織ある國家に非ず」とはまことに明快な回答である。まことによく支那の現狀に、ピッタリとあてはまつた斷定である。滿洲事變發生以來、聯盟と日本との間には、隨分澤山の公文の往復があつたが、支那に關しては、これほど痛快な文句は無かつた。正に金的を射的てたものである。

實際、現在の支那のやうな、變挺な國家が、他にあらうか。成程、中央政府といふものも、有るには有る。即ち今の南京政府である。しかしその命令の及ぶところは、支那二十四省中　精々十省乃至十一省に過ぎない。それも方々に赤化した地域があつたりして、完全に南京政府に服從するものは七省あるか無しである。假りに江蘇、浙江、安徽、湖北、湖南、河北、河南等が南京政府の勢力範圍とする。これに對して西南四省、即ち廣東、廣西、福建、貴州は事實上半獨立の狀態に在る。これに類似する割據軍閥としては、山東に韓復榘、山西、綏遠に閻錫山、四川に劉湘、劉文輝等がある。西藏が支那を離れたのは隨分久しい事であるが、今や西康の三分の二も亦、支那から離れて西藏の手に入つた。外蒙古の例に倣つて、新疆もソヴエート同盟に歸屬する形勢を示して居る。龜頃、叛旗を揭げた馮玉祥、方振武、吉鴻昌の腰くだけに依つて、最近ではこの地方の蒙古人が高度自治要求の旗を揭げてゐる。察哈爾は辛うじて保留出來たやうだが、彼等の計畫が成功すれば、この地もロシアの手に入る筈であつた。南の方で雲南、この地方にはフランスの手が延びてゐて、或るアメリカ人の記者などは最近同地を視察して「雲南はフランス領印度支那の附屬地だ」と云つて居る程である。最後に中國共産黨及び共産軍は、江西を最重要な根據地とし、その勢力は、湖北、湖南、四川、安徽、福建に蔓延してゐる。勘樣に、隨分ゴタ〳〵して居るが、一應の理解を導く爲めに、左に支那二十四省及び西藏、外蒙古を幾つかのグループに分け、それらの地方と、中央政府との關係を表示する。

（A）　名實ともに中央の命を奉ずるもの＝江蘇、浙江、安徽、湖北、湖南、河北、河南。

（B）　右に準ずるもの＝陝西、甘肅、寧夏、察哈爾。

（C）　名目上中央と合作するが、事實上半獨立の狀態に在るもの＝廣東、廣西、福建、貴州（所謂西南派）。

（D）　表面上中央の命令を奉ずるが、實際上その干渉を排斥するもの＝山西、綏遠、山東、四川。

（E）　絶對に現中央政府を否認するもの＝江西、湖北、四川、福建（所謂中國ソヴエート。）

（F）　支那の主權を脱したもの、及び脱せんとするもの＝外蒙古、西藏、西康、青海、新疆、雲南。

この表は、無論大雑把なもので、決して絶對的なものではない。或る省の大部分は、甲といふ政權に支配されてゐるが、その一小部分は、乙といふ政權に支配されてゐるといふ場合もあるし、丙といふ政權に對照して、殆んどこれに匹敵する丁といふ政權が併立し、所謂二重政權の形を呈してゐる省もあるのだ。それから、例へば、一口に西南派といつても、單一な政治的勢力ではなく胡漢民派、廣東派、廣西派、十九路軍といふやうな各派のブロックもある。中央政府にしても、蔣介石、汪兆銘、孫科の三派と、元老派との聯合である。河北省に就いていつても、黄郛、何應欽の政權に對して、元の學良の部下である東北系といふものもあるのである。これらの各派が入り亂れて、陰謀、排擠し合つてゐるのが、混亂支那の全貌なのである。この混亂は果して何時まで續くのであらうか？　混亂の極、崩壞して了ふのであらうか？　それとも亂さはまつて治を生じ、天下一に定まるのであらうか？豫言者でない私には、何ともそれを斷定する事は出來ない。併し漠然と、或る種の結論は感じ得られるのだ。それは後に書く事にして、これからこの混亂せる支那の實情を檢討し、幾つかの動向を拾ひあげ、稍や仔細にそれを說明したいと思ふ。

### 三　青康藏及び雲南の現狀

現代支那の動向中、第一に私が指摘したいのは邊疆分離運動だ。支那周邊の領土と云ふやうな意味で、それに共通の特徴は、漢人種以外の異種族の棲息地であることである。言語、宗教、習慣、風俗を異にするのだから、當然治め難いところへ持つて來て、その範圍の帝國主義が、手を延ばして來るのだから、自づから支那の主權を離脱する傾向を呈するのである。

第一に西藏である。これは早くからイギリス帝國主義の支配下に入つてゐるのであつて、支那は僅かに宗主權を持つてゐるに過ぎない。で、今日では、最早や西藏問題といふ言葉は成り立たない。普通康藏問題といはれるのである。康とは西康省のことで、四川と西藏との間に在つて、もと川邊特別區域と謂はれた地方である。この康藏問題の起つたのは、一九三〇年の夏からで、西藏の達賴喇嘛の派遣した侵入軍と、四川省主席劉文輝麾下の四川軍とは、西康省の中央より稍や東を流れる金沙江を挾んで對峙を續けたのであるが、一九三二年一月西藏軍は金沙江を越へて德格、白玉地方を占領し、西康省政府設置豫定地である打箭爐も危急に瀕した。これに對し、御承知通り四川は小軍閥が林立し、絶えず内亂をやつてゐるのであるが、流石の劉文輝も放つて置けず、兎も角西藏軍を追つ拂ひ、德格、白玉を奪回し、十月八日西藏との間に停戰協定を結び、金沙江を以て境とすることになつた。これで西康省の三分の二といふものが、完全に西藏のものとなつたのである。

西藏の理想は、西康省の全部、青海省の南部、雲南部の北部を打つて一丸とし、歴史上西藏の黄金時代である、唐時代の大西藏を建設するに在るのだ。そこで西康侵入と同時に、青海、雲南兩省へも軍を派し、雲南の方は大したこともなかつたが青海の方では、一九三二年九月上旬、玉樹といふ地方を占領し、一時同省南部一帶が西藏の手に入つた。然しこの方面は、間もなく青海省主席馬步芳の軍隊に依つて恢復され、青海、西藏間には不侵略協定が成立したといふことで、結局西藏問題は、西康省の三分の二が西藏に歸したといふところで、一先づ幕となつてゐるのである。即ち青海は辛うじて支那の主權の下に保全されてゐるのである。併し雲南に關しては、別の方面から觀測する必要がある。即ちフランス帝國主義の觸手は雲南に對して、最近益々強くなつてゐるのである。

御承知の通りフランス領印度支那といふものがある。フランス帝國主義の極東に於ける足溜りであるが、それから鐵道を一本雲南府に引張つてある。これが强力な帝國主義の道具である。雲南は交通不便な土地で、四川の重慶から、船及び陸行二十八日を要するのに、印度支那の河内からは、僅かに四日で雲南府に達する。故に鐵道が唯一の交通機關である。それをフランスが抑へてゐるのだから、雲南は事實上、フランスの屬領といつても差支へないのである。現在の雲南省政府主席は龍雲といつて、漢人ではなく、四川から雲南にかけて棲息して居る猓猓と云ふ種族のヒーローである。一九二七年に唐繼堯が病死すると、その部下の胡若愚

と龍雲との勢力爭ひが起つたが、一旦若愚が勝を得て、龍雲はフランス領事館に逃げ込んだ。そこでフランス側は龍を支援し、終に胡若愚を倒し、龍を省政府主席にしたのである。かういふ經緯があるので、雲南政府といふものはフランスの思ふまゝになるのだ。一歩を進めて併合することも出來るのだ。その時機は？　いふまでもなく西藏問題の發展如何に懸かつてゐるのである。即ち西藏が、西康全省を掩有し、雲南北部に侵入する時であらう。換言すればイギリス帝國主義が西康全部を蓋ひ、雲南北部を蝕ばむときに、フランスの雲南併合が行はれることであらう。

### 四　外蒙古及び新疆の情勢

今度は方向を轉じて、外蒙古及び新疆の情勢を申し述べる。外蒙古とロシアの關係は、西藏とイギリスの關係であつて、書くのも野暮なくらゐ。要するに支那ではないと、一口に片附けていいのだ。この方面から延びるロシアの魔手は、察哈爾方面に向ふのが自然の順序で、外蒙古の庫倫から、察哈爾の張家口までは、自動車で四日行程である。この趨勢を利用して、曩頃叛旗を飜へしたのが馮玉祥、方振武、吉鴻昌の一派であるが、ロシアは終に馮玉祥の誘ひに乘らなかつた。それは察哈爾が滿洲國と境を接してゐるからである。元來ソヴエート・ロシアの進路は、東路が滿洲、中路が察哈爾、西路が新疆であるが、かうして東路と中路とを塞がれたロシアは、全力を西路の新疆に集中することになつた。ここに新疆問題の重要性が發見されるのである。

新疆は回々教徒の根據地で、全人口の六十パーセントを占めてゐる。民國になつて以來、「鐵腕」と綽名された楊增新の獨裁政治の下に、殆んど半獨立の狀態を保つて來たのであるが、その後を承けた金樹仁に對して、回教徒の執拗な反抗が一九三〇年以來行はれた。金はこれに對して、ロシアの援助を求めて、一時回教徒を沈默させたが、後にロシアが方針を一變し、回教徒を援助することゝなつた爲め、彼の勢力はだん〳〵弱くなり、一九三三年四月の迪化政變に依つて、遂に沒落して了つた。その後に出來た新政權は、劉文龍・盛世才を中心とするものであるが、これに對して東部新疆に馬仲英及び回教徒があり、北部にも張培元などいふ親露派があり、內訌を續けてゐる。

迪化政變後、南京政府は形勢重大と見て、先づ參謀次長黃紹松を宣慰使として派遣したが、迪化政權は彼を矢庭に監禁して了つた。で致し方なく、新政權を支持する報告電報を發して、釋放して貰ひ、生命辛々逃げ歸つたやうな始末だ。その後羅文幹が新疆に行き、今はロシア領に這入つてゐるが、その祕書馮有眞の齎らした報告に據ると、新疆の形勢は九・一八事件前の滿洲の形勢に彷彿たるものがあるとのことだ。最近の情報に據るとロシアは支那共產軍に指令を發し、中國ソヴエートの中心を四川に移し、新疆と聯絡すべきことを命じたとのことであるが、これが數ヶ月前から八釜しくなつた「國際路線」即ちコミンテルン・ルウトの打開策なのである。この國際路線の問題は、後で更に詳しく述べる。

以上述べたところを要約すると、邊疆分離の傾向は、近來愈々濃厚になり、西康の三分の二が西藏に歸し、それが更に進めば、フランスの雲南併合を導き、一方新疆は九・一八事件以前の滿洲のやうな狀態を呈して居るといふに歸するやうである。

### 五　赤化運動

邊疆分離に續いで顯著な傾向は、支那赤化の運動である。これは現在の南京政府、即ち國民黨政權を眞向から否認し、ソヴエート支那を作らうといふ運動であつて、既に全國に亘つて、相當數のソヴエート區域を形成してゐる。そのうち大ソヴエート區と稱せられるものが八つある。即ち次ぎの八區である。

(一)江西中央區。(二)江西東北區。(三)江西湖南省境區。(四)江西湖北湖南省境區。(五)湖南湖北西部省境區。(六)湖北河南安徽省境區。(七)四川陝西省境區。(八)陝西甘肅省境區。

八大ソヴエート區の面積は、支那の約二省に匹敵すると謂はれ、そのうちに含まれる人民は、約三千萬に達するだらうと推定されてゐる。さうしてこのソヴエート區を守る共產軍は、基本部分だけで二十萬はあらうと謂はれてゐる。

中國共產黨、共產軍、及びソヴエート區の歷史に關しては、最近「支那に於ける共產運動」などいふ新刊も出てゐるので、詳しいことは省き大體のところを述べると、中國共產黨の成立したのが一九二〇年、今から足掛け十四年前である。最初極く微々たる

もので一種の啓蒙團體のやうなものであつたが、一九二四年コミンテルンからの指令で國民黨と聯合することになり、一緒になつて國民革命を遂行し、それが爲めに勢力は俄然增大した。一九二七年に國民黨と手を分ち、一時襄へてゐたが、そのうちに農民パルチザン軍を基礎として共產軍なるものが出來、その遊擊する地域に、所在にソヴエート區が成立した。今日共產軍の主力といはれる朱德、毛澤東軍の成立したのは一九二八年の四月で、それからまる五年半經つてゐる。最初のソヴエート區である廣東海陸豐ソヴエート區の出來たのはそれよりも一寸前である。兎も角この短い間に、前に述べたやうに八大ソヴエート區二十萬の共產軍を擁し、江西省瑞金縣に中央ソヴエート政府を持つといふ、ドエライ發展を見るに至つたのである。支那の二省に匹敵する地盤と、二十萬以上の軍隊、單なる軍閥としても、今の支那では强力な發言權があり、殆んど絕滅する事の出來ない勢力である。果して南京政府に於いては、一九三〇年來四回に亘る討伐を決行したが、捗捗しい成績を擧げてゐないのである。ただ一九三二年行はれた第四回討伐は、相當の成功で、武漢を包圍して居た三大ソヴエート區を蹴散らし、同方面の危機を一掃した。併しその代りに四川に新らしいソヴエート區を發生し、陝西、甘肅地方にも飛火してゐるから、共產軍の方から見ると大した打擊ではないのである。

目下開始されんとしつゝある第五回討伐は、江西省にある四大ソヴエート區を目標とし、蔣介石自から陣頭に立ち、二十萬以上の直屬軍隊を指揮することになつてゐるが成功と否とは豫斷の限りでない。たゞ共產軍の方では蔣の鋭鋒を避け、抵抗力の最も少い福建地方にハミ出すことになりはすまいかといふ想像は成り立つのである。江西四大ソヴエート區の方は、蔣介石に依つて大體抑へられてゐるから、實は大して心配しなくても可いので、それよりも本當に危險なのは四川の方面である。最近の情報に據ると湖南、湖北省境區の賀龍軍と四川、陝西省境區の徐向前軍とが、双方から聯絡を付けかかつたさうだが、これが成功すれば由々しき大事となる惧がある。前に一寸述べた國際路線、卽ち新疆、甘肅、陝西、四川、湖南、江西を結ぶ一大赤化ラインの、最重大な基礎工事が徐、賀兩軍の合體に依つて完成されるからである。支那赤化運動はまことに心腹の大患である。

## 六　支那中原の諸政治的勢力

邊疆及び赤化地域を除いた二十省が、所謂支那の中原であるが、地圖で御覽の通り、この中原も、諸諸の政治的勢力の割據、混戰の舞臺である。主なる登場俳優は、蔣介石及び南京政府、西南派、山東の韓復榘、山西、綏遠の閻錫山、四川の劉湘、劉文輝等である。このうち如何なる政治的勢力が、終に覇を稱するであらうか。その望みの少いものから、小口に片附けて行かう。

先づ第一に、四川の軍閥である。劉湘の十二萬を筆頭に、劉文輝の七萬、田頌堯の六萬といふ具合に、相當の兵力を持つた軍閥が七八人ゐて、年中內亂をやつてゐる。民國以來曾つて治まつたことがなく、今日まで約四百九十回の內亂をやつたといふのだ。民國六十何年までの租稅を、もう徵收して居るといふのだ。アキレ果てた土地である。現在では劉湘の旗色がよいさうであるが、そんな事はどうでもよい。要するに四川を世界の中心位に思つてゐる連中だから、自分等の懷工合さへ好ければよいので、全支那統一の志などは全くない。

第二は山東の韓復榘。これは表面南京政府の命令を奉じ、對外關係（卽ち對日關係）なども、極く和やかにやり、軍閥としては、最もタチのよい方だ。然し割合に野心は少く、山東一省をヂット持つてゐればそれでいゝと云ふ態度だから、餘り問題にならない。

第三、山西、綏遠の閻錫山。この人はもと反蔣介石派の旗頭で、馮玉祥、汪兆銘等と結んで、北平に擴大會議を組織したこともあるが、張學良の武裝調停に依つて失脚してからは、もう野心を起さず、もとの地盤の整理に沒頭し、表面蔣介石を立ててゐる。中原に乘り出すなどといふことには、もう懲り〳〵したものと思はれる。

第四に西南派である。一口に西南派といはれるが、實は四派乃至五派の寄合世帶である。卽ち胡漢民派、陳濟棠派、廣東元老派、廣西派、十九路軍等のブロックである。この中で支那統一の理想を持つてゐるのが、香港にゐる胡漢民である。國民黨內では元老派の第一人で、相當な理論家であり、孫文の後繼者を以て任じて居り、もと南京政府の立法院長をしてゐたが、蔣介石と衝突し、そのクウデタアに依つて監禁された。

それが一九三一年の三月。それが契機となつて廣東に國民政府が樹立されたのであるが、滿洲事變勃發後、南京廣東兩政府の間

に妥協が成立し、胡は釋放されて香港に雌伏することとなつた。それから約二年間香港に頑張つて國民黨の建直しを叫び、所謂國民黨運動なるものをやつてゐる。さうして何とかして廣東の實力者である陳濟棠を口説き落し、もう一遍廣東に國民政府を樹立したいと努力してゐるが、さてその陳濟棠である。兵力が二十萬、私財三千萬と云はれる陳濟棠は、代表的な割據軍閥であつて、彼の眼中には、廣東の地盤以外には、何もないのである。黨の元老であり、看板として都合がいゝので、表面胡漢民を立ててはゐるが、然し、彼の地盤を危くするやうな投機事業には手を出したくないやうだ。だから先達つて胡漢民一派が廣西派、それから陳銘樞等と結び、廣東國民政府を樹立しようとした時など部下の師團長などに反對させ、胡漢民系の通信社を閉鎖したりして、その運動を挫折させたのである。彼は又其の地盤を保持する爲めに、裏面に於いて常に蔣介石一派と相通じてゐるのである。斯うした强か者の陳濟棠だから胡漢民も骨が折れる。萬一陳濟棠を口說き落すことが出來たら、西南の形勢は相當注目すべきものがあるだらうと思はれるが、それが出來ない限り、西南派に依る全支那統一は、先づ望みがない。然し現狀に於いても、蔣介石コースの障碍物であることは勿論だ。

李宗仁、白崇禧等の廣西派は歷史の古い軍閥であるが、先年蔣介石に叩きのめされてから、その創痍未だ恢復せず、おまけに陳濟棠に出口を塞がれて、武器などにも不足してゐる始末で、心は矢竹に逸れども、といふところだ。

上海事件で名を揚げた蔡廷鍇、蔣光鼐等の十九路軍は、今福建の地盤を握つてゐるが、これも陳濟棠とは仲が好くない。それに地盤保全の關係上、蔣介石に對しても、餘り露骨なことは出來ないのである。何よりも强敵の共產軍が江西から時々押し出して來るし、今後さうした形勢は益々增大して來るのだから、愈々中央に賴らざるを得ないのである。

西南各派が完全に一致して起ち上つたならば、それは正に蔣介石の最大强敵である。併し以上述べたやうに、その一致は殆んど望めないのである。蔣介石といふ男は、まことに幸運な男である。

## 七　蔣介石及び南京政府

支那の中原に盤踞する色々の政治的勢力を、一つ一つ篩にかけて、最後に殘るものは何かといふと、いふまでもなく蔣介石及び南京政府である。

蔣介石のことは、これまで日本の新聞雜誌で、イヤと云ふ程書き立たられたから、贅言を費す必要はあるまいと思ふ。要するに彼は不死身である。北伐に成功して、南京政府にドッカリ座り込んだ一九二八年から今日まで、彼は中樞の地位から一歩も退かない。廣東派や、馮玉祥や、閻錫山や、汪兆銘やが、入れ替り立ち替り、彼の矢面に現はれるが、孰れも散々に叩きのめされてゐる。さうして彼は今、ロボット林森を國民政府主席に押し立て、自分は軍事委員會の委員長として一切の實權を握つてゐる。その勢力範圍は、江蘇、浙江、安徽、湖北、湖南、河北、河南から、陝西、甘肅、寧夏に及んでゐる。中國ソヴエートの二重政權ではあるが、江西にも及んでゐる。メめて十一省。それに直屬將領を配置し、六十萬以上、百萬近い兵力を以てこれを守つてゐる。これだけでも現在の彼の優勢を證明することが出來るが、更に彼の持つ强味を擧げると、略ぼ左の通り。

（一）國民黨中央に於いて優勢を示してゐること。純粹の蔣派六十餘名、元老派十餘名、汪兆銘派二十餘名、孫科派十名、合計約百二十名で、西南派の四十名、其の他三十名、合計七十名を壓倒してゐる。だから全國代表大會、中央執行委員全體會議などでは常に蔣派が勝を制するのである。

（二）國民政府部內で優勢を占めて居ること。これは說明するまでもあるまい。汪兆銘、孫科兩派が大分入つてゐるが、この兩派は、北支にも、西南にも、政治的立脚地を失つた連中で、蔣に依存する外なくなつてゐるから、心配は要るまい。

（三）軍事委員會を獨占してゐること。

（四）亭所方として浙江財閥を持つてゐること。浙江財閥といふのは、江蘇浙江の資產階級で、支那の新興資本閥である。上海は支那經濟の中心である。そこにネーテイーヴ・キヤピタルが蓄積され、その結果出來上つた資本閥であるが、これが一九二七年以來、蔣介石及び國民政府を支持してゐる。この財閥の大御所は、同時に國民黨の元老の一人である張靜江と、もう

一人は虞洽卿といふ人であるが、二人とも蔣とは密接な關係がある。張は浙江の富豪で、私財數百萬といはれた人だが、革命に心酔し產を傾けて孫文を援助し、同鄕の關係から、殊に陳其美を最負にしたが、同時に陳の參謀であつた蔣介石を可愛がりズツト面倒を見てゐる。虞洽卿もそれに劣らず蔣を支持し、第二革命の失敗で、蔣が腐つてゐたのを拾ひ上げ、自分のやつてゐた取引所の仲買人にしてやり、その後旅費をやつて孫文のところに送つたりしてゐる。此の二人が大御所となつてゐる浙江財閥だから、當然蔣を支持する筈で、一九二七年蔣が共產派を混拂つて上海を占領すると、同財閥の有力者錢永銘が財政次長になり、國庫債券三千萬元を引受けさせた。それから今日まで、浙江財閥は七億以上の公債を引受けて居る。宋子文が今度アメリカから棉麥借款を得て歸ると、其の相棒になつて棉の處分に當つたりするのは、矢張りこの浙江財閥だ。支那では殊に錢の世の中、蔣が浙江財閥を持つてゐることは、大變な强味である。

（五）元老派が支援してゐること。林森、吳稚暉、張靜江、戴天仇、蔡元培、李石曾、張繼、居正等の元老派は、最近五六年來の經過から見て、蔣を援けて統一をやらせる外ないと云ふ事に、心境の一致を見出してゐるのだ。これも一つの强味だ。汪兆銘の如きも、今日ではもう元老派の一人に數へてもよささうだ。

（六）藍衣社といふ恐ろしい團體を持つてゐること。これは支那ファッシストの團體である。最近益々活動し出して來た。張敬堯等が北支那で暗殺されたことなどから見ると、同社の勢力が愈々北支那にも延びて來たことが判る。

（七）黃郛を起用して北支那を收拾し得た事。北支停戰協定以來、黃郛の事はよく知られてゐるから、詳しくは述べないが機宜に適した起用で、北支那は之れに依つて安定すること疑ひない。

（八）列國の援助を得てゐること。宋子文の活躍で出來たアメリカの棉麥借款、聯盟の對支援助等がこれである。尙又共產軍の活動に對しては、列國は共同戰線を張らざるを得ない破目に陷るかも知れない。

かういふ風に算へて來ると、蔣介石及び南京政府が矢張り、現在の支那ではナンバア・ワンだと考へざるを得ないのである。近き將來に於いて、支那を統一し得るものがあるとすれば、それは矢張り蔣介石及ひ南京政府だらうと斷定せざるを得ないのである。

## 八　結　結

最後に結論を申し述べる。

支那の邊疆のある部分は、完全に分離した。これはもう取返しが付かない。或部分に就いては、分離が進行中である。それがどの程度で止まるか。それは支那本部の統一の進捗如何に懸かつてゐる。

支那本部の或部分は赤化してゐる。然し全支那の赤化は不可能である。それは經濟的、政治的中心地の占領が不可能であるからである。何となれば、上海とか漢口とかに共產軍が出て來ると、列國は居留民保護の必要上、ガンボート・ポリシイを發動させるからである。

邊疆及びソヴエート區を除いた地域、私の所謂支那の中原では、當分の間混亂が續くが、結局ある政治的勢力が勝利を占め、兎も角統一を完成することにならう。勝利の候補者の第一は蔣介石及び南京政府である。

隣邦の一國民として、私は支那の統一を衷心より、また熱誠をこめて希望するものである。一日も早く支那全土が統一し、さうして新疆省と西康省の分離を喰止め、それに依つてセメテ青海、雲南を保全させたいものだと考へる。所謂「大亞細亞主義」の礎石もこれに依つて始めて築かれるのだらうと、獨りぎめで斷定して居る次第である。（「支那」一九三三・一二）

# 第二章　福建革命の輪廓と動向

## 第一節　福建獨立の新形勢

### 一　三個巨臺の鼎立

李濟深の、心の匕首は、夜な夜な、蔣介石の頸血と相吸うた。

想ひぞ出づる一九二九年、彼は第八路軍總指揮を以て、廣東政治分會の主席となり、廣西の李宗仁と通じ、兩廣兩湖を連ぬる「大廣西主義」の實現を企圖してゐたが、這般の魂膽を蔣介石に嗅着せられ、たまたま兩李（濟深、宗仁）の南京、上海に在るに際し、廣西派の若殿原たる胡宗鐸一派の武漢擧兵を口實に、矢庭に濟深を監禁してしまつた。上海にゐた宗仁は、巧みに遁れ、北支那にゐた白崇禧も、軍を棄てて亡命し、いはゆる廣西派の三尊、むらむらパッと、一時に飛び散つたことがある。濟深は、その後二年の餘も、南京に軟禁せられ、悶々の月日を送つてゐたが、一九三一年の三月になると、胡漢民が軟禁の仲間入りをした。胡は國民黨右派の首領で、かつては廣西派の武力を背景としてゐたこともある。軟禁はされてゐても、線索を通ずることは、そこは支那のこと、御茶の子さいさいで、二人の怨毒は、凝つて古廟芬の南下となり、五月、廣東に國民政府成立、反蔣の氣運は一手に綜合せられて、流石の蔣をして、手も足も出でざらしめた。對峙半歲、兩國民政府の妥協成り、胡、李ともに自由を恢復した。

胡漢民が香港に據り、國民黨の廓清、純正なる黨の再建をスロオガンとしていはゆる「新國民黨運動」を起し、政治的には、廣東の陳濟棠を口說き落して、廣東國民政府を復活しようとしてゐたことは、周知の事實であり、私もたびたび報告したから、ここには詳しく繰返さないが、思ひは同じ李濟深も、この運動に參畫し、はじめ、抗日軍人聯合會を組織して、軍界の失意分子を糾合し、後、新國民黨の革命軍事委員會を率ゐ、陳銘樞、方鼎英とともに、黨の軍事首領として、政治的には反蔣、軍事的には倒陳（濟棠）の運動を試み、後者では、すでに相當の成果をかち得てゐると噂される。一九三三年の春、廣東國民政府再建の運動は、ほとんど成功に垂んとしたが、陳濟棠は從容としてこれに對付し、表面一辭を措かず、ひそかに麾下の勇將餘漢謀以下、廣東將領の連名を以て、反對通電を發するとともに、胡漢民系の通信社、新聞社を閉鎖し、一擧にこれを粉碎した。李濟深、滿腹の牢騷、發するに處なし。終に河岸を變へ、主謀陳銘樞のいふがままに、第三黨、社民黨に擁せられ、アセリにアセつて、福建に革命の烽火を揚げるに至つたのである。故に金聖嘆は、水滸傳を批し、林冲の心事を揣摩していふ。『怨毒の、人に於けるや、深いかな！』と。

舞臺は廻る。上海の某處に於ける、陳銘樞の祕密組織である。革命の第一段階に於いて、發表さるべき政綱の起草が終ると、もどかしとばかり、起ち上つたのが、第三黨の領袖、黃琪翔だつた。

「鄧演達同志が銃殺されてから、もうそろそろ二年になる。やつとここまで漕ぎつけたが、實に待ち遠しかつた！　これで、鄧同志も浮ばれるでせう。私は鄧同志の神位を背負つて、これから福州に行きます。さうして鄧のために、とむらひ合戰を戰ふつもりです。では、諸君もアトから……」

彼の聲は、興奮と怒りとでふるへてゐる。彼は、鄧が武漢で總政治主任をやつてゐた頃、第二方面軍の第四軍長として、鄧と義兄弟の契りを結んだ間柄であり、國民黨と共產黨との分離後は、鄧を輔けて第三黨を組織した男である。鄧演達刑死後、彼は第三黨を率ゐて香港、廣東、福州、上海を股にかけ、ただ今日あるを期して、呼號奔走してゐたのであつた。一座は、黃の述懷に、今更ながら頭を下げた。――一九三三年十一月上旬の某日である。

李濟深の焦慮と、黃琪翔の憤怒。それを調整する陳銘樞の策謀。この三つを載せて、舞臺は再轉する。今度は野外劇だ。――見渡すかぎり、群衆だ！福建人だつたら福建代表だし、廣東人だつたら廣東代表だ。かうして、二十六省區から集まつた代表に依つて召集された今日の大會の群衆、それを前景として、正面壇上、「中華全國人民臨時代表大會」の十二字を記した、横に細長い白

布の額の下に、幹部が整列してゐる。中央、やや左寄りに、圖抜けて脊の低い李濟深（後に五尺に滿たない）が、白レインコオト姿で、手に中折を持つてゐる。その右に、六尺豐かの軍服姿が、蔡廷鍇である。一人置いてその右に黄琪翔、黑レインコオト、これも相當脊が高い。その隣りに陳銘樞。この四人を中心にして、左右に蔣光鼐、徐謙、陳友仁、何公敢、鄧戟、許錫清、梅龍彬等が居流れてゐる。珍らしや福建海軍の大先輩、薩鎭冰の顏も見える。大會は、邱國珍司會の下に、十七名の主席團を選擧し、黄琪翔の開會の辭、各代表の演說後、黄琪翔再び起つて「人民權利宣言」を朗讀。次いで福建、安徽代表から、人民革命政府建立建議を提出し、人民代表團主席梅龍彬（社民黨領袖）から、印綬を李濟深に渡し、黄の閉會の辭とともに、口號十三項が、三萬と號する群衆の口から發せられた。

——人民の權利を保障しろ！

——農工の解放を實行しろ！

——人民革命政府を組織しろ！

——蔣介石を打倒しろ！

——〇〇〇〇主義を打倒し、東北の失地を恢復しろ！

ヒステリカルな口號齊唱のうちに、靜かに、幕が下りた。

かうして、福州に中華共和國が產れ、人民革命政府が設立せられた。それは一九三三年十一月二十日（支那人のいふ「東南半壁」すなはち江蘇、浙江、福建、安徽、江西の五省に、三個の聲量が、尖鋭に鼎立した。南京の「中華民國國民政府」（一九二七年樹立）、福州の「中華共和國人民革命政府」（一九三三年）、江西省瑞金の「中華ソヴエート共和國臨時中央政府」（一九三一年）と。一は三民主義、二は社會民主主義（第二國際）、三は共產主義（第三國際）。

正に、異色ある、世紀的風景といはねばならない。

## 二　人民政府の機構・政綱

「中華全國人民臨時代表大會」といふ母胎から、「中華共和國」が產れ、その中央政府として、「人民革命政府」が、十一月二十二日福州に成立した。その產生手續きの簡率さは、咎めずにあれ。今から二十三年前の辛亥革命で、「中華民國」を產み出したのも、こんどの場合と、あまり違ひはない手續きであつたのだ。當年、武昌に集まつた「各省代表者會議」が、こんどの「中華全國人民臨時代表大會」に當るのだ。畢竟、革命とは、かうしたものなのだ。

「人民革命政府」の機構は、十一月二十三日の第二次人民革命政府委員會で議決された、「人民革命政府組織大綱」九ヶ條に依つて、詳細に規定されてある。それに據ると、この政府は、中華全國人民臨時代表大會の附託を受け、中華共和國の最高權を執行し（第一條）陸海空軍を統率して、一切の武裝人民を領導し（第二條）、對外宣戰、媾和、使節接受、條約締結の權を有するもので（第三條）、委員十一人を以つて委員會を組織し、會議方式を以て國務を處理する。委員會主席一人は、委員から公推し、委員會の下に、經濟、文化、軍事三委員會、內政、外交、財政、農工四部、最高法院を設け、各會、部、院に、主席、部長、院長各一名を置き、人民革命政府委員會の議決に依つて推任する。別に祕書處を設け、祕書長一人を置く。となつてゐる。今まで任命されたのでは、政府委員會主席が李濟深、經濟同蔣光鼐（兼財政部長）、文化同陳銘樞、軍事同蔡廷鍇、外交部長陳友仁、政府委員李濟深、陳銘樞、蔣光鼐、蔡廷鍇、陳友仁、黄琪翔、徐謙、鄧戟、何公敢、李章達である。

人民政府の政綱を擬擬すべき資料としては、十一月二十日の代表大會で決定した「人民權利宣言」、同日發表されたと信ぜられる「最低限度の政策綱領」、十一月二十二日附「人民革命政府成立通電」の三つがある。今この三文獻を綜合し、正確を期すれば、人民政府の政綱は、左のごとくである。

（一）　不平等條約を廢除し、平等互惠の條約を締結する。（一切の帝國主義者の强制訂立せる不平等條約を否認し、關稅自主を首先實現する。）

（二）外資に依る一般企業（經營）、及び外人管理の企業、並びに文化事業にして、甚だしく（中華）民族の利益に違反（背馳）するものは、これを沒收或は制限する。（帝國主義の中國に於ける勢力を排除する。）

（三）新舊外債は、その性質に依つてこれを區別し、絶對拒絶・條件附拒絶の兩種に分つ。但し國に禍ひする政治借款に對しては、人民政府はその責に任じない。

（四）對外貿易を統制し、關稅絶對自主を實行する。（關稅自主を首先實現する）。

（五）政權を解放し、國民黨專制を取消し、帝國主義及び軍閥、反命革分子に對しては、一切政治上の權利を賦與しない。（軍閥を打倒し、封建殘餘の制度を排除し、人民經濟を發展し、徹底的民主解放を實現する。）

（六）民族自決を確認し、中國領域内各民族の自由聯絡を實現する。

（七）人民は身體、居住、言論、出版、集會、結社、信仰、示威、罷工の自由を有する。

（八）苛捐、雜稅を廢除する。

（九）普通選擧制を實行する。

（一〇）計口授田を實行し、以て農業の共營、國營の目的を達到する。一切の森林、礦山、河道、荒地は概ね國有に歸する。

（一一）銀行、交通、その他一切の重要企業（工業）の國家統制を實行する。（民族資本を發展せしめ、工業建設を奬勵し、およそ民族の生存、民生の日用に關係ある重要企業は、概ね國有に歸する。）

（一二）政治力量と國家資本とを以て、農業生産の科學化を扶助する。

（一三）奸商を取締り、日用公賣品制度を實施する。

（一四）高利貸を嚴禁する。

（一五）勞働法（農工法）を制定し、工人（農工）生活を改良し、勞工（農工）團體を保障し、且つその發展を援助する。（人民は勞働の權利義務を有する。軍閥・官僚・豪紳、地主等の寄生分子、及び地痞（無賴漢）、流氓等の遊民分子を肅清する。肉體勞働及び精神勞働は、均しく最大の保護を受ける。）

（一六）教育の普及を謀る。

（一七）徵兵制度を實行し、人民を武裝して反帝並びに經濟政治鬪爭を援助する。（人民は武裝して國家を保衞するの權利義務を有する。）

（一八）中國は中華全生産的人民の民主共和國で、中國の最高權力は、生産的農工、及び社會機構を共同に支持する商勞兵代表大會に屬する。

（一九）中國國家の獨立は、不可侵犯の最高原則である。

（二〇）全國人民は、種族、性別及び職業を論ぜず、民族に背叛し、農工を剝削するものを除く外、絶對の自由平等權を有する。

（二一）南京反動政府を否認する。

（二二）全國の反帝、反南京政府の革命勢力を號召し、ただちに人民革命政府を組織し、南京政府を以て中心となす國民黨系統を打倒する。

（二三）最短期間内に於いて、第一次全國生産人民代表大會を召集し、憲法を制定し、國是を解決する。

精密な分析は必要でない。我等がこれに依つて知り得ることは、新國家が、「生産人民代表大會」といふ、一種のソヴエート共和國であり、又政綱の大部分が、一九三一年十一月制定の、中華ソヴエート共和國憲法に含まれてゐるといふことである。赤色政府でないまでも、支那人のいはゆる「淡紅政府」であることは、間違ひない。

どうしてかうした政綱が出來たか？　エピソオドがある。政綱制定に際して、陳銘樞は、（一）資産階級の利益を以つて出發點と

すること、(二)勞働大衆に對しては、痲醉性に富む「口惠」を與へること、(三)社會民主黨の理論を包括し、中産階級の擁護をかち得ること、の三條件を提出した。これに對し徐名鴻、章伯鈞等の第三黨領袖は、同黨の首領であつた故鄧演達の十大政綱なるものを提出したが、陳の容るるところとならず、徐の名で漳州監獄に打電し、そこに入獄中の共産黨福建西部特區委員胡濬を釋放させ、胡に政綱の起草を依頼し、出來上つたものを陳に示し、陳の贊成を得て確定したのだといふ。政綱の過激なのも、故ありといふべきである。

政綱と關聯して、我等の興味を惹くのは共産黨との關係である。一種の不侵略協定の成立してゐることは、各恒報の一致するところであるが、その事に當つたのは、黄琪翔と彭澤湘である。彭はそのために、漳州監獄から釋放された共産黨員とともに、江西中央ソヴェート區の寧都に行き、そこで協定に調印して來たといはれてゐる。

### 三　中心人物とその背景

福建革命の中心人物を、系統別けにすれば大體左の通りなる。

(一)　廣西派。李濟深。

(二)　十九軍路系。陳銘樞、蔣光鼐、蔡廷鍇、戴戟、黄强、毛維壽、沈光漢、區壽年、譚啓秀、張炎、翁照恒。

(三)　第三黨。黄琪翔、章伯鈞、徐名鴻、鄧適生、彭澤湘。

(四)　社會民主黨。(陳銘樞)、王禮錫、胡秋原、梅龔彬、嚴靈峰、徐翔穆。

(五)　國家主義青年黨。(翁照垣)、邱岡珍、邱兆深、何公敢、關楚璞、林植夫。

(六)　馮玉祥系。徐謙、余心清、方振武、姚禔昌。

(七)　その他。陳友仁。

かうした各派の寄合世帯で、大體陳銘樞、李濟深の兩系統に大別することが出來るが、陳・李、蔣光鼐と蔡廷鍇、第三黨と社民黨といふ具合に、角つき合ひの機會が多過ぎ、いつまで結束がつづくか、疑問にされてゐる。派別の混雜は、新政府の持つ弱點の一つである。

李濟深は廣西人で、陸大出身。一九二四年廣東軍第一師參謀長を振り出しに、翌年もう第四軍長、このときから李宗仁、白崇禧と聯絡し、廣西派軍閥の基礎を築いた。一九二六年蔣介石が國民革命軍を率ゐて北上するや、彼は總司令部參謀長として廣東の留守を引受け、白崇禧を代理參謀長として前線に出し、同時に李宗仁は第七軍長として出征。廣西派の軍閥としての地位は、これで確定した。一九二八年北伐完成後、彼は第八路總指揮として、廣東政治分會主席たり、これが彼及び廣西派の全盛時代で、翌一九二九年監禁以後の事蹟は本稿冒頭に述べた通りである。彼は明けて五十歳、身長五尺に足らぬ小男だが、沈默にして言笑苟くもせず、奸詐を以て著はれ、今度の新政府主席も、決してロボットではなく、蔡廷鍇、徐謙、陳友仁、黄琪翔等を引きつけ立派に陳銘樞を牽制してゐるといふ。陳銘樞は、こんどの革命の主謀者である。廣東合浦の客家族で明けて四十四歳。保定軍官學校を出て一九二三年廣東の第一旅長となつた。このとき麾下の第一團長が有名な張發奎で、その下に黄琪翔、繆培南、李漢魂、吳奇偉、鄧龍光等が營長に控へ、第二團長が蔣光鼐、その下の營長に蔡廷鍇、戴戟、區壽年、毛維壽、沈光漢等がゐた。この第二團の系統が、すなはち第十九路軍で、陳の廣東省政府主席時代(一九二九―三一年)蔣光鼐を總指揮、蔡廷鍇第六十師長、戴戟第六十一師長、區壽年等七十八師長として組織されたのである。このときまでは、陳は蔣介石と善く、一九三一年五月、古應芬が胡漢民救出のため南下し、廣東國民政府樹立を陳に慫慂したときも、陳は蔣に氣兼ねして煮え切らず、終に麾下の陳濟棠に追拂はれ、廣東省政府主席を棒に振つて、南京に出向き、京滬衛戍總司令となつて、十九路軍を上海一帶に駐屯させた。つづいて起つた上海事件で、十九路軍が名を揚げたことは、世間周知の事實、事件後同軍は福建に移駐・間もなく陳は國民政府軍事委員會常委、交通部長を辭して外遊、一九三三年歸國し、スッカリ反蔣的になり、色色と劃策した。その手先きとなつたのが社會民主黨である。

いひ落したが、一九三〇年、彼は十九路軍を率ゐて江西の共産軍討伐をやつた。このときソヴェート區内に發生したA・B團

（アンチ・ボリシエヴイキ團）の活動に關心を持つた彼は、思想的に社會民主主義に傾き、文化運動に努力し出し、上海に神州國光社といふ大規模の出版機關を起し、「讀書雜誌」等を出した。この組織を中心として、終に社會民主黨が產れ、王禮錫、胡秋原、李季、梅龔彬、嚴靈峯、等がその指導者となり、陳の關係から、十九路軍に働らきかけ、相當の成果を擧げてゐた。このうち今回の革命に活躍したのは、胡、梅、嚴の三人である。胡も梅も湖北人で、胡は早大、梅は東亞同文書院の出身である。

右手に十九路軍、左手に社民黨を提げて、福州に乘込んだ陳銘樞は、新政府は自分の意のままだと思つたらしい。ところが李濟深が案外ロボットでなく、十九路軍に於ける蔣光鼐、蔡廷鍇の勢力爭ひに着目し、實力ある蔡を引きつけて軍事委員主席とし、なほ徐謙、陳友仁等の海千山千の怪物を駐使し、おまけに黃琪翔、徐名鴻等の第三黨と聯絡して、勢威を振ふので、陳は軍界の蔣光鼐、翁照垣、直系の社民黨連中、何公敢等の國家主義青年黨を引き連れて、これと對抗を試みてゐるが、大分旗色が惡く、案に相違してショゲてゐるといふ。

第三黨といふのは、鄧演達の組織した黨で、共產黨、國民黨に對する第三黨の謂である。鄧は國民黨極左派の首領で、共產派と緊密に握手し、總政治部主任として、武漢政府で鳴らした男である。一九二七年の國共分離後、黃琪翔、季方、章伯鈞、及び譚平山（共產黨右派）等と第三黨をつくり、一九二八年伯林で第二國際の援助の下に「中國國民黨臨時行動委員會」を組織した。彼の外遊中、彼の同志は、省の統治權力弱き福建に入り込み、共產黨の假面をかぶつて民衆に働らきかけ、相當な地盤をつくつてゐたが、一九三〇年鄧の歸國とともに、第二國際から鄧が得て來た十萬元がものをいひ、黨勢大いに振つたが、一九三一年八月鄧が蔣介石に捕縛され、翌年銃殺されるに及んで、僅かに黃琪翔、季方、章伯鈞（あと總政治部宣傳科長）に依つて、福建の地盤を保守することになつた。しかし今度の革命では、黃の活動最も目ざましく、斷然形勢をリードした。徐名鴻の活躍も、黃に次ぐものがあつた。

第三黨と社民黨（及び國家主義青年黨）の對抗を憂へた陳銘樞、徐謙は、十一月十八日福州で右三派を會同し、一切今までの行掛りを棄てて、第四黨を組織し、これを「人民革命大同盟」と命名せんことを提議し、各派これに同意し、革命の第一日、國民黨福建省黨部を占領して、右大同盟の本部とし、その一黨專制を以て、生產代表大會成立まで押し通すことになつた。黃琪翔が第三黨を脫離したといふ報道のあつたのは、すなはち右の經緯に因るものである。

革命の二つの背景、武力の十九路軍は問題ないが、思想的背景の第三黨、社民黨、國家黨、これは明白に新政府に禍ひする。政綱を過激化せしめ、新政府の對外信用を失はせるのみならず、內では分派的鬪爭を繰返し、厄介この上ない代物である。新政府の癌であらう。

### 四　永續性その他の見透し

新政府の永續性を、先づ財政的に見る。關稅が毎月五十萬元、鹽稅が十餘萬元、統稅が五萬元で計約七十萬元。從來はこれに南京から六十萬元、廣東から三十萬元の送金があり、かれこれ二百萬元で遣繰りしてゐたといふことであるが、獨立に依つて南京廣東の九十萬元がなくなる。どうしてやつて行くか、何人も疑つてゐる。養ふべき軍隊が、十九路軍六師で五萬人。南京側と對抗の必要上、これを增加する必要を感じ、翁照垣の手に依つて、土着軍の斬り崩し、土匪の改編をやつてゐるから、やがては七八萬にはなるであらう。で、もし財政的に行き詰まらないといふことになれば、南京政府部內の不平派なる宋子文と聯絡があるか、（宋子文桑料、張靜江、李石曾等が一團となつて、財政的援助を陳銘樞に與へ――月百萬の約束――ることになつてゐるとの消息は、事件發生直後、上海某邦字紙に依つて、決定的に報ぜられた）それとも〇〇〇からの援助があるか、いづれかであると見なければならない。

對外工作は、李濟深、陳銘樞ともにあまりにアセリ過ぎた結果、ほとんど手が着けてないといふのが本當のやうだ。米國が廣東を援助し、且つ十九路軍に秋波を送つてゐたといふことは事實だが、それなら廣東、福建の關係をますます密接にすることに努力すべきで、廣東と別個の、場合に依つては、それに反抗するかも知れない政府を、援助しようとは思はれないではないか。日本のことを、南京でも廣東でもかれこれいつてゐるやうであるが、わが臺灣の對岸に、共產主義的政府が出來るのを援助する理由は、絕對にない。

對內工作はどうだ？　廣東の陳濟棠の支持のないことは明白だ。彼は十九路軍の廣東歸還を最も恐れてゐるのだ。胡漢民は、陳濟棠口說き落しに失敗し、腐つてゐるのだから、本來なら福建革命に參加すべき筈だが、第三黨や社民黨が出シヤ張り、國民黨治を解消したりするのでは、正統的三民主義者を以て任じ、理論的に潔癖な彼のこととて、到底乘り込むわけに行かない。廣西派も李濟深を諫止してゐたさうで、廣東を挾み擊ちにするやうな氣配は、まだ見えない。

かう見て來ると、永續性は疑問といはなければならぬ。しかし蔣介石及び南京政府の側も、未曾有の危機に面してゐる。(一)福建、江西の淡紅、濃紅兩勢力が共同戰線を張つたといふことだけで、もうすぐに大なる脅威である。(二)胡漢民が陳濟棠を口說き落し廣西派、雲南、貴州と連ねて、福建とは別個に、廣東國民政府を再建し、中華民國の正統政府はコチラだと叫び出す危險がある。(三)福建が、評判の悪い過激な政綱を取消し、廣東及び胡漢民との聯繫に全力を集中し、西南五省聯盟を完成する恐れがある。(四)それが成功すれば、北支那にも響應するものが出て來るかも知れない。大體、一九三三年五月の馮玉祥、方振武、吉鴻昌等の反蔣運動は、福建革命の前哨戰だつたので、それが失敗したのは西南の局勢が整はなかつたためであるのだから。右のうち、(三)の形勢が、すでにホノ見えてゐる（一九三三・一二・三〇朝上海特電）。それが出來なくても、(二)の形勢だけでも、蔣介石コオスの大障碍である。賴みの綱は、陳濟棠と胡漢民に繫る。この方面に對する蔣の工作を、私に興味を以て觀るものである。『中央公論』一九三四・一）

## 第二節　福建革命の思想

福建の獨立は、實質上一つの反蔣運動に過ぎない。それにも拘はらず、福建革命と呼ばれるのは、辛亥革命に於ける「各省代表者會議」に彷彿たる「中華全國人民臨時代表大會」を開き、これを母胎として、「中華共和國」といふ、中華民國とは別個の一國を產み出し、その中央政府である「人民革命政府」の政綱として、ほとんど中國共產黨のそれと等しい政策綱領を發表したからである。どうしてこんな過激な政綱が出來たか？　その經緯を檢べて見て、私は、人民政府の思想的背景として、第三黨、社會民主黨、國家主義派、A・B團等の、國民黨でもなく、共產黨でもない各派があることを知り得たのである。

第三黨の成立したのは、今から七年前に遡る。すなはち一九二七年國民黨と共產黨の足掛け四年に亘る提携が、ほとんど破れかかつてゐたときのことだ。國民黨極左派の領袖に、有名な鄧演達がゐた。國民革命軍の總政治部主任として、武漢政府での花花しい存在であり、共產派との聯繫を、最後まで熱心に主張した男であつた。その甲斐もなく、大勢、國共分離に傾くと、彼は奮然として武漢政府を退出し、共產黨中の日和見主義者としてコミンテルンから脫まれてゐた譚平山、孫文未亡人宋慶齡、武漢政府外交部長陳友仁、それから徐謙、黃琪翔（第四軍長）、季方、章伯鈞（譚平山系、總政治部宣傳科長）等とともに、「中華革命黨」を組織した。これがいはゆる第三黨の濫觴である。中華革命黨といふのは、一九一三年に、孫文が第二革命に失敗し、革命の遺り直しをしなければならぬといふので、亡命先きの日本で、黨員たる人物を嚴選し、秘密結社的に組織した黨であり、後、これから中國國民黨を產み出したのであるが、鄧は、このとき、孫文の故智を襲うたのである。

一應の組織了ると、鄧は、宋慶齡、陳友仁等とともに莫斯科に行き、コミンテルンに、支那革命コオスの變更を求めたが容れられず、轉じて伯林に赴き、一九二八年九月、第二國際の領導の下に、「中國國民黨臨時行動委員會」を組織した。普通には、これが第三黨の發祥であるといはれる。鄧は引きつづき伯林にゐて、第二國際との關係を密接にし、一九三〇年に、十萬元の軍資金を携へて歸國した。

この間、國內に於ける彼の同志は、福建を中心として、セッセと地盤の開拓に從事してゐた。その出發點は、一九二八年の八月もと總政治部の科長をしてゐた江董琴が、鄧の電命に依り、福建特派員となつたのにはじまる。江は福建人である。先づ同省西南の漳州に行き、舊知である陳祖康を探した。陳は共產黨の福建巡視員なのである。陳は間もなく江に買收され、更に陳の紹介に依つて、共產黨福建南部區の幹部章餘生が加はり、三人が第三黨の福建に於ける幹部となり、農民協會、工會、火花社、自由社、婦女協會、革命軍事會等の灰色名義の團體を利用して、第三黨の組織を擴大した。そこで黨の臨時福建省委員會を形成し、陳祖康、

章餘生、傅柏翠九人が幹事となり、江董琴が黨中央代表となつた。一九二九年、共産黨の朱德、毛澤東軍が福建に進擊するや、第三黨は共産黨の組織中に混入し、勝手放題なことをやつて退けた。彼等は共産黨の中に在つて、一の「黨團」の作用を起し、第三黨員及びこれに近づく民衆を優待し、後方動務に當らせるとか、幹部に拔擢するとか、肥田を分配するとか、色々便宜をはかつたので、福建に於ける第三黨の勢力は、俄然增大した。

一九三〇年になると、鄧演達が伯林から歸國し、楊名仙を福建巡視員とし、省黨部を設立したりなどして、黨勢も大いに振つたが、共産黨側の「清黨」に引つかかり、一九三一年五月から八月にかけて、二千七百人捕縛され、領袖のある者は銃殺され、又傅柏翠のごときは、國民黨に歸順したりした。最後は鄧演達自身も捕縛され、（一九三一年八月）一九三二年銃殺された。

鄧刑死の後を承けて、熱心に再建を企てたのが、黃琪翔、季方、章伯鈞等であつた。譚平山は、いつの間にやら影を隱してしまひ、宋慶齡、陳友仁は、結局シンパ以上に出でず、徐謙も途中で馮玉祥系に還元し、馮のために民權聯治黨といふのをこしらへたりしてゐたので、結局黃琪翔、季方、章伯鈞が殘つたのであるが、經歷から何からいつても、黃が第一人者で、その後は第三黨といへば、黃琪翔を聯想するほどになつてゐた。彼はしかし黨的活動が得意でなく、政客的活動に終始したらしく、もとの緣故をたどつて、陳銘樞、李濟深をかつぎ、終に今回の革命にまで漕ぎつけたのである。

第三黨の綱領は、鄧が一九三一年に發表した「現在の國際及び中國の形勢と、我等の鬪爭的方向」の中に「黨の行動綱領」として掲げたものが、それに當るだらう。それは次のやうなものであつた。

（一）反動的南京統治の打倒。
（二）即時眞の人民代表を召集して國民會議を組織し、全國の政權を接收する。
（三）國民會議の組織原則に據り、省民會議、市民會議、鄉民會議を組織し、各級地方政權を接收する。
（四）不平等條約の無條件廢棄、租界回收。
（五）耕地の農有。
（六）勞働法を制し、生産者の工作及び生活を保障する。
（七）寄捐雜稅を撤廢し、國民會議で合理的稅率を定める。
（八）公共機關服務人員の待遇の公正、警察及び兵士の待遇改善。
（九）貪官汚吏、軍閥土豪劣紳の財産沒收、政治犯釋放。
（十）平民革命軍編成。反革命軍武裝の消滅。

第三黨と對抗して、福建革命の思想的背景の一部を成すものは、陳銘樞（新政府文化委員會主席）直系の社會民主黨である。陳銘樞は軍人ではあるが、決して一介の武辨ではなく、辯舌にも長じ、機會ある毎に民衆に呼びかけ、文化方面にも理解があり、民衆政治家としての素質を持つてゐる男で、一九三〇年頃、十九路軍を率ゐて江西共産軍討伐に出動してゐた頃、ソヴエート區内に出現したA・B團（アンチ・ポリシエヴイキ團）に興味を感じ、徐々に社會民主主義に傾き、その後上海に歸つて神州國光社といふ大規模の出版屋をやり、「讀書雜誌」、「文化評論」などいふ雜誌を出させた。この下に集つたのが王禮錫、胡秋原、梅寰彬、嚴靈峯、李季等の連中で、これらを糾合して、社會民主黨を組織し、陳が總理となつた。陳は十九路軍の事實上の首領であるところから、社民黨の手が同軍中に延びた。

社民黨の政治主張としては、筆者寡聞、まだ發表されたものを見ない。斷片的に想像し得られるところは、次の通りである。

（一）國共兩黨の中間を行く。
（二）共産黨の暴動政策、國民黨の共産黨壓迫には、ともに反對だ。
（三）土地の沒收、その貧農への分配。
（四）支那の現實を、資本主義的社會と認める。

（五）帝國主義反對。
（六）工人待遇の改善。
（七）階級專制反對。
（八）集會、結社、言論、出版、罷工の自由を主張する。

陳銘樞は別として、黨の首領格にゐるのは王禮錫で、江西南昌人、まだ三十五歳。早大出身で、もと國民黨中央農民部の祕書。A・B團の組織に參し、一時は汪兆銘の改組派にも投じたことがある。一九三一年來神州國光社の編輯長となつてゐる。李季は湖南平江の人で三十七歳。北京大學出身。共產黨の陳獨秀派から、社民黨に入つて來た人で、社會科學作家としては、社民黨隨一。胡秋原は湖北人で、早大出身、三十餘歳。陳銘樞の家庭教師だといふ。「唯物史觀藝術論」の著者であるが、社會科學作家としては大したものではないらしい。梅電彬は、本名を梅電龍といひ、矢張り湖北の黃梅人で、三十三歳、上海東亞同文書院卒業後共產黨へ加入し（一九二四年）、張發奎の第四軍第十二師政治主任をやつてゐた。一九二九年東京で捕縛され、一九三一年七月歸國した。この頃共產黨を離れて社民黨に入り、國光社編輯として、「文化評論」を主宰した。――以上諸人のうち、こんどの革命に參加してゐるのは、胡秋原、梅電彬、嚴靈峰の三人である。

第三黨、社民黨の外に國家主義派がゐる。新政府委員で、福建省長となつた何公敢、十九路軍の師長翁照垣、その他邱國珍、關楚璞等である。支那の國家主義者としては、フランス留學生曾琦、李璜等のはじめた中國國家主義青年黨が有名であるが、何公敢はわが京大經濟科の出身で、上海で「孤軍」誌を主宰した別派の國家主義派である。曾琦等の「醒獅」派に對し、「孤軍派」と呼ばれる一派である。何が福建に長くゐて、財政廳長をやつてゐたりしてゐたので、この派は、人數の割合ひに、地元では勢力があるらしい。

ザット以上の三派が、新政府の思想的背景をつくり、例の政綱を產み出したのである。政綱は曲りなりにも定まつたが、今後各黨がいかにして進んで行くかについては、大激論があつたらしいが、結局徐謙の調停に依り、「人民革命大同盟」といふ形に於いて、各派の大同團結をつくり、その一黨專制で進まうではないかといふことになつた。しかし所詮一緒になれさうになく、「人民革命大同盟」は、一夜のホテルでしかないやうな氣がする。最近の情報に據れば、人民政府は、例の政綱の評判の悪いのに驚き、廣東との妥協に差支へないやう、政綱の改訂發表をやるといふことだが、さうなると第三黨と社民黨は、お拂ひ箱になるかも知れぬ。「思想的背景」の免職など、いかにも支那の革命らしく、ちよつと面白いではないか。（ヨセルバンヨ一九三四・一）

## 第三節　十九路軍物語

上海事件で、邦人に刷染の深い、例の十九路軍が、又舞臺に現はれて來た。

福建革命のエレメンツは、非常に複雜であり、李濟深一派、陳銘樞及び社民黨一系、第三黨、國家主義派、等々が算へられるがそれら各派のいづれもが、武力的背景として、アテにしてゐたのは、いふまでもなくこの十九路軍である。十九路軍が福建の地盤に蟠據してゐるといふこと、そのことが、福建革命を可能ならしめたのである。これなくして、口舌の徒ばかりでは、革命など、起せるものではない。――十九路軍のロオルは、相當重要である。

先づその歷史を見よう。十九路軍といふ名のついたのは、さまで古いことでなく、一九三〇年の夏で、まだ三年半にしかならないが、その胚胎たり、萠芽たる廣東軍第一師第四團が、陳銘樞を團長として育くまれたのは、一九二一年の冬であり、陳團長の下に蔣光鼐、陳濟棠、蔡廷鍇、戴戟等が、營長、連長を勤めてゐたのである。それから今日までの編制系統を調べて見ると、次ぎの通りになる。

（一九二二年）廣東軍第一師第四團は、北伐に際し先鋒となり、江西の陳光遠軍を擊破し、金城鐵壁といはれた贛州を占領した。六月、陳烱明廣東に叛變するや、北伐軍は師を回へして韶關を攻めて勝たず、轉じて福建西部に入る。このとき陳銘樞は、南京

に去つて支那內學院に入り、佛を學び、團長は陳濟棠が繼任した。

（一九二三年）陳炯明東江に敗れ、孫文大元帥が廣東に歸つて政を主るや、陳銘樞を廣東軍第一旅長に任じ、二團の兵を新募した。その編制左のごとくである。

- 第一旅長陳銘樞
  - 第一團長張發奎（營・連長）
    - 黃琪翔
    - 繆培南
    - 李漢魂
    - 吳奇偉
    - 鄧龍光
    - 許志銳（陣歿）
  - 第二團長蔣光鼐（營・連長）
    - 蔡廷鍇
    - 戴　戟
    - 區壽年
    - 毛維壽
    - 沈光漢
    - 張世德（陣歿）

（一九二五年）春、第一旅は國民革命軍第十師及び第十一師と改制、蔣光鼐團を基本として、これを三團とした。編制左のごとくである。

第十師長陳銘樞—副師長蔣光鼐
- 第二十八團長　蔣光鼐
- 第二十九團長　蔡廷鍇
- 第三十團長　戴　戟

第十一師長張發奎

（一九二六年）夏、國民革命軍北伐するや、第十、第十一兩師は、相並んで奇勳を建てた。汀泗橋、賀勝橋、武昌城、馬砲嶺の諸役これである。紀律鐵のごとく、戰鬪力も同じく鐵のごとしといふので、「鐵軍」と綽名された。冬、陳銘樞は國民革命軍第十一軍長となる。編制左のごとくである。

第十一軍長陳銘樞—副軍長蔣光鼐
- 第十師長蔣光鼐
- 第二十四師長戴戟—副師長蔡廷鍇

（一九二七年）春、武漢南京兩政府對立するや、陳銘樞、蔣光鼐、戴戟武漢を去り、陳の殘した第十一軍長は、張發奎の兼任となり、蔡廷鍇が第十師長となつたが、秋、蔡は第十師を率ゐて張發奎の指揮を離れ、江西の間道から福建に歸り、再び陳銘樞を第十一軍長、蔣光鼐を副軍長とし、第十師の外、第二十四、第二十六の兩師を加へ三師となつた。

（一九二九年）春、編遣會議の結果、第十一は一師一旅に縮編された。左のごとし。

廣東第三師長蔣光鼐—副師長戴戟
- 第八旅長戴戟
- 第二獨立旅長蔡廷鍇

いくばくもなく更に改制せられ、第三師は第十一師に、第二獨立旅は第六十師となり、第六路總指揮陳濟棠の節制を受けることとなつた。しかしこのとき陳銘樞は廣東省政府主席であり、實際は銘樞の指揮を受けてゐたと同樣である。

（一九三〇年）夏、第六十、第六十一兩師は、蔣介石の命に依り北上、左のごとく改制せられた。

第十九路軍總指揮蔣光鼐
- 第六十師長　蔡廷鍇
- 第六十一師長　戴　戟

「十九路軍」の稱、ここにはじまる。

（一九三一年）江西に於いて共產軍討伐に從事、編制左のごとし。

## 第三節　十九路軍物語

第十九路軍總指揮蔣光鼐―軍長蔡廷鍇（第六十師長　沈光漢　第六十一師長　毛維壽　第七十八師長　區壽年）

第六十一師長だつた戴戟は、病氣のため休職となつたのである。

次ぎに、軍の領袖を語らう。陳銘樞を劉備、蔣光鼐を關羽とすれば、蔡廷鍇が張飛に當る。陳の經歷は、ことごとしく論ずるまでもなく、よく知れ亘つてゐるが、要するに一介の武辨でなく、政治家、特に民衆政治家としての素質に富み、文化、思想的方面にも、相當の理解があるといふことだけは、記載を逸するわけに行かない。かつて佛教を研究したことは、前述の通りである。江西共産軍の討伐に從事してからは、社會民主主義に關心を持ち、上海に古くからある神州國光社といふ出版屋（美術ものを主としてゐたと記憶する。）を買收し、それを文化機關とし、「讀書雜誌」、「文化評論」、「文化雜誌」（前者の改題）等を出版し、王禮錫、胡秋原、梅龔彬等を中心とし、社會科學作家群を買收した。そのグルウプを、我等は社會民主黨といふのであり、胡と梅とはこんどの革命にも大いに働らいてゐる。吳敬恒は彼を「常勝將軍」とほめてゐる。彼の傳記作者は、彼を今の儒將なりと讃してゐる。相當の傑物であることは勿論だが、やや人のオダテに乘る傾きがあるさうだ。

蔣光鼐は痩せこけた小男ださうだが、人望は大したものだつた。しかし今、十九路軍の實權は、蔡廷鍇に歸してゐるさうで、蔣との間が面白くないといはれてゐる。蔡廷鍇は猛將だ。支那語でいふ虎將だ。三國志の張飛を想起すればいい。

以上三人は皆廣東人で、その外黃强、區壽年、翁照垣、張炎等も同鄕だが、戴戟は安徽人、毛維壽と劉古雄とが江西人だ。區壽年、毛維壽、沈光漢、張炎、劉古雄皆猛將。黃强はちよつと變り種で、農業の專門家から軍人になつた男、こんどの革命には、內心反對してゐるといふ。翁は綠林の出身で、陳炯光に招撫されて營長になり、それから日英佛三國に留學して、陸海空軍を勉强したといふ。一面國家主義派の領袖でもある。この男が一等將來があるらしい。

十九路軍はほんたうに强いか？　陳、蔣、蔡、戴といつたやうな好統率者を戴いてゐたこととて、たしかに强いらしい。一九二四年には、三千の兵力で二萬の林虎軍を擊破してゐるし、一九二五年には、四千で鄧本殷の六七萬を破つてゐるし、北伐の際、李宗仁の攻めあぐんだ馬廻嶺を、僅かに一回の夜襲で占領してゐる。その後も、これも强いので有名な張發奎軍を、四回に亘つて擊破してゐる。いはゆる「黑色鐵軍、赤色鐵軍を破る。」とは、この役を指す。一九二九年に、戴戟が僅かに一旅を以て、廣西軍白崇禧三師の衆を敗つてゐる。白もただ者でなく、「小諸葛」と綽名のある謀將だが、戴には見事シテやられてゐる。この時蔡廷鍇の徐星唐軍（廣東軍第二師）追擊と來ては、廣東東部から福建南部、又廣東、次ぎは江西といふ具合ひに、窮追すること三ヶ月行程一萬支里、終に江西の信憑で、徐軍の武裝を解除してゐる。徐軍も決して弱い軍隊ではないのだ（徐はこんどの福建革命で、軍事委員會委員になつてゐる。）

かうした强い軍隊だが、共産軍との戰には、隨分苦戰したらしい。そのクライマックスは一九三一年九月上旬の江西興國の役で彭德懷の率ゐる七軍六萬の紅軍と、蔡廷鍇の指揮する第六十第六十一の兩師二萬とが、高興圩で戰つたときである。血戰實に三日蔡は吉安に在つた陳銘樞（剿共右翼總司令）に打電して、「死戰あるのみ。」と稱し、生還を期せず、短銃を持つて戰場を奔馳したが、彭德懷の負傷に因り、辛うじて紅軍を擊退することが出來た。紅軍死傷八千、十九路軍三千。しかし共産軍はこれに因つて十九路軍の强を知り、一九三二年五月、福建漳州占領後一ヶ月を經て、十九路軍福建に移駐すと聞くや、自動的に撤兵したほどである。（撤兵理由は、他にもあるが。）

しかし今日の十九路軍は、すでに强弩の末となつてゐる。福建といふ地盤を獲て、領袖が政治家になり、安逸に飜れたため、士氣が從前のやうに振はない。土着軍との折合ひ惡しく、人民の受けもよくなく、共産軍にも營められてゐる。見樣に依つては、蔣介石の江西共産軍壓迫に依り、共産軍が福建にハミ出すことを恐れ、これと不侵略協定を締結し、一面福建土着軍の反對運動を牽

制すべく、一種の自衛手段として、革命に加擔するに至つたのだともいへるであらう。（同七月一九三四・一）

## 第四節　福建獨立をめぐる人々

### 李濟深

福建人民革命政府の主席李濟深（もと濟琛といつたが、數年來濟深と改めた。）は、字は任潮、廣西省蒼梧の人で、一八八六年生といふから、明けて四十九歳。廣東講武堂を出てから北京の陸軍大學に入り、卒業後、北京政府陸軍部でクスぶつてゐたが、見切りをつけて廣東に歸り、一九二三年廣東軍第一師の參謀長となつた。かくて東江の役には陳炯明を破り、北路の戰には沈鴻英を挫き、謀略を以て稱せられ、第一師師長鄧仲元の暗殺さるるや、その後任となり、幾くもなく第四軍軍長に陞る。時に廣西軍の領袖李宗仁、白崇禧、黄紹雄は、相率ゐて陸榮廷を攻擊しつつあつたが、濟深は孫文の命を奉じて梧州を警備し、同郷の關係を以て李、白、黄等を援助し、陸榮廷を驅逐した。事平ぐの後、李は白崇禧を連れて廣東に歸り、國民政府に歸順させた。その功に依り、一九二六年の國民黨第二次全國代表大會では、彼は監察委員に當選した。間もなく北支問題が起つた。それに對し時機尚早を唱へたものは共産派といふことになつてゐるが、廣西派も同樣に反對であつた。それは、廣西派の軍事力量は、やや充實しかけてゐたけれども國民黨内に於ける地位はまだいふに足るものなく、北伐成功の後、高地位を得る能はざるを恐れたからである。しかし彼等の反對が顧みられなくなると、今度は積極的に、色んな條件を持ち出して、蔣介石を牽制した。その結果、濟深は國民革命軍總司令部參謀長黄埔軍官學校校長代理として、陳濟棠、徐景唐等を率ゐて廣東の留守居役となり、その參謀長の一席は、白崇禧を參謀處長として、これを代理させ、又李宗仁を第七軍長とし、その下に夏威、胡宗鐸、鍾喜培三旅をつけ、廣西から湖南に入らせ、濟深が後方から、これを接濟支應したから、第七軍の給養その他斷然他の各軍を超過し廣西派の軍閥としての基礎は、ほとんどこれに依つて確立したのである。かくのごとき有利な條件をかち得てゐたから、北軍もし失敗せば、廣東を守つて敗軍を容れず、成功せば坐ながらにして革命の根據地たる兩廣を、自分の地盤に納めることが出來ようといふ、ドチラに轉んでも拔かりのない、狡猾さはまる陣形を整へてゐた。出發點からして、典型的な軍閥だ。

蔣介石等が長江一帶に轉戰してゐた間、彼は廣東に頑張つてゐた員、北伐軍第二路總指揮張發奎廣東に歸るや、ともに臨時廣東軍事委員會を組織し、その主席となつたが、汪兆銘と上海に行つてゐる留守中、同年十二月十一日、有名な廣東暴動が起り、一時失脚しかけた。しかし間もたくこれを恢復し、國民革命軍第八路總指揮になつた。一九二八年廣東に歸り、蔣介石が國民革命軍總司令に復職すると、彼は又總司令部參謀長となり、廣東政治分會主席を兼ね、兩廣軍政兩權を掌握した。これが彼の全盛時代である。

一九二八年末の張學良易幟に依つて全國統一の外觀を呈したが、一九二九年に入つて、國軍編遣問題、並びに政治分會廢止問題が起つた。李濟深は當然これに反抗し、暗に李宗仁等と通じて、兩廣、兩湖を連ねる大廣西主義の實現を企圖し、先づ武漢地方にゐた胡宗鐸をして、湖南の魯滌平を强制的に辭職せしめようとした。魯は、黨の元老譚延闓の系統に屬する軍人で、譚から蔣介石に談判した結果、蔣は、三全大會出席のために南京に來てゐた李濟深を矢庭に監禁し、三全大會に附議して、廣西派討伐令を發布させ、軍を陣頭に進めて胡宗鐸等を蹴散らした。廣西派三尊の一人たる李宗仁も、このとき上海に來てゐたが、變を聞いて辛うじて遁れ、北支那にゐた白崇禧も、軍を棄てて大連に亡命した。

李の監禁は、一九三一年までつづいた。同年三月、李と同じ運命に遭つた胡漢民の同志たる古應芬が南下して廣東の陳濟棠を說服し、汪兆銘・孫科その他の反蔣派が團結して、五月廣東國民政府が成立し對峙すること半歳、滿洲事變の勃發を機として、南京、廣東兩派の妥協成立するや、彼も胡漢民も自由の身となつた。

自由恢復後の彼には、先づ訓練總監、次いで討共軍副總司令が與へられたがそれを受けるやうな彼ではない。先づ抗日軍人聯合會を組織し、失職軍人を糾合して、事を起さうとしたが、往年の地盤はなくモノになりさうもないので、南下して香港の胡漢民を

助け、陳銘樞、方鼎英等と聯絡して、革命軍事委員會をつくり、胡の新國民黨に於ける軍事首領を以て任じてゐた。一九三三年春の、廣東國民政府再建運動には、胡の棒組だつたし、五月馮玉祥、方振武、吉鴻昌の察哈爾に於ける旗揚げに際しても、部下を參畫させたものである　しかしいづれも成功せず、終に河岸を變へ、陳銘樞とともに、福建革命をリイドすることとなつたのである。

彼は五尺に滿たぬ矮小漢、しかし精悍無比、沈默寡言の奸雄型で、國民政府主席林森のやうなロボットではなく福建入り後、逸早く十九路軍の實力蔡廷鍇と結び、徐謙、陳友仁、黄琪翔等を引きつけ、陳銘樞派と對抗してゐるといふ。足智多謀を自負し、ロボット視して李濟深を引込んだ陳銘樞の方が、今ではややショゲてゐるといふのだから、李の相當さ加減が判る。

## 陳　銘　樞

福建革命の主謀者陳銘樞（眞如）は、廣東合浦縣人で、客家族の出身だ。明けて四十五歳。客家族は、廣東に於ける異人種で、中原の遺種と稱せられ、團結心强く、輻强にして且つ聰明、テコでも動かぬといふ人種だ。かの太平天國の洪秀全、馮雲山がさうだつたといふし、孫文もその疑ひがあるといふし、死んだ廖仲愷、陳炯明はたしかに客家だつた。現存の知名人中には、銘樞をはじめとし、陳濟棠、陳公博（國民政府實業部長）、繆培南、李漢魂、林翼中、林雲陔、吳奇偉、香翰屏、鄒魯等があり、今度の革命に參加したものの中にも、黄强（十九路軍參謀長）、譚啓秀、沈光漢、黄琪翔等皆客家である。

さて銘樞は、保定軍官學堂の出身、第一革命に從軍し、袁世凱帝制運動の際には、廣東で龍濟光暗殺を企てて成らず、一旦日本に亡命し、一九二一年歸國、廣東軍第一師第四團團長となつた。その下の營長、連長に、蔣光鼐、陳濟棠、蔡廷鍇、戴戟がゐたといふ。翌年、彼は何を感じたか、職を陳濟棠に讓り、南京で佛教を研究し、「支那內學院」に學んだといふ。彼の字を取つて、眞如法師とはこれいかに。だがそれも長くはつづかず、一九二三年廣東に歸り、廣東軍第一旅長となる。麾下兩團、第一團長張發奎の下に、黄琪翔、繆培南、李漢魂、吳奇偉、鄧龍光等が營長、連長たり、第二團長蔣光鼐の下に、蔡廷鍇、戴戟、馬濤年、毛維壽、沈光漢等が營長、連長だつたといふ。この第二團が、彼の十九路軍となるのである。

一九二五年になると、第一旅は第四軍の第十師となり、陳師長の下に蔣光鼐副師長兼第二十八團長、蔡廷鍇が第二十九團長、戴戟が第三十團長となる。この時、張發奎は第十一師長に榮進。一九二六年の北伐には、この兩師團は相竝んで赫赫たる戰功を建て、紀律鐵のごとしといふところから、「鐵軍」の名をかち得、同年冬、陳は國民革命第十一軍長に出世し、蔣光鼐副軍長兼第十師長、戴戟が第二十四師長となる。一九二七年に南京政府が出來ると、陳は武漢を去つて南京に赴き、國民政府軍委、國民革命政治訓練副主任、兼總司令部政治訓練部主任となつたが、同年秋には、もう廣東に下つてゐて、さきに一旦手を放した第十一軍を重ねて組織した。一九二九年の三全大會後、陳は廣東省政府主席となり、翌一九三〇年、第十九路軍組織され、蔣光鼐總指揮の下に、蔡廷鍇第六十師長、戴戟第六十一師長となり、北上して馮玉祥、閻錫山と戰ひ、ついで江西で共產軍討伐に從つた。一九三一年三月、胡漢民監禁に憤慨した監察委員古應芬が、南下して廣東に遊說し、廣東國民政府樹立を慫慂するや、陳銘樞は蔣と一脈相通じてゐたこととて、態度煮え切らないものがあつたため、陳濟棠の乘ずるところとなり、省政府主席を辭して、廣東を去るの餘儀なきに立ち至つた。

彼はここに於いて南京に現はれ京滬衞戍總司令となり、十九路軍を呼び寄せ、南京、上海間の警備に當り、滿洲事變後、南京、廣東兩政府合體するや中央執行委員兼國民政府交通部長に任ぜられ、一九三二年上海事件勃發、麾下の十九路軍の奮鬪は世界的に名を知られたが、事件後十九路軍福建に移駐するに及び、彼は中央を去り、幾くもなく外遊、一九三三年歸國し、爾來虎視眈々として機會を伺つてゐたのである。——以上、彼と十九路軍との關係。

彼はかくのごとく支那軍界の元老であるが、決して一介の武辨でなく、政治家的素質を多分に備へ、特に辯舌に長じ機會あるごとに大衆に呼び掛け、萬事派手好みである。かうした素質は彼をして思想、文化の方面にも、活躍させることになつた。A・B團といふのがある。これはアンチ・ボリシエヴイキ團の謂であるが、これが江西ソヴエート區內に發生するや、陳銘樞はこれに共鳴し（一說に據れば、陳がこの團體を成立せしめたのであるといふ）その部下の陳孚木、鄒敏初等をして、上海に古くからある神州國光社といふ書

店を買收させ、これを大規模の出版社に變形させ、「讀書雜誌」、「文化評論」などいふ種類の雜誌を發行させた。この陣營に據り編輯者又は寄稿家として活躍したものに、王禮錫、胡秋原、梅鷟彬、陶希聖、王亞南、彭述之、劉仁靜、嚴靈峯等があつた。彭、劉、嚴は陳獨秀派の共産黨員である。これらの連中が一緒になつて、終に社會民主黨なるものをつくりあげ、陳をその總理に推したのである。以上、陳と社民黨との關係（一說に據れば、社民黨組織の議はあつたが、まだ正式に成立はしてゐないのであると。）

武に十九路軍あり、文に社民黨あり、これを賄ふ財的機關としては十九路軍の公款を基礎とした國華銀行あり、三拍子揃つた陳銘樞。果然今回の福建革命は、彼が謀主であつたのである。しかし前述した通り、李濟深もなかなかの曲者で必ずしも陳のいふままにならないから、陳も大いに骨の折れることであらう。

### 十九路軍の將領

福建革命の武力的背景である十九路軍の歷史については、前項で略述したから、この項では、その重なる指導者を紹介する。

蔣光鼐（憬然）は廣東東莞人で四十八歳。保定軍官學堂出身。一九二一年來軍界に活躍してゐるが、軍歷は「陳銘樞」の項で述べたから繰返さない。革命前までは、福建省政府主席であつた。李濟深ほどではないが、彼も矮小漢、一寸見は軍人らしくない。部下に對しては頗る寛、しかもよく人を服せしめる。ただし最近は蔡廷鍇に推され氣味であるといふ。

蔡廷鍇（貫初）は廣東羅定人で四十九歳。これも保定軍官學堂出だといふが、一說には鍛冶屋だといふ。猛勇無雙、まことに一員の虎將なりと、支那人はいふ。三國志の張飛といふところだらう。上海事件のはじまる少し前、彼は義勇軍五千を率ゐて東北に出掛けると豪語してゐたといふ。上海事件の際は、十九路軍の軍長として、支那人にしては珍らしく善戰し「民族英雄」と稱せられた。福建移駐の際總指揮となり、次いで綏靖主任を兼ねた。性爽直、しかし老粗、蔣光鼐を推しのけようとする傾向があり、蔣の退讓に依り事なきを得てゐる。

戴戟（季陶）は安徽旌德人、四十歳。經歷は蔡廷鍇と雁行してゐる。亦保定軍官學堂出身。上海停戰交涉で、支那側委員の一人だつた。容貌魁梧奇偉、酒を嗜み詩を能くする。今回の革命には、やや消極的である。

黄强（奏京）は海南島人で四十八歳。陳銘樞と同じ客家族。前淸京師陸軍速成學堂卒業後、佛國に留學して農業を專攻、歸國後陳炯明の下で海關監督をやつてゐたことがある。陳沒落後陳銘樞の幕下に入り、累進して一九三一年十九路軍參謀長となる。上海停戰會議では專門委員だつた。今回の革命には最も不贊成で、厦門警備司令として治安維持に專心してゐる。

區諤年（介眉）廣東羅定人、毛維壽（孝三）江西峽江人三十八歳。沈光漢、張炎廣東吳川人、譚啓秀、廣東羅定人、黄埔軍官學校出身四十八歳。劉古雄等を數へ、最後に翁照垣（名は輝勝）は廣東惠來人、はじめ綠林の豪傑、陳炯明の弟の陳炯光に招撫されて營長となり、後日本に陸軍を、英國に海軍を佛國に空軍を學んだ英才。佛國で飛行練習の際、五百尺の高さから落下し、電柱に引つかかつて死ななかつたといふ、珍らしい經歷を持つてゐる。上海戰では最前線に活躍し、日本空軍の威力を感じ、十九路軍空軍の整備に盡力してゐた。目下土匪の招撫改編に當つてゐる。彼は又一面國家主義者として知られ、政治家的素質を持つてゐる。

### 社會民主黨の人々

社會民主黨組織の歷史は、「陳銘樞」の項で敍述した。この派に屬する人々には、左の諸人がある。

王禮錫、江西南昌人、三十六歳。南昌心遠大學、日本早稻田大學出身。武漢政府時代、國民黨中央農民部秘書、國共分離後、段錫朋の組織したA・B團に投じた。後改組派と關係を生じたり、「青年呼聲」誌、「新時代」誌を出したりしてゐたが、終に陳銘樞に接近し、神州國光社の總編輯になり、社會民主黨の幹部の筆頭となつた。「物觀中國文學史」の著がある。今度の革命には、しかしまだ現はれてゐない。

梅鷟彬、本名電龍、湖北黄梅人、三十四歳。上海東亞同文書院卒業後中共入黨、五・三〇事件では上海工商聯合會で活躍、一九二七年第四軍（張發奎）第十二師政治主任。一七二八年渡日、東京である事件に座して就縛、一九三一年七月歸國して中共から脫離し、神州國光社に入つて「文化評論」、後「文化雜誌」を主編した。「社會科學大詞典」の著者。今回の革命には胡秋原とともに大

いに出風頭してゐる。

胡秋原も湖北人で三十餘歳。武昌中華大學、日本早大出身。王禮錫の紹介で陳銘樞の家庭教師となり、神州國光社編輯、社民黨幹部と、型通りやつてゐる。

神州國光社といふ、有力な文化機關を持つてゐるので、寄稿その他の關係で、陶希聖、彭述之、劉仁靜（錢圈）、嚴靈峰、任曙、漆琪生、彭芳草、李季、王亞南、徐翔穆、陸晶清（王禮錫夫人）等が、一種の團結を成してゐる。しかし棉襲衫、胡秋原とともに、福建で實際運動に携はつてゐるのは、今のところ嚴靈峰、徐翔穆、王亞南くらゐのものであるらしい。

## 黄琪翔と第三黨

陳銘樞直系の社民黨と相對して、福建革命の思想的背景を成してゐるものに、第三黨がある。社民黨の連中の學究的なるに反し、この派は、黄琪翔といふ活動家がゐるので、その政治的力量ははるかに社民黨を壓倒してゐる。

黄琪翔は廣東の客家族で、陳銘樞廣東第一旅長時代、第一團長張發奎の下に營長を勤め、ちやうど蔣光鼐に對する蔡廷鍇の役ところであつた。一九二七年には、もう第四軍長となつてゐたといふから、出世は相當早い方である。この時代、國民黨極左派の首領鄧演達と契合し、譚平山、季方等と第三黨を組織した。その後張發奎とともに廣東に驅還し、一時廣東の實權を握つたが、廣東コムミユウン以後軍權を棄て、第三黨の擴大强化に專心した。鄧演達刑死後、彼の領袖の第一人者となり、政客的活動目覺ましいものがあつた。こんどの革命には、最も激烈な即行論者として、陳銘樞の尻をつつき、人民代表大會では、總主席を買つて出た。その他政綱の制定、共産黨の聯絡にも、彼が最も力量を發揮した。彼は獨逸留學生で軍事のみならず政治經濟をも研究し、文學にも理解をもつて居るが、色を好み、傍若無人な男で、評判はもとからよくないさうだ。

季方（江蘇海門人）は黨の組織部長で、一九三三年五月、馮玉祥の旗揚げに參畫したが、失敗後北平に遁れ、黄琪翔の招電に依つて南下しようとしてゐたところを逮捕された。矮小漢で、好人物。故演達無二の親友だ。

章伯鈞字は子建、安徽の富豪の若旦那で、北大を經て獨逸に留學し、そこで鄧演達と知り合つたといふ。後巴里に行き、李立三、黄平等に接近したが相手にされなかつた。歸國後安徽省立師範教務主任をつとめて居たが中共に入黨し、一面鄧演達に取入り、武漢政府時代、總政治部の宣傳科長だつた。國共分離後、譚平山一味として中共から除名され、第三黨に馳せ參じ、同郷の徐謙の後楯で、中央宣傳部長となつたが、鄧演達就縛（一九三一年八月）のとき、黨の公金六千元を握つて北平に遁れたといふので、評判がよくなかつた。そんなことで勢力が弱くなり、今は黄琪翔に使はれてゐる。

徐名鴻は廣東人で北京高師出身、佛教研究及び東方文化發揚の方面で有名な梁漱溟と親交があつたが、後中共に加入し、北伐の際、第四軍の政治主任として、蔡廷鍇と關係を發生した。一九二七年十二月十一日の廣東暴動で捕はれ、投獄されたが、梁漱溟の擔保に依つて放免され、蔡廷鍇の秘書になり、上海事件の際、秘書長に陞任した。十九路軍福建移駐後蔡を助けて共産黨に荒された福建西部地方を整理し、「計口授田辦法」十二條を制定したことがある。まだ黨員にはなつてゐないが、今度は黄の相棒になつて相當活躍した。

彭澤湘は湖南人で北京大學卒業後中共に入り、莫斯科に行つてレニン研究院の學生となり、かつて第三國際候補執委になつたことがある。瑞金政府主席毛澤東と親交がある。馮玉祥、方振武、吉鴻昌の旗揚げには、その黑幕であつた。今度は共産黨との聯絡に努力し、江西の寧都まで行つて來たといふ。

鄧逈生は鄧演達の弟といふだけで、傳ふべき何物もない。

## 國家主義派と生産黨

國家主義派として一般に知られてゐるのは、曾琦、李璜一派の「醒獅派」であるが、今回の革命に參加した國家主義派は、「孤軍派」で、前者の留佛學生に對する、後者の日本系である。首領株は何公敢で、新政府の福建省長である。本名は何鴻鄰、一に何崧齡といふ。福建閩侯人で四十七歳。第一革命時代鹿兒島七高在學中だつたが、歸國して革命に參加し、福建國民黨員を糾合して丙

辰倶樂部を組織し、延平鹽運局長をやつてゐた。後京都大學經濟科選科で色揚げをし、商務印書館の編輯員となり、「孤軍」誌を創刊して、「醒獅」誌と呼應し、國家主義の驍將と稱せられた。次いで湖南人彭耕の紹介で陳銘樞（時に政治部副主任）の幕下に入り、その宣傳處長。一九二七年福建に歸り、省政府秘書長、財政廳長を歴任したが、一九三二年瀆職の嫌疑で引込んでゐた。

何公敢に次いで翁照垣がある。前述した通り十九路軍の要人である。つづいて邱國珍、邱兆琛（十九路軍將校）林植夫、關楚璞等がある彼等はすべて福建を根據にしてゐる。

生産黨といふのは、北方で組織された結社であるらしく、前燕京大學教授張文理といふのが、今福建に入つて活躍してゐる。前記國家主義派とともに新政府の右派を成してゐるらしい。

### 陳友仁と徐謙

陳友仁と徐謙、武漢政府の外交部長と司法部長で、邦人にも耳熟してゐる。

陳友仁は明けて五十七歳。廣東華僑の子で、トリニダッド島に產れた。英國で教育され、代言人の資格を得て一九一二年歸國、北京政府交通部顧問から、一九一四年北京ガゼット編輯員となり、御得意の英文で奇警な評論を物してゐたが、一九一六年日支軍事協定攻擊の論文を書いて逮捕された。一九一七年釋放され、上海ガゼットを主宰一九一八年廣東軍政府代表として渡米、翌年巴里會議には廣東政府代表だつた。一九二〇年歸國後は、廣東政府の外交顧問をやるやら、北京で馮玉祥と結んで「民報」を經營するやらしてゐたが、結局南に歸り、一九二六年廣東國民政府外交部長、それから廣東政府外交部長。革命外交の立役者として世界的に名を知られた。國共分離後、宋慶齡と莫斯科に行き、一九三一年歸國したが、そのときは張靜江の娘で、巴里サロンにも通つたことのある美人と結婚してゐたので、國民黨の大久保彦左たる吳敬恒に「中國第一の美男子」などと冷かされたものだ。彼はそこで孫科と結び、孫が廣東國民政府に參加するや、その外交部長となり、一念發起して、孫文の大亞細亞主義の眞諦に參したと稱し、渡日して幣原外相と會見し、滿洲問題を議したことは今尚世人の記憶に新なるところである。滿洲事變起り、南京廣東兩政府合作するや、孫科とともに南京に返り咲き、外交部長になつたが、一九三二年上海事件勃發前孫に殉じて辭職。幾くもなく孫に見切りをつけ、西南執行部に入り、外交研究會委員長に擬せられてゐたが、又氣が變つて陳銘樞に雇はれ、新政府の外交部長になつた。かつては第三黨のシンパ程度のところだつたこともあるが、政治家といふよりは外交技師といふところだ。

徐謙（季龍）の名は、古いものだ。安徽歙縣の人で六十四歳。クリスチャンで法律家、前清時代の參事、累進して次長になつたとき第一革命に會し、國民黨に投じ、唐紹儀内閣の司法次長。一九一七年廣東政府成立するや孫文の秘書長。それから幾變轉して北京に舞戻り、馮玉祥系となり、馮の失敗後一緒に入露し、歸つて廣東政府司法部長（一九二六年）、次いで廣東政府委員。この點陳友仁とよく似てゐる。國共分離後馮玉祥に投じて志を得ず上海に隱れ、一時第三黨の世話を燒いたが又廣東に還元し馮のために「民權聯治黨」を組織したりしてゐた。今度は余心清、黃少谷（これはまだ香港にゐるが）とともに馮系代表として參加し、第三黨、社民黨國家主義派の間を調和し、ともかく「人民革命大同盟」といふ大同團結をつくることに成功したらしい。

余心清（馮玉祥代表）は安徽合肥人で、四十一歳。苦學生でクリスチャン、馮玉祥が北京南苑にゐたとき、大いに余に傾倒し、軍官子弟學校の校長にした。馮が失敗してロシアに入るや、余は馮の命を承けて米國に遊學二年、歸國後は馮の秘書をやつてゐたといふ。

### その他

以上で大體福建革命をめぐる人々を描き得たと思ふ。が、なほ一二を拾へば、最高顧問になつた蘿鎭冰は、福建海軍の大先輩として、誰知らぬものもない。姚禮昌は方振武（在香港）の代表。香港の豪商陳廉伯も參加してゐるといふ噂がある。人民大會に湖南代表として出席した歐陽予倩は、新劇の名女形で、舊劇の梅蘭芳と併稱される男だがたしか早大出身で、一介の戲子では勿論ない。代表として可笑しくはない。

（追記）　なほ二三人を拾ふと、楊建平は廣東大埔人、日本留學出身、陳銘樞の私人秘書で、湖海關監督、廣州中國銀行長、

厦門交涉員を歷任、陳銘樞交通部長時代の郵政儲匯局長だつた。今回は經濟委員會委員。劉叔模は湖北人、北大卒業後留佛苦學生、現に行政院參事だが、陳銘樞、蔣光鼐との關係深く、裏面で策動してゐると。劉爾米は叔模の親戚、北大出身、武漢政府の高等法院長、もと中共黨員、今文化委員會委員。陳公培は湖南人、佛國留學、黃埔第一期生、中共廣州市委書記で、後十九路軍機要秘書だつた。（『東京』一九三四・一）

# 第三章　五全大會まで

## 第一節　張學良歸る

### 一

（憤然と）「さうですか、しかし、さうなるくらゐなら、むしろ麾下十六軍を率ゐて、前線に出掛ける。斷じて承服出來ません。」

「さう、ハッキリと、いひ切るものぢやないよ。漢卿。この際、書生論は禁物だ。任せろ。さうして、息拔きに外遊し給へ。惡いやうにはせぬ。一時預かつて置くだけのことだらうぢやないか。いづれ又君にかへす時期が來るだらう。」

「でも、それではあんまり……。」

「思ひ切りが惡いね、君は。とにかく、僕の意思は定まつた。敬之（何應欽）と萬事相談し給へ。」（去る。）

「……。」

保定で、かうした會話が取交はされたのが、一九三三年の三月九日だつた。北平への車中で、蔣の言葉を反芻した張學良は、結局、蔣の意に從ふほかないことを悟つた。で、それから二日後には、彼は愛用のフォウド機に身を托し、一門鄭黨、アレヨアレヨと騷いでゐる間に、上海へ飛んだ。それから、豫定通り外遊。「惡いやうにはせぬ。」といふ、蔣の一言に希望を繫ぎ、悠遊ここに八ヶ月。ひたすらに、歸國の機會を追ひ求めた張學良だつた。

彼の下野當時の噂では、否も應もなく、無二無三に追拂はれたのだといふことだつたが、事實は決してさうでない。閻・馮・汪

の反蔣大同盟を叩き破つて、蔣のためには大功のある學良だ。出來るだけ庇つてやらうといふのが、蔣の本音である。「一時、預かつてやる。」は、決して氣休めではなかつたのである。尤も、かういふと、あまりに人情美談めくから、角度を變へて證明すれば、作霖以來二代に亙つて培養して來た東北軍といふ武力を認識し、その統率者としての學良に、利用價値を觀取したのである。事實、依然として十五六萬もあらうといふ東北軍の向背は、北支那の局面を支配するに足るのであるから、その首領たる學良を反政府の側に廻らせることは、何としても愚策だからである。——裏面の、かうした恒僞を辨別し、その上で學良歸國の問題を檢べると、蔣の意圖がハッキリと判る。いふまでもなく、彼は、歸國後の學良を、シッカリと自分の側に引きつけ、積極的にこれを利用するつもりなのだ。かうして學良は、蔣の允許を經て、一九三四年一月八日上海に歸つて來た。途中、香港で胡漢民に面會したが、それは胡漢民が、代表を新嘉坡に出し、彼を迎へて呉れたから、その答禮に立寄つたまでであると、在北平の萬福麟に打電し、蔣に釋明させるといふ、それほど周到な用意を、學良の側でも拂つてゐる。私は今、むしろ蔣張の接近を豫見するのである。

## 二

しかし、學良歸國問題は態樣はなはだ複雜であり、蔣張接近、相互利用といふ、その一筋に見据ゑることは、實はきはめて冒險である。逆に、彼が反蔣の側に廻り、將來蔣に對し、隱然たる一敵國を形成する可能性もないではない。さうした情報もかなりあるにはある。

第一に、宋子文との關係である。一九三三年熱河戰の前に、財政部長だつた宋子文が五十萬の大金を持つて北平に行き、學良と一緒に戰線を視察し、抗日將士を激勵したことは、今なほ我等の記憶に存してゐるが、それ以來、宋張の關係は、かなり密接だと噂せられた。それに加へて、二人は、ほとんど同時期に外遊し（宋は世界經濟會議代表だつた。）、歐羅巴で隔意なき談合を重ねてゐる。恐らく宋は、張のために歸國を斡旋し、その代償として、張の武力に依る後楯を要求し、張の快諾を得てゐるものと推せられる。財宋軍張の結合は、一大政治的勢力たるを失はない。宋はこの希望に有頂天になり、一方聯盟の對支技術援助、アメリカからの棉麥借款を得て、大得意で歸國したのであるが、棉麥借款の措置の不始末、その使途に關して蔣と意見を異にしたこと、それが原因となつて財政部長を棒に振り、雌伏を餘儀なくされてゐるのである。そこへ福建革命が起り、つづいて張の歸國を見るに至つたのであるから、歐羅巴での約束通り、張を無二無三に反蔣側に引張り込まうとするであらう。行掛り上、張もこの運動に引きずり込まれるのではあるまいか？

第二に、調停派に合流しはせぬかといふ問題である。調停派といふのは、孫科、張靜江、李石曾、李烈鈞、張繼、居正等の一派であり、胡漢民の十二月十七日附通電に含まれた八項の要求（註）を基礎として、蔣の政治關與を禁じ、汪兆銘を下野させ、胡漢民を國民政府主席に、孫科を行政院長にしようと策動しつつあるのであるが、彼等の計畫では、學良にも一役アテがつてあるらしい。學良もこの好餌に、パクリと一口、喰ひつきはすまいかといふ疑ひがある。

（註）福建革命の展開過程に際し、その態度を最注目されてゐた胡漢民は、中央からの特使張繼等南下の機會に於いて、十二月十七日通電を發し、南京、福州兩政府を排擊した後、目前の方途として、次ぎの八項を掲記した。廣東派もこれに同意である旨、その後發表された。（一）總理の遺敎に遵ひ、三民主義政治を力行し、民族の獨立、民權の普遍、民生の發展を期する。（二）上記目的達成のため、南京軍閥政府、叛黨聯共の福建政府を打倒し、眞に人民國家の利益を代表する新政府を樹立する。（三）新政府は國權擁護、民權解放の見地より、外帝國主義に抵抗し、內人民の言論出版集會結社等一切の自由を確認し、「建國大綱」に基き地方自治を實行する。（四）軍閥の政治參與を禁じ、軍統帥權を政府に歸する。（五）全國軍隊を統一的に編制し、軍政部をして指揮監督せしめ、區域を定めて抗日剿共の責任を分擔せしむ。軍需事務は財政部所管とす。（六）中央地方均權制度を實施する。（七）民生の發展を求むるため農村振興、交通開發、商工業助長、關稅自主の實現、財政公開、苛稅撤廢、公債政策の是正を期する。南京政府の公債政策は、國家國民を危害するが故に、徹底的にこれを糺彈する。（八）新政府の組織は總理の遺敎に遵ひ、本黨（中國國民黨）の主義を信奉する人材登用を原則とする。

## 三

右に擧げた兩說は、我等に對して、ともに一應の肯首を要索する。しかし、この兩說の背景が、那邊に在るかを檢討するとき我等は考慮し直さなければならぬ。背景とは？　いふまでもなく福建革命である。福建に革命が起り、それが燃えさかつてゐたからこそ色んな筋書きも書かれたのであり、それが實現の可能性が、あるやうにも思はせるのであるが、それでは福建に於いて、いはゆる人民革命は、果していかに展開したか？

人民代表大會、人民革命政府といひ、人民權利宣言、人民革命大同盟、人民革命軍といひ、「人民」の鈴なりで發したときは、相當景氣のよかつた福建革命ではあつたが、一月經つうちに、そろそろはくが剝げかかつた來た。對外工作は絕無、むしろ英米の反感を招いたやうに見えるし、江西共產軍との提携、第三黨や社民黨の淡紅的政綱が禍ひして、胡漢民派、廣東派、はなはだしきは、相當默契のあつたと推せられる廣西派まで、どうしても一緒になれぬ仕儀。所詮は、さしも、精銳を誇つた十九路軍も、政權を握つてから急速度に腐敗し、福建人の恨みを買ひ、福建土着軍に壓迫され、各方面から鼎の輕重を問はれ、このままで推移すれば、共產軍にやられるか、「福建人の福建」運動につまづくか、二つに一つの破目に陷つたところへ、李濟深、陳銘樞、黃琪翔等の誘惑が來て、ままよ、自滅するよりはと、自衞的の獨立を宣したものと、相場は定まつた。對外工作も、對內工作も、はた又財政も、何もかも、無準備だつたのだ。

これに引替へ、尻上りに底力を發揮して行つたのは、蔣介石及び南京政府だつた。江西の共產軍討伐に力を殺がれ、到底武力討伐の餘裕はあるまいと、はじめにはいはれた。そこで西南を目ざして、胡漢民及び廣東、廣西三派の口說き落しのために、張繼等の四銃士が派遣される。この一行はドン・キホオテ視され、調停工作到底不可能といはれたものだ。ところがどうだ！　蔣介石の遣繰算段、見事成功して、いつの間にやら、十師二十萬の兵力が、蔣鼎文總指揮の下に、浙江に集中されてゐたではないか、これに對する十九路軍は、基本部隊二萬五千、アトは、新募兵で、總計六七萬にもならうか？　これでは先づ相撲になるまい。そこでもうそろそろよからうと、出した切り札が、彰州、福州の空爆だ。命中率の相當なのにも吃驚したが不可能といはれてゐた江西撫州（蔣の剿匪大本營）からの航續に成功してゐたのには、空いた口が塞がらなかつた。これに對する福建の空軍は、二十臺くらゐあるさうだが、性能も駄目、爆彈も不足、たうとう見送りに了つたのである。空爆に全功を收めて、いよいよ陸上の接觸、これ亦アッ氣なく延平、古田、水口をつづけさまに奪はれた眼前の體態、福建政府にも、多少のひゐきもあつたらうが、こんなザマでは義理にも拍手は出來ない。漳州を根據にして、再擧を謀らうといつたところで、讃嚴にかけ、この邊一帶は、共產軍との約束に依つて事實上ソヴエート區になつてゐる。結局李濟深、陳銘樞、蔣光鼐等が香港に移り、蔡廷鍇が十九路軍の殘軍を率ゐて、泉州地方を死守する外あるまい。

武力工作はかやうに成功したが、ドン・キホオテ視された張繼等の調停工作も、私は案外成功してゐるものと見る、廣東派からは、四中全會（一月二十日開會の豫定、これあるがために、蔣は福建の武力討伐を急いだのだ。『四中全會前に、出來るだけ有利な形勢を』これが蔣の目算だつたのだ）出席の言質を得たのだらうし、廣西派からは『當分動かぬ。』といふ約束を取つただらうし、ただ胡漢民が、顏面神經をヒクヒクさせながら、前記十二月十七日附通電を發したことは、四銃士の面目丸つぶれだが、これとて考へやうに依つては、消極的の成功だ、といふのはありやうは、胡漢民の現在の地位たるや、豫ねては各方面から對手にされなかつたのが、福建革命の勃發に依つて、身價が少しく昂つて來てゐるのであり、この際身賣りするつもりで、引札がはりにアノのやうな聲明を發したのに過ぎないのだ。これで國民政府主席に買つて呉れといふ、依賴狀なのだ。かうした依賴狀を發表させることに成功した點に於いて、張等は威張つてもいいくらゐなのだ。

――長長と、福建革命失敗史を述べたが、それは、張の歸國を中心として、種種の策動が試みられたが、そのいづれもが、福建革命を背景として居り、今やその背景がメチヤメチヤになつたことに依つて、學良が反蔣側に廻る可能性が、メッキリ少くなつたことを、立證するためであつた。それでは、學良は結局どうなるか？

四

學良がどうなるか？　といふことは、ツマリ、蔣が彼をいかに處置するかといふことに歸する。

北支那にかへして、舊東北系軍隊全部を率ゐさせるといふことは、今のところちよつと考へられない。學良自身も歸國後舊部下に與へた電報に於いて、ハッキリその旨を述べてゐる。彼を北支那に置くことは、對日關係上きはめて面白くない。これは蔣介石の最よく知つてゐるところである。

古くは、新疆に送るといふ案があつた。理想としては最善の案だが、實行性が疑はれる。最近ではもうこの說は聞かれない。

航空部長兼京滬衞戍總司令說。何年か前、陳銘樞が交通部長兼京滬衞戍總司令として、舊部下の十九路軍を南京、上海一帶に駐屯させたことがある。その故智に倣ふものであるが、上海事件の例もあり、好ましくないといふことになるかも知れない。しかし今は上海停戰協定といふものもあり、心配するほどのことはあるまい。

航空部長兼鄂豫皖剿匪總司令說。鄂豫皖ソヴエート區といふのは、往年鄂豫勦、徐向前の據つてゐた大赤區で、一九三二年の第四次圍剿で全滅し（徐向前四川に逃れ、川陝ソヴエート區を樹立した。）その後吳煥先に依つて、小規模に再建されたものである。で、舊東北軍を割裂し、中央によき于學忠を河北に殘し、その他を安徽地方に移し、剿匪に當らせ、學良は南京にゐて、これを遙領するといふことにすれば、各方面に差し障りなく、名案たるを失はない。（『中央公論』一九三四・二）

## 第二節　一九三四年政治・外交の鳥瞰

### 一　國民革命の歷史

それがいかなる傾向であるにもせよ、まだ萌芽、胚胎のうちに在るものに對しては、我等の認識が、くもり勝ちであることを否めない。一九二一年頃、老支那通楠璞氏は、北京で、いつもかういつたものだ。「どうも、孫文だナ。彼が支那を統一するよ。孫文

砲などとケナさずに、再認識する必要があるネ。」と。かう訓へられながらも、私の眼は、やはり北支那の政局に惹きつけられてゐた。その頃出版した拙著「現代支那」には、「改造の基調としての文化運動」といふ一章があり、その中で、孫文學說の簡單な紹介などをやつてはゐるが、それはただちよつと觸れて見たに過ぎなかつた。それから何年後かには、孫文主義が一世を風靡するやうになるだらうとは、夢想だにもしなかつたのである。――隨つて、「國民革命」といふやうな文字も、一九二五年の三月までは、眼に觸れたことはあるに相違ないが、ハッキリ頭の中に入つて來なかつたのだ。何故一九二五年の三月かといふと、その十二日に孫文が北京に客死し、「余、力を國民革命に致すこと、およそ四十年。その目的は、中國の自由平等を求むるに在り。四十年の經驗を積みて、深く知る。この目的を達到せんと欲すれば、必ず須からく民衆を喚起し、世界上、平等を以て我を待つ民族と聯合し、共同奮鬪すべきことを。現在、革命尙未だ成功せず。およそわが同志は、務めて須からく余が著はすところの「建國方略」、「建國大綱」、「三民主義」及び「第一次全國代表大會宣言」に依照し、繼續努力、以て貫徹を求むべく、最近の主張たる國民會議開會、及び不平等條約の廢除は、最短期間內に於いて、その實現を促すべし。これ至囑するところなり。」といふ遺囑（汪兆銘代撰）を殘したことに、異常な感激を覺えたからである。恥かしい話であるが、私は、このときはじめて「國民革命」といふ文字を知つたのである。さうしてそれから後、少しづつこの方面の研究を開始したのであつた。その結果知り得たことは、國民革命は、孫文終世の目的であり、その出發點は、一九一三年の討袁革命失敗後、日本に於いて組織した「中華革命黨」（一九一四――一七）に在るといふことであつた。

「宋教仁輩は、革命軍を改良派にしてしまつた、我我はこのとき、主義上の亡黨に會してゐたのだ。總理は、宋主動の國民黨には、きはめて冷淡だつた。」

「黨史」の中で、甘乃光はかう斷じてゐる。それはきはめて正しい。孫文は辛亥革命の失敗に因り、新機構を整備して、眞の革命すなはち國民革命に進む決心を固めたのであり、調整された新機構こそ、中華革命黨であつたのだ。黨は一九一七年まで存續、同

年「中國國民黨」と改稱した。これが今日、一黨を以て支那を專制する政黨の發祥である。孫文はこれを基礎とし、國民革命の遂行を志したのであるが、黨勢尙すこぶる微弱、孫の世を卒るまで、革命は終に成功しなかつた。しかし、國民革命に對する孫の周到な準備は(一)一九一八年十二月の「孫文學說」をはじめ、「建國方略」、「建國大綱」、「三民主義」等の、一聯の指導原理の完成、(二)北伐の嘗試、(三)國民革命軍新造の計畫（蔣介石のロシア派遣、黃埔軍官學校の設立）、(四)聯俄容共政策の採用（民族革命聯合戰線の完成、黨組織改善、新政綱の制定、ロシアからの援助等）となつて現はれ、後至者のために、こよなき遺產を贈つたのである。

この遺產を承け繼ぎ、孫文在世當時、二度企てて二度とも失敗した北伐を完成したのが、蔣介石である。黨に在つては比較的後進に屬するが、孫晩年の信任程度からいへば、廖仲愷と伯仲するくらゐであつた。それ故に、廖は聯俄容共政策の實行を受け持たされ、蔣は國民革命軍新造の重任を負はされたのであるが、二人ともそれに成功した。不運な廖は、孫文死後間もなく暗殺されたが、蔣はますます勢ひを增し、一九二六年一月の黨第二回大會では、汪兆銘に次ぐ得票で中央執行委員に當選し、爾後着着國民革命軍の組織に當り、一九二六年七月九日國民革命軍總司令に就任、同二十六日出師、九ヶ月ならずして長江一帶の線を確保し、一九二八年六月、最後の封建軍閥たる張作霖を北京から驅逐して北伐を完成した。同年十二月には、作霖の長子學良に依つて、東四省にも靑天白日旗が揭揚され、全國一先づ統一された。

かう書いて來ると、いかにもスラスラと行つたやうであるが、實はさうでない。黨內には絕えず、動搖があり（反共產を標榜する右派の分離）、國際的にも事件を釀し（南京事件濟南事件等）、革命の進行を少なからず遲らせた。就中、爾後の形勢に甚大な影響を與へたものは、中國共產黨との分離、すなはち民族革命聯合戰線の決壞であつた。

この兩黨は、元來相互利用の立場に在つたもので、利用價値がなくなれば、ただちに對手を突つ放すつもりだつたのである。國民黨幹部は、共產派容納を批難されると、「一時的のことさ。今に見てゐたまへ。」と、いひいひしたものだ。それは嘘ではなかつた。彼等は絕えず共產派の跋扈を抑止することに努めて來た。これに對し、共產派の方でも、何とかして國民革命の領導權を獲得しようとした。かうした相剋は、北伐發途以前から、北伐の全過程を通じて行はれた。その最後の段階は、共產派及び國民黨極左派、同左派のブロックである武漢政府が、蔣介石を總司令から引きずり卸したことに依つて開始された。蔣は終に最後の決心を堅め、上海占領とともに、共產派を上海から驅逐し（四・一二反動）、南京政府を樹立して、「淸黨」を表明した。それが武漢に影響し、三ヶ月後には、汪兆銘等の國民黨左派の白化となり、共產派及び國民黨極左派は、武漢政府から退出し、國共は終に「分家」したのである。これがために北伐は一時停頓し、蔣介石も一時的に下野したが、半歲ならずして復職し、一九二八年二月、開封で蔣、馮玉祥、閻錫山三巨頭會見、國民革命軍の新部署成り、爾後各路の軍事着着進捗し、四ヶ月足らずで北支を平定した。一方武漢を逐はれた共產派は、全國的暴動政策を採つたが失敗し、十二月十一日の廣東コムミユウンを最後の一閃光として、地底運動に移つたが、一九三〇年には、ムツクリと頭を擡げて長沙を占領し、世界を驚倒させた。長沙ソヴエートは、僅か十日で潰滅したが、その後共產軍は擴大する一方で、今日では、別項「中國共產黨・共產軍・ソヴエート」で說くやうに、數十萬の共產軍と、廣大なソヴエート區を擁して、蔣介石を手古摺らせてゐるのである。

さて、北伐成功し、全支那は表面國民黨一黨專制下に統一されたかに見えたが、しかしそれは、ホンの形だけのことで、一皮めくれば、依然たる軍閥のバランス・オヴ・パワアで、一時的平和が保たれたに過ぎなかつた。北伐に功勞ある蔣介石、馮玉祥、閻錫山、廣西派、並びに張作霖の舊勢力を繼承した學良の東四省、これらの諸政治的勢力の均衡の變動を生じたとき、統一は又もや失はれるのではあるまいかと憂慮されたが、果然一九二九年一月の編遣會議（軍隊整理協議會）を契機とし、各政治的勢力間に動搖を生じ、先づ廣西派が蔣介石に對して火蓋を切り、次いで馮玉祥對蔣派の對立と變化し、最後に閻錫山が捲き込まれ、紛紛擾擾のうちに一九二九年を送つた。

一九三〇年に入ると、この傾向はいよいよ顯著となり、閻馮の反蔣聯盟に、汪兆銘一派までが加はり、北平に國民黨擴大會議が開かれ、我こそ正統の國民政府なれと名乘つたが、キヤスチング・ヴオートを握る張學良が、終に蔣介石に口說き落され、武裝調

停の巨彈を放つに及んで、擴大會議は一日にして吹つ飛んだ。

ところが、この反蔣戰の後始末期間に於いて、南京政府部内に於ける蔣介石と胡漢民の内訌が起り、一九三一年三月、胡漢民が蔣に監禁されると、その同志の古應芬が南下して、廣東の陳濟棠を抱き込み、孫科、汪兆銘等が馳せ加はつて、五月、廣東國民政府の樹立を見、對峙半歳、九・一八事件の勃發に口實を見出し、南京廣東兩政府の統一となつた。現在の南京政府は、すなはちその統一政府であるが、その後も内紛は熄まず、一九三三年五月の北支停戰協定に依つて、北支那が一應安定するかと見ると、馮玉祥が察哈爾に反蔣の旗を擧げ、それが失敗し、馮の殘黨方振武、吉鴻昌の亂が平ぐと、こんどは福建に人民政府が出來る。不死身の蔣介石が、これを一つ一つ撃破して行つたのは流石だが、邊疆までは手が延びず、内蒙、新疆、西康、雲南、いづれも一齊に動搖し（邊疆問題は、別項に於いて論ぐであらう。）、四川の軍閥は半永久的に訌爭し、孫殿英軍は寧夏で暴れ、共産軍の討伐は容易でなく、農村荒廢の度はますます加はり、國民經濟は崩壞に瀕してゐる。――これが支那の現狀であり、國民革命の悲しむべき現段階であるのだ。

## 二　政治機構

現在の支那は黨治國である。中國國民黨といふ、國民革命を最終の目的とする結社が、黨の獨裁を以て、國務と黨務とを、合理的に統制して行かうといふのである。尤もこの一黨專制も、或時期までのことで、最後には憲法を公布して、政權を全國民にかへすが、國民革命進行中は、一切黨の獨裁で行くといふ建前である。

中國國民黨は、何に據つてかうした主張をするのであるか？　孫文の三民主義及び建國大綱に據るのである。三民主義とは、民族、民權、民生の三主義を總稱し、民族主義とは對内的には國内各民族の平等結合であり、對外的には、列國の帝國主義的侵略に對抗し、不對等條約を廢除することである。民權主義とは、民主主義的政治革命の原則で、人民の政治的平等を基とする「人民の直接政治管理」の方法を指示したものである。政治の大權を二分し、そのうちの「政權」を人民の手に收め、人民はこの政權を運用して直接國事を管理する。この政權を民權といひ、（一）選擧權、（二）罷官權（官吏を罷免する權）、（三）創制權（法律を制定し政府をして執行せしむる權）、（四）複決權（法律を改正又は廢止する權）の四つに分つ。人民にはこの四つの民權があるのだ。政治の大權の二を「治權」といひ、政府をしてこれを行使せしめる。行政、立法、司法、考試、監察（官吏彈劾權）の五權が治權である。政府はこの五個の治權を行使し、人民は四個の民權を以て政府を節制し、兩兩相俟つて完全な民主政治を施行するのだ。民主主義は、社會革命の指導原理だが、まだその理論が完成されない前に孫文が死んだので、正體を掴みにくい。ただその實行手段として擧げられた「地權の平均」は、國家が土地法、土地收用法、地價稅法を規定して、地權の平均を謀るといふ趣旨であり、「資本の節制」は、獨占的企業大規模企業の國營等、國家社會主義の主張である。

三民主義の實行方法を規定したものが、建國大綱（一九二四年四月發表）である。この中に國家建設の順序が定められてあるが、それに據ると、一は軍政時期、二は訓政時期、三は憲政時期である。軍政時期では軍を以て國を治め、政府は兵力を以て國内の障害を除去する。訓政時期は一つの省が安定した日にはじまり、政府は訓練を受け試驗に及第した人物を各縣に派し、人民と協力して自治の準備に當らせ、諸般の建設事業を行はしめ、完全な自治縣を形成せしめる。この工作が終れば憲政時期になり、國民代表會は省長を選擧し、中央では五權憲法に據る國權行使の機關である立法、司法、行政、監察、考試の五院を設立する。全國過半數の省が憲政期に入れば、國民大會を開いて憲法を制定し、憲法發布後は、統治權は國民大會に歸屬する。次いで總選擧を施行し、國民政府に政權を引繼ぎ、これに依つて建國の事業が完成される。

現在の支那は、この訓政時期に在るのだといふ（一九二八年十月三日訓政綱領及び國民政府組織法公布）。さうして五院が設立されたが、これは憲政時期に設立される筈のものを、繰上げたのである。すなはち或段階を省略したのである。この外、今國民政府のやつてゐるところは、必ずしも建國大綱に嚴密に依據せず、全然その中に見當らない「訓政時期約法」（一九三一・六・一公布）などいふものを發布したりしてゐる。さうしてすでに立法院をして、憲法制定に從事させ（一九三四・三・一草案初稿發表）一九三五年四月を以て、それを公

布させようとしてゐる。訓政時期でやるべきことがまだ完成されてゐないのに、ドシドシ憲政時期の工作をやつてゐる。

國民黨の最高機關は全國代表大會で、一九二四年一月以來、今日まで四回開かれた。新聞で「三全大會」など略稱されるのはそれである。その閉會中は、中央執行委員會が最高機關、その全體會議が半年に一回くらゐ開かれる。ついこの間開かれた「四中全會」は、「第四期中央執行委員第四次全體會議」といふことである。全會閉會中は中央執行委員互選の常務委員會が、中執委の職權を執行する。だから結局中常委が最高機關といふわけだ。黨と國民政府との關係はどうなるか？　中央執行委員會の下に、中央執行委員會政治會議（中央政治會議又は中政會議と略稱する）なるものがあり、それが全國の訓政を實行する最高指導機關となり、その下に國民政府があるといふ仕組である。

現行國民政府組織法は、一九三一年六月十五日修正公布されたもので、それに據ると、國民政府は中華民國の治權を總攬し、陸海空軍を統率し、…等等の權があり、政府主席、五院院長、同副院長の外委員十六人乃至三十六人がある（詳細は及川恒忠氏『支那政治組織の研究』參照）。主席が大總統に當り、行政院長が首相格である。

地方政府の組織は、省に省政府委員があり、省政府主席一人を互選する。その下に民政、財政、教育、建設、農鑛、工商各廳長（省政府委員の兼任）及び祕書長がある。

## 三　政治的勢力

### 中央派

「支那は組織ある國家に非ず。」と內心では思つてゐても、擬制としての國家、中華民國を認めないわけには行かない。で、列國では、南京政府を承認してゐる。この認められてゐるといふことが、どれだけ、この政府に據る政治的勢力を優勢ならしめてゐることか。それは我等の想像以上である。

現在この政府に據つてゐる政治的勢力を、私は假りに中央派といふが、それは蔣介石派を主體とし、元老派がその支柱となり、更に汪兆銘、孫科兩派が連結され、會計方として浙江財閥が控へ、爪牙として藍衣社がある。最近歸國した張學良も、豫鄂皖（河南湖北、安徽）剿匪副司令として、武漢に居据るやうになつたから、これも中央派の一分子として算へることが出來よう。李濟深、陳銘樞の腰くだけに依つて、福建も中央派の勢圏に入つた。かくてその威信の行はれる範圍は、江蘇、浙江、安徽、福建、湖北、河南、河北、陝西、甘肅、寧夏、察哈爾の十二省に及び、その各省に、直系又は傍系の軍隊を配し、蔣石にピカ一の存在を示してゐるのである。

別項「國民革命の歷史」で說明した通り、蔣介石は、共產派と國民黨極左派及び左派のブロックである武漢政府に對抗して、一九二七年四月、敢然南京政府を樹立してその中心となつたが、それ以來、七年の間、依然として中樞を去らない。反蔣を叫んで、廣西派や、閻錫山や、馮玉祥・汪兆銘や、その他小軍閥やが、次ぎ次ぎに矢面てに現はれたが、いづれも擊破された。最近にも李濟深、陳銘樞等の福建革命があつたが、鮮やかに叩き伏せられた。政府部內に於ける彼の相棒にしても、或は胡漢民、或は孫科、馮玉祥、汪兆銘と、出たり入つたりしたが、彼だけは動かない。彼が國民政府主席だつた時代には、名實備はつた主席だつたし、それを退いて軍事委員會委員長となり、共產軍討伐のため南昌に行くと、そこが事實上の政府になる。黨、國の大事、一々南昌行營に決せられる。行政院長汪兆銘だけでは、何も決定出來ず、況んやロボット主席林森では、どうにもならない。實に、肩書きは何等問題にならない。蔣すなはち政府である。

かうした彼の强味はどこに在るか？　(一)黨中央に於いて、六十餘名の委員を擁してゐることである。これに、彼を支援する元老派を加算して約八十名。もしそれ汪兆銘派の二十餘名、孫科派の約十名を考慮に入れると、中央派は約百二十名。反蔣派は、根こそぎさらへても七十名を出でない。每次の中央執行委員會全體會議で、蔣の意圖が、常に勝を制する所以である。(二)國民政府部內に於いても、蔣派が絕對に優勢である。(三)軍事委員會は、蔣の牙城である。(四)國民政府主席林森をはじめ、于右任、吳敬恒、蔡元培、戴天仇、張繼、張靜江等の元老派が蔣を支援してゐる。彼等は辛亥革命以來、大分苦勞してゐる。さうして今では蔣

のコオスが最善と認めないまでも、次善と認め、彼にやらせて見たいといふ心境に一致してゐるのだ。(五)直系將領及び軍隊の力これは說明までもあるまい。少く見積つても六十萬の兵力があり、共產軍討伐のために、二三十萬は固着させて置きながら、例へば福建に事變が起ると、ただちに十萬やそこいらの軍隊を集中し得るのだ。流石に支那第一の大軍閥だ。(六)軍資金を引受けるものに、有名な浙江財閥がある。上海は支那經濟の中心地であり、そこに資產階級が發生し、やがて新興資本閥を形成し、さうして地理的關係から、江蘇・浙江のブルヂョアジイが、その資本閥を壟斷するに至るべきは、けだし當然である。この金融ブルヂョアジイが浙江財閥といひ、國民黨元老派の張靜江を大御所とし、虞洽卿、張公權、錢永銘、李銘等が領袖となつてゐる。支那の國勢に處して、彼等の往くべき途は、「ブルヂョア民主主義革命の完成へ！」と叫ぶ蔣介石一派を援けることでなければならぬ。ことに一九二七年、彼等の牙城たる上海が、一たび共產派の手に落ちたとき、彼等は「清黨」を標榜する蔣介石を、絕對に支持しなければならなかつた。かくてこの財閥と南京政府との腐れ縁は、上海陷落後一ヶ月の第一次國庫債券引受けにはじまり（當時浙江財閥の領袖錢永銘起用されて財政次長たり、部長孫科――後、宋子文――を控け、張公權、李銘等と結んで、公債消化に努力した）、爾來今日まで、六億五千萬元以上の國庫券を引受けてゐる。勿論この財閥は、三井とか、三菱とかいふ財閥のごとく、確然たる規約と堅固な組織を有し、一絲紊れざる統制を誇るものではないが、蔣介石及び南京政府との緣故を生じて七年、巨額の公債保全の必要上、どうしても蔣介石援助をやめるわけに行かない。かうした後楯を持つてゐることは、蔣の最大の强味でなければならない。

(七)藍衣社。支那ファッシステイ樹立を目指す祕密結社として、一九三二年來頓みに有名となつた藍衣社は、一九三一年秋、祕密裡に組織されたものである。蔣介石を社長に戴き、社員はこれに絕對服從し、テロリズムを以て反對派を除去せんとする組織である。南京に本部を置き、各地に支部を設け（表現團體名は復興社、救亡社等色色ある。）、寄帮とも聯絡があり、暗中の活躍は、近來ますます增大してゐる。一九三三年春、北支那の政局で活躍の準備中であつた張敬堯の暗殺は、この社の暗殺隊にやられたものだといふことになつてゐる。支部中最活躍してゐるのは、蔣伯誠・楊杰等の組織した平津支部、新たに副社長張學良を迎へた武漢支部、その他靑島支部等である。

(八)張學良が改めて蔣の傘下に入つたこと。北支那で失敗して下野外遊した張學良に對しては、蔣は常にその利用價値を認めてゐた。それもその筈である。北支那には、まだその系統の東北軍が、十何萬か殘つてゐるからである。北支那の狀態が、何となく安定を缺くやうに想はれるのは、主として東北軍の殘存に因るのであるが、學良を剿匪副司令に位置し、武漢に据へることに依つて、一種の安心に似たものが、東北軍の間に行き亙つた感じがする。將來東北軍は、徐徐に北支那の線から、中部支那及び西北支那に移動させられるであらう。

(九)福建が平定されたこと。海陸空三方面の攻擊に、福建人民政府は、一たまりもなく潰滅し、陳儀が省政府主席に、蔣鼎文が剿匪司令に任命され、善後策に腐心してゐる。衞立煌などいふ剿匪に經驗ある勇將も出掛けてゐるから、江西の共產軍討伐に、一段と足場がよくなつたことは疑ひない。

――叙上の强味があり、蔣介石コオスの前途は、大分有望になつて來た。いひ落したが、福建革命平定後、廣東の陳濟棠との關係が、最近大分改善されて來た。誘ふに利を以てしたらしく、陳は胡漢民に對する態度を改め、從來とても敬遠的ではあつたが、今後はいよいよ冷淡にやるつもりらしく、糧道をも絕つだらうし、場合に依つては、西南執行部といふ、半獨立的機關を取消すだらうといはれてゐる。しかし、依然たる障碍は、共產軍の跋扈と財政難である。その方面の專門家の觀測に據ると目下蔣がやつてゐる第五次討伐が失敗すれば、第六次討伐は、到底組織出來ないだらうといふ。財政がそれに堪へるか？　蔣の運命は、ここに決せられるであらう。

中央派の組成分子として、蔣派の外、汪兆銘、孫科の兩派が擧げられる。汪派は行政院に、孫派は立法院に據つてゐるが、蔣派に比すれば、太陽と螢火である。

かつては蔣の先輩であり、武漢政府・北平擴大政府・廣東國民政府と、常に蔣の敵役に廻つてゐた汪兆銘も、南京、廣東兩政府

統一とともに、一九三二年南京に入つて行政院長となつた。それから半歳間は、彼も相當足掻き、黨内に於ける左翼小組織「中國國民黨改組同志會」を根據として、黨部への侵融を心掛け、一面左翼文藝陣を獲得し、勢力扶植を企圖したものだが、その結果蔣派との爭ひとなり、藍衣社の魔手が動きさうになつたので、一時下野外遊、一九三三年三月歸國復職後はスツカリ觀念し、一切蔣と協調してやつてゐる。于右任等の元老派と、ほぼ同じ心境に落附いたものと見える。

現在汪派に屬する重な政客は、顧孟餘、陳公博、曾仲鳴、唐有壬、褚民誼、谷正鋼等である。

孫科は、かつて色色と政治的活動を試みたが、常に失敗に終り、政界を遊離してゐたのを、伍朝樞の入れ知慧で、一九三二年末の三中全會に、露支復交の題目を提げて入り込み、立法院長に返り咲いた。その地位は全然伴食で、事事しく論ずるに足りない。

### 西南派

從來は西南派といふと、廣東、廣西、福建、雲南、貴州の五省を根據とする政治的各派を指してゐた。しかし最近の觀察方法からすると、雲南にはフランスの勢力が、いよいよ浸潤して來て居り、これは邊疆問題の方で研究した方がよささうだ。それから福建である。ここには一九三二年來十九路軍がゐて、セッセと地盤を開拓中であつたが、一九三三年十一月の福建革命の挫折に因つて、その努力は水泡に歸し、蔣光鼐、蔡廷鍇、戴戟等の首腦去り、軍は改編され、「十九路軍」の名は歴史上の名詞と化し、福建は中央の勢圏に取入れられてしまつた。故に、福建、雲南二省は、この項からは除外しなければならず、殘るは廣東、廣西、貴州の三省に、英領香港を加へた地域である。ここに巣喰ふ政治的勢力としては香港に胡漢民派、廣東に陳濟棠一派の廣東實力派、鄒魯等の廣東文治派、廣西に李宗仁白崇禧等の廣西派、貴州に陳濟棠をバックとする王家烈がゐる。

胡漢民の國民黨内に於ける地位は、非常に高い。孫文直系では、ほとんど第一人であり、孫が最後に廣東から北上したときには彼が大元帥を代理した。ズット前に遡れば、辛亥革命後、李烈鈞、柏文蔚、譚延闓と相竝んで、國民黨系の四都督の一人として、最重要な廣東の都督であつた。しかし孫文の聯俄容共政策には、内心すこぶる不服であり、孫もそれを知つてゐたか、胡に對する信任は、大分うすらいでゐたやうだ。聯俄容共は當時の黨の主流であり、それに反對た胡が、敬遠された形になつたのは、當然の成行きであつた　故に國民黨の容共時代に於いては、彼は遂に志を得ず、中樞から離れてゐたのであるが、共産派が驅逐された後南京に歸つて立法院長になつた。在職四年、黨元老の資格を以て、兼ねて政府部内に於ける廣東派の首領とし、黨右派の理論を展開してその指導者と仰がれ、牢固たる勢力を築いた。このときが彼の全盛時代であつた。終に蔣介石と兩雄竝び立たず、胡は蔣が訓政時期約法制定に反對したといふ點に口實を見出し、一九三一年三月矢庭に彼を監禁してしまつた。

これが楔機となつての廣東國民政府の樹立　滿洲事變勃發に依る南京、廣東の合體、つづいて胡は釋放されて香港に隱れたが、目標は廣東の實力者陳濟棠であつた。廣西派と胡とは、歴史的に因緣があるから、陳濟棠さへ口說き落せれば、兩廣の武力を背景にして、反蔣の目的を達し得るだらう。少くとも廣東國民政府の再建は出來るだらうと、新國民黨運動（正統國民黨樹立運動）を標榜して、香港に頑張りつづけた。

ところがその陳濟棠である。彼は廣東の軍界では、陳銘樞よりも後輩であるが、底力は滅法強く、一九三一年に陳銘樞を逐ひ出してから、一二年の間に概算二十萬の軍隊と、八千萬の財をつくつた。世に顯はるることの遲かつただけ、實力の涵養が充分だつたのである。しかし志は大でなく、精精兩廣の地盤を獲れば足りとし、純然たる部落思想、割據主義の男とて、胡漢民の唱へる理論などは判らない。ただ何分にも黨の元老だし、これを表看板にして置けば、蔣介石に對しても、その他萬事好都合であるので毎月二萬元くらゐの小遣錢を胡に獻納してゐる。

だが、胡が少しでも彼に對して不利な行動を起したときには、彼は少しも容赦しない。すぐに麾下の實力にモノをいはせる。一九三三年の春、胡漢民と李宗仁、それに陳の膝許の廣東文治派鄒魯などが一緒になつて、廣東國民政府の再建を企てたことがあつた。彼は微苦笑しつつ、それを眺めてゐたが、いよいよその運動が進んで來ると、彼は表面には出ないで、麾下の勇將余漢謀以下、廣東軍將領の聯名で、政府再建反對の通電を發出させ、一方疾風迅雷的に胡漢民系の通信社、新聞社を封鎖させ、どんなもんだと

嘯いたといふ。政府再建運動が、それでペシヤンコになつたことは、いふまでもない。

陳濟棠の部下には、もとの李濟深系、陳銘樞系の連中が大分ある。この連中に對して、李、陳二人の手が動いてゐたことは、想像に難くないが、用意周到な濟棠は、絶えずそれに對して氣を配り、麾下諸將の實力を平均させ、自からも常に直轄武力を離さず、流石の李陳をして、手も足も出でざらしめた。福建革命の際なども、濟棠部下動搖の情報は度度あつたが、終に實現を見なかつた。

さて、舞臺は廻つて福建革命となる。これは當時秘密にせられたままで、終に世に傳はらなかつた話であるが、陳は逸早く蔣介石と、某所で會見してゐるのである。その談合の內容は知るに由ないが、事變が片附くと、陳は南京から數千萬元のモノを貰つてゐる。必ずしも現金ではないが、それに相當する實益を貰つてゐるといふ。さう思つて見ると、近頃陳がやや露骨に南京に接近し、胡漢民に對する送金を四分の一に減らしたり、西南執行部を取消してもいいやうなことをいつてゐることが、成程と納得されるのである。

大體こんな調子の陳濟棠であるから、胡漢民も骨が折れる。口說落しの目的は、まづ達せられさうにもない。當分雌伏の外はなからう。一方陳濟棠は、蔣介石と結んで、ますます地盤の强化に努めるであらう。

西南派の一派たる廣西派は、李濟深、李宗仁、白崇禧を三尊と稱し、古い歷史を持つ軍閥である。蔣介石が國民革命軍を率ゐて北上するや、李濟深は廣東の留守居役だつたし、李宗仁は軍長として出征し、白崇禧は蔣の參謀長代理（本任李濟深）だつた。北伐の成功とともに、同派の地盤は、兩廣から武漢に延びた。白のごときは、北支那まで行つてゐたくらゐであつた。しかしこの全盛も東の間、胡宗鐸等同派の若手の盲動が祟つて、李濟深は南京で監禁され、李宗仁は辛うじて上海から逃げ出し、白崇禧は北支那から大連に遁れ、同派は一時はほとんど潰滅狀態に瀕した。

それがいつの間にやら廣西の舊地盤を恢復し、李宗仁、白崇禧（李濟深の行動は、周知の通り全然別だ。）の必死の努力に依つて、復興計畫着々進捗し、廣西は今や南支那の模範省とならうとしてゐる。しかしこれを根據として、反蔣戰に乘り出すには、まだ實力が不足であり、胡漢民の理論も判り、李濟深の立場にも同情出來るが、オイソレと呼應は出來ない。それに御隣りの廣東には、犬と猿の間である陳濟棠が頑張つてゐる。御承知の通り、廣西は海港もなし、交通に廣東にのみ開け、出口を抑へられてゐるから、武器の輸入も出來ず、所詮、急には動けさうもない。

西南の形勢、畢竟かくのごとく、蔣介石は、その豁運がいいといはなければならない。

### 北支那の各派

禍源・張學良が去つてから、北支那は、徐徐にではあるが、安定の一路をたどつてゐる。滿洲國と、共同防衞の責を負ふ日本は滿洲國と接壤するこの地域が、靜かになつて行くことに對しては、喜びを禁じ得ないのである。それにつけても、一九三三年五月の北支停戰協定の偉大なる效用を、改めて認識せざるを得ない。同時に、黃郛の出山に對しても、その意義のきはめて重大であつたことを回顧する必要がある。

今日の北支那は、平津一帶に於ける黃郛、何應欽及び舊東北軍、山東に割據する韓復榘、山西、綏遠を根據とする閻錫山、察哈爾の宋哲元（もと馮玉祥系だが、今は中央派）の連衡に依つて、平靜を保つてゐるのであるが、これらの各勢力を按配してゐるのが黃何政權、別して黃郛である。

これより先、滿洲國の邊疆綏靖工作進み、張學良に依つてこれを防ぎ止めることの不可能を豫斷した蔣介石は、この方面の善後策措置に當る適任者として、二人を意中に藏してゐた。文の黃郛、武の何應欽である。一九三三年三月、張學良の下野に先だち、軍政部長何應欽は、その三日には、もう南京を出發してゐた。さうして、局面の進展とともに、蔣自身も保定まで出掛け、張學良に詰腹を切らせたのであつた。このとき、すぐにも黃郛を出すつもりであつたが、輕佻なヂヤアナリズムは、蔣の苦衷を察せず、八釜しく騷ぎ立てたので、蔣はやむなくこの案を引込め、更に次ぎの機會をねらつてゐるうち、日滿軍の再進出となり、もはや多少の故障は顧慮してゐられなくなり、急に行政院駐平政務整理委員會を組織し、黃を委員長として出馬させたのである（五月三日）。

黄は蔣介石の先輩である。蔣を、支那革命黨に於ける陳其美系とすれば、黄は陳の副將格であり、蔣の先輩に當るのだ。主として北支那の政局に活躍し、國民黨員でもないが、その卓越せる世界觀は、蔣の師匠たるに充分であり、外交上の御指南番といつてもよかつた。形勢一旦變化し、對日方針變換の必要に迫られたる場合、黄を起用することは、蔣の腹案であつたのだ。一方黄も、對日關係を現狀のまゝ放置することの不得策を痛感し、同志とともに、劃策大いに努めてゐたのであつた。機會は到來した。彼は敢然起つてこの重責を引受け、見事にそれを果した。北支停戰協定はその成果である。

かくして黄何政權なるものが出來た。爾來滿一年の間、馮玉祥、方振武、吉鴻昌の反蔣旗上げ、北平公安局長更迭問題をはじめとして、種種の難問題が起つたが、黄何は、よく從容としてこれに應じ、穏便に取り纒め、大過なく今日に至つてゐる。ただ一つ、未解決のまま、一九三四年に持ち越されてゐるのは、舊東北軍の處置問題であるが、別項「中央派」の項で述べた通り、張學良の歸國、劉匪副司令として就任したことに依つて、これも解決の見込みがついた。

黄何政權の範圍は、平津、河北、察哈爾に及ぶ。察哈爾の宋哲元は、今日ではもはや中央派に算へていい。馮玉祥の旗揚げには最初から反對だつたのだ。

滿洲事變勃發以來排日の風潮激甚をきはめた中に、韓復榘の山東だけは、靜まりかへつてゐた。彼はかつて馮玉祥部下隨一の猛將であつたが、反蔣戰をよしとせずして、蔣介石に加擔し、山東の地盤を與へられたのである。經營四年、一九三二年には、蔣の隱目附である劉珍年を驅逐し、完全に山東一省を手中に納め、北支那第一の纒まつた實力を擁するに至つた。蔣との關係は不即不離、表面中央の命を奉じてゐるが、劉珍年事件で見たやうに、無理な命令ははねかへす氣力を持つてゐる。排日をやらなかつたのも、その一例である。

彼は勿論一個の軍閥であるが、その山東に於ける施政を見るに、大した害毒を流してゐない。又、今までのところ、北支那に覇たらんとする野心も、露はしてゐず、保境安民主義を一貫してゐる。軍閥に善良なものはあり得ないが、彼のごときは、無害の軍閥といへよう。

山西と綏遠は、閻錫山の勢圏である。彼は民國以來の模範督軍であるが、馮玉祥に誘惑され、反蔣軍の總帥に擡ぎ上げられ、ヒドイ目に遭つた（一九三〇年）。さうして一時大連に遁れてゐたが、ひそかに山西に歸り、間もなく蔣との妥協が出來て、太原綏靖主任となり、舊部下の徐永昌を省主席とし、舊地盤の整理に餘念なく、特に經濟開發に重きを置き、今や棉花を他省に輸出するまでになつた。山西は再び北支那に於ける模範省とならうとし、閻も亦、模範督軍の本來の面目を恢復した。彼の改過轉向は、北支那安定の一礎石である。

## 國家主義派

中國國民黨の「以黨治國」に對して眞正面から反對するものとしては、先づ第一に中國共産黨が擧げられるが、實は、單にこの一黨のみではない。第三黨あり、社會民主黨あり、張嘉森、張東蓀等の新黨、國家社會黨あり、その他幾多の小黨があるが、その中で、最古い歴史を持つてゐるのが、ここに述べる國家主義派である。尤も國家主義派にも二派あり、一は中國青年黨・中國國家主義青年團で、その機關紙の最有力なものの名を取つて、俗に「醒獅派」と呼ばれるものである。二は福建地方を根據とし、完全な黨組織を有しない國家主義者の一團で、これも機關誌（今はないが）の名を取つて、「孤軍派」といはれるものである。

中國青年黨は、一九二二年十二月、留佛學生曾琦、李璜、周太玄、張子柱等に依つて、巴里に於いて組織されたものである。同時に黨の外廓たる中國國家主義青年團も成立した。一方南京に於いても、余家菊、陳啓天等に依つて國家主義運動が起され、青年中國學會を中心とし、陳はその機關誌「少年中國」誌上に、「國家主義と中國の前途」なる論文を發表したりなどした。翌一九二四年巴里に當機關誌「先聲週報」創刊、十月、曾琦、李璜歸國して、上海に「醒獅週報」を發刊した。爾後の過程は左の通り。

（一九二五年五・三〇事件を機とし、全國各地に二十數社の國家主義的愛國主義團體成立、七月黨、團はその存在を表面化した。（一九二六年）八月一全大會開催。（一九二七年）黨中央を南京、東南大學内に設立したが、三月二十四日蔣介石の

ため解散され、曾琦入獄。(一九二九年)曾琦出獄、吳佩孚の紹介を得て奉天に入り、張學良等の賛同を得て、黨中央を同地に再建した。(一九三〇年、中央黨を北平に移した。

現在の黨員數は約三萬、新疆を除く各省市、南洋、比律賓等に支部がある（本部は現在天津。黨員の成分は軍人、政客、大學教授、學生で、中央執行委員長は曾琦、組織部長兼執法部長常乃德。幹部としては李璜、左舜生、王造時、余家菊、陳啓天、周太玄等がある。機關誌としては「青年月報」（醒獅週報の後身）、「上海小報」、「創共半月刊」、「民聲週報」等十數種ある。

黨の主義は、(一)全國各階級國民を以て全民政治を行ひ、(二)國民黨の一黨專政に反對し、(三)共産黨の一階級獨裁を排し(四)對外的には一切の帝國主義的國家國土の獲得を謀るものを打倒し、(五)對內的には、階級鬪爭を消滅するといふに在る。

黨・團は結局支那ファッシストではないかといふものがある。伊太利に於けるファッシスト勃興の徑路を見ると、充分その可能性があるやうだ。果然藍衣社新興の際、黨・團の代表は南京に入り、それとの提携を策し、一氣に支那ファッシスティ樹立に邁進しようとしたのであつたが、藍衣社は先づ國民黨內の小組織として進行し、(一)黨總理の復活（黨總理の地位は、永久に孫文のものとして、學位にされてゐるが、藍衣社は經章を修正し、葬を經理に据へようとするのである。）(二)國民政府主席の權限擴張の二目的を達するに於いては、必ずしも國民黨を飛び出さなくてもいい。それに失敗した場合新黨組織に進まうといふ、二段構へであるので、青年黨・團代表は、今日はまだ提携の時機ではないとして、引き下つたといふ。これに依つて觀れば、黨・團は、時機さへ來れば、――蔣が丸腰になつて飛び出し、支那のムッソリイニとして現はれて來れば、その下に馳せ參ずるものと觀られるのである。

國家主義派の別派たる「孤軍派」は、わが京大出身の何公敢（福建革命の際省長となる。）を中心とし、十九路軍の翁照垣、邱國珍等がこれに屬する。福建革命に國家主義者が參加したと傳へられるのは、この「日本派の國家主義者」の一團だつたのである。

## 第三黨と社民黨

一九三三年十一月、福建に革命が起つたといふことを耳にした人人は、同時にその思想的背景として、第三黨、社會民主黨、國家主義派等の名を發見したであらう。國家主義派のことは、前項で說明したから、本項では第三黨と社民黨について述べよう。

第三黨といふのは、國民黨でもなく、共産黨でもないといふ意味である。一九二五―七年の支那大革命時代、國民黨の極左派として、最熱心に共産黨との提携を主張した故鄧演達（當時總政治部主任）が、この黨の創立者である。最初の名は「中華革命黨」とも、「中國國民黨臨時行動委員會」ともいはれてゐるが、一九三三年十二月十日の「解散宣言」には、「中國革命行動委員會」となつてゐる。一九二七年七月國共兩黨分離するや、鄧は宋慶齡、陳友仁、徐謙、黃琪翔、季方並びに共産黨の譚平山、章伯鈞等とともに、新黨組織の議を決し（そのとき『中華革命黨』の名を新定したのではないかと思はれる）。江董琴等を福建に派し、若干の工作を開始したのが、第三黨の發端で、その後鄧は、莫斯科を經て伯林に入り、第二國際の指導下に、一九二八年九月「中國國民黨臨時行動委員會」を組織した。故國の同志もこれに應じた。翌翌一九三〇年、鄧が第二國際から十萬元を得て歸國してから、一九三一年逮捕銃殺されるまで、黨は福建を中心として、相當の組織をかち得てゐた。鄧の死後、黨勢は勿論衰へたが、尙黃琪翔、季方、章伯鈞等を首領として（檢擧は馮玉祥派の政客に賣元し、譚平山は證れ、宋慶齡、陳友仁は結局シンパ以上でなかつた）、あらゆる反國民黨、反蔣の運動に沒頭し、就中黃琪翔の活動最も目覺ましく、遂に福建革命に於いて機會を見出したのであつた。

第三黨の主義は、「全國の革命勢力を集合して、中國農工平民群衆の利益を代表する革命政黨を建立し、農工階級の壓迫を解散し、中國民族の自由平等を爭取し、社會主義社會を建設するを以て鬪爭の目標となす。」（解散宣言の一節）といふに在つて、福建革命の劈頭發表せられた「赤い政綱」は、ほとんど第三黨のそれと解して差支へない。

社民黨は陳銘樞の手創した黨である。陳は一介の武辨ではなく、民衆政治家としての素質を多分に持つてゐる男で、共産軍討伐のため江西に出動中、A・B團を組織し、社會民主主義に傾くやうになり、その後交通部長として南京政府に入るや、上海の神州國光社といふ出版社を買收し、文化運動にも努力し出した。何しろ金はあるし、原稿料の拂ひつ振りもいいといふので、この社から出す「文化雜誌」、「讀書雜誌」には、A・B團、中國共産黨の落武者、陳獨秀取消派の殘黨等の、種種雜多な連中が寄稿し、同

社の編輯王禮錫、梅龔彬、陳の祕書胡秋原等を中心として、自づから一つのグルウプが出來上つた。

このグルウプを、我等は社會民主黨と呼ぶのであるが、正式に結黨はされなかつた。イヤ、一度結黨の話が持ち上つたが、何かの都合で成立しなかつたといはれてゐる。從つて政綱等は發表されたことはないが、大體次ぎのやうな主張を持つてゐた。

（一）　國共兩黨の中間を往く。
（二）　共產黨の暴動政策に反對する。
（三）　國民黨の白テロに反對する。
（四）　土地の沒收、その貧農への分配。
（五）　帝國主義に反抗する。
（六）　工人待遇の改善。
（七）　階級專制に反對する。
（八）　集會、結社、言論、出版、罷工の自由。

要するに陳銘樞の私黨であり（このグルウプの全部がさうでないが）、陳の旨を承けて、走り廻つてゐた連中であり、第三黨と同じく福建革命の挫折に依つて、今は散り散りになつて、聲を潛めてゐる。

**中國共產黨・共產軍・ソヴエート**

それは、一個の貧弱な、學術研究團體であつた。「マルクス主義研究會」はその名であり、その中心となつてゐたのは、北京大學教授・圖書館長李大釗で、彼をめぐつて、北大の左傾學生數十人があつた。李は、その當時、年齡未だ三十に滿たない青年で、早大を出たばかり、北大末席の教授として、學內に於ける勢力は大きくなかつたが、默々としてマルクス主義を研究し（恐らく日本語で！）一九一八年春、前記マルクス主義研究會を創立したのであつた。張國燾、韓麟符等が、急先鋒となつて馳せ參じ、先づ、往年帝大の新人會といつたところ。勿論この外にも、各種の思想團體が學內に簇生した。その傾向を拾つて見ると、孔子教反對、白話運動（言文一致運動、舊道德排斥、家族制度破壞、人道主義的傾向、文化普及運動、無政府主義的傾向等。これらの諸傾向が綜合されて、一大文化運動となり、就中、文學革命の運動が主潮となつて、守舊派との肉搏戰を現出し、その極、終に一九一九年春の五・四運動となつた。

五・四運動は、支那革命史の開卷第一頁であり、その文化史上にもつ意義の重大なことは、今更いふまでもないが、私が特にそれを重視するのは、支那の民衆が、その一部にして、且つ常に先鋒たるべき學生が、「組織」の齎らす力量を、はじめて體驗したからである。この一役を經て、マルクス主義研究會は、一歩を實行運動に踏み込んだ。中國勞働組合書記部の創立は、その第一歩であつたが、更にコミンテルン代表ウオイチンスキイの來支に依つて、一九二〇年九月、中國共產黨が上海に成立したのである。

爾來今日まで滿十三年半、足掛け十五年。中國共產黨は、いかに成長してゐるか？　第十七回黨大會で、中央執行委員マヌイリスキイは、左のごとく總結してゐる。

> 聯邦共產黨を除いては、成績、中國共產黨に一指を屈する。黨は、無產階級の大多數を獲得したのみならず、ソヴエート區域內に於いては、一切の勞働者を獲得してゐる。支那に於ける共產主義の影響の增長は、黨員數の增加に依つても知られる。すなはちこの一年間に十二萬人を增加し、總計四十一萬六千人となつてゐるのだ。黨はすでにソヴエート國家を管理し、その面積は七十萬平方キロに及び、ドイツ、フランス、或はその他の帝國主義列强（米國を除く）のいづれよりも大である。その支配下に在る武裝力量は、工農紅軍三十五萬と、約六十萬の遊擊隊である。成分は、三十パアセントの工人、五十パアセントの黨員。黨・軍は國內戰爭の多年の訓練を經て、堅定なる幹部、軍事家、軍官を鍛練し、蔣介石の五次に亘る圍攻を擊破したのだ。

これには、勿論誇張がある。その誤まれる點は、後に說くが、ともかく僅かに十數人、數十人の學術研究、乃至啓蒙團體に出發

して、誇張にもあれ、七十萬平方キロのソヴエート區、三十五萬の共產軍を擁するといはれるほどの發展を遂げたことは、正に「世紀の驚異」でなければならない。――その發展過程をたどつて見ると、ほぼ次ぎの三時代に分けることが出來る。

（一）雌伏時代。黨の成立（一九二〇年九月）から、中國國民黨との提携完成（一九二四年一月）まで。滿三年四ヶ月。

（二）昂揚時代。一九二七年七月の國共分離まで。滿三年六ヶ月。

（三）甦生時代。國共分離後の八・七緊急會議から今日まで。すでに滿六年半以上を經過してゐる。

第一期・雌伏時代に於いては、黨はなほ多分に啓蒙團體的な要素を具備してゐて、黨員數も少く（一九二一年頃やうやく四十餘名、一九二五年の五・三〇事件當時が、九百餘名だつたから、一九二四年の國共合作當時は、三四百名と推定するのが、妥當ではあるまいか）、勢力も微弱だつたが、しかし香港の海員罷業、京漢鐵道罷業（いはゆる二・七事件）を指導したり、第一回勞働大會を開いたり、成績は相當なものであつたが、大體から見て、黨勢きはめて幼稚だつた。黨の產みの親であるコミンテルンはこれを見て氣が氣でなく、そのいはゆる植民地革命の原理に據り、支那に於ける小ブルヂョア及びインテリゲンチアの黨である中國國民黨との提携を、黨に指令した。その工作は、一九二二年頃から開始され、一九二四年一月、終にそれに成功した。すなはち第一期に於ける黨の活動は、（一）勞働者組織、（二）罷業指導の嘗試、（三）民族革命聯合戰線形成の準備工作、の三つに盡きるのであつて、農民運動に至つては、ほとんど手を着けてゐないのである。

第二期・昂揚時代がはじまつた。換言すれば、聯合戰線の時代である。黨は、すでに合法政黨であり、その尖鋭分子を國民黨に入黨させ、思ふがままにそれを引き廻した。コミンテルンの三段援助、すなはち人（ボロデイン、ガアレン等の顧問の招聘）、智惠（中共への指令、中國國民黨の改組、北伐軍の組織等）、及び武器の援助も、この時期に於いて頓みに熱心を示した。それを背景として、黨は多大の活躍を現はした。政治方面では、黨は國民黨を援けて北伐を遂行し、出師九ヶ月で長江の線を收め、一面國民黨極左派と緊密に握手して、武漢政府を樹立した。勞働運動では、中華全國總工會の組織、上海ゼネ・スト（五・三〇事件）、對英經濟絶交（沙基事件等）を領導した。農民運動では、廣東省を眞先きに農民協會を組織し、五・三〇事件の教訓から、同事件後この方面に力を入れ、北伐開始とともに、新附地方に手を擴げ、相當の收穫があつた。この三方面の運動が、相並んで昂揚したため、黨員數も激增し、一九二五年五・三〇事件當時の九百名が、年末には一萬、二年後の一九二七年五月には六萬となり、これに黨の補助機關たる共產青年團員四萬を合せて十萬人といふ、驚くべき發展を見せた。しかしこの昂揚時代は永續せず、一九二七年七月、民族革命聯合戰線に破綻を生じ、國共兩黨は終に分離した。

聯俄容共政策、換言すれば孫文の左傾に對しては、最初から黨内に反對があつた。極右派馮自由等、つづいて右派張繼等、孫文死後、新右派戴天仇等が反共態度を明かにし、いはゆる西山會議派を出現させたが、蔣介石の實力增大とともに、一九二六年三月二十日の中山艦事件、同五月の黨務整理案可決、蔣の戴天仇登庸、陳獨秀の北伐反對、共產派の張靜江攻擊、國民黨及び國民政府北遷問題、といふ工合ひに、蔣と共產派との間に溝が出來、終に蔣介石の上海クウデタア（一九二七・四・一二）となり、最後に左派汪兆銘も共產派と離れ、一九二七年七月中旬、共產派及び國民黨極左派武漢政府を退出し、黨の昂揚時代は終焉を告げた。

第三期・甦生時代の出發點は、八・七會議すなはち一九二七年八月七日の九江會議である。コミンテルンの見解に從へば、武漢の失敗は黨幹部の日和見主義に起因する。黨幹部が國民黨左派との決裂を惧れ、黨極左分子と農民の直接行動を阻止し、×××××を制し得ず、總じていへば、農民運動の大勢を理解・領導し得ずして、日和見主義の過誤に陷つたことが、失敗の原因であり、目前黨の任務は、日和見主義を清算し、農民×××に依る農民×××××することでなければならない。この見地の下に開かれたのが、八・七會議である。會議の決議に基づき、各地に暴動が起つた。上海罷業、四省秋收暴動、海陸豐ソヴエート等がそれだ。十一月、八・七會議後三ヶ月間の經驗に依り、擴大會議を開いて譚平山を除名し、一切の土地所有權を否認した土地問題黨綱を制定し、「ソヴエートを樹立せよ」といふスロオガンを採用した。やがて廣東コムミユウン（一九二七・一二・一一）の失敗が來て、黨は地底に沒し去つた。

## 第二節　一九三四年政治・外交の鳥瞰

それから一九三〇年七月、共産軍の長沙占領まで、比較的世人の耳目から遠ざかつてゐたが、この期間こそ、黨實質の甦生期間であつたのだ。八・七會議から廣東コムミユウンまでの盲動時代の經驗から、黨は、(一)廣汎なる大衆の獲得、(二)共産軍の結成、(三)ソヴエート樹立、の三大方針を歸納し、鋭意その實現に努めた。この方針を決定したのは、一九二八年二月のコミンテルン第九回プレナム、及び黨あつて以來の最大規模、最大重要會議である六全大會（一九二八年六月）であつた。指導者の期待に背かず、毛澤東を中心とする共産軍組織は、短期間に驚くべき發展を遂げ、それは又必然にソヴエート區の擴大となり、一九三〇年四月までに、十四軍七萬五千の共産軍が出來、五月には、上海にソヴエート區代表大會が開かれた。つづいて七月、長沙を占領したが僅か九日で敗退。これが當時の黨最高指導者李立三の路線に對する懐疑を起させ、一九三〇年末までに、やつと李立三コオスの清算を濟ませ、一九三一年以後、黨は陳紹禹一派に握られてゐるが、共産軍及びソヴエート區の實權を握つてゐる毛澤東一派の勢力ははるかに陳等の書生派の上に出で、一九三一年十一月七日、江西中央ソヴエート區に、「中華工農兵蘇維埃第一次全國代表大會」が開かれ、瑞金に臨時中央政府が成立した。軍權黨權より高く、陳等の黨中央は、國民政府の白色テロル下に辛酸しつつ、若干の工作をつづけ、コミンテルンへの電話機を動めてゐるに過ぎない。

「三十五萬の共産軍、七十萬平方キロのソヴエート區。」と、コミンテルンをして鼻うごめかせつつある支那共産軍、その萠芽は、一九二七年の國共分離直後に發見される。八月一日の南京暴動に參加した葉挺、賀龍、朱德の三軍がそれである。しかし正規の共産軍として、我我が認めるのは、一九二八年四月に結成された朱德・毛澤東の工農紅軍第四軍である。つづいて彭德懐の第五軍が出來、一九三〇年四月までに、十四軍七萬五千の勢力となつた。一九三一年の初めには、四軍團二十萬となり、一九三二年には、六方面軍三十萬と概算せられた。現在では基本部隊十萬、外廓軍隊（赤衞隊その他）を合せ、二十五萬から三十萬と思はれる。編制、指導者左表の通り。

（A）第一方面軍　總司令　朱德　總政委　周恩來

第一軍團　總指揮　林彪

第三軍　軍長　徐彦剛

第四軍　軍長　周昆

第十二軍　軍長　陳毅

第三軍團　總指揮　彭德懐　總政委　滕代遠

第七軍　軍長　張錫龍

第二十二軍　軍長　羅炳輝

第五軍團　總指揮　董振堂

第十三軍　軍長　董振堂

第六軍團　總政委　蕭勁光（第七軍團總指揮轉任說あり）

總指揮　孔荷寵（又は蔡會文）

副指揮　蕭克（又は蔡會文）

第八軍　軍長　李天柱（兼副指揮）

第十六軍　軍長　孔荷寵

第七軍團　總指揮　方志敏（又は蕭勁光）

第十軍　軍長　周建屏（又は邵式平）

（B）第二方面軍　總司令　賀龍
　　總政委　夏曦
　　第二軍團　總指揮　賀龍
　　第二軍　軍長　賀龍
　　第七師　師長　盧東生
　　第九師　師長　賀英
（C）第四方面軍　總司令　徐向前
　　總政委　張國燾
　　第四軍團　總指揮　徐向前
　　總政委　陳昌浩
　　第四軍　軍長　徐向前
　　第九軍　軍長　何畏
　　第二十五軍　軍長　王樹聲
（D）獨立行動部隊
　　第二十五軍　軍長　吳煥先
　　政委　沈澤民
　　第二十八軍　軍長　廖榮坤

第一方面軍は江西に在る四つのソヴエート區を拱衛し、第二方面軍は湖北・湖南・四川省境ソヴエート區を、第四方面軍は四川・陝西省境ソヴエート區を防護してゐる。

共産軍の遊擊するところ、所在に無數のソヴエートが產れる。一等大きいのを特區ソヴエートといふ。次いで縣ソヴエート、鄕ソヴエート、村ソヴエートといふ具合になつてゐる。起伏常なく、正確なソヴエート數など、決して判りつこないから、研究者は常にソヴエート縣數を算へる。本邦に於ける研究者の發表したもののうちで、支那に於けるソヴエート區の範圍を、四百二縣と計算したのが最大數である。私は、大局に影響ある重なるソヴエート區として、次ぎの八大ソヴエートを擧げ、ソヴエート縣數百餘りと概算するのである。

| ソヴエート區名 | ソヴエート縣數 |
|---|---|
| （一）江西中央區 | 一九 |
| （二）江西東北區 | 六 |
| （三）江西・湖北・湖南省境區 | 七 |
| （四）江西・湖南省境區 | 三 |
| （五）湖北・湖南・四川省境區 | 一一 |
| （六）四川・陝西省境區 | 一三 |
| （七）陝西・甘肅省境區 | 三 |
| （八）河南・湖北・安徽省境區 | 六 |

かつて共産軍に占領せられたことのある縣數は、勿論三百縣以上に達する。これは國民政府も認めてゐるところである。が、五年に亙る討伐を經て、ソヴエート區の範圍は、大いに變つてゐる。一九三四年初頭現在に於いて、完全に赤化してゐる縣數としては、私はどうしても百餘を出でまいと推定するのである。散在してゐるソヴエート區を一緒にしたら、支那の約一省半に當るであ

らう。

これらのソヴエート區を總括して、黨は、これを中華ソヴエート共和國と稱し、その臨時中央政府を、江西中央ソヴエート區の瑞金に置いてゐる。中華ソヴエート共和國中央執行委員會は、六十三人の委員を以て構成し、毛澤東が主席、項英、張國燾が副主席になつてゐる。中央執行委員會の下に、人民委員會があり、それがこの共和國の中央行政機關である。主席はやはり毛澤東、副主席が項英、張國燾。人民委員會は王稼祥（外交）、朱德（軍事）、項英（勞働）、鄧子恢（財政）、張鼎丞（土地）、瞿秋白（教育）、周以栗（内務）張國燾（司法）、何叔衡（工農檢察）の九人である。別に革命軍事委員會があり、共産軍全體を統轄し、朱德が主席、彭德懷、王稼祥が副主席となつてゐる。

ソヴエート區内の狀況に關しては、多少の報告がないではないが、所詮實情は分らない。ソヴエート側の資料で見ると、秩序整然たるものがあり、經濟建設等にまで、相當の成績を擧げてゐるやうだが、そのまま信用する氣にはなれない。しかし國民政府側でいつてゐるやうに、まるでメチヤメチヤになつてゐるとも思へない。例へば江西のソヴエート區のごとき、すでに五六年も持ちこたへてゐるところを見ると、貧乏なりに、何とか纏めて行つてゐるのではあるまいか。エピソオドがある。廣東の陳濟棠が人を出して、江西ソヴエート區を視察させた。歸つてからの復命に、陳に對しては、「まるでなつてゐない。崩壞近きに在り。」とあつたさうだが、親友との茶のみ話しのときには、聲を潜めて、「なかなかよく堅まつてゐるよ。」といつたさうだ。眞相はここいらあたりではあるまいか。陸軍空軍の精鋭を盡し、延べ人員二百萬以上の軍隊を動員した蔣介石の討伐を、五年に亙つて持ちこたへてゐる點から歸納すれば、或程度の實力あり、基礎あり、組織ありと斷定せざるを得ない。

もしそれ將來の形勢論に轉ずるならば、四川陝西省境ソヴエート區の創建は、ソヴエート・ロシア想定の赤化ライン、流行語のコミンテルン・ルウトの打開のために、重要な礎石を置いたものであり、トルク・シブ鐵道から新疆に入り、八大ソヴエート區を飛石傳ひに、縮建まで突き拔ける國際路線も、滿更夢物語ではないと思はれる。ただしかし全支の赤化は、まだ考へられないし、蔣介石ある限り、又列國の關心が、長江筋を離れない限り、何とか防ぎとめると思ふ。否、防ぎとめなければならないと思ふ。その時機は、將來一度は來るものと覺悟して、今からその準備工作に沒頭しなければならぬ。黨・區・軍の研究を勸奬する所以である。

## 四　邊疆問題

### 内蒙古自治の完成

「今の支那で、何が一番重要な問題か？」と問はれたとしたら、私は少しも躊躇せずに、赤化問題と邊疆問題であると答へるであらう。赤化は支那の内臟を蝕ばみ、邊疆の分離は、手や脚をもがれるやうなものである。――かうした重大な意義に氣附いたものか、外支雙方の耳目は、最近一齊にこの兩問題に集注せられた觀があるが、ともに頗る難解であるため、どうしても眞相が摑みにくい。資料が不足してゐるからである。私は、以下、邊疆問題の重なものを取扱ふが、叙上の理由に依つて、それは一の「中間報告」に過ぎないことを、最初に御ことはりして置く。

さて、邊疆問題は、性質上、屢屢聯關するのを常としてゐるが、そこで考へなければならないことは、滿洲問題も亦、邊疆問題の重要な一斷面であつたといふことである。それが滿洲國の建設によつて解決されたとなると、他の斷面に影響しない筈はない、熱河が綏靖されたに於いて、一層然りである。果然動き出した内蒙古の自治運動。それは一九三二年に起り、足掛け三年、一九三四年二月に完成し、内蒙古は、いふところの「高度自治國」となつて起ち上つたのである。

内蒙古といふのは戈壁沙漠の南、長城の北、東は遼河、松花江、西は寧夏地方を限界とする一帶の地方を指すのであるが、さういふ行政區劃があるのではない。清朝では滿洲八旗の制に倣ひ、蒙古族にこれと同樣な軍事編制を施し、それを蒙古王公の自主專制統治下に置いた。旗とは人を基本とする軍事上の編制で、土地を基本とする行政上の區劃ではないが、事實上これと同樣の機能を有してゐた。民國になつてから、行政區劃として省或は特別區域が制定せられたが、「旗」制度は依然存續してゐる。數個の旗は

合して「盟」となり（察哈爾、呼倫貝爾、及び西套蒙古のごとく、旗だけで盟を成さないものもある）、旗の長官（札薩克）の有力なるものが、盟長及び副盟長となる。內蒙古には東四盟（哲里木、卓索圖、昭烏達、錫林果勒）、西二盟（烏蘭察布、伊克昭）合計六盟、二十四部、四十九旗の外、滿洲國に加入し、錫林果勒、烏蘭察布・伊克昭三盟二十三旗が支那に殘つてゐる（察哈爾八旗以下は暫らく論外とする）。今回高度自治運動をはじめたのは、察哈爾省に屬する錫林果勒、綏遠省に屬する烏蘭察布、伊克昭の三盟であり、別して錫盟が中心である。

自治運動の中心人物は、錫盟の副盟長・蘇尼特右旗札薩克である德穆楚克棟魯普で、略して德王といふ。その崇拜者によつて「成吉思汗の再來」とまでいはれてゐる王は、年齢僅かに三十三歲。北京で支那式の教育を受け、英語にも通じ、世界の大勢をも知り、縣値のないところ、蒙古切つての新知識であり、つとに蒙古復興の雄圖を懷いてゐた。幕下には日本留學出身の喀喇沁旗人韓鳳林、黃埔軍官學校出身の土默特旗人雲繼賢等があり、その他包悅卿、賴達補英、達米林札普等が、代表として南京その他に出てゐる。部下の蒙軍は、烏滂警備司令として持つ六千餘人で、前記雲繼賢が指揮してゐる。蘇尼特旗には、小さいが兵工廠、皮革廠、製絨廠がある。德王は又一面保守分子の懷柔にも意を用ひ、內蒙巡錫中の班禪喇嘛のために、滂江に大伽藍を建築したりしてゐる。

九・一八事件、つづいて滿洲國の創生は、德王の蒙古復興熱を、いやが上にも煽り立てた。彼は火のやうになつて、各方面に工作した。さうして機熟すと見るや、一九三三年七月二十六日、百靈廟に內蒙各盟旗長官三十餘名を會して、高度自治獲得に關する豫備會議を開いた。百靈廟は山西からする要道に當り、錫、烏、伊三盟の中心に近く、無電臺などもあるところである。

百靈廟會議に集まつた王公は、錫盟十旗、烏盟六旗、伊盟七旗、察哈爾八旗の代表、並びに班禪喇嘛で、會議は德王及び烏盟盟長・雲端旺楚克（すなはち雲王）にリイドされ、南京政府に高度自治を要求することに議一決。八月十九日更に會議の結果、自治要求に關する南京政府への呈文草案が起草され、九月二十八日可決、ただちに發出された。この「自治呈文」は、滿洲國建國通電にも比すべき重要文獻で、大要左の通りである。

外蒙古及び東部蒙古の覆沒は、西蒙古に影響する。事態は因循偸安を許さない。自治の外、これを救ふ途がない。孫總理の遺訓に、人民の自治を以て基礎となし、弱小を扶植するを以て職志となすとあり、中央は軍事に忙殺され、遠くわが蒙古を憂ふるの暇がない。自任自決あるのみである。民國二十年國民會議の決議に、外蒙自治を許した先例があるので、七月二十六日烏盟百靈廟に內蒙全體長官會議を開いた結果、高度の自治を採用し內蒙自治政府を建設することを決定した。ただ軍事外交は、國家の體制に關係あり、且つわが蒙古の力及ばざるところ。一切の對外措施は、中央に賴る。

この呈文を發して置き、南京政府の回答をも待たず、十月九日から二十三日までの會議で內蒙自治政府組織法を可決し、左の幹部顏ぶれを內定した。

委員長　雲端旺楚克（雲王）　烏盟盟長
副委員長　索諾木喇布坦（索王）　錫盟盟長
同　沙克都爾札布（沙王）　伊盟盟長
政務廳長　德穆楚克棟魯普（德王）　錫盟副盟長
參議廳長　阿拉坦鄂齊爾（阿王）　伊盟副盟長
制法委員會委員長　巴賚多爾濟（巴王）　烏盟副盟長

自治呈文に接して南京政府は大いに狼狽し、章嘉呼圖克圖を蒙旗宣化使に任命し、班禪喇嘛に調停を依頼した外、十月十七日の行政院會議で、(一)現在の蒙藏委員會の組織を變更し、行政院の下に蒙藏部又は邊務部を設置する。(二)蒙古地方行政系統の改革。(三)蒙古行政に蒙古人を採用すること。の三項を原則に決定し、同時に內政部長黃紹雄、蒙藏委員會副委員長趙丞廉を內蒙に派遣することとした。

黃趙一行六十餘名は十月二十一日南京發、北平、張家口、綏遠を經て、十一月十日目指す百靈廟に到着した。このとき綏遠省政

府主席傅作義も、衛隊三百を隨へて同行した。かくて十一日から十七日まで、連日協議の結果内蒙自治解決大綱に到達した。その要點左の通り。

(一)内蒙に自治區を置き、烏、伊兩盟、土默特、阿拉善、鄂爾特各盟旗を第一自治區政府に、錫盟、察哈爾八旗を第二自治區政府に屬せしめる。

(二)自治區政府は行政院に直屬し、區内各盟旗一切の政務を管理する。

(三)自治區政府の經費は國民政府から毎月支給する。

(四)各自治區間の聯絡機關として聯席會議を組織する。

黄等は十一月二十八九兩日、綏遠に於ける蒙漢聯歡大會に出席、十二月十六日南京に歸着した。その復命を根據とし、南京政府で審議の末、一九三四年二月二十八日に至り蒙古自治辦法八原則を決定し、それに基づき、三月八日、「蒙古地方自治政務委員會暫行組織大綱」十一ヶ條、「蒙古地方自治指導長官公署暫行條例」九ヶ條を發表し、雲王、索王、沙王、德王以下二十四人を「蒙古地方自治政務委員會委員」に任じ、雲王をその委員長に、索王、沙王を副委員長とした。同時に何應欽を蒙古地方自治指導長官に、趙戴文（閻錫山派）を副長官に任命した。八原則の要點左の通り。

(一)蒙古地方自治政務委員會（略稱蒙政委員）は、行政院に屬し、主管機關の指導を受ける。

(二)蒙政委會の經費は、中央より支給し、旗政府の經費は中央から補助する。

(三)盟旗の劃分と系統、並びに租稅は舊のごとくにして變更しない。

(四)牧地に於ける放牧、開墾を中止し、各盟旗内には「縣」を增設しない。

かうして内蒙古の高度自治は完成された。しかし德王一派が、これを以て滿足するかどうかは、今後の推移を見なければ、何とも豫斷は出來ない。と、同時に、私は一警報を傳へる。前門よりする漢人の侵略を防ぎ得たことは結構だが、後門をどうする？

内蒙を赤化せんとする魔の手に注意せよ！

外蒙古がすでに赤化してゐる關係上、内蒙にも共產運動が起らない筈がない。かつて内蒙古に工作した内蒙青年黨は、呼倫貝爾、海拉爾から轉じて外蒙古車臣汗附近を根據とし、首領阿某以下、虎視眈眈として機會を窺つてゐるとの報がある。彼等の目的は、内蒙古共和國を建設し、ソヴエート同盟に加入せんとするに在り、その背後には、東方赤化の「東路」たる滿洲を塞がれたソヴエート・ロシアが、「中路」を内蒙に見出し、躍起となつて尻押ししてゐる。德王一派に對しては、この方面に向つての「高度」の警戒が要索せられるのである！

## 新疆問題

新疆問題は邊疆問題中の花形(?)である。英露支三國勢力の角逐するところであり、人種關係は、支那で一番複雜してゐるところだし、目前の支那の二大傾向である邊疆分離と赤化、そのいづれもが濃厚な地方であるからである。人を殺すこと麻のごとく、目指す人物を宴會に招んで置いて、席半ばに別室で斬首し、首級を同席者に見せるとか、當年二十三歳の青年將軍が現はれて、世界に三つくらゐしかない立派な裝甲自動車に乘つて、ピル・ハート見たいに、二挺ピストルで群衆の中を馳せると、その兩側に忽ち死人の山が築かれるとか、敵軍の來襲を防ぐためにカーペットで防壁をこしらへたとか、登場人物の名前にしてからが、ホチアニヤーッだとか、エミール・バシアだとか、サビット・ドムーラだとか、我我の耳には、お伽ばなしとしか聞えないやうなのが多い。さうした異國趣味的な要素も加はつて、新疆問題は、今人氣第一である。

さて新疆は、支那第一の大省で、五五〇・三四〇方哩（内政部計算）あり、支那本部の三分の一弱の廣さがある。支那各省のうちで、一番小さい浙江省に比べると、その約十七倍に當る。人口は二百五十萬、三百萬、或は六百萬と稱せられるが内政部の計算では、二、五五二、〇〇〇人となつてゐる。人種は東方人種博覽會、又は亞細民族雜居地といはれ、複雜をきはめてゐる。その分類は頗る困難であるが、ごく大雜把に分けると左のごとくである。

| | |
|---|---|
| (一) 回　民 | 一、六五〇、〇〇〇 |
| (甲) 纏頭回 | 一、二五〇、〇〇〇 |
| (乙) 漢　回 | 四〇〇、〇〇〇 |
| (二) 漢　人 | 四〇〇、〇〇〇 |
| (三) キルギス人 | 三〇〇、〇〇〇 |
| (四) 蒙古人 | 一三〇、〇〇〇 |
| (五) 外　人(露、印、阿、土、波各國人) | 五〇、〇〇〇 |
| (六) 滿人及び西藏人 | 三〇、〇〇〇 |

全人口の五割を占める纏頭回は、一名喀什噶爾人(カシガルウイ)といひ、頭上にタアバンすなはち布帛を捲いてゐるので、纏頭といふのである。土耳古語を話し、多くは支那語を解しない。大部分が天山南路＝南疆に住み、王といはれる酋長的なものが存在してゐる。

漢回は東干(東蔡)人で、支那に於ける回教徒中、最も漢人化し、勿論支那語を操つるし、衣食住ともに漢人同樣である。住居地は天山北路。

キルギス人は天山山地及び天山北路の草原に遊牧し、哈薩克、布魯特の二族に別れ、前者は天山北路草原に、後者は山地に遊牧する。支那語を解しない。

漢人は甘肅人、湖南人が多い。商業は天津人に實權を握られてゐる。蒙人は準噶爾草原に遊牧し、喇嘛教を奉じてゐる。滿人は清朝時代官吏、軍人として赴任したものの子孫である。西藏人は主として喇嘛僧である。

――新疆の概念を掴むには、これだけの記述では、勿論不充分であるが、本項に割り宛てられた枚數では、遺憾ながら割愛の外はない。ただどうしても記載を逸してならないことは、新疆は、一般に考へられてゐるやうな不毛の地ではなく、牧耕ともによく、氣候も滿洲帝國の黑龍江省よりは優しで、實に支那西北の一大寶庫であるといふこと、これである。歴史的に考察すると、北隣の各民族は絶えずこの寶庫を爭奪して來たのである。さうして最後にはそれが英露の二大勢力に綜合せられて、重壓が加へられた。その經緯を詳述することは、この一小編のよくするところではないが、要するに一八八一年のペテルブルグ條約に依つて、新疆の地位は確定し、爾後三十年間は比較的平靜に經過し、一九一一年の辛亥革命に及んだ。革命の起つたとき、巡撫は袁大化であつたが、彼は後事を提法使楊增新に托して出亡した。楊は進士出身、才文武を兼ねた鐵腕政治家で、袁巡撫の後を承けて新疆都督となり、いくばくもなく阿爾泰地方を併せ、爾來一九二八年まで、大新疆の獨裁者となつてゐたが、國民革命軍の北伐成功に近づくとともに、省内にも動搖を生じ、七月七日交渉員樊耀南に暗殺された。

樊の事を起すや、民政廳長金樹仁と通じてゐたのであるが、反覆常なき金は、一日樊を宴會に招き、酣なる頃、衞兵に樊を拉致させ、斷首して衆に示した。かくして易易と政敵を除き、省政府主席兼邊防督辦となり、一九三三年四月まで、足掛け六年間、新疆第二代の獨裁王となつた。

彼は楊增新の才能なくして、徒らにその愚民政策、漢尊回卑主義を學び、その殘酷なことは、遠く楊の上に出でた。省民は彼に「殺人省長」の綽名を奉つり、陰に怨恨の刄を磨いたが、一九三〇年に至つて、省民の反感終に爆發し、大叛亂を見るに至つた。それは新疆東部の重鎭たる哈密に起り、漢回出身の青年英雄馬仲英の後援を得て、一九三二年まで繼續した。

馬仲英は本年二十六歳、二十一歳にして第三十六師長となつた傑物で、つとに大西北主義を唱へ、回教國の建設を念願してゐる。彼は哈密回民の請を容れ、一九三一年五月、兵を鎭西、七角井、瞭墩一帶に進め、哈密を包圍したが、瞭墩の戰に傷ついてより勢振はず、一九三二年はじめ甘肅西部に退却した。これが第一回の叛亂であるが、この鎭定に當つて、金樹仁はソヴエート・ロシアの援助を求め、前門を開いて虎を入れたのである。その結果、問題の新・露密約(一九三一・一〇・一調印)が成立した。これより先、一

九三〇年四月、ロシアは多年の宿望であつたトルク・シブ鐵道を完成し、新疆侵略の重要な工具を整へてゐたのであるが、ここに至つて新・露密約を得、商業代表機關、決算事務所創設權、專門家派遣、稅率引下げの利益を獲たのである。

一九三二年七月、第二回叛亂開始され、馬仲英又もや兵を省内に入れ、公然「漢人を殺せ！」のスロオガンを揭げたのみならず、纏回の總首領たる和甲尼亞子と結び、和は南路總指揮となつた。漢纏兩回の聯絡が、これに依つてある點まで完成したのである。かくて回軍は同年十二月鄯善及び吐魯番を占領し、一九三三年二月二十日終に省城迪化を圍んだ。形勢は殆殆として危ふかつたが、省防總指揮盛世才吐魯番方面から急遽歸還し、辛うじて圍みを解いた。ここに於いて盛の勢力俄然增大し、四月十二日盛を擁する陳中、陶明樾一派の策動成功し、金樹仁を驅逐し、教育廳長劉文龍をロボット主席とし、實力者たる盛を督辦とする新政權が產れた。これを迪化政變といふ（金樹仁は天津に遁れ、次いで南京に來り、十月三十日新・露密約の違法その他を具て捕縛）。

政變の報に接し、南京政府は大いに狼狽し、金樹仁を免職し、參謀本部次長黃慕松を宣慰使として新疆に派遣したが、盛世才の屈强は、楊增新、金樹仁に劣らず、黃慕松、迪化滯在中、これと通じて策動する形跡のあつた陳中、陶明樾、李笑天を逮捕し、叛亂の罪名を加へて銃殺し、黃を軟禁し新政權支持の電報を發せしめた（六月末）。黃の使命は完全に失敗し、その釋放歸京後、南京政府は劉文龍を省政府主席、盛世才を邊防督辦、伊犂の張培元を屯墾使に任じ、新政權を容認したのである。

南京政府は第二段の策として、司法行政部長羅文幹をして新疆巡察に當らせたがこれも大した效果なく、ただ羅の祕書馮有眞の發表した省内事情見聞錄が、世人の同省に對する研究に稗益を與へただけである。

一方新政權に對しては、馬仲英は第一回の攻擊を試みたが、ロシアから送還された舊東北軍が盛世才を援助したため、終に哈密に追ひ返された（一九三三年六月）。十月、第二の盛馬戰、又もや馬の敗退に終り、次いで張培元は馬仲英に應じ、迪化進擊を企て、戰ひ利あらず陣歿（十二月）。かくて親露的な新政權はやや鞏固を加へ來つたやうであつたが、それは北路だけのことで、南疆喀什噶爾一帶には、迪化政權の勢力及ばず、纏回首領鍾木爾（喀什噶爾回城、和甲尼亞子の系統）、和闐のエミール・バシア、喀什噶爾漢城の馬占倉の三派鼎立して内紛を事としてゐたが、鍾木爾はその將オスマンに暗殺され、オスマンも亦アンヂシヤン（ロシア屬）人某に打倒された と傳へられ、形勢混沌たるものがあつた。然るに突如一九三四年に入り一月二十三日タシケント發タス通信は喀什噶爾にサビット・ドムーラを首班とする「支那トルキスタン國政府」が樹立せられ、完全に支那の主權を離れ、漢人放逐のスロオガンを揭げたと報じて、世人を驚かせた。サビット・ドムーラは本年四十餘歲、かつてトルコ、ロシアに遊び、教育はないが進步的な思想を有し、和甲尼亞子及び馬仲英と結び、一九三三年八月、英國側の諒解を取附け、支那トルキスタン國政府樹立を準備しつつあつたが、馬仲英及び和甲尼亞子が、ドムーラとの約束を無視し、伊犂の張培元と結び、且つドムーラの勢圏たる南疆地方に進出したので、ドムーラは仲英等との契約を破棄し、單獨に旗揚げすることとなつたものらしい。

ドムーラの新政府には、和闐のエミール・バシアも加擔し、その代表はアフガン首都カブールに入り、英獨側に工作したりして、一時は相當の勢ひであつたが、最近の情報では、和甲尼亞子に擊破されたといふことになつてゐるが、眞相は判らない。

要するに新疆の現狀は、親露的の迪化政權の勢力は、新に伊犂に延び（劉斌、張培元に代つて屯墾使となる）、馬仲英＝和家尼亞子の第二の勢力は、喀密から南疆に進出し、その立場は英露雙方を利用せんとするに在り、更に第三勢力たるドムーラ及びエミールの喀什噶爾政府は、純粹に親英的であり、三派の混戰、何時果つべしとも覺えずといふことに歸するのである。

## 五　當面の國際關係

### 聯盟の對支援助

「以夷制夷」は支那の傳統的外交方針である。九・一八事件以後日本に對する復仇の念に燃えてゐた支那は、必然的に國際聯盟泣き縋りの一手に出でた。あだかもその時、聯盟事務局内に於ける支那ヒイキの筆頭として、世界的に有名なライヒマン博士（聯盟保健部長）が第三回の渡支を試み、九・一八事件の起る一二週間前に、上海に到着してゐたから、たまらない。彼はわが事のやうに日本の態度に憤慨した。さうして、彼の好き相棒である財政部長宋子文に對し、聯盟提訴を慫慂した。宋子文は元來政府部内に於け

る歐米派の首領、下地は出來てゐる。すぐにライヒマンの勸誘に飛びつき、誇大な情報を聯盟に送るとともに、渥滯なく提訴の手續きを取つた。聯盟內部には、情報部長コメールなどといふ、これも支那ヒイキの男がゐて、ライヒマンと呼應する。ことに錦州空襲事件當時と來ては、ライヒマンは、有無をいはさず宋子文を、眞茹無電臺に引きずり込み、一切の情報をそこに集中し自から總指揮官となつて、僞僞取りまぜ多量の情報をジュネーヴに送つたものだ。それがどれだけ支那のために役立つたか？　滿洲事變の外交史を回顧するものは、その初期に於ける支那の宣傳陣が、水際立つたものであつたことを、今でも想起し得るであらう。あした場合、何よりも多量の情報を早く送つた方が勝である。さうして一度その情報を信じたものは、大體その系統の情報に引きずられて行く。かうした心理狀態に通じ、且つ目標たる聯盟內部の事情を誰よりもよく知つてゐるライヒマンが、ちやうど事件當時來支してゐたといふことは、何たる運命の惡戲であらう！

彼は、どうして支那に來てゐたのか？　聯盟の對支技術援助の用向きを帶びて、第三回目の渡支中であつたのである。もう前に二度も來てゐる！　當然彼と支那との因緣は淺くない筈だ。それでは彼の本來の任務である「對支技術的援助」とは、何であるか？その由來を尋ねて、私は時間的には、一九二八年に遡り、登場人物として、ライヒマン以外の幾人かを發見するのである。

一九二八年九月、時の聯盟事務總長ドラモンドは南京政府に對し事務副總長アヴノールの渡支視察の同意を求め、その快諾を得て、一九二九年ア氏を渡支させた。かくてアヴノールは、一九二九年一月上海着支那各地を視察した上、四月ジュネーヴに歸つたのであるが、彼の支那視察の目的は、結局對支財政援助の下調べであつたのである。さうして彼の得た結論は、財政援助は尙早だが、技術的援助は可能であるといふことであつた。いはゆる聯盟の對支技術援助は、アヴノールのこの視察旅行に依つて基礎づけられ、さうしてその選手として、ライヒマンが選ばれ、ラは同年秋二ヶ月に亙つて視察を遂げた。これが彼の第一回渡支である。

彼のジュネーヴに齎らした報告は、支那に對して非常に同情的であり、アヴノールのやや悲觀的な報告を覆へし、財政・經濟乃至交通方面に於ける合作が有望であると結論したものであつた。不思議にもこれが聯盟事務局をリイドし、聯盟はますます乘氣になり、一九三〇年十二月ライヒマンの第二回渡支となり、一九三一年に入ると、ラと入れ違ひに經濟部長ソルター、交通部長アースの渡支を見、その結果同年三月十八日の立法院會議で全國經濟委員會の組織條例が可決された（發布は六月六日）。これは聯盟の對支技術援助に關する總聯絡機關なのである。つづいて五月十九日には、聯盟第六十三回理事會で、對支技術援助の件が附議可決され追つかけて六月には、宋子文の要請に依るライヒマンの第三回渡支が聯盟で許可され、彼は九月上旬來支、そこで滿洲事變に遭遇し、本來の任務の範圍を逸脫し、本項冒頭に述べたやうに、一時支那外交の總指揮官のやうなことをやつて退けたのである。

一九三二年中は、聯盟の對支技術援助は、大した進展を見せなかつたが、一九三三年に入ると、四月ライヒマンの第四渡支があり、財政部長宋子文の世界經濟會議代表として渡米するあり（棉麥借款成立）、歐羅巴に於いては、或は四國借款團にかはる新財團の組織を提議したり、或は聯盟に對し技術援助の徹底を求めたりした。その結果七月十八日の對支技術援助委員會で、聯絡員としてのライヒマン渡支の件が可決された。ライヒマンは第四回の渡支から歸つて、倫敦で宋と會見し、かうした段取りを定めたのだといふ。宋が右手に棉麥借款、左手に對支技術援助の强化といふ土產を携へ、凱旋將軍のやうな勢ひで歸國すると、ライヒマンもその後を逐うて、第五回の渡支を試みた。しかしラ・宋のコムビが、全國經濟委員會の擴大强化に成功して間もなく、宋は財政部長の職を棒に振つた（十月末）。それは棉麥借款の不始末と、その使途に關して蔣介石と意見を異にしたことに因る外、彼の留守中、南京政府の外交方針が、ある角度の轉換を來してゐたことに因るのである。宋の失勢とともにライヒマンも木から落ちた猿で手も脚も出ないやうになつたのみならず、折角の思ひで支那に引張り出した、アヴノールの先輩格の佛國財政通モネは、流石專門大家の眼光鋭く、支那の財的立ち直りの非常なる困難を道破し、ライヒマンの論據、延いては聯盟の對支技術援助の根本論據を覆へすに至つたと傳へられてゐる。彼は流石に達眼だ。支那の經濟開發は、日本を除外して決して出來るものではないことに氣附いたのである。聯盟が私心なき財政專門家モネに聽くか、それとも成心ある非專門家ライヒマンに從ひ、依然として從來の方針を一貫するか、けだし今後の見物である。

## 第二節　一九三四年政治・外交の鳥瞰

**日支關係の現狀と將來**

日支兩國の現在の關係については、年來二樣の觀測が行はれてゐる。一は、日支關係好轉說であり、二は、好轉は支那の僞裝だとする說である。

先づ第一說を檢して行かう。この說を支持するものは、定まつて昨年五月の日支停戰協定を持ち出す。さうして平津に於ける黃何政權を論じ延いて黃何を出山せしめた原動力を究め、ツマリ蔣介石、汪兆銘が、對日方針を換轉したのだといふ風に歸納して行くのである。その推測に當つてしばしば引用されるのは、蔣介石が剿赤將士に訓示したといふ「剿共・抗日より重し。」の一句である。この外、南京政府の要人が、滿洲問題に關して、最近ピタリと口を噤み事實上この問題をセット・アサイドしてゐるといふ情報もしきりに使用されるのである。白狀すれば私もこの說を主張する一人である。さうして、二三の機會に於いて、次ぎのやうな見解を披瀝したのであつた。

先づ蔣介石の地位と、その魄力とを認める。彼が國民政府の主席だつたときは、名實ともに彼が政府であつた。主席を譲つて、軍事委員會の委員長となつても、依然として彼が政府である。この蔣介石が、今何を考へてゐるか？　彼は何よりも彼の地盤の完成を急いでゐる。長江一帶の地盤である。それを脅かす敵は江西を本據とする共產軍である。彼の最大の關心事は、共產軍を討滅して、彼の地盤を完整し、それを根據として、支那のムツソリイニとして起ち上ることである。彼はそのことで胸が一杯になつて居り、滿洲問題などは忘れてゐる！　忘れてゐるものを、强いて想ひ出させずとも、だ！

私のこの見解は、非常な俗論であるとして、各方面から攻擊を受けた。その根據となつてゐるのは、前述した第二說、すなはち好轉は支那の僞裝だとする說である。それは次ぎの要約に盡きる。

蔣を中心とする南京政府は、最近表面極端な譲步政策を執つてゐるが、實際的には種々なる反日準備をなし、いはゆる「長期抵抗」は廬山會議で決定せられ、その後も何等變るところはない。對日譲步は、長期抵抗の準備である。蔣介石の見解に據れば、對日譲步は亡國を招來しないが、對共（共產黨）譲步（すなはち不討伐）は必ず亡國を齎らすと。故に剿共を先きにせざるを得ないのである。しかし剿共進行期間內に在つても、彼は決して日本を忘れず、直屬ファッショ機關藍衣社は、反日の總本部であり、外交方面に於いては、暗に米、獨、伊を抱込まうとしてゐる。軍事的には、空軍の擴張を準備してゐる。要するに對日方針の轉換は、一時的カムフラージで、時來らば、猛然その假面を脫ぐであらう。その「時」とは、一九三五——六年の危機であり、……、……、……、……、……、……。○○○關係があるからである。

要するに第一說は、綜合觀に立つもので、日本內地にゐるものの間に起り易い觀察であり、林を見て樹を調べない缺點がある。第二說は、分析觀を根據とし、多く現地に卽して行はれ、樹を算へて、林を見ない缺點がある。前者はあまりに表面的であり、後者はあまりに深文的である。——いづれも偏よつた觀察であらう。と、同時にいづれも楯の一面を摑んでゐる。眞理は、この中間に在るのであらう。

そこで私は、自說を少し訂正する、蔣介石が、滿洲問題を忘れてゐるといつたのは、私の過言であつたと。しかし日支の關係が、北支停戰協定以後、やや好轉して來てゐるといふことは、どうしても否定し得ないのである。この點については、第二說の主持者といへども、「斷じて好轉してゐない。」とは、頑張り得ないのではあるまいか。

すでに少しでも好轉して來たとすればその勢ひに附け入つて、今一層好轉せしむべく、適宜な外交工作を行ふべきである。「對日方針を緩和したいといふが、口ばかりでは駄目だ。見せて貰ひたい。それにつけてもこの件はどうだ？　あの件はどうする？」と、遠慮なく突つ込んで差支へない。絕えず對手の誠意を試驗しつつ、機あれば乘ずる。小口から片附けて行く。問題、懸案は山ほどあるではないか。同時に民間も一緒になつて、先づ實業家が乘り出し、その方の聯絡をやるがいい。徒に支那の底意を揣摩して彼が抗日の腹でゐる以上、何をやつても無駄であるといふ消極觀に終始し、だまされるのを恐れてばかりゐてはいけない。この際「少」

は「無」に優るのである。地域的についても、南がいけなければ、北だけでも取り止める工夫をするがいい。水銀の地にそゝぐや、孔として入らざるなしといふほど、隙間なく、ガッチリと蛇のやうに食ひ入るがいい。

再びこれを要するに、支那の對日方針緩和は、カムフラージに過ぎぬといふやうな說は、腹の中に叩き込んで置き、澄し込んで表面の勢ひに就き、それを手操つて食ひ込むべきである。

と、ここまでは現狀觀である。日支關係の將來はどうなるか？　好轉するか？　逆轉するか？　その見透しはちよつとつけられないが、たゞ一つ確かなことは、支那の態度を左右するものは、結局日本であるといふことである。(一)外交工作の擴大强化(二)滿洲帝國の發展充實、(三)國防軍備の遺憾なき整備、(四)財政の改善、この四つの工作を推進して、ヒタ押しに進むときは、いはゆる危機は解消すべく、否到來せざるべく、支那は結局沈默を守るの外ないであらう。東洋の局面に鬼を出すか、佛を出すか。それを決定するのは結局日本である。それ以外のいかなるファクターでもないのである。

## 米支關係

米國は、支那問題では、最後の登場者である。彼が舞臺に現はれた時、他の列國は、すでに相當の足場を支那に持ち、種々の權益をも獲得してゐた。そこで彼は、この間に割り込むべく、懸命の努力をした。そのために唱へ出した標語が「門戸開放、機會均等」であつた。それを振りかざして奮鬪した結果、多少の實效はあつた。借款に應じたり、湖廣鐵道の投資權を得たり、上海や天津に租界を持つたりした。しかし出發點から一歩を遲れてゐた米國は、事每に後手に廻らざるを得ず、徒らに列國に追隨してゐたのでは、所詮ウダツは上らないと氣附いたので、方向を代へて文化的方面に着目した。義和團事件の賠償金を免除して、その金で留學生を米國に誘引し、又支那に學校を建てたり、病院を建てたりした。この方針は非常に成功し、米支兩國の精神的接近を促がした。これから後、支那人は、米國こそ、頼りになる唯一の國だと感ずるやうになつたのである。

なほこの間に於いて、米國の世界に於ける地位は、グン〳〵高くなつて行つた。殊に歐洲大戰後は、ますます高くなつて行つた。時分はよしと、ワシントンに列國を會盟した。主唱者たる米國の外、日英佛伊白蘭葡支八國が、一九二一年ワシントンに集まり、軍備制限問題とともに支那問題を討議した。それは、世界に關涉を持つ支那問題の劃期的會議であつた。

この會議で、「支那とは何ぞや」といふ至極もつともな質問が飛び出したのは、支那に取り、決して嬉しいことではなかつただらうが、その他の收穫で滿足した。ルート四原則に依つて、不平等條約の廢棄が原則的に承認され、列國の特殊地位は原則的に否認された。門戸開放・機會均等の意義が變化して、支那領域內に於ける特殊的利益の設定を排除するといふことになつた。山東も還附されることになつたし、威海衞、廣州灣も同樣である。日英同盟廢棄、石井・ランシング協定廢棄といふやうな副產物もある。支那人の感想からすれば、列國が支那から取つて行つたものを、米國といふ優しい(!!)おぢさんが叱りつけて、支那に取返して呉れたやうな氣がするのである。故にワシントン會議の一役を經てからは、支那の對米信頼は、益々高まる一方であつた。

歷史的回顧に終始するわけに行かないから、この邊で打切つて、現在米國が支那人の信頼を利用して、何をやつてゐるかを述べると、文化方面の努力を外にして、支那に於ける航空事業に、全力を傾注してゐるといふことに歸する。尤も、五千萬米弗の棉麥借款といふものがあり、近頃の支那には珍らしく現實に成立した大口借款として、當然米國の對支援助の現はれと思はれるが、實は生產過剩で持てあましたものを、支那に賣附けたまでのことであるから、ここに詳說する必要を見ないのである。

先づ支那航空に喰ひ入つた米國の努力を見ると、中央軍の航空兵力は、航空隊四、驅逐隊、爆擊隊、偵察隊、杭州飛行學校、廈門航空處及び馬尾飛行學校で、飛行機二百臺となつてゐる。さうして杭州飛行學校には、米人教官及び飛行士二十餘名があり、校の實權を握つてゐる。これに次ぐ廣東派の航空兵力は、飛行隊六、飛行學校一、飛行機百數十臺となつてゐるが、その中にゐる米人は、設計主任一、顧問三、教官八、合計十二名である。米國は支那の統一を當分望みなしと見てゐるので、所在の實力者を助け、自己の欲するところを遂げるといふ風で、中支那では蔣介石を、南支那では陳濟棠を目標に、誘惑の魔手を延ばしてゐる。特に廣東に於いては、航空顧問といふよりは、一種政治的顧問に活動してゐることは、見のがせないところである。

民間航空事業としては、米國は一九二九年に手を着けてゐる。時の鐵道部長孫科と、米國カーチス系アヴイエーション・エキスプロレーションの合辦でやりかけたのがそれで、一九三〇年には、米國飛運公司（スチムソン・デトロイト會社）と交通部長王伯群との間に、米支航空契約成立し、米支合辦の中國航空公司（ザ・チャイナ・ナショナル・アヴイエーション・コオポレーション）が設立された。資本總額は一千萬元（一萬株）で、支那五千五百株、米國四千五百株の權利を有することになつてゐる。航空路線は（一）上海成都線（上海—南京—九江—漢口—宜昌—萬縣—重慶—成都）（二）上海北平線（上海—海州—青島—濟南—北平）（三）上海廣東線（上海—寧波—温州—福州—厦門—汕頭—廣東）の三線で所用機十六臺。（一）は毎日一回（二）は毎週三回、（三）は一週二回往復してゐる。現在右三線であるが、豫定線としては（一）廣東—貴陽—重慶線、（二）上海—香港—マニラ線が計畫され、すでに試驗を了つた。

飛行機賣込みも當然活潑で、支那に輸入される總額の十分の七を米國で占め、一九三三年一——八月の賣込高は、五百六十三萬元に及び、半年毎に倍加の勢を示してゐるといふ。

米國が對支活動の主力を航空事業に傾注してゐるのは、いかなる底意であらうか？　皆々しい說明を避け、讀者の心領意會を促がすにとゞめる。

### 露支關係

一九二九年七月十日、支那の東支鐵道武力回收に依つて、露支兩國の國交は、ここに完全に斷絶した。爾來兩國ともに、相當の努力を復交に傾注した。一九三〇年二月、南京政府外交部は、ハバロフスク協定（一九二九年十二月十六日）を越權と認むると宣言を發し、路線を改めて復交交渉に進むこととし、（一）復交、（二）東支鐵道、（三）通商の三項全權を莫德惠に與へ、同年十月から莫斯科に於いて、露支會議が開かれたが、年を越えて纏まらず、一九三一年九・一八事件後は、ますます絶望視されたのである。この形勢を見て、孫科、陳友仁等の復交論者は、一九三二年二月の中國國民黨二中全會に、對露復交案を附議否決されたが、政府部內に於いても、これを契機として復交論擡頭し、六月、原則的可決を見、駐露代表團の一員たる王曾思をして、申入れをなさしめた。それから半歲、表面には少しも現はれなかつたが、裏面に於ける進行は意想外で、ロシア代表ロシノフ、ソコロフスキイ南京に入るに及んで、外交部長羅文幹との間の交渉進捗し、一九三二年十二月十二日、露國外務人民委員リトヰノフのジュネーヴ訪問の機會に於いて顏惠慶（駐佛支部代表）との間に公文交換を見、國交の完全なる斷絶以來、滿三年五ヶ月にして、兩國は終に復交した。

爾來今日まで又一年半。その間兩國の關係はどうだつたか？　復交の利益を獲たのは、支那であつたか？　ロシアであつたか？　私はロシアであつたと斷ずる。

第一に貿易關係に就いて見る。一九三三年一月から十月までの貿易總額二三、四八四、八六〇元、ロシアからの輸入一八、三八五、六〇三元、支那からの輸出五、〇九九、二五七元、差引入超一三、二九四、七七八元に及んでゐる。斷交前に於いては、支那はロシアに對して輸出超過の國であつたのであるが、今や「俄貨傾銷」（露品ダムピング）の滔々たる勢ひに壓せられて、主客その地位を顚倒したのである。支那の輸出は、ロシアからの輸入の三分の一にも及ばないのである！　輸出の大宗たる茶に於いても、一九三二年の五分の三にも及ばないのだ。ロシアは勝ち、支那は敗けたのだ。

第二に赤化宣傳の方面について見ると、支那は復交に依つて至大の不利を被むつてゐる。復交の結果、大使ボゴモロフは南京に入り、北平大使館も復活され、天津上海その他の地方にも、領事館及び通商事務所が復活された。斷交中であつても、赤化の魔手は絶えず動いてゐたのであるが、復交に依つて上記機關が復活したことは、一層の便宜を赤化に寄與するものである。見よ！　北平大使館及び天津領事館は、中國共產黨の北方に於ける根據地となり、「北方落後」の頽勢を挽回すべく、懸命の努力が開始されることになつたではないか。更に有能なるヴイテヤ・ビザロフスキーは、天津のソヴエート・ロシア購買組合支店長セリヨーギンの斡旋に依り、江西中央ソヴエート區に潛入し、支那共產軍の軍事指導に當つてゐるではないか。ヴイテヤ・ビザロフスキーは、ロシア革命の際南部戰線に於いて活動し、デニキン派に對抗して勇名を現はした赤衞第十二軍團の政治部主任であり、一九二九年の露支戰爭にはブリユウヘル（カアレン）將軍の下に極東軍參謀となり、その手腕を謳はれた勇將であり、今回ブリユウヘルの推薦で、

一旦有事の日、總豫備隊と目する支那共産軍の最高指導者となつたのである。彼の外、ゲー・ペー・ウーのグレゴリイ・マルコフ、政治方面の指導員としてのマバクモフ等の猛者も、前後して江西中央ソヴエート區に入つたとの報がある。

これらの有能なる分子が潜入し、上海に於けるコミンテルン代表ミフ、米共産黨員にして、黨機關誌「チヤイナ・フオーラム」の主筆であるハロルド・アイザックス等の呼應し、中國共産黨・ソヴエート區・共産軍のために必死の努力をするといふことになれば、一體どうなるといふのか？

百害あつて一利なき露國の復交。近來稀れな馬鹿らしい取引きで、支那の愚や及ぶべからずといはざるを得ないのである。

## 六　支那時局に躍る人々

### 蔣　介　石（軍事委員會委員長）

相も變らぬ蔣介石。――支那の人物論をやる度に、定まつて第一に持ち出す名だが、さて、彼以外の誰を持つて來て、「壓紙」（けさん）にするかとなると、何人も選擇に苦しむだらう。彼は、依然として支那のピカ一なのだ。

ピカ一であるだけ、彼に對する嫉視も多い。それが、支那人の間にあるだけでなく、大して利害關係のない我々日本人の間にもある。最近、席を同じうした某老支那通が、かういつてゐた。「福建の騷ぎを、あんなにも鮮やかにやつつけた蔣介石が、共産黨をいつまでもノヲバらせて置くのは、可笑しい。察するに、共産軍をあのままにして置く方が、彼に有利なのではあるまいか？」かうした批評は、決して耳新らしいことではない。昨年も大阪紙の特派員が書いてゐた。「損な役廻りは、他人に押しつけて置いて、討匪だ、討匪だで、南昌に引き籠つてゐる。まるでヤリテ婆アだ。」

か、と思ふと、こんな批評もある「蔣介石は、日本人だ。あまり支那人らしくないので、周圍が皆弱つてゐる。」――これも、ある支那通の言だ。

一體、どちらが廬山の眞面目なんだらうか？　ちよつと判斷に迷ふが、自分の地位を有利に保つために、共産軍を徹底に討伐しないのだといふ觀測は、どうも首肯しかねる。私の見るところでは、彼の正面の敵は共産黨だ。故に彼は一番邪魔になるものに對し、眞正面から打つつかつてゐるに過ぎない。何故共産黨が邪魔物か？　蔣の第一の目的は、長江上下一帶に亘る、彼の地盤の確保に在る。それが出來なければ、蔣介石コオスは推し進められないからだ。孫文の後を繼いで國民黨の總理になるには、否、國民黨をかなぐり捨て、藍衣社の鬚眉をことごとく露はし、「支那のムツソリイニ」として起ち上るためには、先づ以て地盤を確立して置かなければならぬ。そのための共産軍討伐である。かう、平面的に解した方が、今のところ無難であらう。

逞ましい野心家だ。さうして無類の實行家だ。自信自任の資を享け、一歩一歩築き上げて行きつつある。彼は、男らしく歩みつつある。小面憎く、小氣味よい。ただ大望成就の日ありや否やは、彼の最大の敵――共産軍――を克服し得てゐない今日、豫斷の限りでない。

### 汪　兆　銘（行政院長兼攝外交部長）

彼は、國民黨の「聖人」と呼ばれる。それに、二樣の意味が含まれてゐることは、いふまでもない。德も高いのであらうが、御人善しでもあり、迂闊でもあるのであらう。

私はそれに加へて、「永久の青年だ。」といはう。明けて五十だといふのに、アノ若さはどうだ？　朗らかで、蟠まりがなく笑ましげになるやうな風貌をしてゐる。それでゐて、若い頃は爆裂彈を持つて、攝政王を殺しに行つたりしてゐる。同じく書生の本色を失はないといつても、胡漢民になると苦學生のやうだし、汪は應慶ボオイのやうだ。先輩には可愛がられるし、後輩にも、一應の勢力はある。ただし、頼りになるかどうかは、保證出來ないが。……

政治に無節操だと評する人もある。その行藏を見れば、成程と思はれる節がある。共産黨と組んで、間もなくそれと離れ、閻錫山、馮玉祥等の軍閥と結ぶかと思ふと、政敵、蔣介石の懐に飛び込んだりしてゐる。さればとて、その動機をまで疑ふ人はない。腹のキレイなことは、全支那的に、信ぜられてゐるからだ。

好きだが、頼りにならないといふ型を、我々は、世路に於いて、幾人かを發見するが、汪がその型だ。ともかく亂世の姦雄ではない。從つて蔣介石ほど、もはや我々の興味を惹かない。

### 胡漢民（新國民黨首領）

汪兆銘と相並んで、孫文門下の雙璧だが、汪の陽性に引き替へ、胡は頗ひ稀れな陰性だ。汪の凝滯しないのに對して、胡は又あまりに偏執し過ぎる。汪は洒然として蔣介石と手を握るが、胡は今でも蔣が憎くて堪らぬらしい。

この陰性が、彼をして不人氣ならしめる。香港に引つ込んで、正統國民黨を再建するのだといひ、いはゆる新國民黨の看板を掲げてゐるが、附き隨ふものは劉蘆隱、劉紀文、黄季陸等十數名に過ぎない。鄒魯等の廣東文治派も、都合のいいときは胡を利用するが、場合に依つては全然無視して憚からない。廣東の實權を握つてゐる陳濟棠に至つては、徹頭徹尾敬遠の一手である。かつては李濟深、陳銘樞等が胡を擁き、廣東國民政府を樹立し、胡をその主席に据へようとしたこともあつたが、陳濟棠のクウデタアに阻まれた。

李濟深等は間もなく胡に見切りをつけ福建に據つて反蔣の火の手を揚げた。一九三三年十一月の福建革命がそれである。しかし理論的に潔癖な胡漢民は、李等が三民主義を排斥し、孫文を打倒し、國民黨を脱黨したので、どうしても一緒になれず、時局に對する八大宣言なるものを發表して、福建政府にも加擔せず、勿論南京政府にも合作せず、無爲に終つた。福建革命が腰くだけにならず、尙數ヶ月持ちこたへてゐたならば、彼の「宣言」がモノをいひ、南京政府に復活出來たかも知れなかつたのだが、それも今では空頼みに了つた。

彼は好個の立法院長である。蔣介石に監禁される前、一年間ばかり、彼は立法院長として、足一歩も南京を出でず、立法に餘念もなかつた。その眞面目さは、遍ねく内外人をして畏敬せしめたものである。今、失意の境に在つても、毅然としてその志すところを變へず、些さかも取り亂した齟のないのは、流石に立派な教養の持主である。

### 宋子文（經濟委員會常務委員）

アメリカから棉麥借款を、歐羅巴から「聯盟の對支技術援助」を得、凱旋將軍の勢ひで歸國した宋子文も、事、志と違ひ、財政部長を棒に振らなければなかつた。その原因は色々あらうが、結局棉麥借款なるものが、想つたほど有利なものでなかつたこと、その使途に關して、蔣介石と衝突したこと、この二つに因るのであらう。不平不滿の折柄、降つて湧いた福建革命。一時は第三黨―宋慶齡―宋子文と結びつけて、革命の裏面に彼ありといふ風說が行はれたが、根なし草だつた。彼は、結局蔣介石を離れることは出來ないのだ。財政部長の職を離れると、やはり何も出來ないのだ。そこで、ひたすらに謹愼して、蔣の御機嫌を取結び、近い將來に復職しようと心掛けるに至つた。現に、彼の手創した財政部直轄の稅警團は、江西の剿匪前線に出てゐる！　更に最近の情報に據れば、聯盟の對支援助に淡い失望を生じ、支那の開發には、日本を除外しては何にも出來ないことを、多少悟るに至つたさうである。

彼に取つて、一つの進境と目して憚からないと同時に、彼の復職の期も、この分なら遠くはあるまいと想へるのである。

### 張學良（豫鄂皖剿匪副司令）

日本人として、問題にしないわけに行かなかつたのは、張學良の進退である。歸國後、果していかなる地位に就くかと、注視を怠らなかつたのだが、そこは蔣介石。學良とても滿更の馬鹿ではない。立派にこの難問題を解決した。すなはち豫鄂皖剿匪副司令として、蔣介石總司令を援け、漢口に鎭坐することとなつたのである。急に運ぶかどうかは判らないが、北支那の舊東北軍は、徐徐に中部支那に移動するだらう。萬福麟が河南に、何柱國が安徽に、といふ具合ひに。中にも王以哲のやうな男は甘肅か新疆にやられるかも知れない。外樣の于學忠だけは、河北に殘るだらうが。

漢口にゐて、彼は何をやるつもりだらうか？　いはずと知れた、名實ともに蔣の「副」となるつもりなのである。剿匪も副司令、藍衣社も副社長、さうしてファッシズムいよいよ勢ひを得ば、蔣の大總統の下に彼は副大總統となる心算なのだ!?

**孫　科**（立法院長）

親の光りが七光りといふことがある。孫科に於いてこの感が深い。彼がとにかく若干の乾兒を率ゐ、立法院長として、多少の勢力を中央に持つてゐるのは、詮じつむれば、孫文の嫡子であるからである。

しかし、それだけで片附けてしまふのは、あまりに可愛想である。軍資金をつくることも相當心得てゐるし、一九三一年鐵道部長を一擲して廣東に下り、廣東國民政府の創立に馳せ參じ、海軍空軍の實權を握るといふやうな、政治的離れ業もやれる。實際この當時などは、一時的だが、汪兆銘よりは勢力があつたくらゐだつた。だから南京、廣東兩政府の合併が成立すると、彼は眞先きに北上し、行政院長をかち得たのだつた。

だが、それも束の間、汪兆銘に取つて代られ、同時に廣東に於ける根據（海軍、空軍の實權）も陳濟棠に召上げられ、暫らく流浪した後、立法院長に返り咲き、文句はあらうが、伴食をつとめてゐる。

世界觀が凡庸で、日本に對する理解の足りないのは、彼の著るしい缺點である。この點今日の宋子文にも劣るであらう。チト乃父の「大亞細亞主義」でも讀み直したらどうだらう。

**陳濟棠**（廣東實力派首領）

蔣介石に次ぐ、支那第二の大軍閥の首領であるが、その世に顯はるるや遲く、僅僅四年來のことに過ぎない。一九三一年、胡漢民監禁事件が機となり、古應芬の南下に依つて、廣東國民政府が樹立されたとき、陳銘樞を押しのけて、はじめてその存在を世に知られた。それから滿三年になるが、廣東に來た政客は、汪兆銘にしろ、孫科にしろ、伍朝樞にしろ、皆彼にイビリ出された。胡漢民にしてからが、手も足も出せなかつた。鄒魯に至つては、全く陳の傘下に入つたも同樣だ。

金をつくること、無類の妙手だ。八千萬はあらうといふ。こんども福建革命を利用して、蔣から大分セシメたといふ噂もある。入方に氣を配り、多少の金も撒き、地位の保全に餘念もない。部下を馭することも相當に上手で、李濟深や陳銘樞に、絶えずねらはれてゐながら、まだボロを出さない。なかなかの怪物である。しかし志は大でなく、何等面白味はない。

**白崇禧**（廣西派首領）

某老支那通が最近支那を視察しての話に、支那は將來廣西化するか、江西化するかのドッチかであるといつてゐた。江西は共產軍の本據だから、江西化は赤化と解せられるが、廣西化がちよつと分らない。よく聞いて見ると、廣西の內部が一團となつて、燃ゆるがごとき意氣で復興に當つてゐる。南支那で、否支那全體で、一番治まつてゐるのが、廣西だ。これが他の省に及ぼされたとき、支那ははじめて救はれるといふ、多少希望を加味しての斷定だつた。

この復興運動の中心となつてゐるのが、小諸葛孔明の名ある白崇禧だ。彼は今李宗仁を押し立てて、大童になつて復興に努力してゐる。陳濟棠と違つて、彼は中原にも志がある。

かつては蔣介石を畏怖させたといふ彼は、さしづめ蒲生氏郷だ。惜むらくは病氣があるさうだが、天もし年を假さば、面白い展開が見られやう。

**閻錫山**（山西派首領）

南支那で白崇禧が注目されるのと同じ意味で、北支那で再認識され出したのが閻錫山。かつては反蔣戰線に躍り、盟主と推されたものが、そのツマラナイことを自覺して以來は、山西綏靖主任として、舊地盤の整理に餘念なく、一方經濟開發に重きを置き、相當の成績を擧げてゐるさうだ。

尤も、もとをただせば、山西は支那の模範省であり、彼は模範督軍であつたのだ。馮玉祥の口車に乘つて、反蔣戰に飛び出したのは彼に取つては一時的失錯でしかない。今日の彼の態度こそ、その眞骨頭なのである。毫も怪しむに足りないが、ともあれ、彼が本來の面目に立ち歸つたことは、北支那の安定のために最歡迎すべき事象たることは間違ひない。

**韓復榘**（山東省政府主席）

韓の名を聞くこと久し、而して我等が彼を眞に發見したのは、この三四年來のことである。世を擧げて排日の風潮滔滔たる中に山東のみは、斷乎としてそれに捲込まれない。珍らしいことがあるものだ。省主席は誰れか？　と尋ねて見て、我等ははじめてそこに韓復榘を發見したのである。

彼が卒伍の出身であるにせよ、いかにも一介の武辨でしかない風貌を有するにせよ、よくその地位を認識し、俗論に阿ねらなかつた態度は、見上げたものといはざるを得ない。

支那に於ける模範將軍に推す所以である。

**黃　郛**（北平政務整理委員長）

滿洲事變、上海事件以後、支那に於いて、眞に卓越せる世界觀を持する數人の志士は、日本と支那との間を、このままに放任して置いてはならないと感悟した。これは實に敬服すべき識見である。而も彼等はこれを實行に移し、二年間倦まずに工作をつづけた。時機は來た。さうして黃郛が出山した。さうして北支那は、今日の安定を得てゐる。

名優黃郛を舞臺に上せた蔣介石、汪兆銘兩監督を認めると同時に脚本作者をも認める必要があらう。尙附言するが、この脚本作者は、同じテエマを編建にゑがきある程度の效果を擧げてゐるのである。

**毛　澤　東**（中國ソヴエート主席）

――殿りに控へしは、中國ソヴエート主席毛澤東である。蔣介石の敵役たる彼は、湖南師範出身のインテリで、しかも肺病やみの一書生である（といつても四十歲は越してゐるが）。在學當時から、各地の新聞を集めては、隅から隅まで熟讀してゐたさうだ。さうして得た結論は何か？　支那革命は結局農民運動だといふことだつた。そこで八・七會議後鄕里に歸つて、農民軍三千を組織した。それが今日數十萬といはれる共產黨の濫觴だつた。蔣介石が、『後生畏るべし。』といつたかどうかは知らないが、國民黨の機關紙が、「きはめて組織力あるボルシニヴイキだ。」といつたことは全くの事實である。（『中央公論』一九三四・五）

# 第三節　激化する列强の對支利權獲得運動

**天羽聲明は支持されねばならぬ**

滿洲事變以來、日支の關係が疏隔したのを好機に、列國は、火事泥的に、利權獲得の猛烈な運動を開始した。それは、日清戰後における、利權競爭時代の再現に外ならず、無序秩、無統制さもほゞ相似てゐる。「東洋における平和の守護神」と任じてゐる日本。それでも隨分辛抱してゐたのだが、たうとう我慢し切れず、かんしやく玉を破裂させたのが、四月十七日の「天羽聲明」である。用語に、洗練さを缺くといふ非難はあらうが、盛られた內容は、決して一時の思ひ附きではない。この數年來、日本政府が痛切に感じ、且つ行つて來たところを、齒に衣着せずにブチまけたものである。

さて、今、私の意圖は、列國最近の對支策動を暴露して、「天羽聲明」の妥當性を證しするに在るのだ。それにしても、「列國の對支進出、援助、侵略。」と、苟しくも、話が大きい。頭緒紛繁、どこから說き起さうか？　に、チクと迷ふが、宋子文がそれを助けて與れる。南京政府部內での歐米派の巨頭、小面憎く、有能な財政家。一九三三年の春、世界經濟會議への支那代表として、先づアメリカ、それからジユネーヴ、歐洲各國を遍歷した。彼はアメリカで棉麥借款に成功したのだ。

借款以外のことで、彼の果し得たところは、先づ「聯盟の對支技術的援助」であらう。聯絡員として、數年來宋の相棒であるライヒマンが任命されたことは、相當重大な意義を持つものではあるが、しかし、技術的援助そのものは、一九二九年以來、繼續して實行されてゐる。別段珍らしいことではない。それよりも、私が重大視するのは、（一）支那經濟再建のための國際コーポレイション案。（二）財政諸問會案が、宋子文によつて提起されたことである。前者は、支那及び某某六國を以て組織せんとするものであり、後者も同樣六國代表を以てし、徹頭徹尾日本を除外しようとした。宋の反日の眞骨頭は、ここにおいて遺憾なく暴露された。さうして彼の棒組となつて、熱心にその事に奔走したのが、誰あらう、前の聯盟事務局長（一九一九―二三年）であり、かつては佛國

財團代表だつたこともある著名の財政家、ジヤン・モネであつた。勿論ライヒマンも參畫してゐるし、例の椋鳥キンダースレイも一役買つてゐるが、モネの奔走力、就中第一。

幸ひにも、兩案とも成立しなかつた。第一案に對しては、四國財團の存在が、國際コーポレイションの成立を阻止した。第二案に對しても、同樣の經緯があつた。結局、第二案の變形として、モネ、ソルター（前聯盟財政部長）等の南京政府顧問就聘が實現したのみであつた。

かう見て來ると、宋子文巡遊の土產は、第一に、棉麥借款五千萬金弗、第二に、聯盟の對支技術的援助の徹底（ライヒマン任命）、第三に、モネ、ソルター等の顧問受聘、の三つとなる。それに附帶して、宋歸國後調整したのが、全國經濟委員會の擴大强化である。宋はこの機關に依りライヒマン、モネ、ソルター等の後援を得て、いはゆる「經濟獨裁」を完成し、南京政府の實權を握るつもりだつたが、さうは問屋で卸さず、蔣介石の一睨みで、宋は財政部長を棒に振つた（一九三九年十月末）。その主因は、棉麥借款の不始末。すなはち、同借款によつて輸入された棉花の額が、華商紡績の需要以上に出で、完全に消費し切れず、人もあらうに、敵視した日本紡績に賣込まうとして、「國策による拒絶」に會ひ、いよいよ持てあまし、一棉を賣つて、小麥を賣つて……」と、アテにした金が得られなかつたからである。揚句の果てか、全國經濟委員會の第一回全體會議（一九三四・三・二六）で、五千萬金弗の借款原額を、棉花一千萬弗、小麥六百萬弗、麥粉四百萬弗、合計二千萬金弗（銀で四千八百萬元目當）に減額されたのである。しかも、專門家の測定によれば、小麥及び麥粉は、何とか處分出來さうであるが、棉花の方は、今日まで五萬俵處分濟、一千萬弗の棉花を十五萬俵と見積れば、殘餘の十萬俵を處分するには、今後約一ヶ年を要すべく、場合によつては、又後に殘額の解約が行はれはせぬかとある。散々の體態だ。

棉麥借款の不始末は、聯盟の對支技術援助に影響し、全國經濟委員會に依つて立案された經濟建設事業費二億元の豫算は四千八百萬元見當に激減され、本年度において支出される見込みのある費目は、七省公路費その他九費目、この金額合計一千三百五十萬元に過ぎない。泰山鳴動鼠一匹。ここにおいてソルターは、「支那の現狀は、要するにワンダフルだ！」と、嗟嘆して去り、ライヒマン亦慚愧の汗を拭ひつつ、「支那經濟開發十年計畫」の作文を抱き、ジユネーヴに歸る。獨り、モネあり宋子文、李石曾を相棒とし、四月上旬、「中國建設銀公司」の設立に奔走。支那產業開發のため外國側から資本と材料の供給を受け、全國經濟委員會の指導下に、事業を遂行するといふ計畫で、中央銀行四百萬、中國銀行二百萬、交通銀行百五十萬、四明銀行百萬、宋子文、孔祥熙（財政部長）等百萬、の出資を以て、すでに一千萬元を集め得たと稱してゐるが、いづれも內諾程度。ことに中央銀行の定款では、かうした種類の投資規定なく、無理にやらうとすれば、中央政治會議を通す必要があり、しかも通過の見込みなしとのことだ。モネも影がうすい。

これ、しかしながら「日本を除外して」といふ初一念の非に起因してゐる。「支那の經濟建設は、日本の援助乃至合作なくしては、不可能だ。」この大前提を忘れた、當然の歸結である。

### 潛入する米國資本

棉麥借款から、中國建設銀公司まで。――これが、列國の對支援助乃至進出の本流であるが、この外に、傍流として、諸種の努力が試みられてゐる。米國の支那航空事業援助のごときがそれだ。

この「傍流」の部門は、きはめて多岐。飛行機、自動車、武器、機械、鐵道材料の賣込みもあれば、軍事顧問の受聘などいふ、「智惠の援助」もある。第一に米國。その最顯著な努力は、航空方面である。アメリカが、どうしてこんなに力を注ぐか？　その底意を說明せよ、などと、そんな野暮な讀者ではあるまい。ここいら、一切拔きにして、エキスだけを書く。空軍に喰ひ入つた力。中央軍の航空兵力は、航空隊四、驅逐、爆擊、偵察諸隊、杭州、馬尾兩飛行學校、厦門航空處で、飛行機二百臺。この大部分が米國の協力に成る。杭州飛行學校に、米人教官及び飛行士二十餘名ゐて、校の實權を握つてゐるが、校は近く南支に移り、東洋一を目ざす大飛行場の建設と相俟つて、支那空軍の總本營となる筈だ。中央軍に次ぐ航空兵力は、廣東の飛行隊六、飛行學校一、

飛行機百數十臺だが、その中に設計主任一、顧問三、教官八、計十二名の米人がゐる。この顧問といふ奴、單なる航空顧問ぢやない。恐るべき政治顧問だ。南支の實力者たる陳濟棠をマークして、よからぬ進言を試みて來たことは、三島泰雄氏が暴露した通りだ（『國際評論』一九三三年九月號一四四―五九頁）。民間航空事業へは、一九二九年來喰ひ入つて、一九三〇年に米支航空契約成立、合辦で中國航空公司（支部五五〇〇株、米四五〇〇株）ができた。爾來足掛け五年、社運ますます隆盛、ついこの間、獨支合辦の歐亞航空公司との合併談が成立し、完全な制覇ができた。飛行機の賣込みにおいても、斷然優勢で、支那に輸入される總額の十分の七はアメリカからであり、一九三三年一――八月の賣込み高、五百六十三萬元といひ、半年毎に倍加する趨勢にある。

「招商局借款」支那の國營汽船會社である招商局と、米商チヤイナ・リアルテイ會社間に二千萬兩、ダラー汽船會社との間に一千萬兩合計三千萬兩の借款が一九三二年にほぼ成立したが、裏面にスキヤンダルがあつたことが發覺し、前渡金七十萬元だけを認めて解約。

「江蘇北部開墾借款。」六千萬元で、一九三二年に假契約調印との報があつたが結局未成立。

「自動車路建設借款。」これも一九三二年のこと。いはゆるモータライゼイションの一つの現はれで、江蘇、浙江、江西、河南四省自働車路建設目的の一千萬弗借款の計畫だつたが、終に成立しなかつた。この外、一九三三年十二月に、フォード會社と實業部との間に、米支合辦自動車工場設立契約成立との報があつた。

「漳州澳港借款。」江蘇海州連雲港築港計畫だが、これは現實に工程進捗中である。その資金が問題。オランダから借入れたといふ說があるが、その蔭にアメリカがゐるといはれる。一億元程度と思はれるが、詳細な點は判らぬ。

「古物借款。」瀛河戰前張學良が南に運んだ北平故宮博物館の古物を擔保に、四千萬元程度の借款說が喧傳された。眞相不明。

「廣東借款。」一名文化建設借款といはれるもの、三千萬元見當らしいが、成立は不明。

「漳龍鐵道借款。」福建省南部の重要地點漳州から、江西境の龍巖（いつも共産軍に取られるので有名な地。）までの漳龍鐵道敷設計畫。南洋華僑が主となつて、一九三三年五月頃から大分騷動があつた。華僑の黑幕にアメリカがあるといふので、各方面から注目せられた。何しろ臺灣の對岸、わが日本との間には、明治三十一年の福建不割讓の交換公文があり、大正四年の交換公文で、沿岸不割讓が謳はれ、その精神から推すと、この省の鐵道に外資を用ふることは、日本の好まざるところであるので、相當の警戒を要した。しかし同年十一月に福建革命が起つたので、この計畫も自然中止の姿となつた。

### 蠢動する英國の勢力

第二に英國。團匪賠償金を巧妙に利用したのは、米國が第一の例であるが、遲れ馳せながら、英國もなかなかうまくやつてゐる。日本など、文化事業の一點張りだが、英國のは、一旦鐵道その他の建設事業に注入し、その利子を文化事業に投ずるといふので、結局經濟的進出の資金になる仕組みだ。すなはち一旦、一九二二年から一九四五年までの受取額約一千一百二十萬磅を支那に返還し、その中の約五十萬磅を天引きして香港大學等に寄附し、殘額約一千七十萬磅のうち、約六百八十五萬磅を倫敦の「購買委員會」に寄附し、鐵道その他の建設事業に要する材料買入れ費に充當し、約三百八十五萬磅を「中英庚款董事會」に交附し、鐵道その他建設事業費に充當するといふのだ。名義上は一旦支那に返還し支那の金であるやうに見えるけれども、英國の主張は、中英庚款董事會における英人委員を通じて完全に貫徹され、事實上英國資金と見るべきものである。この巧妙な方法により、一九三〇年から三二年まで、購買委員會を通じての材料買入十一口、中央庚款董事會から投資したものが、鐵道その他の建設事業に投ぜられてゐるし、一九三三年には、粵漢鐵道に對する四百五十萬磅、招商局に對する四十萬磅、計約五百萬磅といふ巨額の貸附が、董事會を通過した。

「四川石油借款。」一九三三年六月、時の駐支公使ラムブソンの四川旅行に引かけて、四川石油工廠設立のための一千五百萬元借款說が流布されたが、噂にとどまつたらしい。

「硫安廠設立計畫。」これは英獨支合辦で、資本一千一百萬元と傳へられ、目下交渉中。

「江西タングステン鑛一手販賣。」英商アーノルド商會が一旦獲得（一九三三年春）したが、各方面の反對で取消された。

「廣東對英借款。」陳濟棠との間に二千八百萬元借款成立説があつたが、眞僞不明。

**獨・佛・伊の割込運動**

第三にドイツ。「鋼鐵借款。」南京政府實業部と、獨商喜望公司との間に、國營鋼鐵廠設立のための借款五千萬元が、一九三二年一月二十日に、假契約調印を見た。これは確實。

「四川鋼鐵廠借款。」喜望公司と交渉中。

「江西タングステン鑛經營。」六百萬元の獨支合辦。交渉中と解せられる。

「雲南飛行機契約。」本年五月四日某處着電によれば、雲南省政府はドイツのユンケル會社と飛行機製作所の建設について蔣介石監督の下に最近契約成立し・調印を了したが、右契約の内容は大體次ぎのごとくである。

（一）雲南に千平方メートルの飛行場を設け、飛行場側に飛行學校を建設し、これに要する飛行機器材は全部ドイツから供給を受ける。

（二）一年間の製造能力は八十臺とし、ドイツから技師十五名を招聘する。

（三）飛行學校では飛行機操縱術、空軍爆擊、射擊法等を教授し、學生二百名を收容する。

（四）八十臺中の教機は、近日中にドイツから輸入される筈であるが、ドイツでは一年間六十機までは無代で修理する。

「フォン・ゼークトの就聘。」蔣介石は、ヒットラーのドイツの讃美者で幕中にドイツ人教官の多いこと、周知の事實だが、こんど終に大物を取り込んだ。フォン・ゼークト將軍がそれで、四月すでに着任。その後を逐うて、ファルケンハウゼン將軍も來る、共産軍に入つた赤露のビザロフスキーに對抗して、ゼークト、ファルケンハウゼンの剿匪軍指揮が實現するわけだ。

「歐亞航空公司。」支那の航空界の十分の三を占めてゐたが、最近米支合辦の中國航空公司に併合されたことは、前述の通りである。

第四に佛國。モネの活躍のほか正太鐵道材料借款、廣西派への飛行機供給説がある。

第五に伊國。團匪賠償金擔保の支那銀行借款四千三百萬元成立は確實。その中の百十萬元が、伊國からの飛行機購入に充てられすでに十三機購入濟。それに附帶して、飛行大佐十二人着任、南昌飛行學校教官になつた。

以上、各國の活動。出來た、出來たといふ、支那の宣傳が大きくて、實際に成立したものは、案外少いともいへるが、しかし默過は出來ぬ。「天羽聲明」が尙、しかしその妥當性が證しされる所以。ただしかし、一片の聲明を以てしては、列國の「冒險者」を屏息させることは難かしい。無統制な援助、協力、進出、侵略の無謀を覺醒せしめるための、わが旣定方針に基づく努力は、今後も不斷に繼續されなければならぬ。差當り、對支援助の根本前提たる對支債權整理に關して、列國をリードする必要があらう。わが旣定方針、これその一端である。（『世界知識』一九三四・六）

## 第四節　支那政局首腦者論

### 一　五全大會延期——蔣の腹藍

豫測の外の事態が、支那に起つた。反蔣陣營の整備が、物物しく傳へられ、その決戰のアレナが、十一月十二日を以て召集される、五全大會（中國國民黨第五次全國代表大會）であらうとせられてゐたとき、突如、大會延期の切札が、蔣介石に依つて、投ぜられたのである。

「中央公論」一九三四年九月號所載拙稿、「共産軍の頽勢と蔣介石の獨裁強化」に於いて、私は、蔣介石コースとして、次ぎの三つを想定した。

（一）五全大會に、黨のマグナ・カルタである「總章」の修正を持ち出し、國父・孫文に對する敬意のために、永久に空位としてある「總理」の地位に、誰でも座れることにする。といふ心は、蔣が國民黨の總理になるといふことは、彼が、次いで

中華民國國總統となることの豫約であるからだ。

（二）これが通らなければ、彼は、第二のコースを採るであらう。國民黨を蹴飛ばして、藍衣社を明るみに出し、一氣に支那ファッシスティを樹立するであらう。當然、「無血革命」ではあり得ない。

（三）五全大會に、「總章」修正案を出さず御座成りの議案を討議するだけで、有耶無耶に空過し、一切萬事を一九三五年に持ち越すであらう。

三つのコースの可能性の比率は、二・三・五、或は三・三・四であらう。――とも、想定して置いた。第三コースに、大きい率を與へたのは、蔣介石の羽翼がまだ豐滿でないと觀たからであつた。私としては、きはめて用心深い豫斷のつもりであつた。にも拘はらず、蔣介石の腹藍は、はるかに私の豫斷の上に出でた。

「總章」に拘泥するとき、黨大會は二年に一回、やむを得ない場合、一年を延期し得るといふからには、到底延期はあり得ないと斷ずるのが常識だが、――必要の前には、「總章」も何も、あつたものではない。「剿匪部隊の將領中から、多數の代表を抽き出し、大會に出席させることは、剿匪軍事に差支へる故、大會を延期されたいと、陳濟棠等の電請があつたから。」といふ理由で、アッ氣なくも延期となつたのだ。いつまで延期するのか？　來る十二月十日に五中全會（第四屆――現在――中央執行委員全體會議）を開き、その席上で、それを決するといふのである。

## 二　冷頭冷腦の王寵惠

「責任を重んずるが故に空談をしない。」

と、常にいつてゐる蔣介石は、成程、決して戰術を露說しない。よき謀を、密室に決するが例である。從つて、彼がいつ大會延期の腭を堅めたのか？　知るに由がない。しかし、推測は、つかぬこともない。彼が、十月五日武漢に張學良を誘ひ、十日の洛陽軍官學校分校開校式に臨む前、すでに秘書長・楊永泰あたりと、談合を終つてゐたものと想はれる。南京か、廬山の一角にゐて、その優秀な偵察網に依つて、西南及び國際の動向を、手に取るやうに知つてゐる彼は、「この際、西南と事を構へるのは、萬事に面白くない。氣を抜くに限る。」と、想ひついたに相違ない。汪兆銘（行政院長）からも、さういつて來る。上海にゐる、中立派の中央委員からも同じやうな意見をいつて來る。「だが、誰を西南にやつて、話させるか？　剿匪を御題目にして、それには、羅卓英――第十八師長――でも構はないが、政治的接衝には、冷頭冷腦の人間でなければ。……」――眉間に皺を寄せた彼が、考へ出したのが王寵惠。國際司法裁判所の判事として、ヘーグに行つてゐた王寵惠が、幸ひに歸國してゐる。ある意味で、支那での元老の一人。閲歴は、申分ないし、近年國內政治から遠ざかつて超然派だし、おまけに廣東人だし、これ以上の適任はない。廬山に呼んで、旨を授け、香港に打ち立たせた。上海から王と同行した劉盧隱は、胡漢民の大番頭格の男である。

## 三　面紅耳赤の胡漢民

王寵惠と劉盧隱とが、香港に着いたのが、十月の十一日。十五日まで滯在して恐らく連日、妙高臺の胡漢民邸を訪ひ、中央の意圖を示して、胡の反省を促がしたらしい。ここに、「らしい」といふのは私の手にした情報網が、香港會談といふ重要な節目に至つて、ポックリ大穴があいてゐるからだ。餘程秘密にしたものらしく、新聞電報も雲を摑むやうなものばかり。しかし、この會談が、いかにも重要であつた證據には、十六日に王が廣東に着く。その夜發の廣東電報が、早くも南北妥協成立を報じてゐるのである。かうした重要性を帶びた會談であるから、ただ「判らない。」で捨てて置かず、少しく想像を交へて、大體を揣摩すれば、多分次ぎのやうなものであつたらう。

「展堂、少し大人げないではないか？」

「だが、南京のやり方が、あまりヒドいし、若い連中は、大分憤慨してゐる。敢へて事を好むわけではないが。」

「五全大會は、延期してもいいと、南京ではいつてゐるが、どうだ？」

「うむ。憲政時期に入るのは、尙早だと思ふ。」

「外遊問題はどうなつた？　八十萬元くらゐは、出せるといふのだが。」

「……」

胡のところにはこれまで幾人かの說客が來た。しかし、彼等は、いづれも當面の政治に、關涉を持つてゐる人人である。動機に不純なところがある。それが胡漢民の潔癖性に、グッと障つた。――朝日の和田特派員のインタアヰウの中に「……と、語氣鋭く刎ねかへし、廣い額に皺を寄せ、肩を怒らした。」（東朝一〇・一五）とあつたが、よく胡の爲人を表現してゐる。――ところが、こんどの王寵惠は、これまでの說客と違ひ、冷頭冷腦の人である。淡淡として說き入ると、流石個性の强い胡漢民も、忸怩たらざるを得なかつたのであらう。王の辭は、血壓の高い胡に、アニマザの作用を現はした。

王が、蔣から託された使命は、足未だ廣東を蹈まずして、その大半を成就したのだ。故に、十六日、廣東に入るや、途端に五全大會延期の同意が與へられ、十八日、南京にその反響があつた。蔣が西北各地を廻り、突如として北平に現はれ胃病の療治のためロックフェラー病院に入院した二十四日同じ日に南京中央政治會議は、アッ氣に取られた大向ふを尻目にかけて、大會延期を可決し去つたのである。

### 四　紅軍頽勢が延期の眞因

大會延期に決まるまでの經過は、上述したところに依つて、ほぼ明かになつたと思ふ。では、「總章」違反の危險を冒して、敢へて延期の策に出でたのは、蔣の側に、どんな理由があるか？「イヤならよせ。」と、突つ放したとか、或は、對手の意表に出て、勢ひ込んだところを、フワリとそらしたとか、又は、國際の動向を參酌したとか、色色と考へられるが、根本的な理由は、今暫らく西南との衝突を避け、時日を遷延するうちに、一層有利な地歩を占めたいといふ魂膽に外ならぬと私は思ふ。それを立證する爲には共產軍第五次討伐は、一九三四年下半期に入つて、ますます進捗して來た。江西に於ける四大ソヴエート區のうち、三區は潰滅し、僅かに中央ソヴエート區が贛化、寧化、清流、汀州（以上福建、會昌、瑞金、雩都、寧都（以上江西）の八縣を範圍として殘つてゐるだけである。福建に於いては、福州の北、羅源地方に羅炳輝軍の殘黨が殘つてゐたが、徐徐に北方に追ひ詰められ、方志敏軍と一緒になつて、浙江南部の龍泉、江山、開化、遂安方面に分散してしまつた。かういふ頽勢になつたので、共產軍は浮足立ち、湖南への西漸を開始した。最先きに進んだのは、もとの江西・湖北・湖南省境區にゐた蕭克軍で、江西・湖南省境に沿うて南下し、湖南南部を通過し、一時廣西北部に侵入したが、轉じて貴州北部に入り、天柱・玉屏・石阡・餘慶を占領し、沿河から南下した賀龍軍と、銅仁・印江地方で合體した。つづいて彭德懷軍が、その後詰として湖南に入り、最後に朱德・毛澤東軍が、中央區の南端、會昌から、南して安遠を占領し、西して贛水を横斷し、その先鋒は、湖南汝城に達したとの報がある。（湖北に於ける湖北・河南・安徽省境區は四五縣、四川東部に於ける四川・陝西區は五縣を維持してゐる）。すなはち蔣介石が、數年來精力を集中して來た剿匪事業は、今やそのゲームの終局に近づきつつあるのである。江西の共產軍が湖南に入り、貴州を侵し、賀龍軍と合體して、湖南・貴州・四川區ともいふべき新ソヴエート區を形成することは、所詮、隱蔽たることを失はないけれども江西・福建を肅淸して、共產軍を上記地方に追ひ込むことは、當面、蔣の希望するところである。何となれば、一九三三年十一月の福建革命を潰滅させ福建をその勢圈內に入れたことが、蔣に與ふるに測り知られぬ利益を以てしたと同樣に、江西の共產軍を湖南に追ひ込むことは、蔣をして、江西南部に重兵を集中せしめ廣東省境を壓することを、可能ならしめるからだ。それは同時に、廣東・廣西と湖南との間に、共產軍といふ障碍物を置き、ややもすれば態度を二にする湖南の何鍵と、西南派との接近を邪魔させる結果ともなるのだ。

かうした有利な地歩を、五全大會の前に占めやうといふのが、蔣の期待であつたのだが、それには、大會の召集期が、ホンの少しだが早過ぎた。豫定通り、十一月十二日から開會するとし、それが動機となつていよいよ西南派と衝突するやうなことになれば、江西には、まだ共產軍といふ邪魔物がゐて、作戰の障碍になるし、湖南と西南派との聯絡もつき易いし、「位取り」といふ點に於いて、どうも面白くない。如かず、西南派の機先きをヤンワリと受けて、大會延期と出て、時日を遷延し、共產軍の退出を待たんに

は、――これが、九月下旬に於ける蔣の心算であつたらう。かくて、大會延期の眞因は、共産軍の頽勢といふ事實の中に、求められるのである。

## 五　白崇禧――支那の瀋生氏郷

五全大會は、延期せられた。しかし、危機は、決して去つたのではない。ちよつと間が延びただけである。とすれば、蔣も、反蔣派も、今後ますます對抗準備に熱中するであらう。故に、反蔣陣營の檢討は、依然として今日の問題である。

いはゆる西南派中に包含せられる各派のうち、胡漢民の態度については、すでに述べた。彼は、最忠實な三民主義者として、新國民黨などを組織し、一等調子が高いやうに觀られてゐるが、實際はどんなものであらうか？　行政院長として中央に復活出來れば、案外それで納まるのではなからうかといふ氣がする。蔣介石が國民黨を蹴飛ばし、支那のヒットラアになるとすれば、その下にすはるといふことは、勿論考へられないが、その場合を除いては、中央復歸を肯んじないものでもあるまい。この三四年間、香港に頑張つて、廣東國民政府樹立の運動をやつては見たが、結局モノにならなかつたのであるから、今日では、もはや廣東ばかりに執着はすまい。その證據として、私は、本年春頃、一時傳へられた彼の外遊說を擧げる。根も葉もないことだと、當時は一笑に附せられたが、私はこの說の眞僞が、彼の態度を解く鍵だと思つて執拗に檢べた結果、最近、正しくその話が進んでゐたことを確かめ得た。種種の故障で、實現はしなかつたが、今後局面の進展に連れて、蒸し返される可能性が充分ある。蔣が國民黨を蹴飛ばさない限り、胡が外遊し、やがて中央に復歸することは、先づ間違ひあるまい。

鄒魯、蕭佛成といふやうな、いはゆる廣東文治派は、一面胡漢民をかつぎ、一面陳濟棠の實力に依存し、更に手を延ばして、廣西派とも聯絡してゐる政客の一群である。彼等の反蔣は、南北妥協の結果西南執行部、西南政務委員會の兩機關が取消されて、彼等の活動が封ぜられるといふことに原因してゐる。

廣東實力派の陳濟棠。これが、西南の反蔣空氣をして、曖昧模糊ならしめてゐる根元である。最近、日本の一部では、陳と廣西派とが、完全に一致してゐると傳へてゐるが、眉ツバものである。元來廣東と廣西とは、流行語の「喰ふか、喰はれるか。」の關係に在るもので、陸榮廷・陳炯明の昔から、李濟深・陳銘樞の昨日陳濟棠・李宗仁・白崇禧の今日まで、一貫して渝らない。故に、今後の局面に於いて、反蔣戰爭が起つたとする。福建・江西の省境に集中した蔣軍は、一氣に陳濟棠の廣東に侵入し、蔣の空軍は、爆彈を廣東市に雨降らすであらう（しばしば述べた通り、江西の共産軍は、このとき全部湖南に移動してゐると豫想するのである）。と同時に、否、それよりも先きに西の方から廣西軍が進擊して來るであらう。加ふるに、反蔣戰が起つたといふ、それだけの理由を以て、廣東財閥は、もはや陳のいふことを聽かなくなるのだ。廣東財閥が、今日陳を支持してゐるのは、彼が、反蔣戰などいふ馬鹿なことをやらないと、見極めをつけてゐるからなのだ。（廣東の商人が、いかに戰爭をイヤがつてゐるかは、共産軍討伐のために一小部隊を省境に送ると、公債の市價がすぐ下落するといふ一事に徴しても知れる）。北と西に敵を受け、その上足許が崩れては、陳は失脚の外ない。元來打算のうまい陳濟棠が、こんな馬鹿らしい取引きをする筈がない。

かう觀て來ると、反蔣陣營の中心は、どうしても廣西派の外には求められない。いかにも蔣と廣西派とは、歷史的に相容れない。蔣介石が北伐に出發するとき、廣西派の李濟深が參謀長となり、しかも蔣に隨行せず、同派の白崇禧を參謀長代理とし、自分は廣東に留守居役となつたとき、これは、廣西派が、北伐成功と否とに論なく、廣東を永久に占據する魂膽だと、早くも疑するものがあつた。萬一北伐が失敗したら、李濟深は、蔣介石を閉め出しただらうとまでいはれた。又、當時李宗仁は軍長として出征したがそれに對する李濟深の後方からの援濟が遠く諸軍の上に出で、それがために、李軍の戰蹟がよかつたのだとまで疑された。かうした情僞があつたから、蔣は廣西派を眼の上の瘤視し、一九二九年、廣西派の若殿原、胡宗鐸等の擧兵を口實に一氣に廣西派を擊破した。濟深監禁され宗仁・崇禧辛うじて遁れたことは、今猶我等の記憶してゐるところである。

それから幾年。李濟深は、福建革命で、味噌をつけたが、李宗仁・白崇禧は、廣西の古巢に閉ぢ籠り、北に於ける閻錫山の山西もどきに、建設計畫に餘念なく、その甲斐あつて、廣西は、今や支那第一の模範省として、內外人注視の的となつてゐる。廣東か

ら視察團が行つたり、邦人の視察者も三五人を下らず、その報告のいづれもが、多大の讃辭を李、白ことに白崇禧に捧げてゐる。足智多謀、「小諸葛」の綽名を負ひ、流石の蔣介石をすら畏怖せしめた白のことだから、廣西一省の料理は、まこと易々たるものがあるであらう。しかし、それだけで、彼が反蔣の盟主として起ち上り、同床異夢の西南各派を糾合して、蔣を打倒し得べしとの事は、過大評價たるを免かれまい。

彼は、今のところ、支那の蒲生氏郷でしかない。

### 六、北支那はどう動く？

反蔣陣營の中心は、廣西派に在るが反蔣戰事の成功には、北方の參加が必要である。西南派が、若干の布置を、この方面に試みてゐることは想像出來るが、同時に蔣介石も、孜々として對抗工作に努力してゐる。西北を視察し、山東に韓復榘と會見した蔣は、十二月二十四日北平に入り、この稿起草の頃（十一月四日）は、まだ滯平中であり、近く太原に飛び閻錫山と懇談を遂げる筈だといふ。

蔣の北方に於いて目指すところは、黄郛政權の强化であることは勿論だが、同時に、山東の韓復榘、山西の閻錫山との友好關係設定に、一層重きを置いてゐるのだ。幸ひにして閻、韓ともに閉關自守主義であり、西南派の尻馬に乘つて、反蔣戰事に參加するやうな氣配は見えないから、蔣の北支工作は、一先づ成功するものと觀てよからう。蔣が、北支工作を完成して、南昌に歸還する日に、彼の「位取り」は成就する。五全大會延期で肩すかしを喰ひ、蔣の北支工作を、アレヨアレヨと見送つた反蔣派が、これに對してどんな對策を講ずるか？　默して推移を觀ることとしたい。

（追記）張學良の存在を忘れたことは迂濶であつた。蔣は十月五日武漢に入り、何應欽・劉峙・張群の外、學良、兩湖將領を集めて、剿匪會議を開いてゐる。北支工作に先だつ、中支工作の一石である。（『中央公論』一九三四・一二）

## 第五節　汪兆銘の遭難

滿洲事變が起つたとき、支那の三人の政治家、蔣介石、胡漢民、汪兆銘は、三人三樣の措置を取り、もしくは意見を發表した。國民政府主席であつた蔣は、恐らく政府部内歐米派の意見を容れて、事件を、國際聯盟に提訴した。その結果については、その後の經過が示す通りである。胡漢民はその當時、蔣のために南京に監禁されてゐたので、彼の意見は外間にはあまり聞えなかつたが、監禁を解かれて後、香港で發表したところに據ると、聯盟提訴には、最初から反對であつたとある。「聯盟に何が出來る？　たゞしかし日本の横暴に屈するわけにはいかん。」――これが彼の本音であつたらう。

ところが汪兆銘である。彼は當時、廣東國民政府主席であつたが、胡と同樣に聯盟提訴には反對であつた。しかし、彼は更に一歩を進めて、「話せばわかる。」といつて、有名な「一面抵抗、一面交渉」のスローガンを發表した（このスローガンを發表した時期については種々異說があるが、確證を得るまでは、廣東時代といふことにして置く）。流石に孫文門下の雙璧だけあつて、胡も汪も、聯盟提訴の無效不得策を看破したのだが、汪の國際認識は、はるかに胡の上に出てゐたといつて差支へない。それといふのも、汪がその一二年前から、孫文最後の大獅子吼であつた大亞細亞主義を再檢討し、シツカリした對日本觀を打ち建ててゐたからである。事變前四ケ月、彼が外交部長陳友仁を日本に派遣して、朝野の間にこの趣旨を遊說させたことは、今なほ世人の記憶に存してゐるであらう。滿洲にハイ・コムミッショナー設置の案など、我等も噂にきいたものであつた。彼は日本とフランスで教育を受け、彼の頭は、日本學系とフランス學系の混合物であつたのだが、中年フランス學系に傾き、黨内民主化などといふのが、彼の政治的主張の主なものであつたが、ここに至つて日本學系が復活し、大亞細亞主義に味到することになつたのだ。すでに彼の心裡にかうした準備が出來てゐたから、九・一八に際しても、「日本と話をすればわかる」といひ切れたのだ。

かうした意見を發表しただけでなく、彼はそれを實行に移すべく、廣東・南京兩國民政府の妥協を策した。想へ、その一年前までは、彼は北支那に於いて閻錫山、馮玉祥と結び、いはゆる擴大會議派を提さげて、蔣介石と抗爭した間柄であつたのだ。さうして、その繼續として、廣東國民政府に參加したのだつたが、――彼は、かうしたイキサツを水に流して、政敵たる蔣と握手したの

である。變節と罵られやうが、改說と嘲けられやうが、少しも頓着せず、平然として故我をうち、いいと信じたところに邁進するのが、彼の特徴である。「國難を排除するのは、自分の任である。さうして、それには實力が必要である。實力は蔣が持つてゐる。怨をすてて、彼と結ばねばならぬ。」――かうして、彼は南京に乘り込んだのだ。恰かも好し、蔣の心境にも、同樣に一段の進歩があつた。（その裏には、蔣の先輩であり、外交上の指南役である黃郛の努力があつた）一九三二年のはじめ、兩雄は終に握手した。

爾來四年、二者の提携は、まだつづいてゐる。しかし何等の波瀾もなかつたわけではない。先づ蔣介石陣營からの反對があつた。この方面では陳果夫、陳立夫兄弟の名が、聯想される。蔣の親分であつた陳其美の甥で、それ故に重用され、國民黨黨部に於いて、蔣を代表する兩陳は、最初から汪に反對であつた。今日でもそれは變つてゐない。つづいて張學良があつた。北支那にゐて恣まなる反日滿工作を行ひ、汪の政策を妨害したことは、周知の事實であるが、汪は一度び學良に敗北し、下野外遊したこともあつたのだ。やがて學良が失脚すると、黃郛の忠言が效を奏して、蔣汪合作が再びはじめられ、今日に及んでゐる。

この間、行政院長兼外交部長としての汪の政策は、着々果を結んで來つつあつた。日支提携の聲は、一九三五年一月以來いよいよ高くなり、中頃北支事件の波瀾があり、近くその蒸し返しがあつたけれども、國民政府の對日策は、汪の定めた範疇以外に、動く氣配は見えなかつた。それほど彼の政策は、研究し盡され、洗錬されたものであつた。何人が局に當るにせよ、對日策はこれ以外に出ることは出來ないまでに完成された。

それだけ、政敵の憤慨は昂揚されて行つた。汪との間を割かうと、隨分畫策したものもあつたらうが、それが無效だと知ると、最後の手段として、彼の生命を絶たうとするものが現はれた。十一月一日、六中全會開會式當日、怨みの飛彈は、終に彼の胸に飛んだ。

犯人孫鵬明は、江蘇徐州人、黃埔軍官學校出身、もと十九路軍の小隊長、今は晨光通信（蔣系）の記者で激烈なファッシストであるといふ。彼の自供として外間に知られてゐるところでは、蔣の對日政策に憤慨した結果であるといふ。晨光社長以下、多數の共犯があるといふ。それ以外、犯行の背景はまだ判らない。

もつとも警察廳の發表に據れば、彼は中國共産黨と關係があるといふ。彼のねらつたのは、汪一人でないともいふ。およそこれらの貧弱な材料を根據として、背景を揣摩して見るならば、――

第一、汪蔣政權の反對派たる西南派ではないか？　この疑ひは、誰の頭にも浮ぶところで、事件當時の第一報は、いづれも西南派說を傳へてゐた。無理もない。西南には胡漢民派はじめ、汪を快よからず思つてゐるものが多い。六中全會前にも、西南派は蔣に迫つて、國民政府改組、汪兆銘追ひ出しを要求した事實すらあるのである。しかし日が經つにつれて、この說は影がうすくなつた。ただ今だに一縷の疑ひが殘つてゐるのは、犯人がねらつたのが、汪一人でないといふ點である。一年餘に亙る周到な計畫だともいふから、六中全會に各要人の集まるのをねらつて、汪蔣政權の一擧顚覆を目論んだのだと、疑へば疑へぬこともないからだ。

第二、共産黨？　これも汪蔣は根こそぎやつつけたい希望を持つてゐる連中だから、充分疑はれる。晨光通信捜査の際、共産黨の宣傳ビラが殘つてゐたといふことだし、激烈なファッシストに擬裝して、共産黨員が入り込んでゐたといふことも、考へ得られないことはないのだから。

第三、歐米派？　これへの疑ひは、最微弱であつた。歐米派といつても誰がゐるか？　大體口舌の雄だし、ピストルを持出すには、およそ不似合だ。

第四、C・C團？　C・Cは陳果夫、陳立夫の頭文字を取つたものだ。陳の支那音は Chen だからである。前述した通り、感情的に汪と容れない連中であるし、藍衣社の中堅組成分子でもあるし、犯人は或はこの團に屬してゐたかも知れないではないか？　C・C團の首領が、「將の側近を淸めねば」といふやうなことをいへば、末社が逸まつて實行に移るといふことは、有り得べきことだから、相當疑はれても仕方がない。いはゆる「平生往生」といふ奴。

第五、しかし我等は、結局單獨犯行說を採る。汪の對日政策に憤慨し、彼等去らざれば、といふことになつたのだと思ふ。世を

經ること深からず、體驗淺き若者が、血氣に逸ることは、東西その例に乏しくない。暗殺者の六七割は、御多分に洩れないのだから。

背景の如何はともあれ、犯行は失敗した。天、吉人を佑く。汪の負傷は案外輕く、生命に別狀なきは勿論、半歲も靜養すれば、又復活出來ぬこともあるまい。我等は東亞の大局から見て、さうあるべきを希望せざるを得ない。

政局も亦大した動搖を見せてゐない。對日政策も、案外動かないだらうといふ觀測が多い。その實、今日支那の對日對策は、どう動かしやうもない境地にまで達してゐるのであるから、誰が汪の代りに出ても、目立つた轉換は出來ないのであらう。と、書いてゐる途端に、英支借款、銀國有令發布といふやうなことが起り、スハこそ外交政策大旋回？　と、ヂヤーナリズムは飛耳張目してゐるが、大體支那のインフレ採用は、昨年來の懸案で、宋子文が中央銀行を乘取つたときから、チヤンと定まつてゐたことではないか？　我等の了解するところに據れば、わが關係筋は、年來このことあるを豫期して、對策を講じてゐる筈だし、英支借款にしたところで、溺れた者のワラでもつかむは知れ切つたこと。日本を袖にして、日本を排除して、一切合切やらうといふのでは決してない。日本で貸すといつたら、いつでも飛びついて來る支那である。論より證據、これまで支那から、何度借款話があつたか？　およそ外交會談にして借款に觸れざるはないといつていい狀態だつたではないか。ただ日本は、深切に支那のためを考へ、今少しく絕食療法を採り、自力更生に進むがいいと信じたが故に借款交渉を拒絕しただけのことである。

日本にハネられれば、どこかへ持ち込むのは知れたことだ。それがいちいち、對日策の變更ではない。

これを要するに、汪兆銘の遭難によつても、政局は案外動搖せず、對日政策にも大旋回はありさうもないと斷定して、大して間違ひあるまい。この斷定で腹を落着け、英支借款その他、今後生起することあるべき種種の問題に對して、從容として對策を講ずればいい。あはてフタメク必要もなく、まして滿洲國承認誘導、排日根絕、赤化共同防衛、經濟提携、北支に於ける日滿の關係調整を基調とするわが新對支政策には、微動だも與へないでいいのである。（『セルバン』一九三五・一二）

# 第四章　支那ファッシステイと蔣介石

## 第一節　支那ファッシステイ運動の解析

### 一　分解しつつある中國國民黨

中國民族の最大の缺點は、自尊心のあまりに强いことである。東三省沒落の後、民衆は、武力を以て失地を恢復せよと叫び對日宣戰を高唱してゐるが、現在の中國の實力は、共匪の跳梁、內部の不統一經濟恐慌等のため、對外的に武力を行使すべくあまりにも貧弱である。又、國際の大勢に觀るも、一般人の豫想に反し、日露、或は日米の開戰は、一種の希望的構想に過ぎない。露國は五ケ年計畫に沒頭して他を顧みる遑なく、米國は日本に對し、充分の實力を持つてゐるが、輕卒に日本と事を構へるとは信ぜられない。英國は銳意國內の整理に努め、佛國は、安南問題に汲汲としてゐる。伊太利の對日態度は消極的である。かかる際中日開戰せんか、中國は孤立無援に陷るべきこと明瞭である。內憂山積の際萬一の僥倖を賴むべきでない。目前中國の急務は、內部の統一に在る。人民は、共匪討伐のため、政府を信任せよ。土耳古の復興は、人民が政府に信賴したからであり、伊太利の强大を致せるは、政府人民協力の結果だ。故に、我等は今高らかに叫ぶ。「中國國民は、暫時東三省を拋棄せよ。共匪討伐を完成し、全國統一した後、政府と人民の力を併せて、失地を恢復しようではないか。」と。

一九三二年十月四日、上海發電通は國民政府軍事委員會主席蔣介石を社長とし、支那ファッシステイ樹立を目的とする、秘密結社「藍衣社」が、右記「滿洲拋棄宣言」を發表したことを報じた。いはゆる東北義勇軍の活動は、猶頗る顯著であり、失地恢復の叫びも、全支那に遍ねく唱へられてゐる際、滿洲拋棄といふが如き、大膽不敵な宣言を發する「藍衣社」とは、果して如何なる存在

であらうか。その目標、その蔣介石との關係、果してかかる宣言を發した事實があるかどうか。等等の點一世の注目を惹き、それらについて、各方面で精密な檢討が試みられたが、その結果判明したところは、この宣言が全然虛構でないまでも、大部分反蔣派のデマであるといふことであつた。

宣言は、十月一日附、上海の小報「社會新報」に「棒喝黨主張割讓東三省。」と題し、藍衣社の九・一八宣傳大綱の一部であるとの但書き附きで、掲載せられたものである。この新聞は、反蔣派の機關紙で、汪兆銘、陳銘樞との關係が濃厚であるといはれ、今では程潛、柏文蔚、胡宗鐸等、失意政客の結社である「鉞社」の手に歸してゐるといふ。これより先、九月中旬、藍衣社幹部は全國支社に對し、「暫らく沈靜的態度を執り、失地恢復を口にしてはならない。」と打電したことがあるが、事、鉞社一派の知るところとなり、さてこそ社會新聞紙上に暴露されるに至つたものである。柏文蔚はかつて改組派（汪兆銘）と行動をともにしたことがある。胡宗鐸は廣西派の一領袖であつたし、ともに失意政客として反蔣派に算へられてゐる。當然、彼等の放つたデマは、これを以て反蔣派大同團結の結成を誘導せんとする策動であつたのである。しかしデマとはいひ條、彼等の照準は正確であつた。今日の時勢に處して、「暫らく失地恢復を口にしてはならない。」と通電したとすれば、この片言隻語を演繹して、前記のやうな宣言をデッチあげることは、むしろ當然で、蔣の本音は正にこのいはゆる宣言と、相距ること遠からずとさへ思へるのである。

蔣介石及び藍衣社が滿洲問題に關して、果してかうした考へを懷いてゐるかどうかは、しかし我等の關知しないところである。武斷を差控へたいところでもある。ただ、蔣派對反蔣派の軋轢の隙間から洩れ出た該宣言なるものに依つて、我等は藍衣社の存在を確認し、同時に、それが國民黨内の小組織であることを知り、且つ同社の外にも、幾多の小組織が、中國國民黨内に存在することを察し得た。すなはち中央派として蔣介石派あり、左派、修正派、改組派として知らるる汪兆銘あり、――その小組織は、「中國國民黨改組同志會」といはれてゐる。――右派としては胡漢民一派の「新國民黨」あり、――「智社」なる小組織をつくる。――これを繞り、廣東別派孫科を中心とする「再造社」、陳銘樞及びその手創せる第十九路軍を根幹とする「國光社」、程潛、柏文蔚、胡宗鐸等失意政客の組織せる「鉞社」、その稱呼はすでに歴史上の存在となつたが、人的結合依然として存する「西山派」、等等の小組織あり、騷然たる分解作用を起しつつあるのである。事態は正に民國二年（一九一三年）に於ける國民黨分裂の蒸し返しで、孫文が、當時の混亂のうちから、純正分子を選び出し、再革命を目標として「中華革命黨」を結び、前清時代の「革命同盟會」から後の「中國國民黨」に至る、一系の革命機構を調整した故智に倣ひ、現在の小組織はいづれも正統國民黨樹立を目指して、策謀をつづけてゐるのである。蔣介石、汪兆銘、胡漢民の三者中、何人がよく當年の孫文たり得るであらうか。いづれも一長一短あつて、豫測を許さないが、就中客觀的條件最も整ひ、場合に依つては、國民黨そのものを超克すべき可能性ある蔣介石派の運動が、最も世人の注目に値ひすべきを信じ、左にその大概を叙せんとするものである。

## 二　「西西園」時代

前述のごとく、「滿洲抛棄宣言」の發出に依つて、藍衣社なるものの存在が、ヘッキリと世人の眼に映じたのであるが、その成立したのは、決して昨日や今日のことではなく、一九三二年三月初旬のことであり、その前身たる「中國棒喝黨」は、一九三一年秋成立したといはれ、更に母體たる「西西園」にまで遡れば、今日まで優に一年有半の歴史を有する結社である。けだし蔣介石は、中國共産黨及び紅軍の勢威ますます增長し、不可滅的形態を整へて來たのみならず、一九三一年三月の胡漢民監禁が楔機となり、廣東に反蔣派の大同團結成り、自派の勢力が漸衰の傾向あるに鑑み、この際自派に一大緊縮作用を施し、甦生の途を講ずる外なしと思惟し秘密裡にその工作を開始するに至つたのである。工作開始の正確な時期は、これを判定すること困難であるが、恐らく廣東國民政府成立前後であらうと推定される。而して蔣の腹心となり、基礎工事に當つたのは、革命の元勳陳其美の甥で、蔣と同鄕の關係ある陳立夫（註一）、陳果夫（註二）兄弟である。兩陳は、國民革命以來、常に蔣の代表乃至曁目附として中央黨部に頑張り隱然たる勢力を黨の間に有してゐる人物であるが、今や又蔣の旨を承けて、支那ファッシスティの基礎工事に當ることとなつたのである。彼等はその第一着手として、西西園なる倶樂部を設け、政客、有志の招待、糾合に努めた。西西の支那音はシイシイで、C・C

に通じ、C・Cは兩陳の支那音 Chen の頭文字である。從來兩陳の一派はC・C派と呼ばれ、浙江財閥、黄埔同學會、勵志社（蔣都四十餘名中、全國有力師長二十五名が蔣の乾兒といはれてゐる。）と並んで、蔣派政治的勢力の中堅であるが、是に於いて彼等は、敢然として晉頭を取り、狹義の黨難來を叫んで、緊肅作用に發途したのである。彼等の發聲は蔣派内に於ける共鳴を招來し、政客有志續續西西園に雲集したが、それらの分子中の躍起組たる黄埔同學會有志た依つて、支那最初のファッシスト團體たる「中國棒喝黨」が産れることになつた。

兩陳の努力空しからず、西西園は完全に支那ファッシズムの母體たる役目を果したのである。

（註一）陳立夫、名は祖燕、字を以て行はれてゐる。浙江省吳興縣人、一八九九年生。革命の元勳陳其美の姪で、米國ビッツバアグ大學卒業後、國民革命軍司令部秘書長、國民政府訓練總監部政治訓練處長を經て一九二九年國民黨第三期中央執行委員兼中央黨部秘書長に任じ、その後中央政治會議候補委員、建設委員會委員、考選委員會委員等に擧げられた。一九三一年第四期中央執行委員兼中央黨部組織部長となり、同年末組織部が組織委員會と改組さるるに及び、同委員會副主任委員となり、一九三二年同主任委員となつた。

（註二）陳果夫、名は祖燕、字を以て行はれてゐる。陳立夫の實兄で、一八九二年生。浙江陸軍小學堂南京陸軍中學卒業。―第二革命には叔父陳其美の片腕として活躍した。その後上海で爲替取引事業に從事し、蔣介石と相識り、爾來その腹心の部下となり、一九二四年黄埔軍官學校教官に任じ、中央黨部組織部長を代理した。一九二六年第二期中央監察委員、一九二七年上海臨時政治委員會委員、南京中央黨務學校總務主任、中央黨部農民部委員となる。一九二八年中央黨部組織部長、監察院副院長に任じ、一九二九年第三期中央執行委員。一九三一年第四期中央執行委員、同常務委員、同年末國民政府委員に任じ、一時監察院副院長を辭したが、一九三二年復任した。

## 三　中國棒喝黨成る

西西園に集まつた政客、有志のうち、最急進分子は黄埔同學會の連中であつたが、その牛耳を握る賀哀寒（註三）、劉健群等は、いよいよファッシスティ樹立の時機到れりとし、蔣に一黨組織を進言するに至つた。蔣はC・C派の策動、鼓舞の結果にホクソ笑みつつ、賀劉等の進言を容れ、一九三一年秋、賀夷寒、蔣堅忍（註四）、胡宗南（註五）、鄧悌、杜心樹、曾擴情、康澤、潘佑强、蕭贊育、桂永清、劉吟堯、鄧文儀、鄭介民等十三人（一説に據れば蔣英、孫常鈞をも含む。他の一説に據れば、陳立夫、賀耀祖、周佛海（註六）、張治中（註七）等も名を連ねてゐるといふ。）を中央幹部に任命し、宋子文、何應欽、劉峙、張群、孔祥熙、邵元冲等の巨頭の外朱家驊（註八）、張道藩（註九）、陳布雷（註一〇）、程天放（註一一）、楊公達、楊虎等を顧問格に、その他共産黨から裏切つた顧順章（註一二）、上海のギャング「青帮」の大親分杜月笙等の變つた顔觸れを揃へ、「中國棒喝黨」なる秘密結社を組織した。

（註三）賀夷寒、黄埔軍官學校出身。一九三一年陸海軍總司令部政治訓練部第一剿匪宣傳處長となり、次いで江西地方整理委員會委員、陸海軍總司令南昌行營黨政委員會委員を兼任、後第一、第二剿匪宣傳處を合併し、訓練總監部剿匪軍隊政治訓練處設置さるるや同處長となり、一九三二年國民政府訓練總監部國民軍事教育處長となる。

（註四）蔣堅忍、浙江省奉化縣人（蔣介石と同鄕。）で黄埔軍官學校出身。一九二七年國民革命軍第二十六軍政治訓練部主任。一九二九年漢口特別市政府社會局長、次いで江西に入り、第六師政治訓練部設計委員會委員、一九三〇年江西剿赤總司令宣傳隊長となる。「日本帝國主義侵略中國史」といふ著書がある。

（註五）胡宗南、字は壽山、浙江人で一八九五年生。黄埔軍官學校出身。劉峙に從ひ、一九三〇年對馮閻戰に、第一師副師長として各地に轉戰、同年劉の後を承けて第一師長となる。一九三一年石友三背叛するや、平漢線方面に出動し、平定後浦口に轉任し、安徽省内の紅軍討伐に當つてゐる。

（註六）周佛海、湖南人でわが京大經濟學部卒業。中國共産黨の創立（一九二〇年）に參加し、一九二一年の同黨一全大會では、選ばれて中央副委員長となつたが、後思想的轉換を來し、三民主義の論客として、「三民主義之理論的體系」等の著書を發

表するに至り、漸く蔣の部下に入り、國立廣東大學、上海大夏大學教授、中央陸軍軍官學校政治訓練處主任を經て、一九二九年國民政府訓練總監部政治訓練處長となり、一九三一年まで在任した。

（註七）張治中、字は文白、安徽省巢縣人で一八九一年生。一九一六年保定陸軍軍官學堂卒業。後廣東軍政府に入り、黄埔軍官學校學生總隊長、軍官團長、廣州衞戍司令部參謀長、第二師參謀長、黄埔軍官學校武漢分校教育長、國民革命軍總司令部訓練處長を經て、軍政視察のため歐米及び日本に派遣、一九二八年歸國後、國民政府軍事委員會軍政廳長、中央軍官學校訓練部主任、同教育長に歴任。一九二九年馮玉祥討伐に際し陸海空軍總司令武漢行營主任。一九三〇年教導第二師を編成してその師長となり、對閻、馮戰には津浦線方面に作戰した。一九三一年中央軍官學校教育長。一九三二年の上海事件には第五軍長として第八十七師長を兼ね、日本軍と戰つて敗れ、浙江に退いた。

（註八）朱家驊、字は騮先、浙江省吳興縣人（陳立夫、陳果夫と同郷）で一八九二年生。上海同濟大學、獨逸伯林大學卒業の地質學博士である。歸國後北京大學教授として屢次の學生運動に關係し、一九二五年以來は東方文化事業上海分委員會委員である。一九二六年廣東に入り、中山大學教授兼代校長となる。一九二七年廣東省政府委員兼民政廳長、廣東政治分會委員、省政府委員兼教育廳長を經て浙江省政府委員兼教育廳長に轉じ、一九二八年又廣東政治分會委員、國民政府建設委員會委員となる。一九二九年第三期中央執行委員、一九三〇年國立中央大學校長となつたが、一九三二年辭職。

（註九）張道藩、貴州省盤縣人で、一八九七年生。倫敦大學卒業。一九二六年廣東省政府農工廳秘書。一九二八年南京特別市政府秘書長、國民黨中央執行委員會組織部秘書。一九二九年第三期候補中央執行委員、江蘇省黨務指導委員、國立青島大學教務長。一九三〇年浙江省政府委員兼教育廳長、一九三一年中央執行委員組織部副部長、同年末退任、第四期候補中央執行委員となる。

（註一〇）陳布雷、字は長蘆、浙江省慈谿縣人で一八九〇年生。浙江高等學校文科卒業後上海天鐸日報商報、時事新報主筆に歴任し、復旦大學講師を兼ねてゐたが、一九二八年浙江省政府秘書長兼教育委員會秘書長、一九二九年第三期候補中央監察委員會秘書長、一九二九年第三期候補中央監察委員。一九三〇年國民政府教育部常務次長、同政務次長兼中央黨部宣傳部長、一九三一年第四期候補中央監察委員、同年末浙江省政府委員兼教育廳長となる。

（註一一）程天放。江西省新建縣人で一八九九年生。上海復旦大學、イリノイ、トロント兩大學卒業の哲學博士である。一九二八年江西省政府委員兼教育廳長、國民政府考試院參事。一九二九年安徽省政府委員兼教育廳長、第三期中央執行委員、中央黨部副部長。一九三一年陸海軍空軍總司令行營黨政委員會委員、第四期候補中央執行委員。一九三二年國立浙江大學校長。

（註一二）顧順章。湖北省人で一九〇四年生。南洋煙草兄弟公司事務員出身で、獨逸留學歸國後中國共産黨に加入し、中央執行委員、中央政治局委員、全國工界糾察隊總指揮等に歴任し、向忠發、李立三、周恩來とともに、黨の四大健將と稱せられてゐたが、一九三一年漢口で逮捕され、歸順して蔣介石の幕下に入り、討赤事業に活躍してゐる。

黨成立の時期については、一九三一年秋とのみ、確然たる時日を判定し得ないが、恐らく九・一八事件勃發後、廣東國民政府との間に、妥協氣運が動きかけた頃であらうと推定される。

ファッシスト團體である黨は、當然總理蔣介石の獨裁で、黨員は總理に對し絶對服從の義務を有してゐる。黨員は十人一組、三百組すなはち三千人を以て基本黨員とし、内二百組を黄埔軍官學校出身者から採り、殘り一百組を一般から募る。基本黨員に對しては、月額二百元の生活費を保障してゐる。中央軍官學校内に在る軍官特別研究班は、黨の高級政治訓練機關で、政治、情報、青年及び消費組合の四組に分ち、班の主任には康澤（黨幹部十三人――すなはち所謂いはゆる十三太保――中の一人）が當つてゐる。班の卒業生は各地に派遣され、地方幹部に充てられる。

軍事訓練機關としては、同じく中央軍官學校内の教育總隊がある。總隊長は徐培根で、第一隊長は桂永清、等二隊長潘佑強、第三隊長杜心樹、いづれも十三太保の一人である。隊員にはファッショ的軍事教練を施し、卒業後はこれを各軍に配屬し、各軍將領

の行動監視、ファッシスティ基本軍隊編制準備に當らせる。ファッシスティ政治警察訓練のためには、同校内の團警班を利用してゐる團の主任は孫常鈞で、班員卒業後は各地公安局に入れて警備任務、民衆運動操縦及び鎭壓の任に就かせる。此の外に戴笠を主任とするゲ・ペ・ウである「鐵血隊」がある。（一說に據れば隊長顧順章、訓練主任楊虎）隊員約三十名。隊員は黃埔同學中の新進で、黨員の裏切監視、政敵暗殺に當る。本部は南京三道高井の黃埔同學會で、恐怖政策に必要な自動車オウトバイ、飛行機の操縦、ピストル、爆彈の發射投擲等の訓練をやつてゐたといふ。同隊の「要處分」表に、汪兆銘、陳銘樞、蔡廷鍇、程潛等の人名が記載されてゐるといふ評判は、かなり擴がつてゐたものだ。

組織にも勿論力を注いだ。黨員を學生に變裝して各大學、高等學校に入れ、學生買收に當らせてゐたといふ風評もある。

經費は一ヶ月百二十萬元で蔣の私財から出てゐるといふことになつてゐる。

宣傳機關としては中國日報、我們的路（週報）を南京に、文化日報、人民週報、民衆喉舌、上海夜報等を上海に持つてゐる。南京の二種は發行部數十萬と號してゐる。

### 四　藍衣社出現

中國棒喝黨成立後の約半ヶ年間は、中央政局大變動の時期であつた。すなはち九・一八事件に因り南京、廣東兩政府間に妥協氣運動き、多少の曲折はあつたが、結局妥協成立し、はじめに孫科、陳友仁一派が、つづいてその退却の後を承けて汪兆銘派（左派、修正派而して改組派）が、中央政府に入つて來、國民政府主席には虛位を擁して林森がすはり、蔣は軍事委員會主席に、汪は行政院長（一九三二年一月就任）になり、蔣の實權は大いに減ずるに至つたのである。汪は陳公博を實業部長に、顧孟餘を鐵道部長に、曾仲鳴を同次長に、唐有壬を中央政治會議祕書長に、といふ具合に行政院各機關に乾兒を入れたのみでなく、積極的に黨部侵入を企て、更に宣傳陣、文藝陣を張り、鬪將谷正剛（一に鋼につくる）をして蔣派の鐵血隊に備へさせる等、意外に猛烈な切崩し策を講じ蔣派の陣營はために少しくグラツキはじめた。この趨勢を見てハガユク思つたのは、賀衷寒とともにファッシスティ樹立を蔣に進言した劉健群である。彼は汪派の谷正鋼にも對比すべき熱血漢で、默つて見て居れず、中國棒喝黨の改組を蔣に迫つた。蔣も劉の熱心に動かされ、一九三二年三月初旬、黨の組織を擴大、深化し、名も「中國國民黨藍衣社」と改め、藍衣社總章三十一ヶ條を制定した。一說に據れば、藍衣社の名は黨内の秘密的名稱で、正式の名稱は「中國國民黨救亡社」であり、その組織條例三十一ヶ條を制定したのだといふ。

藍衣は支那の國民的衣裳である、一面青天白日旗の青にも近く、兼ねて堅忍刻苦の意をも含んでゐるといふ、彼等の用意である。

「藍衣社總章」すなはち「救亡社組織條例」の全文は左の通りである。

#### 第一章　總　則

第一條　本社は中國國民黨救亡社と定名す。（一說に中國國民黨藍衣社と稱す。）

第二條　本社は中華國民の危亡を挽救し、三民主義を力行し、國民革命を完成するを以て宗旨とす。

第三條　本社の組織原則は左の如し。（1）虛僞的民主集權制を屏棄し、ファッシスティに倣ひ社長獨裁制を實行す。上級は下級に對し何等の義務なきも、下級は上級に絕對服從す。（2）份子（一說に社員）はすべて社長の支配を受け、以て少數幹部が操縦把持し、尾大不掉の形勢造成を防止し、個人の自由を犧牲にし、團體の自由を尊重す。（3）各級幹部及び群衆をして、唯一の領袖を信用せしめ、相互猜疑せざらしむ。一切の大計は社長の賢明なる裁決に任す。（4）人材を集中して權利の衝突を發生せざらしめ、忠實なる同志を吸收して實際行動に參加せしむ。

第四條　本社は如何なる困難を排除して、隨時如何なる場所に於ても、左記最低限度の政綱を完成す。（1）誓つて國仇を復し國家の獨立を完成し、不平等條約を廢除す。（2）中央集權の政治統一を謀る。（3）徹底的に政治を肅清し、貪官汚吏を掃除す。（4）極力農業を發展し、地權平等を實行す。（5）工業建設を勵行し、勞資鬪爭を消滅す。（6）全國財政を整理し、節約政策を勵行す。（7）國防軍隊を整頓し、徵兵制度を實行す。（8）生產教育を提唱し、民衆教育を普及す。（9）男女權利の平等を主張

す。(10)徹底的に三民主義の新社會を實現す。

## 第二章　社　員

第五條　すべて本社の總章を接受し、本社の紀律を遵守し、本社の義務を履行せんことを志願する中國國民は、社員二人の紹介を以て、社長の批准を經たる後、本社社員たることを得。

第六條　すべて本社に入りて社員となりたる者は、自己の身體、權利、自由を犧牲とするを以て基本原則とすべし。

第七條　社員入社の時は、須らく宣誓を行ふべし。誓詞は別にこれを定む。

第八條　社員は社長の許可を經るに非ざれば、如何たる他の團體にも參加することを得ず。

第九條　社員は社内に於いて、別に小團體を組織するを得ず。

第十條　社員公務に死亡し、或は災害を被むりたる時は、本社より撫恤し、或はその遺族を救濟す。

第十一條　すべて社員にして正當なる原因にて失業せる時、本社はその生活費として毎月二十元乃至三十元（一説に、二百元乃至三百元。）を給與することを得。

第十二條　社員入社の時は、本社發給の社證を受け、以て識別に供するものとす。

第十三條　社員一旦入社後は、自由に退社するを得ず。

## 第三章　組　織

第十四條　本社は社長を以て最高領袖とす。

第十五條　社長の下に黨務秘書、内務秘書、外交秘書、軍事秘書、財政秘書各一人を設く。その職權は社長を協助し、本社一切事宜の進行を計り、並びに建議方面の政見を草創するものとす。

第十六條　社長の下に總事務處を設け、社務實施の總機關とし、内部を總務部、組織部　宣傳部、通訊部、紀律部に分ち、毎部に正副主任各一名を置く。その職權左の如し。

(甲)總務部の職權。(1)本社機密事項の掌理。(2)本社財務事項の掌理。(3)本社庶務事項の掌理。(4)他部に屬せざる一切の文書事項の處理。

(乙)組織部の職權。(1)各級幹部の組織を指導し、並びにその活動を指揮す。(2)各級幹部の錯誤を糾正し、その紛糾を解決す。(3)各級幹部の活動狀況を考査す。(4)本社一切の調査統計事項を處理す。

(丙)宣傳部の職權。(1)宣傳計畫の發案。(2)宣傳資料の編蒐。(3)出版發行事項。(4)その他一切の宣傳事宜の實施。

(丁)通訊部の職權。(1)通訊綱要の設計。(2)各級幹部との通訊聯絡。(3)各方情報の蒐集。

(戊)紀律部の職權。(1)本社職權の執行。(2)社員行動の考査。(3)各級幹部工作の考査。(4)財務報告の審査。

第十七條　各級幹部は地域に依り左の如く區分す。(1)省社は書記一人、助理員二人を置く。社長は社員中よりこれを選任す。(2)縣社は書記一人、助理員一人を置く。省書記は社員中よりこれを選定し、社長に申請し、その許可を經て任命す。(3)市社は書記一人を置く。これが任命は前項に準ず。(4)鄉社は書記一人を置く。縣書記は社員中よりこれを選定し省社に申請し、その許可を經てこれを任命す。(5)村社は書記一人を置く。これが任命は前項に準ず。(6)區社は書記一人を置く。村社書記は社員中よりこれを選定し、省社に申請し、その許可を經て任命す。(7)各級幹部は社長の必要と認むる時、これを自由に入替へ、或は直接委派することを得。

第十八條　各學校内の幹部區分左の如し。(1)小學生團。初級小學或は高級小學在學中の社員の集合を小學學生團と稱す。(2)中學學生團。初級中學或は高級中學在學中の社員の集合を中學學生團と稱す。(3)大學學生團。大學在學中の社員の集合を大學學生團と稱す。

以上各學生團には、均しく總書記一人、助理員一人を置く。社長は社員中よりこれを委任す。

### 第一節　支那ファッシスティ運動の解析